

---

# 名の無い魔獣

今井敏之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名の無い魔獸

### 【Zコード】

Z9982Z

### 【作者名】

今井敏之

### 【あらすじ】

名の無い魔獸は滅びを完成させるのか？ 何者かに拉致された王女の探索に、騎士団は怪しい情報屋に導かれて、大峡谷に足を踏み入れた。そこで出会った少年に少しの道案内を頼む。これが、全ての真実を知る人間が一人もいない事件の始まりだつた。

少女は少年と遊んでいた。

少女は九歳。少年は七歳。

少女は少し年下の、この少年と遊ぶのが一番の樂しみだった。弟のように可愛がっている少年と一緒にいるだけで嬉しくて仕方がなかった。

どうしてそんなに樂しいのか、彼女は享樂の源泉を深く考えたことはなかつた。

花々が咲き、小鳥が轟り、温かい陽光が優しく降り注ぐ、おとぎ話のような庭園で、少年と一緒に遊んでいれば、それだけで楽しかつた。

「これはなんという花だ？」

少女は少年と同じ瞳の深い青紫色の花を指差して尋ねた。

「それはね、スマレだよ」

答えた少年は、不意になにかを思いついた表情をした。

「そうだ。ちょっと待つてて」

告げるが酉や、少年は立ち上がりスマレを丁寧に摘み始めた。

少女は不思議に思いその様子を見つめる。

やがて少年が丹念に編み上げたそれは、花の冠だった。

「はい」

少年はそれを少女の頭にかぶせる。青紫の花は、少女の金色の髪と調和して、美しさを引き立てる。

少し驚いたような少女は、すぐに笑みを浮かべる。

「ありがとう」

二人は笑顔で見つめ合つていた。

けれど、少女は不意に不安になる。少年の笑みはなんだか寂しげで、まるで今日を境にもう会えなくなつてしまつような。

「その、私たちはずつと一緒であるよな？ そなたは私を置いて、

どこかへ行つてしまつたりはしないよな?」

少年はその疑問に不思議そうな表情をした。

「もちろんだよ。ぼくはずつと君と一緒にいるんだよ。だつてコンヤクシヤなんだから当然じやないか」

少女は頬を赤らめてはにかんでしまつ。

「そうだな。そうであつたな」

「ところで、前から気になつてたんだけど……」

不意に首を傾げて疑問を提示する少年に、少女は言葉を促す。

「うん?」

「コンヤクシヤって、なに?」

「……」

少女は沈黙した。そんな問い合わせは予想していなかつた。

「どうしたの? ぼく、変なこと言つたかな?」

少女は首を振る。

「いや、なんでもない。あのな、婚約者とは……」

「うんうん」

秘密のベールが解き明かされるのを、少年は好奇心で一杯の瞳で待ち受ける。それがなんだか面白くて、つい意地悪をしたくなつた。

「んー、やはり教えぬ

「えー」

少年からは不満の声。

「さあ、もう帰ろう。父上たちが我らを探し始める頃だぞ」

少女は先んじて親族のいる場へと向かつた。

その後を追いかける少年は、重ねて追及する。

「ねえ、コンヤクシヤってなんなか教えてよ」

少女は立ち止まると、少年へ振り返る。スミレに飾られた金色の髪が大きく揺れた。

「良いか。もし、そなたが今言つたとおり、私と一緒にいるのなら、ずっと傍にいてくれるのなら、いつか必ず教えてよ」

「本当?」

「勿論だ。ずっと私から離れなかつたらな」

「わかつた。ぼくは君の側にいるよ。ずっと君と一緒にいるよ」

「約束するか？」

「約束する」

こうして少女は少年と誓いを交わした。その本当の意味を理解しないまま。

テラスから誰かが少女を呼んだ。母上だらうか。侍女のかもしれない。きつといなくなつたので心配して探し始めたのだ。

「さあ、早く戻ろう。みんなが呼んでいる」

少年と手を繋ぎたくて、少女は振り向いて手を差し出した。

だが少年は手を握り返してくれず、少女のその手が掴んだのは空虚だつた。

一陣の風が庭園を吹き抜け、草木が擦れる音と共に、木の葉が舞つた。

少年の姿がどこにもなかつた。

「……あれ？」

周囲を見渡しても、そこに居たはずの少年は、幻影であったかのよう忽ちと消え失せていた。

「どうした？　どこへ行つたのだ？」

返事はない。

「どうしたのだ？　隠れているのか？」

かくれんぼだ。よく遊んでいる。少年を見つけると、嬉しくて思わず抱きついてしまう。少年に見つかると、嬉しくてやはり抱きついてしまう。だがこんな時にすることはないだらうと思つ。早く見つけて親族の集まつている場所へ戻らなくては。

少女は少年を求めて周囲を探し始める。

花壇の影でなにかが動いたのを見つけて、気付かれぬいよつ、足音を出さないよう慎重に移動した。

そして驚かせようと、つい笑みが出てしまつ顔を唐突に出して見せる。

「どこいか?」

少年はいなかつた。動いていたのは、風に揺れる花壇の花だつた。予想が外れて、不満に口を尖らせる。

「どこにいるのだ? 早く戻らなくてはいけないのだぞ。もう出て来るが良い……あ?」

名前を呼ぼうとして、しかし喉<sup>イズム</sup>がから出たのは疑惑の咳き。

「……名前?」

少年の名はなんと言うのだ?

今まで何度も呼んでいたはずなのに、なぜか思い出せない。

形容できない漠然とした不安が、名の代わりに喉下から湧き上がり、少女は無理に奥へと押し込める。

「どこだ? どこにいる? 人をあまりからかうな。隠れていいで早く出て来るのだ。どうした? 返事をせぬか」

応えは静寂。名前を呼ばないからなのだろうか。だから返事をせず、姿を現さないのだろうか。

けれど頭に霞がかかつたように名を思い出すことができない。どうしてこんな簡単なことが思い出せないのだ。

「出て来てくれと言つているだろつ。私はこのような冗談は好かぬ。早く姿を見せよ」

誰も現れない。まるで名と一緒に、少年は消滅してしまつたかのように。

「どうしたのだ。返事をするのだ。早く出てくれ。私の傍を離れないと約束したではないか。こんな、こんな冗談は止めてくれ!」いつしか声は震えだし、気が付けば走り始め、庭園中を必死に探すが、少年の姿は見つからない。

「頼む! 返事をしてくれ! どこにいるのだ!? ビコに隠れているのだ!? どこへ行つてしまつたのだ!?」

名前を呼べば少年は答えてくれるのに、どうしてか喉元で塞き止められているように出てくれない。

「私の傍に居てくれ!」

名がわからない。

「私から離れないでくれ！」

名が思い出せない。

「私と一緒に居てくれ！」

名をただ一言呼びたいのに。  
「私と約束したではないか！」

「約束したではないか！」

エンカータ王国、王宮の一画にある第一王女リグヴェーダの寝室にて、その王女は目覚めた。

呼吸も鼓動も荒く乱れ、全身から玉のような汗が滲みシーツが肌に張り付いている。すぐに呼吸は治まるが、胸の動悸はなかなか静まらず、悪夢の余韻を確かに残していた。

時計を見ると午前一時を指している。真夜中。草木も眠る丑三つ時。

「…………はあー…………」

王女は肺から全ての空気を搾り出すよつて、長く息を吐く。嫌な夢だった。もう、いなくなってしまった、忘れたはずの少年の夢。

いや、忘れたことなどなかつた。心の片隅、記憶の片鱗、思い出の断片の中では、いつでも少年はそこにいた。過去の中だけに。

「…………おまえの名は…………」

現在という時の中での現実といつ世界の中で、少年の名を呼んでも、応えは静寂。

返つて来るはずがない。絶対に。

享年七歳。

少年は死んだのだから。

当時九歳だったリグヴェーダに、死の本当の意味を理解していたのか、彼女自身疑問だが、それでも少年は約束を守ってくれなかつたのだということだけはわかり、少しの怒りと、溺れそうなほどの深い悲しみが、心に満ちていたことだけは憶えている。

少年とリグヴェーダの関係は、簡単に簡潔に記せば、親同士が決めた婚約者だつた。

当時、少年の父、アファマッド・クラノフ侯爵は様々な事業の連続成功で、巨大な財を築き上げ、それに伴い王宮内での発言力は急速に高まり、つまり巨大な権力を手中に収めた。

さらにクラノフ侯爵は権力の安定を図り、王族との関係を結ぼうと画策する。

それが、クラノフ侯爵第一二子と、第一二王女リグヴェーダとの婚約だつた。

これが行われれば、クラノフ侯爵の力は不動の物となるはずだつた。

だが、行われなかつた。

クラノフ侯爵の野望は、一夜にして消滅した。

一人の大々的な婚約発表を控えた数日前、クラノフ侯爵家は正体不明の襲撃を受け、執事侍女を含めた全家族が殺害された。

クラノフ侯爵の館は同犯人に火を放たれ全焼し、遺体の判別すらできなかつた。だが遺体の人数は合つており、それが判断材料となる。

襲撃者の正体、足取りは掴めず、その目的、背景も当然不明。襲撃から三年間、捜査は続けられたが、手掛かりとなる証拠類は一切発見できず、迷宮入りとなつた。

そして、誰の指図か陰謀かと、根拠のない推測による流言飛語が飛び交つた。

「リグヴェーダ王女との婚約が原因だ」

「事業を妬んだ者の仕業だ」

「政敵の仕業だ」

「ただの金銭目当ての強盗だ」

「失墜させられた者の怨恨だ」

「隣国敵国の仕業だ」

「仕事関係のトラブルだ」

「魔王崇拜者で神罰を受けたのだ」

「女絡みの事件だ」

「男絡みの事件だ」

と、その全てが真実を言い当てても不思議ではないが、真偽の程はわからず、真実は闇の炎の中へと消えたまま。

クラノフ侯爵は一代で財力権力を築いた成り上がりで、親族血縁関係者はほとんどおりず、この襲撃事件により、クラノフ家は事実上消滅した。

こうして、一つの貴族の家系が消えたが、権力を欲しがる者は後を絶たない。

リグヴェーダ王女が十六歳になつた現在、再び婚約の話が持ち上がりつている。

相手は学問に秀で、武芸に通じた才能ある若者で、財力家柄共に申し分のない相手である。

父王並びに親族一同は揃つて勧めるが、リグヴェーダは返答を避けている。

なぜ？

思い出したからだ。忘れていた少年を。果たされなかつた約束を。あの婚約は親同士が決めたことで、本人の意思などまるでない一方的なものだつたが、それでも少年は彼女にとつて、王族という特殊な環境の中で初めてできた、友だつた。

それが、あまりにも呆気なく、容易く、なにもわからないまま、なにも知らないまま、何一つ理解できない裡に、消え去り、終わつた。

死というどうすることもできない、一文字で。

あんな終わりでなければ、忘れることができただろうか。そんな終わりでなければ、忘れてしまつていただろうか。こんな終わりでなければ、忘れる必要はなかつただろうか。だが、全ては仮定であり、答えはすでに決まつている。

王族としての義務を果たせ。王族としての在り方を国民に見せ、

国民に手本を示し、国民に献身を乞くせ。

すなわち、理想的な結婚と模範的な家庭を国民に示せ。

それが王族に生まれた者の義務だ。

そんなことはわかっている。王族としての義務を果たす覚悟もある。

それでも心は迷うのだ。思つよつに心は在つてくれないのだ。どこまでが真実なのか判別できない、過去の思い出といつ幻想に心は囚われている。

「ふう……」

リグヴェーダは溜め息を吐くと、シーツを剥ぎ取つて寝台から起きる。

侍女や執事を呼ぶための、ベッドの傍らのテーブルに備え付けてあるベルに、手を伸ばそうとした。そこで自分が、寝間着を着けていない、下着だけの姿だと気付く。服を着て睡眠をとることが苦手な彼女は、いつも下着だけでベッドに入り、そのことで侍女のサリナとささやかな争いを起こすのだ。

今夜の当直は、そのサリナだ。若いからなのか人柄なのか、誰もが思わず知らず萎縮する王女といつ身分の者に、物怖じすることなく意見するサリナは、当の王女にとつては逆に心を許せる存在だが、細かいことを諦めずに注意し続けるのは少し辟易する。

どうしたものかとしばらく思案したが、まあ良いかと思い、ベルを鳴らす。程無くしてサリナがやって来るだろう。そうしたら、汗で湿つたシーツを取り替えて貰い、体を拭くタオルと湯を持って来てもらう。ついでに寝酒用のワインを所望し、それを飲めばゆっくりと眠れるだろう。

今度は夢を見ないことを願つて。

カタン……。窓ガラスが風に揺れて音を立てる。そしてキイと蝶番が軋む音を立てて少し開いた。

「……？」

カタン、と閉まり、キイ、と開く。夜風に揺れてその繰り返し。

鍵を閉め忘れたのだろうか。王女は窓を閉めようとして足を進め……

よつとして止めた。

違う！

背後に微かに人の気配。リグヴェーダはベッドの枕元に隠してあつた、東洋の刀とは異なるこの国独特の三田円のよつな形状の剣を、素早く手にすると向かつて構える。

「ありやりや、見つかっちゃつたか」

気配の正体は、リグヴェーダに向けて足を進め、曇な月明かりの下に姿を晒す。

「うつひよー。下着だけたあ、またいい眺めだねえ。あつりやー、股のモノ、立あつちまつちやつたよ。みつともねえー」

顔から手足の先まで、全身を包帯のような布で巻きつけた姿の男。緑黄色の斑模様の上着に、頭部には同じ模様の鉄帽をかぶつた、奇抜な格好をした男だつた。頭部が異様に大きく錯覚して見え、全体として人型の異形のよつに不気味だ。

「貴様、何者だ？」

リグヴェーダは全く怯えることも、自分の姿に羞恥して臆することもなく、誰何する。

その静かな声は、王家の血に連なる者が自然と発する威厳に溢れていた。

剣を正眼に構えた彼女の姿は、限りなく清んだ氷の輝きの如く凜として、灼熱の劫火の紅の輝きの如く猛々しく、極限まで研ぎ澄ました刃の輝きの如き美しさを放つ。

「……う」侵入者の男は微かに気圧される。

「もう一度訊くぞ。貴様、何者だ？」

「さ、さあねえ。何者でしょう？ ゲッゲッゲッゲッゲッ」

男は気を取り直すかのように、おどけて奇怪な笑い声を上げる。

人の声とは思えない発音だが、男の奇抜な姿には相応しい声。

「実は俺さま誘拐犯。王女さまをさらいに来ました悪人悪者大悪党。おとなしくしててくれりやあ手荒な真似はしませんけどお、暴れた

りするとも、イータイ目になつちやうぞー！ ゲーゲッゲッゲッ  
歌うように悪行の行使を告げると、腰の両側に佩いている一本の  
短剣を抜いた。

この国の暗殺者の多くが使う、カタールと呼ばれる、特異な形状  
をした短剣。握りが刃に対して直角になつており、拳で殴る要領で  
突き刺すことができるの、特別修練を積まなくとも、絶大な殺傷  
力が発揮される。また鐔の代わりに一本の短剣が左右に広がる形で  
付けられている。そして、通常の剣とは違い、手首を動かす必要が  
なく、固定して使う形になるため、意外と防御にも適している。単  
純な発想だが、実戦性は極めて高い。

「ふつ」リグヴェーダはその武器を見ても、男の目的を知つても動  
じることなく、逆に不敵な笑みを浮かべた。「我が剣技を知つた上  
でのことか？ もしそうであるならば、その口上褒めて遣わすが、  
知らぬであるならば……」表情を引き締め「今、ここで教えよう」

リグヴェーダ第二王女。今年度エンカータ王国武闘祭、剣術部門  
準優勝者。大陸でも最高の武術大会と称されるこの大会にて、若干  
十六歳での入賞は、国民を驚かせ、若くして達人と称賛された。

その強さに敬意を表して、闘姫と呼ばれる。

このような手合い、助けを呼ぶ必要もない。一人で取り押さえて  
みせる。

「おおー、こえーこえー。俺、ちびっちやいそお」男は言いつつ足  
腰をわざかに下げる。「シェア！」

一気に跳躍する。

「フツ！」リグヴェーダは短い息吹と共に、一気に詰められた間合  
いに合わせて剣を振り下ろす。

だが剣先が届くか否かの手前で男は踏み止まり、床を踏み鳴らし  
て真上に跳躍。軽々と天井まで届き、両足を天井に着けると、そこ  
で再び跳ね、リグヴェーダ頭上を越えて、その背後へ。

「！？」

リグヴェーダは少なからず驚愕するが、動きを止めずに流れるよ

うに反転し、背後頭上へ鋭く切り上げる。

### 鋼の激突音。

男は両手の暗殺短剣を十字に重ねて、王女の一閃を防いだ。しかし、その一撃の反動で撥ね飛ばされ、だが空中で一回転して体勢を立て直すと、難なく着地する。

「ワーオ！　さーつすが闘姫さま。俺の動きについてこれるなんて、すうつごいねー」

男はおどけてカタールをひらひらとからかうように動かす。

リグヴェーダは再び男に向けて正眼に剣を構える。

「貴様……」

リグヴェーダは男の体術に疑念を持った。

男の動きは鍛え上げたものだけではない。あんな動きは如何に鍛えようとも、如何に技を練ろうとも、通常の人間には不可能だ。

二つの方法を除いて。

魔法か薬物。

「麻薬服用暗殺者。貴様、樂園（ジャングル）の手の者か」

世界最大の暗殺組織の名を挙げる。そこで育成される暗殺者は、身体能力を強制的に向上させる麻薬を服用しているという。

「当つたりー。でーも、雇い主は別だよ。ゲッゲッゲッゲッゲッ」「どうする？」リグヴェーダは胸中咳く。

麻薬服用暗殺者に対抗するのは至難の業。痛覚などの感覚も鈍くしてあるため、生半可な攻撃は意味がない。それこそ一撃必殺の斬撃を与えるければ効果がないだろう。だが、強制的に向上させた身体能力のため、それ自体が極めて難しい。

加えて敵の技の鍛度も問題だ。技をなにも知らない者が、薬物によって身体能力を向上させても、力任せに動くだけで、武術を習得した者にとつてはそれほど脅威とはならない。だが、この男の技は、けして素人ではない。

負けるとは思わないが、勝つのが難しいのも確かだ。

このような相手に負けるようで悔しいものを感じるが、暗殺者な

どに剣士の誇りを貫いても意味はないだらう。素直に人を呼ぶべきか。

「ボツズル。なにを遊んでいる？」

不意に窓からもう一つの人影が現れた。

全身を黒で統一した衣服に、足元にまで届くロープを羽織つた初老の人物。月明かりに照らされる銀髪が目を引く。黒衣の姿は闇に溶けるようでいて、その実、異様に映える。

「ゲシユタルの旦那」ボツズルと呼ばれた、奇怪な姿をした暗殺者は答えた。「いやー、この王女さま、結構強くつてさー。ひょつとして負けちゃんじやないかなーつて、ちよこつと」人差し指と親指で大きさを示し「思つちやつたりしてー。ゲーゲッゲッゲッ」「ふざけるな」恐ろしく抑揚を欠いた声で叱責する。「早く済ませろ。時間の無駄だ」

「だけどよー、この王女さまほんとに強いんだぜー。俺一人じゃあ時間がかかるちまうよ。だからさ」首と手を奇妙に捻つた踊りのような動きをして見せて「旦那も手伝ってくれよん」

「……」ゲシユタルという男はしばらくの沈黙の後「わかった」「二対一。これは人を呼ぶしかない。

決心したその時、寝室のドアが開いた。

「王女様、お呼びでしょうか？」

しまつた！ リグヴェーダは慄然とする。先程、呼び鈴を鳴らしていたことを完全に失念していた。

リグヴェーダが行動を起こすよりも素早く、ボツズルはドアの前に疾走。室内に入ろうとした侍女、サリナの首に腕を回すと、彼女の首筋にカタールの切つ先を突き付ける。

「お姉ちゃん、動いちゃダメー」

「あ？……王女様？」

ボツズルの腕に捕らわれたサリナは、恐怖で震え、その声はか細い。

「王女さまも動いちゃダメー。動かないでー、静かにしてー、おと

なしく、捕まつてちょうどいい。ゲーゲッゲッゲッ

「……なに？ 王女様……なにが起きているのですか？」

サリナは突然の出来事に混乱を起こしかけていた。

ボッズルは、その彼女の頬に刃で一筋の傷をつけ、次に首筋に刃を当てる。

「ほーらほらあ。早く武器を捨てないと、このお姉ちゃんの首が、あらまあキレーに切れちゃつたりしてー」

「ひつ」サリナの短い悲鳴。

「待て！」リグヴェーダは叫び、静かに感情を押し殺した声で「わかつた。捨てる」

「いけ……ません……駄目……逃げてください……」

サリナが叫ぼうとしているが、意に反して喉から出るのは小さな声。

リグヴェーダは苦渋の表情で、剣を床に捨てた。

「それでいいんだよお。ゲッゲッゲッ」そしてゲシュタルに「じや、旦那、よろしく」

ゲシュタルが肯いて了承の意を示すと、リグヴェーダに足を静かに進める。

どうする？

リグヴェーダは思案する。黒衣の男が接近するまで残り十歩。その間に打開策を考えつかなければ、囚われの身となり、サリナの身もどうなるか。この状況を打開する方法を考えなければ。

視界の端で、サリナが手をゆっくりと動かすのが入った。その手が向かうのは、扉の隣に備え付けられた、人を呼ぶための鈴。サリナの手が届く距離にある。そして呼び鈴は、緊急時に備えて、鳴らした場所では音が鳴らないようになつてている。

サリナが慎重に、呼び鈴に震える手を伸ばす。

人を呼び、衛兵が来れば、なんとかなるかもしない。あの呼び鈴を鳴らせば他の誰かが気付いてくれるかもしないとえたのだろう。

リグヴェーダは警告を出すべきかどうか逡巡した。

迂闊に警告すれば、二人の行動から察するに躊躇いなく、サリナを殺めるだらう。

だが、やつらに判明すれば、やはりサリナは殺される。

リグヴェーダは自分から行動することを断念した。自分から行動すれば、サリナの身が危険にさらされるしかない状況だ。

銀髪の男はこちらに向かっており、サリナには背を向けている。サリナを捕らえている男も、自分に気を取られている。

気付かれずに成功してくれ。リグヴェーダは胸中祈つた。

「ダメ」

だが唐突に、サリナの手をボッズルが掴んだ。

「ひつ！」サリナは思わず悲鳴を上げる。

「そんなことしちゃあ、ダメダメのダメダメ！　だーかーらー、お

位置き！」

「まつ」待てと、リグヴェーダは制止の声を上げようとした。

だがそれより早く、なにかが切断される、軽いのに鈍く嫌悪感を催す音が聞こえ、一瞬後、サリナの首筋から鮮血が吹き出た。

「あ、ああ、ああ！」

「サリナ！」

リグヴェーダは叫び、一人の侵入者に構わず、サリナに駆け寄ろうとした。

だがゲシュタルがその進路を遮り、左手をリグヴェーダに向ける。同時に破裂音にも似た音が鳴り、リグヴェーダは全身に衝撃を受けて、力なく床に崩れ落ちる。

「こやつ魔法使いか！」

魔法使い。人間が持つはずのない力を持ち、操る者。古代の巨人

たちの持つ力と技を継承する者たち。

如何なる魔法を使つたのかわからないが、体が痺れてまるで動かず、意識が急速に薄れていくのを実感した。

暗くなっていく視界に、セリナが首筋から吹き出る血を手の平で

押えようとして、それが全く効を成していないのが見えた。早く血を止めなければ、その命を失う。さながら水時計のように。早く助けなければ。

サリナの出血を止めて、医者に直してもらわなければ。魔法使いでも良い。今すぐサリナを助けなければ。

「サリ……ナ……」

だが、仕える者を守護する使命感は、薄れていく意識を繋ぎ止めるることはできなかつた。

「誰かギテ！ 誰ガああガああ！」

視界が暗闇に閉ざされる直前、サリナの最後の力を振り絞つた声を耳にした。

だが絶叫に近いその声も、リグ・ヴェーダの暗闇に閉ざされた視界に光を戻すことはできず、途絶えた思考も覚醒することはなかつた。

ゲシュタルは、首筋からの出血多量によつて死亡した、侍女の死体を見下ろした。

そして、ボッズルに抑揚のない声で「悪趣味だぞ」

「なんだよお、旦那。いいじゃねつかよー」ボッズルはおどけて踊つて見せて「気に入らなかつたあー？ 文句あるうー？ ザーラディースの旦那に言つて俺を解雇するうー？」

ゲシュタルは軽く首を振り、一言。

「いいや」

廊下から足早の音が複数、寝室に向かつてくる。

「気付かれたな。当然だが

「いいじゃねえか、もう終わつたんだしよ。さつさと撤収、撤収ー」

十数秒後、リグヴェーダ王女の寝室に、近衛兵が到着したが、そこには事切れたサリナの他に、誰の姿もなかった。寝室の主である王女も。

これが、これから起こる、そして全ての真実を知る人間は誰一人していなかつた、事件の始まりだつた。

神は四つの世界を御創りになられた。

四つの世界それぞれに、四つの名を御与えになられた。

天界。  
魔界。  
地界。  
火の国。

それぞれの世界に住まう者として、四つの民を御造りになられた。  
光から天使を創り、天界に置いた。  
闇から魔族を創り、魔界に置いた。  
土から人間を創り、地界に置いた。  
火から炎の民を創り、火の国に置いた。

神は四つの民それぞれに四つの世界を与え、世界の在り方と四つの民の在り方を教えた。

四つの民は、母にして父である神に従い、教えを忠実に守護し続けた。

しかし千年目にして綻びが生ずる。

神の玉座に最も近い位置に在る七人の天使長が、突如として神に反旗を翻し、魔界を統べる魔族を従え、神に戦いを挑んだ。  
この時から、七人の天使長はその地位を剥奪され、魔王と呼ばれるようになつた。

これに対し神は、天使を率いて、魔王の軍勢を迎撃つた。

神と魔王。

天使と魔族。

二つの勢力軍による戦争が始まつた。

神は人間に命じた。天使と共に、魔族と戦い、魔王を撃ち倒せ。魔王は人間を誘つた。魔族と共に、天使と戦い、神を打ち倒せ。だが、四つの世界を震撼させた戦に、人間は参加しなかつた。

臆病な人間は、神の勅命も、魔王の誘惑も、どちらも選ぶことができなかつた。

そのため戦いは拮抗し、永遠に続くかと思われた。

しかし、存在するはずのない存在が現出し、単純にして純粋な結末を迎える。

滅び<sup>ハラカ</sup>。

深淵の虚無から死<sup>マツタガ</sup>が訪れた。死は魔王と魔族を、地獄<sup>ジャハシナム</sup>の奈落へと引きずり落とした。この時より四つの世界には死が訪れるようになつた。

火の国から炎の王<sup>マーリード</sup>が立ち上がつた。炎の王は炎の剣<sup>ラハット・ハヘレガ・ハミトウハベヘット</sup>で天使を焼き尽くし、天の扉を閉じ、炎の剣を据え置き、天界と神の玉座を封じ込めた。この時より万物は老<sup>シャイフーハ</sup>い、腐<sup>ファサダ</sup>し、朽<sup>タクスイル</sup>ちるようになつた。

空虚なる混沌から名の無い魔獸<sup>アジ・アディースム</sup>が現れた。名の無い魔獸が全ての名を剥奪し、滅びは完成される。

完成された滅びは、全てを真なる永劫の内に終焉<sup>イフタタマ</sup>させる。

しかし神は奇跡<sup>ハラジカ</sup>を起こした。

名の無い魔獸に名が与えられ、名の無い魔獸は、名の無い魔獸ではなくなつた。

そして世界は存続を許された。

だが魔王も秘跡<sup>スイツリ</sup>を起こした。

名を与えられたことによつて、名の無い魔獸ではなくなつたはずのものから、名を奪い、再び名の無い魔獸へと戻した。

そして名の無い魔獸は空虚なる混沌へ帰つて行つた。  
再来<sup>ラジヤア</sup>することを告げて。

神は人間に説く。

汝らは、我にも彼の者たちにも従わなかつた。それ故に汝らは善<sup>ハイル</sup>でも悪<sup>シャッル</sup>でもあり、そのどちらでもない存在となつた。次に名の無い魔獸が現れるまでに、我の言葉を聞き入れなければ、我は救いを与えず、名の無い魔獸は全てを終わらせるだろつ。

魔王は人間に囁く。

汝らは我らにも神にも耳を貸さなかつた。それ故に汝らは悪でも善でもなく、そのどちらである存在となつた。次に名の無い魔獸が現れるまでに、我らの言葉を聞かぬならば、我らは褒美を口へえず、名の無い魔獸は全てを終わらせるだらう。

モスク  
礼拝堂にて導師<sup>シャイフ</sup>は教徒たちに語る。

聞きなさい。神の子供たちよ。神にも魔王にも従わなかつた者たちの末裔よ。

この神話は我らの心を最も良く表してゐる。

臆病であるがゆえに、善も惡も選ぶことができない我らの性質。しかし我らは選択しなければならない。

神の救いを求め、神の言葉を聞き、神の下僕となるか。

魔王の褒美を求め、魔王の誘惑を聞き、魔王の奴隸となるか。神は名の無い魔獸から救い、滅亡を止めようとされている。

魔王は名の無い魔獸を使い、滅亡をもたらそつと齎す。

どちらの言葉を聞くかは明白と言えるでしょ。う。

慈愛を持つて救う者に従つか、恐怖を持つて齎す者に従つか。

ハイル<sup>シャッル</sup>  
善と惡。  
イラフ<sup>シャイターン</sup>  
神と魔王。

我らは二つの選択から、一つに決断しなければならないのです。  
アジ<sup>アジ</sup>・アディースム<sup>アディースム</sup>  
名の無い魔獸が、再び現れる前に。

エンカータ王国南西部に位置するそれは、全長約三百五百キロメートル、幅約二十五キロメートル。深さ最大千五百メートルの、ノーラカル河の水流が数十万年もの長い年月をかけて刻んだ大地の裂け目。

それはあまりにも、広大で巨大で偉大で、それ故に極めて単純にそれを表現する名で呼ばれている。

大峡谷。  
アザマワーデイ

その一画で、一足歩行の獣が群れを成して疾走する。蹄が搔き鳴らす地響きと土煙が巻き上がる。

その背に跨っているのは、十四歳の少年たち。

人口が疎らなこの土地で、大峡谷の住人たちは年に一度、大峡谷に点在する集落の中心地、ベドウイルム村に一年に一度集い、成人の儀式の一つとして競馬スイバークルハイルを行なう。

参加者はこの年、成年を迎える十四歳の少年たち。

ただ、通常の競馬とは違い、この地方の乗用動物であるティダが使われる。

ティダとは大峡谷に生息する動物で、保護色なのか、土色に近い茶色の体毛が全身を薄く覆い、頭部には木の枝のような角があり、鹿に似ていると言えないこともない。だが、鹿とは違い一足歩行で、遠くからはカンガルーともダチョウとも取れるシエルエットをしている。体の大きさはそれらの一倍近くあるので、近くで見るとまるで似ていないが。

生活の基盤を、狩猟を中心としたこの地方に点在する村や集落は、ティダサイドウを常用動物として利用し、その優れた乗り手は、同時に優れた狩人サイドウであり、勇者バタルと賞賛される。

成人式の儀式の一つである競馬で優勝することは、子供から大人になる少年たちにとって、最高の名誉なのだ。

幅約三十メートル、距離三キロメートルの、天然の地形を利用して作られた、外壁に挟まれ曲がりくねった競技場で、十二頭のティダが走り抜ける。

先頭を走るのは、ベドウイルム村から参加した四人の少年たち。ダラス、リーバ、ジェドム。そしてマースムカ。

他の村や集落の乗り手から大きく引き離して、自分たちの村の少年たちだけが先頭を占めて走るその光景に、崖上から観戦するベドウイルムの村人たちは歓声を上げる。

「いいぞお！ 突っ走れえ！」

「ジフ、マースムカもなかなかやるじゃないか」

「ゴールへ先回りしよう！」

「ああ、誰が優勝するのか見届けないとな」

彼らは少年たちに向かうゴールへの近道を走り始めた。

先頭から四頭目のティダに乗る少年、マースムカはティダに話しかける。

「セネロ、準備はいいかい？」

「モモウ！ 牛のような雄叫びを上げ、セネロと呼ばれたティダは応えた。

視界が開ける平野まで残り五百メートル、その手前で勝負をかける。マースムカは防風ゴーグルの中でその目を輝かせた。

残り四百メートル。先頭を走る少年、ダラスが一瞬後方を振り返つた。マースムカを警戒している。

残り三百メートル。平野に入る手前の急激なカーブに差し掛かった。

「今だ！」

マースムカの合図に呼応し、セネロは急激に速度を上げた。

「なに！？」

先頭を走るダラスは、思わず疑念の声を上げた。

確かにカーブを曲がる時は速度を落とさなければならない。そこを狙い、あえて全力で突入すれば三人を抜くことは可能だろう。だが、直角に近いあのカーブを全力で走り抜けることなど不可能。曲がり切れずに壁に衝突する。あまりに無謀だ。

ダラスを含めた先頭三頭のティダは速度を落とし、体勢を斜めに傾けて方向を変え始める。

その横をマースムカは全力で、大幅に外側を走り、だがリーバ、ジェドムを一気に抜き去り、先頭のダラスに迫る。しかし、やはり曲がり切れずに壁に向かってしまっている。このままでは壁と接触して転倒するだろう。

バカが、そんなことをすれば当然だ。ダラスは笑みを浮かべ、正面へ改めて向いた。

「ダラス！ 抜かれるぞ！」

だが、リーバの声に思わず振り返る。

マースムカとセネロは体勢をほとんど真横にした状態で、外側の壁を蹴りつけてカーブを走り抜けた。ほどなく地面に戻り、速度を落としていたダラスよりも明らかに早く、一気に最大速度へ。

「冗談だろ！」 ジュドムが叫ぶ。

速度と遠心力を利用して、壁を地面の代わりとする。単純な理屈だが、口で言うほど簡単ではない。乗り手とティダが正に一心同体の協調を行わなければ、体勢を崩して転倒する。大峡谷のティダ乗り全員で、これを行えるのはいったい何人いるだろうか。

その高等技術を、マースムカはやってのけた。

「冗談じゃねえ！ ダラスは胸中叫んでいた。

必死でティダの尻に鞭を打ち、速度を上げるよう指示するが、彼のティダはこれ以上速く走れないと言いたいのか、悲鳴のような声を上げるだけで、速度はほとんど上がらない。

それに対してもセネロは、マースムカが一度も鞭を使わないにも係わらず、速度をどんどん上げて、ダラスに迫る。

「冗談じやねえぞ！ ダラスは再び胸中で叫んだ。

このままでは確実に抜かれる。優勝の名誉をマースムカなどに奪われてしまう。最高のティダ乗りの栄誉が、狩人の称賛が、勇者の称号が。

マースムカのようなクズに！

「ふざけんじやねえ！」

ダラスは叫び様、ちよつと真横に来ていたマースムカに向けて、鞭を横に振るつた。

「グッ！」

完全に不意を喰らつたマースムカは、防ぐこともできずに鞭の一撃を胸に受け、体勢を崩して落馬しかける。かろうじて右手が手綱を握るも、振り落とされる寸前。

平野に入り一気に視界が開けた。同時にセネロは乗り手の異常に気付き速度を落とす。そこでマースムカの右手が手綱から放れた。地面を転がるマースムカ。その横をリーバ、ジェドムが抜けて行く。回転が止まつたマースムカは、落馬の痛みで呻いたが、後方からティダの一群が迫つて来るのに気付いた。

まずい！ 急いで横へ避難する。

ティダの一群が地響きを立てて、マースムカの横を通り過ぎて行く。

土煙を残し、群れが走り抜けた後には、土埃と泥で汚れたマースムカだけが残つた。

立ち上がった少年の隣に、セネロが寄つて來た。

「……セネロ」

力ない呼び声に、セネロは顔を摺り寄せる。元氣付けよつとするかのように、慰めるように。

「大丈夫だよ、セネロ。それと、よく氣付いてくれたね。ありがとう」

セネロがマースムカの異常に氣付かずに、全速力で走り続けていたら、マースムカの命はなかつたかもしれない。

峡谷を抜けた荒野、三百メートルほど先のゴール地点で歓声が上がつてゐる。

決着がついたのだ。

「行こう」

マースムカはセネロの背に跨ると、ゆつくりと歓声の方向へ向かつた。

歓声に包まれたダラスは、誇らしげに両拳を天に向け、周囲の人々へ自らの存在を誇示していた。優勝者の当然の称賛だと言わんばかりに。

その両脇で、二位のリーバ、三位のジェドムが、やや控えめに手を掲げて戦績を誇る。

人々は三人を口々に褒め称える。

「大峡谷の新しい狩人の誕生だ」

「優れたティダ乗りだ」

「さすがダラスだ」

「ベドウイルム村の誇りだ」

マースムカは彼らの言葉を聞くうちに、誇りに満ちて勝利の栄光を受ける彼らを見ているうちに、怒りが湧き上がってきた。マースムカは付けていたゴーグルを剥ぎ取つた。

隠れていた顔が現れ、近くにいた者たちは、その顔を見て思わず後退りした。

少年というよりは、少女のような端整な顔立ちで、過酷な自然に鍛えられた粗野な彼らの中にあって、逆に目立つ。そして瞳の色が大峡谷の者たちは黒だが、少年だけが蒼い。

だが、秀麗とも呼べる顔は、けして人を魅了することはなかつた。右目から右頬にかけての周辺にある、古い火傷の痕。爛れた痕跡が、瞼を捲れ上がらせ、右側の目玉が飛び出しているように錯覚させている。

醜悪で、薄気味悪い、右顔。

美醜が同居する顔。

それは異形の魔物のように、見る者に否応なく不快感を与える。マースムカは彼らの前に出ようとすると、人垣に阻まれてなかなか前に進めない。マースムカに気付いた者たちが、その顔に驚き、または恐怖し、そして嫌悪感に道を開けるが、それでも人波を縫うようにして進み、ようやくダラスの前へ。

ダラスはマースムカを見ると、嘲るような笑みを浮かべた。いや、事実嘲笑しているのだ。

「ダラス！」マースムカは思わず叫んだ。

「なんだよ？ どうしたんだ、マースムカ」瘤に障る笑みを浮かべたまま答えた。

「なんてことするんだ！ 死ぬところだつたぞ！」

ダラスは意図的に肩を竦める

「なんのことだよ？」

マースムカは一瞬掴みかかりかねないほど激昂したが、寸前のところで正気に返る。

「どうしたのだね？」という声がかけられたから。

声の主はベドウィルム村の長老ザイムだつた。大峡谷の最長老でもある。歳七十歳を超える高齢だが、足腰はしっかりしており、このような場でも顔を出す。白く長い鬚を蓄えており、それを片手で撫で付け

るのが癖だ。

「長老」

マースムカは事情を説明しようとしたが、それより先にダラスが口を開いた。

「こいつが、マースムカが言いがかりをつけてくるんです。最下位になつた腹癒せにね」

開き直つて臆面もなくてたらめを口にするダラスに、マースムカは唖然とする。

「ダラス、おまえ……」

「マースムカ、落ち着きなさい」長老が手で制する。「なにがあつたのだね？」

マースムカは一呼吸落ち着けてから、「ダラスがレースの途中で僕に鞭を振るつたんです。そのせいで僕は落馬しました」

長老は「ダラス。マースムカはこのように言つてこいるが、お前はなにか言いたいことはあるかね？」

「言ひがかりですよ。俺はそんなことしていません」

「ふざけるな！ お雨が僕に鞭を振るつたところはリーバとジエドムが見ていたんだ！」

言つてからマースムカは、ハツと氣付後悔した。これから起ること、リーバとジエドムがなにを言つたか予想できたから。

「リーバ、ジエドム。俺がマースムカになにかしたようなとこりうを見たか？」

ダラスの質問に、二人は首を振る。

「いいや、そんなの見てないぜ」

「俺が見たのは、マースムカが無茶な速度でカーブを突つ切りうとしたところだ」

「ああ、それでバランスを崩して転倒したんだ」

「そうだ。危なかつたんじやないか、あれ」

「他の奴を巻き込んだら、大惨事になつてたかもな」

「……」マースムカはなにも言えず、己の迂闊さを呪つた。

リーバとジエドムはダラスの友人であり舍弟同然。それに対して自分は仲間でさえない。その二人が、ダラスに不利になることを言うはずがないのに、そんなことにも気付けないなんて。

ダラスが周囲に向かって「他に誰か、俺が鞭を振るつたとか、そういうことをしたのを見た者はいるか?」

返事は沈黙。手を上げる者、返答する者は誰もいない。あの時はカーブを曲がった直後で、後方にいた乗り手は勿論、観客からも見えない位置だった。そしてなにより、大峡谷においてマースム力に味方をする者は誰もいない。

皆、せっかくの喜びの場に水を差したマースム力に対して、非難の目を向けるが、あるいは、その醜い顔に不快感を示していた。

「なんだ、あの顔は?」

「顔も醜いなら、性根も醜いわけか

「化け物じゃないのか?」

「ただの卑怯者さ」

人々は事態の真偽を確かめようとせず、ただマースム力の醜怪な右顔に嫌悪と不快を指摘するだけ。

「どうです? 長老、俺の身の潔白が証明されましたか?」

長老は、なにを考えているのか良く判らない表情で、相変わらず髪を撫で付ける。

しばらくして「マースム力、お前の結果は確かに残念だが、その腹癪せに嘘を言つて、誰かを陥れるということをしてはいかんと思うのだがのう」

「長老! 僕は……」

長老はマースム力の言葉を制する。

「それぐらいにしておきなさい。第一、お前の言つことは全部証拠がない。それでは誰も信じやせん。そうじやうつ」

マースム力は悔しこ、爪が食い込むほど手を強く握りしめた。

「……はい」

ダラスがマースム力の肩に馴れ馴れしい仕草で手を置いた。とて

つもない不快感が体を侵食したが、それを払い除けようという気持ちがどうしても湧き上がらなかつた。

「今ここにはな、大峡谷の住人が全て集まつているんだ。そんなどころで、これ以上村に泥を塗る真似は止めるんだな」そして肩から手を離し、マースム力にしか聞こえない小声で囁く。「余所者が」長老は「さあ、皆の者。改めて新しき狩人たちの誕生を祝おうではないか」

その声に、最初は疎らに、やがて全員がダラスたちに祝福の歓声を上げる。

その中からマースム力は静かに出て行つた。  
敗北感を抱えたまま。

ベド・ヴィルム村で一番の器量良しと称されている少女、ラーナは、事態の顛末を危ぶみながら見届けた。

そして歓声の中から、歯を食いしばり、拳を握り締め、その秀麗な左顔と醜怪な右目に、怒りと悲しみ、そして悔恨を抱えたマースム力が立ち去ろうとして行く。

彼に話しかけようと足を向けた。なにを言えば良いのかわからな。だけど、なにか話しかけなければ、誰かがマースム力の傍にいてやらなければいけない。上手く言い表せないが、そんな焦燥感と義務感が湧き上がるのだ。

だが、隣にいた母親がそれを見咎めて、ラーナの手を引いた。「さあ、ラーナ。大峡谷の誇るティダ乗りのダラスにこれを渡してやりなさい」

花束を娘の手に強引に握らせて、ダラスを示す。

「あ、でも」

ラーナは戸惑い、ダラスとマースム力に視線を交互に変える。「なにをてれているんだい。早く行つてやりな。お前が行けば、ダラスは喜ぶよ」

母親はダラスの方へと娘の背を押した。

それは他の人々も気付き、皆に押されるようにダラスの前へ。ラーナは仕方なくダラスに花束を渡す。

ダラスはラーナから花束を受け取ると、不意にラーナの腰に手を伸ばし、高々と持ち上げた。すると、周囲からこれまでとは違った、若い恋人を祝福し、からかう、野次の混じる歓声が上がった。

だが、ラーナにはそんな気はなく、突然のことに戸惑い困惑しているだけで、どちらかといえば迷惑としか思わなかつたが、彼女の

内心に気付くものは誰もいなかつた。

内気な少女が恥ずかしがつてゐるだけとしか思わなかつた。  
なによりもダラスが。

ジフは少し息を切らし、ゆっくり進むよつと、ティダを操る。途中までは他の観客と一緒にゴールに先回りしようと、ティダを走させていたのだが、疲れたので止めた。

初老に差しかかった最近、体力の衰えが激しく、若い頃は軽く行えたことが、酷く労力を必要とする作業になつてしまつた。頭髪もほとんど白髪になつてしまい、つまりは寄る年の波には勝てないと言つことか。

だが、ジフはあまりレースの結果に興味がなかつた。マースム力の順位だけは気になるが、崖上から見たあの調子だと、それなりに良い結果を得られているだろう。

やがてゴールが見えてきた。決着は付いたらしく、歓声が上がつてゐる。

だが彼は、やはり速度を上げずに、ゆっくりとしたペースで進む。ふと、見知つた影が観衆の中から出て行くのが見えた。  
マースム力だ。少年はセネロに跨ると、集まりから離れていく。ジフはそちらにティダを向けた。

マースム力は気分が落ち込んでゐるのを自覚していたが、落下していく精神を自制することができなかつた。

また僕は負けた。競争ではなく、主張することだ。

人間関係は勝ち負けで成り立つようなものではないが、自分がなにかを主張すれば勝負になる。ましてや自分が正しいのならば、絶

対に負けてはならないはずだ。

だが、マースムカは負けた。引いてしまった。彼はそういう少年だった。誰かと争うことが苦手で、なにより全精力をかけて対抗し抗議する度胸も気力も、勇気もない。

おとなしく優しいといえば聞こえは良いが、概してそれは臆病と言い換えられる。

「どうした？ マースムカ」

「あ、父さん」

今初めて気付いたのか、すぐ傍まで来ていた父に、少し驚いた表情を向ける。

「皆のところにいなくて良いのか？」

「……良いんだ」

マースムカは寂しげに答える。その様子に不審なものを感じたが、ジフは追求しなかった。

「競馬の結果はどうだった？」

マースムカはしばらく黙っていたが「……最下位だった」

「……そうか」ジフはなんでもないようなことに答え「まあ、気にするな。そういうこともある」

「……そうだね」

「さあ、村へ帰ろう。成人の儀式の準備があるだろ？」

「うん」

そして二人で帰路に立つ。

二人は親子だが、血は繋がっていない。七年前、当時七歳のまだ幼かったマースムカを、ジフが王都の孤児院から引き取り、養子として育てた。ティダの扱いも、狩の技も、全てジフが教えた。

かつて大峡谷隨一の狩人と呼ばれた人物に指南を受け、マースムカは現在、ティダの優秀な乗り手となり、優れた狩人となつた。

だが、それでも村で疎外される。ダラスのようにあからさまに他所者扱いしてくるのはほとんどないが、なにかにつけ不當に扱わってきた。

それは醜悪な右顔、爛れた火傷の痕に起因しているのは理解していた。そして引っ越し思案な性格や、人と付き合うといふことに不器用であることが、さらに拍車をかけている。

だが、自覚し理解しても、簡単に治せるものでも、解決できるものでもない。

少年は、だからこそ今日のレースで優勝したかった。せめて優秀な成績を収めたかった。

そうすれば皆が認めてくれると、村に受け入れられるようになると信じて。

だが、結果は最下位。それもダラスの卑劣な妨害によって。そしてなによりも悔しいのは、自分が卑怯者とされたことだつた。どうして僕がこんな思いをしなければならないのだろう。謂れ無い非難を受け続け、それをなんとかしようとしても、何一つ上手く行かない。

マースムカは悔恨と悲しみが募る。だが、彼は一滴たりとも涙を流さない。少年は七歳の時から泣いたことは一度としてなかつた。ふと、マースムカは向かう方向に誰かがいることに気付いた。ティダではない、普通の馬に乗つた黒衣の男だ。

銀色の髪をした黒衣の人物は、マースムカとジフへ向けて馬を進めていた。

二人はティダを止める。

「父さん、誰だろう？」

マースムカは尋ねたが、ジフは答えず、黒衣の男を厳しい目で凝視している。驚愕とも怒りとも取れる目に、微かに怯えが混じっているような。

「父さん？」

「私の後ろに下がれ

「え？」

「早く下がるんだ」少し語氣を荒くして、指示する。

「う、うん」マースムカは戸惑いながら後方へ下がる。

黒衣の人物は小さな声でも届く距離まで来ると馬を止めた。

「久し振りだな」

男からジフに話しかけた。酷く鷹揚のない、まるで感情が欠落しているのではないかと思う声。

「なにをしに来た？ ゲシュタル」

「ご挨拶だな」一呼吸おいて「そう警戒するな。今日はただ顔を見に来ただけだ。たまたま近くに立ち寄つたものでな」

「ならば、早く立ち去れ」

「付き合いが悪いな。少しくらい話をしてもいいだろ。アザニスの悪魔」

「その名で呼ぶのは止めろ！」

「そう、怒るな」そこで初めてマースムカの存在に気付いたように目を向けた。「……その少年は？」

「息子だ」

「ほう。お前に息子がいたとは、知らなかつた」

「話さなかつたからな」

「養子ではないのか？」

「お前には関係ない」

「関係なくはないだろ。昔の仲間なのだから」

「昔のだ」

「今は違うとも言いたそудな」

「そうだ」

「今は違つとも言いたそудな」

重なる一人の視線は、火花を散らしていくとやえ錯覚するほど、緊張感に満ちていた。

「……フツ」

だが、不意にゲシュタルは少し俯いて視線を外し、苦笑した。感情がないと思われた男に。

「わかつた。さつさと立ち去ることにする」

馬を操りジフとマースムカの横を通過する。だが、ふと思い出したように馬を止めた。

「ああ、そうだ。さつきのレース、か？　あれはなかなか面白い見世物だった。特に最後の場面は」

言葉とは裏腹、楽しさなど微塵の欠片も感じなかつたかのよう、「」  
感情のない声に戻つていた。

「先頭で走つていた少年が、お前の息子を鞭で叩き落したんだつた。そのことでなにやら揉めていたようだが……」ゲシュタルはしばらく言葉を搜して『いたようだ』が「まあ、いい。くだらないことだ」マースムカは「見てたの？　僕が落とされるところ。そのことで揉めていたことも？」

ジフは息子の質問に叱責するような目を向けたが、彼が何かを言う前に、ゲシュタルが答える。

「ああ、見ていた。……なぜ証言してくれなかつたとでも言いたいのか？」

マースムカは肯定するべきなのか否定するべきなのかわからなかつた。それは純粹な疑問だつたからなのか。

ゲシュタルはやはり感情のない抑揚を欠いた声で答えた。

「俺には関係のないことだから」そして付け加えるように「少年……マースムカだつたか？　自分の居場所を確立したいのなら、争うことをおれないことだ。そしてけして引いてはいけない。引けば追い込まれるだけだ。そして、負ける」

ゲシュタルはマースムカの返答を待たずに、馬を進ませ始めた。

「……マースムカ。奇妙な名だ」

少年の名前の意味を、古代語の意味を知つて『いる』  
古代に使用された、名を問う時の言葉。

マースムカ  
汝の名はなにか？

銀髪の黒衣の男は、名前と呼べない名前にそれ以上の興味はなかつたのか、そのまま去つた。

その背後を沈黙したまま見送り、やがて男は峡谷の彼方へと姿を消した。

しばらくしてマースムカは尋ねる。

「父さん、今の人は？」  
ジフは少しの沈黙の後、短く答える。  
「知り合いだ。昔のな」

その日の夜。

ベドウイルム村で成人の儀式が行われた。  
満月の月明かりの下、長老が祝詞を唱え、清酒を杯に注ぐ。  
成人を迎える子供たちはそれを飲み干した。  
やがて誰からともなく楽器を奏で始め、歌声がそれに伴い、一人、  
また一人と、やがて全員が併せゆく、重ねゆく。  
静かで素朴な、それゆえに荘厳な、自然との調和が奏でる協奏曲。  
どこまでも、いつまでも、大地に空に、遙に彼方に、響き渡る。  
偉大なる大峡谷に。

こうしてマースムカは、子供と呼ばれる時期の、最後の日を終えた。  
敗者<sup>ハジイマ</sup>のまま。

エンカータ王国第一王女、リグヴェーダが拉致されてから、十日後。

リグヴェーダ搜索の一隊が大峡谷を訪れた。

ともすれば己の位置を見失いかねないほど広大で起伏に富み、天然の迷路のように入り組んだ地形の大峡谷を、長旅用の馬で、彼らは進み続ける。

一人の巨漢がふと外套の頭巾を外し、陽光を右手の平で遮つて雲一つない空を仰ぐ。一応は砂漠の中なのだが、大陸三大大河の一つである大峡谷にいるためか、運河が空気の熱を吸収し、大気に灼熱の暑さはない。しかし照りつけられる空からの光は紛れもなく、砂漠の昼の支配者がもたらす、恵みにして忌避すべき光熱だった。

巨漢の男は視線を前方に戻す。

「本当にこの場所で間違いないのか？」

肌が赤褐色に焼けた三十代後半の巨漢。筋肉ははち切れんほどに膨れ上がり、血管が浮き出るほど引き締まっている。黒髪を短く刈り、彫りの深い顔立ちには猛獸をも怯えさせる鋭くも静かな眼光。背には刃渡り一メートルを超える巨大な剣を担いでおり、腰に拳銃を一丁佩いている。馬の脇には巨大な盾。日除けの外套の下には、砂漠の長旅では邪魔になるので鎧ではなく、隠密作戦用の特殊防護服を着用しているが、それでも彼の姿を一目見た者はこう呼ぶだろう。

ファーリス  
騎士。

ラッガート・エティングス。

この搜索隊を率いる隊長であり、エンカータ王国騎士団百騎長の位を持ち、王家警護部のリグヴェーダ王女近衛隊長でもある。

この男に声をかけられただけで、ほとんどの者はその威圧感に萎縮してしまうのだが、質問を受けた先導の男は、まるで意にすることなく軽い調子で答える。

「大丈夫だつて。そのために俺を雇つたんだろ」

先導の男は懐から煙草を取り出すと、マッチを片手の爪だけで器用に擦つて火を点けた。そして美味そうに深く紫煙を吸い込むと、至福に満ちた愉悦の笑みでゆっくりと吐き出す。

金の髪をバンダナで纏めた、この国では珍しく白い肌をした、二十代後半と思われる男。砂漠を渡るために必要な外套の下に身につけている軍用ジャケットには、六連装拳銃(リボルバー)が二丁と散弾銃(ショットガン)が隠されている。遮光グラスのゴーグルは砂嵐を警戒してのことなのか、ただの飾りなのか、少なくともサングラスの代用品にはなつており、強烈な太陽の光に悩まされることはないだろう。ただ、夜間だろうと睡眠時であろうと、外したことが一度としてなく、当然素顔を誰も見たことがないのが、問題でもあり謎でもあるのだが。

とにかく、口調といい、雰囲気といい、全体として軽薄な印象を受ける。

パブロと名乗っているが、本名がどうかは怪しい。

「王女さまがこの大峡谷に連れて行かれたのは確かだ。俺の情報網から得た情報だから間違いないって。いい加減に信用してくれよ」

パブロの右後方に位置する女性が、全然信用していないような口調で答えた。

「ええ、信用しているわ。情報屋」

温和な印象を受ける、眼鏡がよく似合う知的な美女だ。整つている顔は、逆に特徴が捉え難いため、外見からは正確な年齢がよく判らず、二十歳程度とも、三十代後半とも見える。そのせいだろうか、穏やかな雰囲気であるのに、どこか妖艶な香りが漂う。

その体を覆う濃い青紫のドレスのようなローブに、十一本の短剣が仕込まれているのは、この場にいる誰もが知っている。最初に会つた時に、自己紹介ついでに自分の武器について少し説明をしたか

らなのだが、その腕前がどの程度なのかは、危険な砂漠の旅で幸運にも盗賊団などに襲われなかつたため、不明なままだ。

リグヴェーダ王女を拉致した者たちとの戦いで発揮してくれるかもしれないが、実のところラッガートは、彼女の短剣の腕前はあまり期待していなかつた。期待しているのは別の武器。

そして彼女の武器は目に見えるものではない。

彼女の最大の武器であり、そして戦闘技術は、魔法。

王国軍特殊部隊・魔術師団所属。セリナ・ランテルギー。

古代の巨人の力と技を継承した、人にして人ならざる技と力を持つ魔術師マジック。そして王国から魔法の師の称号を授与された者。すなわち、魔術師。

その魔術師は手を振つて周囲に漂う紫煙を散らす。

「でも、煙草は止めてくれないかしら」

「ああ、悪い悪い」慌ててパブロは煙草を片手の指だけで揉み消す。熱くないのだろうかと、ラッガートは訝しく思った。

「大丈夫でしょうか？」

ラッガートの後ろで、一番若い男、ルマジヤーン・イーブが隣の男に小声で尋ねた。

去年騎士に叙勲されたばかりの新米で、王家警護部のリグヴェーダ王女近衛隊に配属されている。

砂漠服用の外套の下には、ラッガートと同じ動きやすさを優先させた特殊防護服を着用しており、剣と拳銃を腰に下げているが、どこか着け慣れていない様子で、年齢もまだ二十一歳と、騎士と称されるにはいささか頼りない印象を受ける。だが、ラッガートは彼が見た目とは違い、極めて優秀で、有能であることを知つていた。

「俺に聞くなよ。難しいことなんかわかんねえんだからさ」

ルマジヤーンの隣にいる、最も年齢の高い男が、質問に困つたよう答える。

周囲を落ち着かない様子で見渡している彼は、一応騎士団の一員だが、ルマジヤーン以上に頼りない印象を受ける。実際はそうでも

ないのだが、自分に対しても自信がないことの表れだろう。

シェルダック・ジエドルケ。名家の出身で、騎士に叙勲できたのは、ほとんど家柄と親の意向とコネと金のためだと、本人は思つており、そのことに不満を持つている。不満というより、不安だ。

騎士として力も能力も不足していると、自分を低く評価しており、そもそもどうして騎士になれたのか、後ろ盾があつたとしても不思議なくらいだとさえ感じているようだ。

だが、そのためだろうか、逆に任務を必ず果たすと努力と命を惜します、それが必ずしも成功するとは限らないが、誠実に職務に励んできたことが功を成し、出世こそできなかつたが、周囲の騎士たちは彼に一目置いている。

隊長であるラッガートも、彼の経験と実績を高く評価しているが、本人は全く気付いておらず、シェルダックは自分は駄目な男なのだろうとと思い続けながら、騎士の叙勲を受けて早三十年。そろそろ退職の時期が近付いている。

経験を積んでも、年を重ねても、今だに自信が持てないシェルダックは、手にする猟銃ライフルを縋るよう握り締めて、周囲を警戒し続けている。

六発装填式の猟銃は、子供の頃に唯一、銃の腕前を褒められた時の物だと、ラッガートは以前聞いたことがある。それ以来、ずっと大切に扱い続け、重要な任務には必ず所持していた。これを握つている間は少しだけ自信が持てるようだ。そして今回も所持して来た。

「信用するかどうかは、問題ではない」

ラッガートが彼らに答えた。

「この者しか手掛かりがないのだ」付け加えて「少々、不安ではあるがな」

ラッガート。セリナ。ルマジャーン。シェルダック。そして、パ

プロ。

この五人が大峡谷に訪れたリグヴェーダ王女捜索隊の全員だ。

一国の王女の捜索に当たるには少なすぎる人数。なぜなら、彼らは非公式の、そして非公認の捜索隊だからだ。

リグヴェーダ王女が何者かに拉致されてから、ラッガート率いる捜索隊が王都を出立する一週間前まで、王宮に急遽設立されたリグヴェーダ王女拉致事件捜査班は、実行動をほとんど取っていない。正確には、取れないというのが現状で、動くには情報が少なすぎるためだ。

リグヴェーダ王女を拉致し、そして侍女サリナを殺害した犯人の手掛かりは全くと言つていいくほどなく、犯行声明は勿論、嘗利誘拐の常套である、身代金の要求も政治的の要求も脅迫の類も一切なく、犯人からの連絡は皆無。

捜査は難航し、しかも王宮の威信の失墜を恐れ、情報は一般公開されていない。国民は勿論、騎士団、王国軍、警察の上層部意外は、ほとんどの人間はリグヴェーダ王女がさらわれたことを知らされていない。

のみならず、情報の流出を警戒して、捜査人数は必要最小限にされ、実際に現場で捜査活動をしているのは数えるほどしかいない、捜査班はアスベルト帝国を始めとした敵国の陰謀策略、もしくは巨大犯罪組織による犯行の可能性を想定しており、それに対応する体制を整えている

つまり連絡を待つてている状態。言い換えれば、連絡が来ない限り動かない。

そして今もつてなお連絡がないということは、永遠に犯人からの連絡がない可能性が高い。

だが、それでも捜査班は動きを見せない。まるで、何者かの指図、圧力があるかのように。

ラッガートはその状況を見て、独断で実行動を起こす決意をした。とは言つても、自らが国王に任された近衛隊を動かしたわけでは

ない。そもそも、騎士団は捜査から外されている。彼らは王家に近い分、感情的になる可能性が高く、人員としても必要ないという理由で。

エンカータ王国の武力組織は大きく分けて三つ。

王国軍。

警察。

騎士団。

当然それぞれ管轄が違う。

王国軍は他国の勢力に対する武力組織、いわゆる軍隊であり、他国からの武力侵略の対応、対抗。あるいは国外での活動などを、主な任務とする。

警察は、基本的に国内での犯罪行為の摘発、取締り、捜査、逮捕などを主な任務としている。リグヴェーダ王女の捜査も、一応警察の管轄になった。

そして騎士団。上下関係からいえば、王国軍、警察の上に位置し、その最高司令官はエンカータ国王本人。つまり国王の直轄軍。基本任務は国内外における治安維持と、曖昧なところがある。そのためか、時には王国軍のような行動を起こし、時には警察のようにも振舞う。両方に関係を持ち、同時に無関係。王国の利害に伴うことならば、どのようなことも任務とする、一種の特務機関と言えるだろう。

現在の主だった任務は、王家、貴族、民選議員の護衛となつている。裏で各國の諜報密偵活動を行つていうという噂があるが、真偽のほどはラッガートも知らず、少なくともその部署に関わったことはない。

組織の権限や有用性を考えれば、リグヴェーダ王女の拉致事件の管轄を請け負つてもおかしくないのだが、国王はその命令を下さず、警察に任せた。もし、リグヴェーダ王女が国外に運ばれたのならば、警察では対応できないにも関わらず。

ラッガートは騎士団の王家警護部、それもリグヴェーダ王女の警

護の責任者であり、王女の安全に直接の関わっている者として国王に直訴したが、現段階では騎士団を動かすのは性急であるとして却下された。

確かに国王の判断はもつともなのだが、実の娘が誘拐されたとうのに、冷淡とも取れる命令だ。しかし国王本人の様子を見る限り、娘の安否を気遣っていることは間違いない、そうなると何者かの作為を推測せざるにはいられない。

国王に近い誰かが、国王に忠言と称して、讒言したのではないだろうか。

冷静な判断を。安易に騎士団を動かせば、リグヴェーダ王女の身が危険にさらされるかもしません、と。

それが、真実リグヴェーダ王女を案じてのことならばまだいい。だが、なにかの謀ならば捜査の妨害工作であり、ことによると国的一大事に発展するかもしれない。リグヴェーダ王女だけではなく、さらに大きな事件へ。

そしてラッガートは独自に捜査状況を、誰にも察知されないよう密かに調査した。結果、捜査における判断は、一つ一つをとれば間違つていないので、全体としてみると、なにかおかしいのだ。それとなく阻害されているような。

だが、ラッガートにできることは、騎士としては、なにもない。国王の命令がない限りは。

そこで、休暇を取つた。

現在の状況で、しかもリグヴェーダ王女を守れなかつた者が、呑気に休暇などどういうつもりなのかと、非難を受けられそうなものだが、意外なことに上官は簡単に許可した。

騎士団の上層部でも、リグヴェーダ王女の安否を憂いており、そして何者かの妨害工作が働いていたことを感じ取つていた。

ラッガートの意図を読み取つた上官は、休暇願を受理し、届けていない騎士団の武器の持ち出し携帯許可も一緒に出した。

そして暗黙の了解の内に、ラッガートの非公式、非公認の捜査

が始まった。

ルマジヤーンとシェルダックはそれに付随してきた。

ラッガートが命令したわけでもなく、そもそもこのような命令は出せないし、出す意思もなく、逆に一人を止めた。今の時期にこのような行動を取ると、立場を悪くする。それにこの事件は、通常の任務より遙に危険度が高い。

だが二人は事件当日の当直をしており、リグヴェーダ王女を守れなかつた責任を感じているのか、制止を聞き入れずに休暇をとつた。これも難なく受理されたため、放つて置くと二人だけで捜し出そうとするかもしれない、そちらのほうが、二人にとつてもリグヴェーダ王女にとつても危険なため、ラッガートは同行することを認めた。そしてセリナ。王国軍に所属する彼女は、本来この事件の捜査をするべき人物ではない。捜査は極秘扱いにされているとはい、一応は警察の管轄であり、基本的に国外からの影響を対象任務とする王国軍の者が国内の事件を捜査すれば、内部で問題になりかねない。ラッガートたちのように、リグヴェーダ王女に係わつていてるわけでもない。

だが、間接的にならば、ある。

事件当夜、殺害された侍女サリナの、双子の姉だ。だから、彼女はラッガートの休暇の話を偶然知り、それがリグヴェーダ王女を探すためだと見当が付き、彼らに接触した。

彼女の目的は、リグヴェーダ王女の安否の問題もあるが、それ以上にサリナの敵を討つという利己的な理由によるところが大きい。

セリナはその辺の事情は説明しなかつたが、サリナと面識のあるラッガートは、セリナがなぜこのような非公認の捜索隊に参加しようとするのか、漠然とだが感じ取り、そして魔法使いであるセリナの力は必要になると見え、彼女を受け入れた。

こうして彼らは独断専行による捜索を開始した。

だが、やはり手掛かりは一切発見できず、そもそもどこでなにを調べればいいのか判らない有様だつた。捜査班からの密かな協力者

おかげで資料の写しを入手することはできたが、それを読み取ることは徒労でしかなかつた。

休暇を取つたことも、なにもかも、全て無駄だつたのではないかとう、倦怠と諦めが三日目にして湧き上がるほど、何一つ進展しなかつた。

そんな状況の中、パブロを見つけた。

正確にはパブロのほうから接触してきた。

三日目の夜、街の片隅にある酒場で四人がささやかな休息を取つていた時、夜にも関わらず遮光グラスのゴーグルを装着した男が話しかけてきた。

「あんたたち、王女さまを探しているんだろう。俺は王女さまがどこに連れて行かれるのかわかる。あんたたちが本当に王女さまを助けるつもりなら、俺がそこへ案内する。金次第でな」

素性を語らぬ正体不明の男に、不信感を抱きつつも、微かな希望を託し、この話に乗つた。

そしてラッガートたちは現在、大峡谷に至る。

「ところで、どこへ向かっているのか、まだ詳しいことを聞いてなかつたわね」

セリナの何気ない質問は、真実ただの何気ない質問だったのか、そのように意図したことなのか。

質問を受けたパブロも何気ないよう端的に答える。

「当面はベドウイルム村だ」

「どんなところなんだ?」ルマジヤーンが訊く。

「大峡谷に点在する集落の中心になっている村。詳しいことは知らないが」

「そこに王女が居られるのか?」ラッガートも何気ない風に装つて質問を重ねた。

「いいや、いない」

わかりやすい返事だった。思わずラッガートは、他の三人のと顔を見合わせてしまつほどに。

「いない?」ラッガートが繰り返す。

「ああ、いない」

「ならば我々はどこへ向かっている?」

「だからベドウイルム村だつて」

ラッガートが手を振り、「聞き方が悪かつたな。王女はどこに居られるのだ?」

「知らね」

四人は再び顔を見合わせた。

「ちょっと待て!」ルマジヤーンが慌てたように声を上げる。「あなたの言っていること無茶苦茶だぞ。リグヴェーダ王女がどこに連

行されたのか知っているんじゃなかつたのか！？

「知らねえよ」パブロはからかうように、そして付け加えて「俺、そんなこと言つたか？」

「言つただろ！自分で言つたことも覚えてないのか！？」

パブロはわざとらしく考へる仕草をしてから「いいや、やつぱり言つてないぞ、俺は」

ラッガートの目が危険な輝きを放つた。これ以上戯言を続けるのなら、この場で切り捨てよう。

状況が状況だけに、ラッガートは見た目の平静とは裏腹、内心気が立つていた。

無言の殺意にパブロは慌てて「俺がお前らに言つたのは、王女さまがどこに連れて行かれるのかがわかる、だ。わかる。知つていい、じゃない」

「詳しく聞かせてくれるかしら」セリナが穏やかに、しかしどこか剣呑なものを感じる声で促した。

「俺が情報屋だというのは最初に言つただろ。それで俺は、所属している組織が国中に張り巡らせてある情報網を使うことができる。そいつに王女さまのことが引っかかつたんだよ。十数人ほどの怪しい連中が大峡谷へ王女さまを連れて行つたってな。それで、ベドウイルム村で密告屋が……」そこで自分が使つている専門用語に気付き「あ、密告屋つてのは、情報網を構成する人員のことなんだが、ベドウイルム村でそいつに会つて、その時に詳細情報をもらう手筈だ。その時にならないと、王女さまの正確な位置はわからない」

「その密告屋というのは、どういう人物なんだ？」トルマジヤーン。

「秘密」

ラッガートとルマジヤーンは同時に剣の柄に手をかける。セリナは動かなかつたが、魔法使いである彼女は動いていなくても、攻撃態勢に入つていないと限らない。シェルダックだけが、どうするべきなのか判断が付かず、困惑していた。

「秘密だ！これは絶対に！」パブロは慌てながらも、断固として

秘密を開示しない。「ほら、あれだ。企業秘密つーか、仕事上の機密事項つーか、有名料理店の料理のレシピは簡単には教えない、教えて欲しかつたら弟子入りして最低十年は働けつてやつで、とにかく商売上教えられねえ！ 仕事に差し支える！」

意味がよくわからない喻えで、教えられないことを説明するパブロを、しばらく睨んでいたラッガートは剣の柄から手を離した。続いてルマジヤーンも離す。

「まあ、いいだろう」ラッガートは「仕事を果たしてくれるのなら、俺たちはそれでいい」

「おう！ 任せてくれ！」パブロはもう安全と見たのか親指を立てて見せる。そして額の汗を拭い小声で「ふう、ちょっとした冗談じやねえか。短気な連中だぜ」

その咳きはしつかり聞こえていた。冗談など言っている時かと、怒鳴ろうかとラッガートは思つたが、パブロは気が付いていないのか、気を落ち着かせるためか、再び煙草に火を点けた。

「だから、煙草は止めて頂戴」とセリナは手を振つて煙を散らす。どうも煙草が苦手らしい。

「ああ、悪い悪い」慌てて揉み消す。

その仕草に気が抜けて、ラッガートは他の二人と顔を見合させて、同時に溜息を吐いた。

「本当に大丈夫なんでしょうか？」ルマジヤーンは、先程とは違う意味で尋ねた。

「わからねえよ。俺に難しいこと聞くなよ」

シェルダックもやはり先程とは少し違う意味で答えた。

「判らん。だが信用するしかあるまい」ラッガートはやはり先程とは少し違う意味で付け加えた。「色々不安だが

しばらくして、探索の騎士たちは一人の少年と遭遇した。

漆黒の髪に、蒼い瞳をした、どこか頼りなさそうな雰囲気の少年。この地方特有の乗用動物、ティダに乗っているのを見ると、おそらくベドウイルム村の人間なのだろう。ティダの両脇に駆動式短弓と矢筒が添えられ、数匹の小動物を吊るしていることから、狩りの最中らしい。

ルマジャーンは、少年の右目が少し奇異に感じた。よく見ると顔の右側に火傷の痕があり、それが原因で右目の瞼が異様に捲り上がり、眼球が飛び出しているように錯覚する。

彼は少し離れた場所から、警戒するようにラッガートたちを窺つていた。

どうしたものかと皆が顔を合わせ、ルマジャーンが手を軽く上げた。

「俺が行きます」

「任せた」ラッガートが首肯する。

そしてルマジャーンは少年へ馬を進めた。

大きな声を出さなくとも話せる距離にまで近付くと、少年が警戒しているのか、控えめに誰何する。

「あの、あなたたちは？」

近くで見ると、少年の顔は整つており、美少年と称しても良いほどで、それが右目異様さをさらに際立たせており、突然視界に入れば目を背けたくなるだろう。しかし、それに耐えて見れば、少年の瞳には優しい光を湛えており、醜悪な右顔もすぐに気にならなくなり、なぜ一瞬でも不快に思つたのか自分に疑問を抱く。失明はしていないうつだが、火傷の原因となつた時の苦痛はどれほどのものだつたのだろうか。

内心を表に出さずにルマジャーンは質問に答える。

「うん。俺たちは王都から来た……」騎士団と言おうとして、伝えて良いのか少し迷つたが「王都から来た騎士団なんだけど、ベドウイルム村へ向かっているんだ。村はこの方角でいいのかな？」

「騎士様ですか」

少年は警戒を解かず、「言葉を繰り返す。

「そうだよ」ルマジヤーンは肯定する。

「ベドウイルム村には」のまま真っ直ぐ進めば一時間ほどで到着します「少年は重ねて「それで、村にどういった要件が?」「

ルマジヤーンは核心を伏せたまま、なるべく嘘を吐かない方向で離すことにした。虚言は苦手だが、隠し事をするのはそれほどでもない。

「旅の途中なんだ。それで、宿を提供してもらえると助かるのだけど」

「それなら、長老に相談するということ思います。頼めば貸してもらえますから」

エンカータ王国では、旅人が訪れたのならば自らの食を割いても持て成せ、という風習がある。これは国土の半分以上が、水や食料に乏しい砂漠であることに起因している。水や食料を得ることが困難な砂漠で、旅の宿を断ることは、その者に死ねと言っているのと同義だからだ。

「そうか。ありがと!」

「よければ、案内しましょうか?」

「ああ、それは助かる」

ルマジヤーンは後方のラッガートたちに簡単な手ぶりで、話が上手くまとまったことを知らせると、彼らは馬を進め始めた。

「そうだ、名前をまだ言つていなかつたね。俺は、ルマジヤーン・イーブ。君は?」

少年は一瞬躊躇つたが、名乗つた。

「マースムカ」

村に到着した一行は、マースムカの案内で長老の家に向かつ。切り出した石材を組み立てた家々は、建ててから百年以上経過し

ているように見えるが、おそらく間違いではないだろう。

樹木は砂漠では希少であるため、木材は戸口に使われている程度で、他にはほとんど見られない。代用品として、布類を窓に使っている家もある。運河が流れる大峡谷も、肥沃な土地とは言い難く、木々は疎らで成長も遅い。

建築思想は基本的に王都と変わらない砂漠特有のものだが、その間取りや形式、壁に描かれた模様は、この地方独自のもので、大峡谷の民族の特色を表している。

村に入る前後から、村人たちが遠巻きに見ており、シェルダックはどうにも落ち着かない様子だが、他は特に気にした様子もなく堂々としている。パブロに至つては、にこやかに若い女性や女の子に手を振つたりする。目が合つただけで隠れられてしまうが。

「気にしないでください。大峡谷の外から誰かが来るのは珍しいんです」

マースムカは村人の行動をフオローする。外の人間が訪れることが少ないので警戒していると言いたいのだろうが、パブロが避けられる理由は絶対に違うと、他の四人は思つた。

やがて長老の家の前に到着した。他の家と同じく、民族色の色濃い独特的の模様が描かれており、異なる箇所といえば玄関に、呪術的な意味があるのか、ただの飾りか、なにかの動物の頭部の剥製が飾られているだけだ。

玄関から髪を長く蓄えた長老が姿を現す。

「マースムカ、その方々は？」

「王都から来られた騎士様だそうです」

「ほう、騎士様でございますか」長老は大仰に頷き「して、このような辺境に一体どのようなご用がありますのでしょうか？」

「巡察を行つております」

ラッガートはあらかじめ考えておいた嘘を吐く。王女のこととは秘密だ、安易に口にするわけにはいかない。独断専行の最中であれば尚更。

「巡察ですか」長老は信じたのがどうか、言葉を繰り返した。

「はい、大峡谷の状況を巡察し、国王に報告します。それで、今日はこの村で宿を提供していただけとありますか」

「ああ、勿論でござります。狭苦しいところではあります、わしの家でよければ、どうぞ」自由にお使いください」

「ご好意、感謝します」

その夜、村の集会場で、大峡谷には珍しい来客に対する酒宴が催された。とは言つても、先日の行われた成人式の続きのようなもので、ラッガートたちが来なくとも行われたのだが。

星空の下に集まつた村人全員に、長老は王都から訪れた騎士を紹介すると、最後の科白で締めくくる。

「それでは騎士殿、大峡谷の狩人たちに、挨拶サラーミと食事タームと会話をカラーム。そして、ゆっくりと楽しんでくだされ」

心弾む音楽と歌が始まり、酒が振舞われ始めた。

客人の周囲に自然と人が集まり、大峡谷の話を聞かせ、または王都の話を聞き、酒宴は盛り上がる。

巨漢の戦士のラッガートに狩人たちが集まり、戦士としての力自慢を聞かせる。

「そうだな、若者の中で一番の戦士は、やつぱりダラスだな」

「いや、村一番の戦士だ」

「あいつはすごい。昨日成人を迎えたばかりだが、大人でも敵わな

い」

「それに、ティダの扱いも村一番だ」

「ほう。たいしたものだ」

「そんなに褒めるなよ。てれるじやねえか」

「もう一日早く来ていればな。スピバ・クルハイル競馬スパイバ・クルハイルが見れたんだが」

「すごかつたんだぜ。まあ、最後がちょっとあれだけよ」

「その話は止めとけよ」

「あなたは、王都じゃどうなんだ？」

「やつぱりその年で騎士団長なんだから、さぞかし強いんだろ」

「王騎長だ」

「大して変わらねえって。強いことには間違いないんだ」

ルマジヤーンには、王都の若い騎士に興味を持った若い女性が集まり、彼はすっかり赤面してしまっていた。

「ねえ、騎士さまは恋人はいるのですか？」

「あら、いて当然よ。こんなに素敵な方ですもの」

「い、いえ。まだ、いません」

「本当ですか！？」

「なに嬉しそうな顔をしているのよ」

「そ、そんなことないもん」

「あたしなんかどうですか？ 王都に連れて行つてください」

「あー！ ダメダメ！」

「妬き持ち妬いてるー」

「あ、いや、あの」

「きやー！ てれちやつて、可愛い！」

ショルダックの周囲には、やはり年齢の関係だらうか、老狩人や引退した者たちが集まる。

「若い頃は、そりやあ危険なこともしたもんだ」

「だが、そういうことが、成長に繋がる」

「まったくです。だが、必ずしも成功に繋がるわけじゃない。それでも、若い頃は夢を見るべきなんだ。夢を見なかつたら、おしまいだ」

「あなたは、王都で夢破れたのかな？」

「いや、まだだ。後もう少しだけがんばれる。後もう少ししかないが、それでも夢は見られるんだ」

「ああ、夢はいい。大きな夢でも、小さな夢でも、見なことが、そして叶えようとすることが大切なんだ」

セリナには老若男女問わず、色々な人間が集まり、王都の名物や名所の話をしていた。

「王都の王宮は世界有数の建築物として知られています。関係者以外は立ち入り禁止となっていますが、外観だけでも一目見ようと、大勢の人々が訪れます」

「へえ、そんなに凄いのかい」

「それに、王都は水がとても豊富です。北の大山脈の雪解け水が河となつて、王都のすぐ隣を流れているんです。そのため、この国の中でも一番目に水の豊富な場所として知られています」

「一番目は？」

「マシュー流域です。ですが、あの場所に住む人はあまりいません。頻繁に氾濫が起きて、住居が流されてしまふんですよ」

「水が多すぎるのも考え方のだな」

「大峡谷はどうなんだ？」

「三番目か、四番目になると思います。ですが、地形の問題で、簡単に手に入るというわけにはいきませんね。実は河から水を汲もうとして、転落しそうになりました」

「はは、他所から来た人には、ちょっと難しいな」

「一人だけ誰も集まらなかつたのは、パブロだつた。

他の者は、王都からの騎士ということで、警戒心も特になく接するようだが、明らかに騎士ではない、素性不明のこの男にだけは、誰にも話しかけようとはしなかつた。夜にも関わらずゴーグルを外さず、明るく人好きのする振る舞いをしても、得体の知れない雰囲気は隠しようがなく、警戒感が自然と湧き上がる。

もつとも、パブロとしてはそちらのほうが都合は良かつたが。

ふと、最初に出会つた村の少年、マースムカに目を向ける。

少年ではなく、青年と呼ぶべきかもしれない。彼は一応この土地の風習、文化の規範では、成人しているらしい。だが、少年という呼称が本人に馴染んで抜け切つていない。

他の村人は、騎士たちの周りに集まり、あるいは彼らだけの輪を

作っているのだが、マースムカだけは少し離れた場所で、初老の男と一緒にいた。

その一人だけが酒宴の場から浮いている。というより、他の村人がマースムカに話しかけないか、話しかけても相手にしないようだ。その若者に初老の男が付き添っている。どういう関係かは聞いていないが、親子だと思われる。

やがてマースムカは父親らしき男に一二三言交わすと、静かに酒宴の場を離れて行ってしまった。

パブロはなんとなく気になり、酒瓶を一つ手にすると、彼の後を追うこととした。

マースムカは酒宴の席を離れ、自宅へ戻ると、セネ口のいる納屋へと入る。

セネ口はまだ起きていたのか、マースムカが姿を現すと同時に嬉しそうな声を上げた。

「クー」

もう一頭のティダ、ジャリスは眠っていたようだが、入つて来たマースムカに気付いて、首を上げ一警するが、すぐに興味なさそうに再び寝入つた。

「やあ、セネ口。調子はどうだい？」

セネ口の頭と首筋を撫でると、セネ口は嬉しそうに頬を舐める。

「あははは。よしよし」

マースムカは抱きしめるようにセネ口の喉をくすぐつてやる。すると、セネ口はますます嬉しくなつてマースムカに頭を摺り寄せた。村から疎外されているマースムカにとつて、セネ口だけが友達と呼べる存在だつた。

ジフに引き取られ、大峡谷に着てから間もない頃、他所者であることと、その右目のために、村人たちからは邪険に扱われていた。もしジフというかつて大峡谷最高の狩人と呼ばれた男の庇護下になければ、ほどなく大峡谷から追いやられていただろう。

だが、ダラスのような一部の子供は、大人の目の届かない場所でマースムカを享楽的な暴力の対象としていた。そしてジフ以外の人がそれを見ても、止めることはなく、ジフが問いただしても子供の遊びだといいわけにもならない弁明ですまさる。

大峡谷に来たのは間違いだと思はじめ、それでも助けてくれるジフがいることや、大峡谷に来る以前のことから、とどまり続

けてきたが、三か月ほど過ぎた頃には、やはり大峡谷を出て行き一人で暮らす方法を、まだ十歳にもならない子供の内から考え始めた。

悩んでいるマースムカは、村を離れて一人当てもなく歩いていると、一頭のティダが現れた。

その野生のティダはマースムカに興味があるのか、少し離れたところで少年を見つめ続けていた。

それがセネロだった。

それからというもの、村から離れると必ずセネロが姿を現した。最初の頃は遠くから眺めるだけで近付こうとしなかつたが、マースムカが餌付けなどで懐いてくれるよう努力した結果、やがて傍に来るようになり、触ることを許し、今では一緒に暮らしている。

野生のティダを飼いならすということは極めて難しく、ほとんどの場合には徒労に終わる。

だが、余所からやつてきた、ティダのことをなにも知らない少年が、熟達者でも困難なことを簡単にやつてしまつた。

村の風習では、ティダを飼い馴らすことは狩人の証の一つとされていた。このこともあって、村人はマースムカをそれなりに認め、追い出そうとする者はいなくなり、また子供たちがマースムカに暴力を振るうことを止めるようになつた。

勿論、マースムカとセネロのことはほとんど偶然が重なつただけのことなのだが、マースムカは仲間として認められる方法を理解したような気がして、ジフから様々な技術を学んだ。そしてジフはそれに応えて多くの知識を伝え、マースムカは砂が水を吸い込むように習得した。その成長は目覚ましく、同年代の子供たちの中では飛びぬけていた。

だが、村人は才能を認める以上に、マースムカを恐れるようになつた。長い年月をかけて培つた自分たちの知識や技術が、まるで取るに足らないことなのだと示されたようだ。

どちらにせよ、それが今もつて村人がマースムカを疎外する最大

の理由だった。

つまり、嫉妬。

そして同年代の者では、マースムカに敵意を剥き出しこにする者も現れた。ダラスのよう。

マースムカはセネロの首筋を撫でる手を止めると、深刻な顔で話し始める。

「ねえ、セネロ。やっぱり僕は村から出たほうがいいのかな？ ここを離れてずっと遠くへ行つて、そこで新しくやり直したほうがいいのかな？ 七年間ずっと頑張つてきたけど、少なくとも頑張つて来たつもりだけど、なんだか上手くいかないんだ。狩の腕が良くなれば皆認めてくれる。そう思つて一生懸命やつて。父さんはもう立て派な狩人だつて褒めてくれるけど、他の皆は僕を認めてくれないんだ。今でも、僕を余所者だと持つて、僕の居場所はここにはないような……」

いつしか俯いていた顔を上げて、セネロと瞳を合わせる。

「セネロはどう思う？」

「クワー」セネロは話を理解しているのか、あるいはしていないのか、首を傾げたが、不意にマースムカの頬を舐めた。

「ああ、そうだよね」セネロがなにを言いたいのか、マースムカにはわかった。「そうだね、セネロがいるものね。父さんがいるよね」

「クイッ」セネロは一声嘶ぐ。肯定するように、元気付けるように。ギィ……。不意にドアの蝶番が軋む音。

マースムカは怪訝に顔を向ける。こんな時間に、自分の家に誰かが訪れるなど今までになかった。

ガタタン、ガタガタ。扉が壊れそうな音を立てる。この納屋の扉は古くて歪んでおり、立て付けが悪いのだ。

「あれ？ これ開かないのか？」

聞き覚えのある声だった。巡察団の一人。

名前は確か……「パブロさん？」

「おう、開かない扉の向こうから答える。そしてガタガタと扉を開

けようとする。

マースムカは慌てて駆け寄つて扉を開ける。「コツがいるのだ。開いた扉から、バンダナで金色の髪を纏め、夜なのに遮光レンズのゴーグルを装着したままの、怪しい」とこの上ない風貌の男がのつそりと入つてくる。

「よお」そして酒瓶を掲げて振つて見せて「お前は酒に付き合わなくていいのか?」

マースムカは首を振る。

「いいんです。僕は、お酒はあまり飲めませんから」

「そうか」それだけではないのだが、パブロは追求しなかつた。そしてセネロに手を伸ばす。「ごく自然に、警告する間もなく。

「あ」思わずマースムカは声を上げた。

「クユウー」

だが、セネロはなにもしなかつた。それどころか気持ち良さそうに撫でられてさえいた。自分以外にはけして懐かず、他の誰かが触れようとしただけで、足で跳ね飛ばしてしまつ、そのセネロが、他の人の手に触れられることを許している。

信じられない光景だった。

パブロはことの重大性を知つてか知らずか「どうした?」

「いえ」マースムカは驚愕を胸にしまい首を振る。そして「あなたは皆さんの所にいなくていいんですか?」

先ほどの質問を返した。

「俺も、ああいうのはどうも苦手でな」そして少し考えてから「それに、腹の中を探られていてるみたいで落ち着かない」

マースムカはパブロを見つめる。

彼は酒宴の場に目を向け「王都から来た騎士つてことで、歓迎しているように振舞つてはいるが、その実、心を開いていない。余所者に対する警戒感というのとは違つんだが、なんつうか、早く消えて欲しい、って言うのか。そういう排除感がある」

この土地に住む者は、大峡谷は自分たちの土地であるといつ、あ

る種の繩張り意識が強く、他者がこの地に踏み入れることを快く思わない傾向にある。

王都から騎士に対しては、さすがに礼儀を失することなく歓迎しているが。少なくとも、表面上はそのように接している。

「だが、俺たちが本当に巡察の旅をしているだけなのかどうか疑っている。いや、そこまで不審に思つてはいるわけじゃないな。探つていると言つた方がいいのか。それと、もしかすると長く留まろうとするかもしれないことを考えて、追い出す口実を事前に引き出そうともしている。だから必要以上に話をしようとしている」マースム力に視線を戻し「そうだろ?」

マースム力は正直に答えるべきかどうか、逡巡したが「そうです。パブロは肩を竦めて見せて「まあ、どちらにしろ、俺たちは明朝になれば出て行くんだから、どうでもいいんだがな」

「でも、どうして?」

「旅慣れている奴にはわかるさ。他の連中が気付いているかどうかは知らねえけど」

「いえ、どうして僕に気が付いている」と話をしたんですか?」「ああ、お前も苦労しているだろうなと思つてなんとなく」酒瓶に一口つけてから「洞察力と観察力を自慢したかった、つてのもあるんだけだ。名探偵みたいだろ」

「冗談めかした言い方だったが、マースム力は可笑しいと思うより、動搖していた。

それは、マースム力が元々この村の人間ではないということを見抜いていなければ出てこない科白だ。

「それは、どういう意味ですか?」純粹な疑問だった。

「どういう意味って?」

「僕が元々この村の人間ではないと、なぜわかつたんです?」

「ああ」パブロは自分の眼の位置を指す。ゴーグルを外さないので眼を示すというわけにはいかなかつたが、意味は汲み取れる。「眼だよ。この村の人間は、全員瞳の色が黒だ。だけど、お前だけ蒼い

「それだけですか？」言われてみれば簡単なことだが。

「それだけで十分わかるさ。大体、村の人間の態度が、お前と接する時だけ、なんか変だしな」

それは右顔の火傷の痕と、怪物のようになびき出しているような右眼が原因だと考へなかつたらしい。あるいは、それだけでは説明が付かないことを察したのか。

ふとマースムカは思う。このパブロという人が、夜でも遮光レンズのゴーグルを外さないのは、自分の右顔の古傷のよくななにかがあるからなのかもしけない。この国には珍しい白い肌と金の髪。少なくとも、エングラー王国出身ではないだろう。

そのパブロは、演劇の舞台で見せるような意図的な笑みを浮かべて「俺の推理力もなかなかのもんだろ。名探偵パブロと呼んでくれ」マースムカはそれに答えなかつた。

代わりに「あなたたちはなんのために大峡谷へやつて來たんですか？」

「巡察つて言つたる。まあ、実質ただの旅行みたいなもんだ」

「でも、嘘なんでしょう」微笑んで否定する。

「なぜ嘘だと？」

「ただの旅行なら、あんな多くの物々しい武器なんて持つてきませんよ」

護身用にしては武器は強力。量も多い。

「はははっ」パブロは軽く笑い「そりやそうだな。なかなかの洞察力に洞察力、そして推理力だ。名探偵マースムカくん」そして少しだけ真顔になり「ある人物を探している。詳しいことは事情があつて言えないが、王宮の要人で、現在生死行方共に不明。銀髪の男が関係しているつてことはわかつたんだが

「銀髪の男？ それつてゲシュタルツて人のことですか？」

「なに？」パブロは不意を突かれたように聞き返す。

「昨日、銀髪の初老くらいの男の人と会いました。話はあまりしませんでしたけど、名前だけは……」少し間を置いてから「その人は

「ゲシュタルと名乗っていました」

パブロは完全に笑みを消した真剣な顔になり、マースムカの両肩を掴む。

「そいつは、どこへ向かうか、そういうことは言ったか？」

「いいえ」マースムカは首を振るが「でも、見当は付きます

「どこだ？」

「ここから北へ向かって二十キロほどぐらいでしうが。古代の神殿があるんです。誰も住んでいませんし、訪れる人もいませんが。そもそも、どんな神を奉つっていたのかもわかりません。大峡谷に住む人たちは邪神の神殿と思って近付きませんが、本当のところどういった経験があるのか。記録はなにも残っていないんです。でも、ここから外の人が向かう場所は、それぐらいしかありません」

パブロはしばらくなにかを考えているようだつたが、不意にニッ

と笑う。

「マースムカ」

「はい」

「明日、そこまで案内してくれないか」

マースムカはしばらく吟味するように黙考していたが、不意に笑顔を見せた。それは、醜い右目がまるで気にならない、誰もが思わず見惚れてしまう、魅力的な笑顔だった。

「わかりました」

ラーナは酒宴の席を外したマースムカを探していた。

話したいことがあつたのに、気が付けばその姿が見えず、自分も酒宴から、誰かに見られないようにこつそりと離れる。

酒宴を避けて、迂回してマースムカの住む家へ向かい、そして納屋から話し声が聞こえたので、そこへ足を向けた。

開いている納屋の戸から覗いて見ると、やはりマースムカがいた。

そして先客も、王都からの客人の一人。確かパブロと名乗っていたと記憶している。

なんだか声をかけづらくなつて、だが酒宴に戻る気もせず、好奇心と興味もあつて、影に隠れて一人を観察した。

なにを話しているのか、ここからでは声が小さくて明瞭に聞き取れないが、姿はランプの灯りで明確に見えた。

不意に、マースムカが笑つた。

彼が笑顔を見せた。

とても明るい笑顔だつた。

とても素晴らしい笑顔だつた。

見る者の心を穏やかにする、とても魅力的な笑顔だつた。

村人には今まで一度として見せなかつた笑顔。

どうして？ ラーナの心に疑問が浮かぶ。

どうして笑つているの？

どうしてあんな笑顔ができるの？

どうしてあの人に笑顔を見せるの？

どうして今まで笑つてくれなかつたの？

どうして私に笑顔を見せてくれなかつたの？

なぜだか、信頼していた人に裏切られたような、心が締め上げられたような痛みを感じ、ラーナはいたたまれず、その場から離れた。

マースムカと一旦別れたパブロは、誰もいない村外れの野原に立つと、酒瓶に口をつけ、最後の一滴まで飲み干した。

そんなに飲むと体に悪いよ

夜闇の虚空のどこからか、少女の声がしたが、その姿はどこにも見えない。

「別に構わないだろ。どうせ作り物の体だ」

パブロは声の主を確かめることはせず、誰もいない虚空に向かつ

て答えた。

「まあ、そうだけね

「それより、そっちの状況はどうだ？」

王女さまはまだ無事だよ。これからどうなるかわからないけど。でも、目的地には到着したみたい。昨日から移動を止めて、なにかの作業をしてるの。場所はベドウイルム村から川の上流へ向かって二十キロほどの……

「古代神殿だろ」パブロが先に口にする。

……どうしてわかったの？

「こっちで現地住民から情報を仕入れた。偶然だがな」

そういうことは先に言つてよ 声が少し荒くなっている。

「怒るなよ」パブロは宥めた。

で、あたしはこれからどうすればいいの？ そっちと合流して道案内する？

「いや、そのまま王女に張り付いていてくれ。できれば、敵の規模、目的、動向も調査しておいてくれ」

了解

そして声は途絶えた。

マースムカは家に戻ると旅の支度を始める。

三泊程度の短い道程だが、万全に備えて準備をする。それが狩人の最も基本的なことだというのが、ジフの教えた。

そのジフが、支度をしている途中、家に戻ってきた。

「彼らについていくのだな

「さつきの話、聞いていたの？」

「少しだ」ジフは首肯する。

どこで聞いていたのか、全く気付かなかつた。だが、ジフが気配を断てば、すぐ傍に接近されていても気付かないことさえある。

かつて大峡谷隨一の狩人と賞賛された人物だ。人間より遙かに鋭敏な獸にさえ氣付かれずに接近できるのだから、人間相手に聞き耳を立てるなど造作もないことなのだろう。

父さんは彼らを神殿へ案内することに反対なのだろうか。マースム力は思つたが、ジフはなにも言わずに家の奥の物置部屋に入ると、なにかを探し始める。

やがて出てきた父のその手には、長方形の箱があった。それほど大きくはない、一抱え程度のもの。

マースム力は受け取ると、蓋を開ける。

拳銃だった。薬莢と弾丸を別々に詰める、旧式の単発短銃。装飾品としての色合いが強く、握りに鷲を象つた紋章が施されている。「……これは？」マースム力はこの拳銃にどういう由来があるのかすぐに理解した。「どうして、今頃になつて？」

ジフは質問に応えず、「いつでも使えるように手入れをしておけ」そして外へ出ると、今更ながら酒宴の席へ向かつた。

最後の曲が流れ、やがて酒宴は終わりを告げる。

ダラスは家に戻りつつ考える。  
ラーナはどうも内氣で良くない。俺たちの中は村中の皆が全員知  
つていて。

村の若者衆の中で一番の狩人でありティダ乗りの俺。  
若い女の中でも一番の美女であるラーナ。

完璧な取り合わせだ。

大人になつたし、すぐにでも結婚してやつと考へてやつてゐるの  
に、ぜんぜん進展しないじやねえか。

ラーナはなにもさせようとしないしよ。俺がそういうことに誘う  
とすぐに引くんだよな。

花も恥らうつていうのか？ 焦らしているだけか？ そういうの  
は俺にだつてわかるけどよ、もつと積極的になつてもいいだろ。  
ラーナがその気になるまで待つなんて紳士的に、つーか悠長に考  
えてたのが駄目だつたか？ もつと男らしさをアピールして、一氣  
に盛り上げたほうが良かつたか？

酒宴でも途中でいなくなりやがるし。騎士さまに俺の恋人を見せ  
てやろううと思つてたのに。これじや、俺の立つ瀬がないぜ。ラーナ  
の奴わかつてんのか？ せつかく優勝してやつたつていうのに、こ  
れじや意味ねえじやねえか。誰のために優勝してやつたと思つてん  
だよ。マースムカも勘違いして出しゃばつてきやがるし。

ああ、クソ。こうなつたら、ラーナを家から引っ張り出して一氣  
に押し倒そう。あいつだつてその気になつるのはわかつてんだ。  
そつそ。そうすれば全部収まるところに収まつて全部解決明日には  
結婚式。毎日可愛がつてやるぜ。

酒のためか、支離滅裂な理論で自己中心的な結論に達すると、ラ

ーナの家に向かう。

家には彼女の両親もいるだろ？が、そのあたりのことは考えなかつた。というより、思い付きもしなかつた。

がに股で足をどかどかと踏み鳴らしつつ、勢いだけは村一番という状態で進む。

ふと、足を止めた。視界の端に、パブロの姿を偶然見つけたからだ。

そういうえば、あの男も途中で姿を消していた。どこへ行つていたのか知らないが、今は方向から長老の家、宿に戻るところらしい。

ラーナのことは一瞬で忘却し、その男へ興味が移る。

騎士さまは巡察に来ているのだと言つてはいたが、あの怪しい風貌の男は何者なのだろうか。

案内人だと言つていたが、あの男は大峡谷のことを良く知らないようだつた。もしかしたら騎士さまは騙されているのかもしれない。いや、そうに違ひない。

なら俺が調べて正体を暴いてやる。

代わりに俺が大峡谷を案内しよう。それがいいに決まつていい。勝手な考えを固めつつ、ダラスは長老の家に先回りすることにした。

長老が提供してくれた部屋で、ラッガートは一人の部下と魔術師とで、今後についての会議を始めようとした。

だが、情報屋がない。

「あの男はどうした？」ラッガートは部下の一人に尋ねる。

「いません」シェルダックは首を振る。「酒宴の途中から姿を消したみたいで」

「どこに行つているんだ、あいつは」ラッガートが苛立たしげに非難する。

「密告屋、という人物に会いに行つているのかもしれないわね」とセリナ。

「あの男は本当に……」ルマジャーンはなにか言うとして止めた。  
「本当に信用できるのか、でしょう」だがセリナが代わりに口にする。

「今更言つても仕方のないことだ。後には引けん」ラッガートが断ずる。

「そのとおりよ」セリナが同意する。

パブロがなぜリグヴェーダ王女の話を持ちかけたのか。この村で会う予定の密告屋とは何者なのか。そしてあの男自身何者なのか。それらの一切を知らない。金のためだと言つていたが、それが方便でしかないことは誰もがわかっている。

だが、あの男を信じるしか、リグヴェーダ王女へ辿り着く方法はない。

細く頼りない蜘蛛の糸。己の心から滲み出る不安感との戦い。ただ一人落ち着いていたのはセリナだけだった。

そこへ、ようやくパブロが現れた。

「よう。一杯どうだい？」どこからかくすねてきたのか、酒瓶を一本翳してみせる。

「密告屋はどうした？」ラッガートは応えずに、質問する。「一体いつになつたら会える」

パブロは肩を竦めて見せて「もうとっくに村を出て行つた」「村を出て行つた！？」ルマジャーンが叫ぶ。「俺たちに会わずにか」

「会いたいなんて一言も言わなかつただる」

「それはそうだが」

「それに必要なことは俺が全部聞いたからな。用がなくなれば出て行くさ。こんなところに他に用件なんてないんだからよ」

「その判断は我々がする」とラッガート。「ここへ連れて来るんだ。聞き逃したことがあるかもしけん

「

「だから、もう村を出たから会えないって。今から追いかけようと、時間を食つぞ」

「正確にどれくらいの時間がかかるのかしら?」セリナは穏やかに訊く。だが、僅かな綻びも聞き逃さないという感じではあった。

「半日くらいじゃないか」パブロは適当に言つてみる。

あからさまな嘘を感じるがラッカードはなにも言わないことにする。

セリナは続けて「その密告屋はどこへ行つたの?」

「王女さまのところへ、一足先に偵察だ。現場で合流して、その時に新しく仕入れた情報を受け取る予定」

それを信じたのかどうか、四人は顔を見合せると、同時に諦めの嘆息をした。

「大丈夫かな? 本当に……」シェルダックが不安げに呟いた。

「わかった。密告屋に直接会つて諦めよう」とラッガートは「それで、王女はどこにおられる?」

「この村から河の上流へ向かって約二十キロ先に古代神殿がある。そこに連れて行かれたそうだ」

「王女は無事か?」

「今のところは。だが、王都から離れて、こんな辺鄙な所へ連れて来るんだ、賞利誘拐つてわけがないよな」

「どう意味だよ? それ」シェルダックが不安げに尋ねる。

「王女さまはさらわれて怪しげな神殿へ連れて行かれました。おとぎ話の類じや、この後はどうなる?」

「生贊を使用した魔法儀式」セリナが即答する。古代神殿と訊いた時点での可能性を考えていた。

「逆賊は王女様を弑するつもりなのか」ルマジヤーンは声を上げる。エンカータ王族は、かつて神が四つの世界にその姿を見せていた

時代、神より直接、神の力の一部を賜り、その強大な神力によつて大陸を統治していた、古代神人の末裔だと言われる。

神と魔王の戦いの後も、彼らはその力を代々継承し、大陸を統治し続けた。

そして、その力が最も強大に発揮されるのは、死が訪れる瞬間。つまり統治において神力は生贊という形で使われていた。

民草の力でも、古代神人が力を合わせても、解決できない事態に陥つた時、王が自らの命を絶ち、その力の全てを注いで、事態を收拾したという。

そして、その事態というのは、たいていの場合、戦であったという。

すなわち、王族とは支配者であると同時に、生贊の候補者であり、最後の武器でもあった。

神代の時代が終わつてから二千年近く経過した現在は、そういうことは行われておらず、また強い神力を持つ者も誕生しなくなつた。

だが、このことは國の人間なら誰でも知つてゐる。他国でも調べればすぐにわかることだ。大峡谷の住人も知つてゐるだろつ。

その凡庸で単純な利用法も。

若い乙女であり、血に連なる力を秘めているリグヴェーダ王女なら、生贊としては申し分ない。条件さえ揃えば、太古の邪神や、地獄に封印された魔王でさえ、呼び出せるかもしない。

「今一つ根拠も証拠も欠ける推測だが、否定できないのが、どうにもこうにも」そして不意に酒瓶を振つて見せて「で、酒はいらないのか」

「あー」控えめにシェルダックが手を上げる。「一杯貰えるか」

これから先のことを考えると、一杯飲まないとやつていられないのだろう。

「あいよ」パブロは部屋にあつた杯に注ぎ渡す。

そして他の三人にも改めて勧めるが、首を振つて断られた。

「そうか」パブロは自分の分も杯に注ぎ、一口含んでから「古代神殿のことを村の人間に少し聞いてみたんだが、具体的なことはなにもわからなかつた。大峡谷の住人は邪神を奉つた神殿と恐れて近付かない。そうだが、記述も口文もなにも残つてないんで、実際はなにを奉つた神殿なのか不明。だから、もし本当に生贊にするつもりなのだとしても、それで具体的になにをするのか、見当が付かないな。魔神でも召喚するつもりなのか、それとも封印された太古の邪神でも復活させるつもりなのか、それとも全く別のことか。まあ、どうにしろ……」

パブロは不意に言葉を止めると、急に懐から六連装拳銃を抜いて、窓に向けた。

「動くな！」

パブロの誰かへの厳しい制動の声に、ラッガートは武器を手にして窓に向け、残りの一人も続けて警戒態勢に入る。シェルダックだけ反応が一瞬遅れ、慌てて武器を構えようとして、手にしていた杯を落とした。

「待て。待つてくれ！」窓の外に隠れていた人物は、両手を挙げて姿を現す。「なにもしないよ。撃たないでくれ」

ラッガートは窓際へ一気に駆け寄ると手を伸ばし、その男の胸倉を掴んで部屋の中へ引きずり込み、力任せに床に押さえ込む。

「イテエ！」そいつは悲鳴を上げる。「止めてください！俺です！騎士さま！」

その声にラッガートは憶えがあつた。

「……ダラス？」

「そうです、騎士様」

ラッガートが手を離すと、ダラスは膝をさすりながら立ち上がる。擦り剥いたらしい。

「今のは、聞いていたのか？」ラッガートは鋭い眼で問う。「はい」剣呑な雰囲気を感じていないのか、なぜか嬉しそうに答える。

「どうする？」シヨルダックがルマジャーンに尋ねる。

「どうする、って言われても」

判断に困っているが、ラッガートも同じ思いだ。

リグヴェーダ王女の拉致事件は、王宮の判断で秘密になっている。独断で行動を起こしている自分たちも、それは守らなければならぬことだと承知していた。

それを、こんな失敗で外部に漏らすわけにはいかない。

いや、パブロが知っているのだから、水面下では噂になっているのかも知れないが、とにかくここまで確定した情報として漏れるのは、最悪だ。

それに、ラッガートたちが独断で行動を起こしていることも、明確に伝わると、非常に危険なことになる。辺境の村だから情報が伝わる可能性は低いと言つて油断はできない。現在の自分たちの王都での立場は、綱渡りのような危うい状態で、それが転落することになれば、王女の身にどのような影響を及ぼすか。

どうやってこの若者の口を封じるか。

「どうする？ 殺すか？」

パブロが物騒なことを平然と口にする。そのことに、シヨルダックとダラスは、仰天したようだったが、他の二人は特に感想を抱かなかつたようだ。

口にしただけの脅しと捉えたのか、それとも選択肢の一つとしてすでに認識していたのか。

「あの」ダラスは驚きからすぐに回復すると、なぜか嬉しそうな声で「大丈夫です。誰にも言いませんから。秘密なんでしょう、リグヴェーダ王女が誘拐されたのは。だから巡察団なんて嘘を吐いたんですね」

「声が大きい」ラッガートが指摘する。

「あ、すいません」声を潜めると、繰り返して「安心してください。大丈夫です、誰にも言いませんから。約束します」

ラッガートは他の四人と顔を見合させる。頼みもしないうちに約

束してきたが、信用していいのだろうか。

「だつてよ」パブロが肩を竦めて「どうする？」

「約束するつて言つてるんだから、いいんじゃないか」とシェルダツク。もつとも、ダラスの言葉を信用したというより、血を見るのが嫌なだけなのかもしねりが。

パブロは「だけどこいつ信用できるのか？」

「……あんたがそれを言つのか」ルマジヤーンはパブロの斜目に自然としないものを感じたらしい。

しばらく黙考してから、ラッガートはダラスの肩を掴む。

「ダラス。念を押すが、いいか、これは王宮の重大な問題だ。君がもしこのことを誰かに漏らせば、王宮の威信を落としかねない。いや、それどころか、國中を揺るがす問題に発展しかねないものだ。それはわかるな」

「はい、勿論」

「よし。では、少なくとも、事件が終わるまで口を閉ざすと約束してくれるな」

「はい、誓います。騎士さま」

ラッガートはダラスの肩を離すと、皆にこれで終わりだと、両手を軽く翳してみせる。

だが、ダラスは続けて「その代わりと言つてはなんですが、俺に神殿まで案内させていただけませんか」

「なに？」ラッガートは思わずダラスへ振り向き、眼を見開く。予想も付かないことだつたので。

「俺にリグヴェーダ王女を助ける手伝いをさせてください。必ず役に立ちますから」

ダラスは、どうやら王女救出の名譽に誇りたいらしい。

「あ、それまづい」しかしパブロが口を挟む。「俺、もう他の人間に案内を頼んだんだ。今から解消すると怪しまれるんじゃないか」付け加えるように「というか、ちょっとだけ事情説明しちまつたし

「説明した！？」ルマジヤーンが声を上げて「リグヴェーダ様のこ

とをか？」

「そこまで話してねえよ。巡査が嘘だつて部分だけだ」

「そんな細かいことはどうでもいいよ。あんた、なんでそんな勝手なことをするんだ」

「まさか他の人間にもばれるとは思わないだろ。どの道、案内人は必要なんだ。こつから先は、いくら俺でも手に負えないぞ」

大峡谷はとてつもなく複雑な地形をしている。それはさながら天然の迷路で、入り組んだそれは、平野を行く時より難しく、時間も二倍、三倍とかかる。その場所に住んでいる人間の案内が必要なのだ。

「だからってそういう……」

「止める」ラッガートが不毛な言い争いを止める。そしてダラスに「わかった。案内を頼もう。明朝出発する。それまでに準備をしておいてくれ」

「はい！」

ダラスは嬉しそうに返事をすると、長老の家を玄関から出て行く。

「こら！ お前どこから入つてきた？！」

長老の声が聞こえた。すぐに玄関の開閉の音が聞こえ、外からバタバタと走る音。

パブロは音が聞こえなくなるのを待つてから「で、俺が頼んだ案内人のほうはどうなるんだ？」

「そつちも連れて行く」ラッガートはベッドに腰掛けると、疲れたようすに深い溜め息をつく。「そうするしかないだろう」

ラッガートは限りなく余計で、無駄な体力を使つたような気がした。

明朝、ベド・UILム村で、巡察団の見送りに村人が集っていた。村人は皆、ダラスの周囲に集まつており、マースム力を見送る者は一人もいない。いつものことなので気にしないようにしているが、少しだけ寂しい。

「どうか、ダラスが案内をするのか」

「ダラスなら安心だ」

「騎士さまをしつかり案内するんだぞ」

ダラスは騎士たちに付いて行くのを案内のためにだと説明していた。事情を知らない村人は信じて疑わなかつたが、マースム力だけは首を傾げた。

なぜダラスが案内をするのに、自分は外されないのか。

パブロが少しだけ説明してくれた、秘密にされている王宮の要人捜索に、部外者を必要以上に入れるのは危険なのではないかと思う。ダラスがなんらかの形でパブロたちの事情を知り、それを隠すために案内として雇つたということなのだろうか。

だが、それならば自分は必要ない。案内は一人で十分だ。

パブロは、妙なことになつてダラスも付いて来ることになつてしまつたが、とにかく気にせずに案内してくれと、少し申し訳なさそうにしていたので、追求しないことにしたが、答えを教えてもらつたわけではない。

どうしたことなのか。

少しでも事情を、つまり巡察団というのが嘘で、本当は王宮の要人探索をしていることを、自分が村人に漏らすことを恐れていると、したことなのだろうか。辺境の住人が知つたとしても、王都に伝わることなどほとんどないのに。

そんな些細な可能性もできる限り避けたいほど、探している人物は重要なのだろうか。

そして、それほど重要な、なぜ秘密にしなければならないのか。重要だからこそ、秘密にしなければならないのか。

結論の出ない疑問を考えながら、荷物をセネロの体に固定する。「いつたいなにが起きているんだろうね？」

「クワー？」セネロも疑問符の付いた声を出す。

「ま、いいか」マースムカは考えるのを止めた。

不明なことだらけだが、セネロが警戒しないのだからパブロは少なくとも悪い人ではないだろうし、人になにかを頼まれたりするのは、これが初めてで悪い気はしない。

誰かの役に立ち、感謝されることは、それだけで嬉しいものだ。

「マースムカ」

不意に声を掛けられて、マースムカは少し驚いた。ジフかパブロたちの誰かであつたのなら驚くことはなかつただろうが、思いがけない人物だったのだ。

「……ラーナ？」

彼女はなにか言いたいことがあるのか、しかし言い難そうに俯いている。

「どうしたの？」マースムカは彼女の返事を待たずに続けて「ダラスのところへ行かなくて良いの？」

ラーナはなにを言われたのか理解できないように、一瞬困惑したような顔をしたが、次には怒ったように「あなたまでそんなこと言うのね」

「なにが？」マースムカは面食らう。

マースムカは本当に理解できなかつた。ラーナとダラスが恋人であることは村の誰もが知つていて、だから、なぜダラスを見送りに行かないのか不思議で、そのことを聞いただけなのだが、それでどうして怒るのかわからなかつた。

ラーナは、マースムカの言葉に苛立たしげな言葉を返した。

なぜ自分がダラスの傍にいつもいなければならぬのか。ラーナにしてみれば、また勝手にそういう役割を、ダラスの恋人という不本意な立場を押し付けられているようで、そんなふうに決め付ける他人に、そして違うのだと言えない自分にも腹立たしかつた。そして、なんの根拠もないのに、マースムカだけは理解してくれていると思つていて、それが今、村人たちと同じように、自分の勝手な思い込みであつたのだと知らされて、つまりはそういう苛立ちだつた。だがマースムカは、そんな彼女のそんな複雑な心境など推し量ることなどできるはずがなく、さらには誤解までした。

「あ、ごめん。その、別にダラスの邪魔とかしようつてわけじゃないんだ。ただ、僕はパブロさんに頼まれて、それで案内するだけだから」

「？」今度はラーナが理解できなかつた。

マースムカは続けて「それで、騎士様の方でもダラスに案内を頼んでいたらしくて、良くわからないけど、結局僕たち二人とも連れて行こうつてことになつたらしくて……」マースムカは言い籠もる。「僕はただ騎士様やダラスの手伝いをするだけで、そんな、邪魔をしたりしないから、その……」

どんどん言い淀むマースムカに、ラーナはようやく気がついた。騎士様に大峡谷を案内するといつもやかな名譽を、マースムカが横取りしようとしているのだと自分が思つていて、それで文句を言いに来たのだと、誤解しているのだ。

自分はただ、マースムカを見送りつつ、少し話をしようと思つただけなのに。

「あの、違うの。私はただ……」ラーナは急いでお互の誤解を正そうとする。

「マースムカ、準備はできたか？」そこにパブロがやつて來た。

「あ、パブロさん」マースムカは助けられたかのようになんか、それじゃ、僕はこれで

まるでラーナから離れたい一心のようで、返事を待たずに行つてしまつた。

「あ、待つて」

ラーナはマースムカを追いかけようとしたが、その腕を誰かに掴まれた。母だった。

「ラーナ、あの子にあんまり関わるんじゃないよ。いいかい、あの子は余所者なんだよ」

ラーナは母までもがマースムカにそのように思つてゐることに愕然とする。

「そんな言い方酷いと思つわ。マースムカはもう七年近く村にいるのよ。それなのに、まだそんな風に言つなんて。それに皆マースムカを見送つてあげない」

「お前は優しい子だ。でも、お前にはダラスつていつ決まって人がいるんだ。他の男と一緒にいると、変な誤解を招く。そういうのもう、あるんだ」

「わたしは別にダラスとそんな関係じゃ……」

「成人を迎えるも、中身はまだまだ子供だね。恥ずかしがるものいいけど、あんまりそういうことを言つと、ダラスの機嫌が悪くなつちまうよ。ほら、ダラスのところへ行つてやつなさい」

「でも、マースムカは」

「あの子は、ほら、ジフが付いてゐるよ。お前は心配しなくていいんだ」

ジフがマースムカと話をしている様子を指差す。

「さあ、ほら。早く行つた行つた」

そして、ラーナはまた強引に押されるような形で、ダラスのところへ行かされてしまつた。

実のところラーナの母親は、ラーナがダラスを好いておらず、寧ろマースムカを意識しているのだと知っていた。

だが、出自不明の者よりは、村の若者と一緒になつて欲しい。なにより、あんな醜い顔の者を息子として迎え入れることなど彼女には耐え難かった。

あんな顔のどこが好いのか、まるで理解できないが、一時の氣の迷いといふこともある。とにかく、ラーナにマースムカを近づけてはいけない。間違いが起こらないとも限らないのだ。

ダラスは村人に囲まれていた。みんなが自分の栄光や名譽をさらにお加えることを期待している。

それは、騎士を案内するといつをやかなものであつても、辺境の村では珍しい。

だが、ダラスは案内だけで終わるつもりは毛頭なかつた。約束どおり村人の誰にもまだ教えていないが、彼の目的はリグヴェーダ王女の救出。正確には、一国の王女を救つたといつ名前を手に入れることだ。

これでラーナも焦らすなんてことは止めるだらう。まさに勇者の女になれるのだから。

ダラスはラーナの姿を探して周囲を見渡す。一向に姿を現さないと思つたら、なんとマースムカと一緒にいるではないか。

あの野郎、なにをしてやがる。俺のラーナに手を出すつもりじゃないだらうな。

ダラスは勝手な思い込みで、殴り倒しに行こうとしたが、それより早く、二人は何事もなく離れてしまったので、止めることにしてやる。騎士の前でもある。だが、神殿までの道程でマースムカをいたぶつてやると決めたが。そうとも、マースムカがどれだけ低能で

卑小な人間か、騎士の前で晒してやろつ。

そしてラーナがダラスの傍まできた。少し暗い顔をしている。きっとマースムカがなにか言ったに違いない。

ダラスはラーナの肩を掴むと「ラーナ、あいつになにをされた?」

「え?」一瞬意味が理解できなかつたようだが、すぐにマースムカのことだとわかつたようで「ち、違うわ。別になにも……」「そうか。それならいいんだが」ダラスは最後まで聞かなかつた。

「だがな、あいつがなにかしてきたら、すぐに俺に言つんだぞ。俺が助けてやるからな」

村人はダラスの男気に感心し、マースムカに対する誤解をさらに深めた。

そうして、マースムカは孤立していった。  
最初に村に来た時のように。

「なにやつてるんだ? あいつら  
ショルダックは馬にくくりつけた荷物を確認しながら呟いた。  
「なにして、見送りだと思いますけど」  
ルマジャーンが答える。

「いや、それはわかるんだけどよ。あんなに大騒ぎするほどのこと  
か?」

巡察の案内にしては、いさか大げさな送迎だ。まるで、他の誰  
かを無視したいがための行動に思える。

誰を? もう一人の案内人をか? 村人は彼に対しても好意  
を持つていなのはすでに察しているが、これはあからさますぎや  
しないだろうか。曲り形にも村の一員なのに。

「まあ、いいか。この土地の風習なんだる」

ショルダックは気にするのを止めて荷物を纏める作業を再開した。  
「ショルダック、ルマジャーン。準備は終わつたか」しばらくして

ラッガートが確認をしに来た。

「大丈夫です」ルマジヤーンが即答する。

「問題なし」シェルダックが答えた。

ラッガートは頷いて了承の意を示す。

「こちらも終わった。パブロたちも終わったようだ。そろそろ出発するぞ」

そうして、巡察団と偽ったリグヴェーダ探索隊は、ベドウイルム村を後にした。

ラッガートが率いる王女探索隊は大峡谷を、河の上流、北へ向かって進んでいく。

平地であれば一日で辿り着ける距離の神殿は、起伏が激しく入り組んだ地形の、さらに岩肌の露出した足場の悪い道のために、倍の一日を要する。

到着するのは、明日の夕刻。

神殿へ入るのは夜になるだろう。もつともそのほうが闇に紛れて都合が良いかもしれない。王女を拉致した者たちの人数によるが、戦闘は可能ならば避けて、王女を救出したい。

敵の目的、動向、規模。一切不明。正面から戦闘を行い、制圧あるいは殲滅するのは得策ではないだろう。隠密を旨とした潜入作戦が望ましい。

問題は、王女が捕えられている場所のことが不明であること。もつと情報が欲しい。パブロが使っている情報屋に、事前に調査させることはできないだろうか。もつとも情報屋自体、実在するのかどうか不明だが。

「それで優勝した俺がバシッと言つてやつたんですよ。マースムカはそういう卑怯なやつなんです。あいつには注意しないと。秘密が知られたら、とんでもないことをするに違いありません。でも心配ありません、俺がなんとかしますから」

無言で思案するラッガートの隣で、ダラスがなにか自慢話をしているが、彼は王女の安否に意識が向いておりあまり聞いていなかつた。

マースム力の隣で馬を進めるルマジヤーンは、川岸に小さな小屋を見つけた。

「あれは、人が住んでいるのかい？」

「ルマジヤーンはマースム力に尋ねる。こんなところに住んでいるといたら、河で漁業を行っているのだろうか。」

「いいえ、あれは筏の保管所です」

「筏？」なぜ集落や村から離れたこんなところに。

「緊急用の筏です。大峡谷では材質に使える大きな樹木が少ないので、緊急に使用する筏を大峡谷の住人全員が管理しているんです。怪我人が出たとか、そういう時に筏を使えば、川下の方角へは早く着きますから。逆に上流へは行けないんですけど」

大峡谷の河は、場所にもよるが、意外と速い。確かに筏を使えば早く移動できるだろう。自分たちは今上流に向かっているため、使うことに意味はないが。

東の空に見えていた太陽は、やがて真上に昇り、昼食と休息の時間となつた。

遠くで野生のティダが三頭、ラッガート率いる搜索隊が食事をする様子を見ていた。大峡谷の狩人とは違う姿の者たちに興味があるのだろうか。

シェルダックは自分が見世物小屋の珍獣になつたようで落ち着かないようだ。

「なんなんだ？ あいつら、なんで俺たちを見てるんだよ？」

マースム力は「たぶん、見慣れない人間いるので、興味を持つているんだと思います。彼らは、結構知能が高いんですよ。ただの好奇心でしうから、こちらからなにかしない限り、襲われることはありません」

野生のティダは基本的に単独行動をし、群れを作らないが、一時的に数匹で集まることもある。そして、協力して獲物を捕らえたり、あるいは遊んだりするが、あくまでも一時的で、数日から、短い時

は数時間で別れてしまう。しかし、一週間ほどすると再び集い即席の群れを作る。その様子は人間が仲間や友人と集まるそれに似ている。

縄張りというものは基本的に存在しないらしく、ティダ同士が遭遇しても争いが起ることはない。当然決まった巣はなく、そのため行動範囲は極めて広い。

また人間ほどではないがとても器用で、前足で物を掴むといったこともでき、両手を使って食事を取るその姿は人間のようだ。ちなみに雑食性。

知能は高く表情豊かで、人里で飼い馴らされたティダは、人語をいくらか理解できる。人懐っこいとは言えないが、いつたん飼い主に懐くと、その人間に忠義を尽くす。あるいは友達や仲間と見ているのかも知れない。

食事と休息が終わつたその後も、道程を進みながら、ルマジヤーンはマースム力にいくつか質問をするが、少年は淀みなく即答する。ルマジヤーンは思う。マースム力と話をしてわかるが、彼はかなり頭の回転が速いようだ。知識にも長け、質問に対して言葉を的確に返してくる。村ではなぜか好かれていないようだが、その理由は少なくとも能力が低いことによる足手まといという理由ではないらしい。あるいは、辺境の閉鎖的な村にありがちな、能力が高いゆえに阻害されているのだろうか。

もしそうなら、少年にとつて不運以外何物でもない。閉鎖的な村から離れて、どこかで働くか学校に入れば頭角を現すかもしれないが、しかし大峡谷の世界しか知らない少年にとつて、ここから離れるのはよほど勇気のいることだろう。

ふと気付くと、ダラスが忌々しげな眼をマースム力に向けていた。

神殿への道程を続け、問題が発生することなく進み、やがて西の

地平線に太陽が沈み始め、大峡谷は夕焼けに紅く彩られ、野宿の準備をする。

焚き火を囲んでそれぞれ夕食を摂る。ダラスは搜索隊の騎士たちと混じつているが、マースムカは距離を置き、焚き火を挟んで反対側で夕食を摂つていた。会話を聞かれたくないのか、騎士たちはマースムカに関心を払わなかつた。

ただ、パブロが側へやつて来て、色々話しかけてくる。

「このティダ。セネ口だつたか？ こいつ野生のティダだよな？ なんでお前に懐いているんだ？」

「ああ、そうなんだ。なんか珍しいよな、そういうの。

「え？ 僕にも懐いてるつて？ フツ、当たり前だろ。人柄つてもんがわかるんだよ。人徳、人望、人格。全て完璧なこの俺様が。

「イテツ！ なにしゃがるセネ口！」

「なんで詳しいのかつて？ 世界中をあちこち旅したからな。見聞が広いんだよ

「今抱えていいる問題が解決したら、一緒に来るか？ 旅は面白いぞ。

「お前の名前つてなにか理由があつてつけたのか？」

「古代語を少しでも習つた人間なら誰でも知つてるだろ。

「マースムカ  
汝の名はなにか？」

「つて、セネ口！ それは俺の飯だ！ 僕の！」

言葉遣いは乱暴で馴れ馴れしく、会つて間もない人間に對してはいささか無遠慮で、少年は初めこそ戸惑つていたが、けして不快ではなく、彼が無意識に行つ話し方で、その奥に隠された優しさを感じとつていた。

夕食が終ると、マースムカはジフから渡された、握りに鷲を模つた紋章が描かれている拳銃をなんとなく玩んだ。

「なあ、それつて旧式の単発短銃だよな」 パブロは尋ねた。

「ええ」

「使い方、わかるのか？」 旧式の単発短銃は、弾丸と火薬、雷管を別々に詰めるため、扱いが難しい。

「使い方、わかるのか？」 旧式の単発短銃は、弾丸と火薬、雷管を別々に詰めるため、扱いが難しい。

「父さんから教わりました。他にも、狩や、ティダの扱いとか、色々と」

「ふうん」パブロは氣のない返事。「ジフ、って言つたよな。おまえの親父さん」

「はい」なにが訊きたいのだろう。

「前にどつかで会つたような氣がするんだが。親父さん、どんな人なんだ?」

「昔は大峡谷隨一の狩人と呼ばれていたそうです。今は道具の製造に携わっていますけど……」しばらく記憶を辿り、「……一時期、大峡谷を離れて旅をしていたことがあつたそうです。その時に会つたんじやないですか?」

「旅つて、どんな? 行商とか、色々あるだろ」

「いえ、詳しくは知りませんが

「そうか」

パブロは夜空を見上げて沈黙した。思い出そうとしているのだろうか。そういうえば、この人はいつたい何歳なんだろう。父と会つたのならば、七年前より以前のはずだ。その頃は、彼は二十歳程度だろうか。世界中を旅しているのなら、いつたい何歳の時から放浪し始めたのだろうか。

マースムカも夜空を見上げる。

養父のことも良く知らない。ジフは自分の過去を話したがらず、質問してもほとんど答えなかつた。ただ、マースムカの父の友人だと。だから引き取つたのだと。そしてあの時、助けに来たのだと。ほとんどそれだけしか説明しなかつた。

七年前、マースムカの両親は目の前で殺された。現在も捕まつておらず、そして正体もわからないあの時の犯人たちが、なぜ家族を殺したのか、それは今でもわからないままだ。

だが、ジフは知つていたのだろう。だからあの夜、助けに来たのだ。そして間に合わなかつた。結局マースムカだけしか助けられず、そのことを今でも悔やみ続け、罪悪感を抱いているようだつた。だ

から、逆になにも話そうとしないのかもしれない。そしてマースム自身、詳しく述べなかつた。

一旦孤児院に預けられた時、ジフはこれから絶対に自分の身元や両親のことを誰かに話してはいけないと言われた。その理由を正確に理解できるようになつたのは数年たつてからだが、そうしなければいけないのだと、まだ幼かつたあの時の自分でもわかつた。殺されるからだ。奴らに。

だが、どうして今頃になつてジフは拳銃を渡したのだろうか。王都から騎士がやつて来た途端、それまで一度も存在を教えなかつた、両親の形見、自分の身元の証とも呼べる拳銃を出した。まるで、彼らに全てを話せといふかのように。

どうして、今頃になつて。

マースムカは色々な過去を思い出していく。

僕はどうして今更王都の出来事に係わらうとしているのだろう。幼いあの頃の日々は、裕福ではあっても、けして幸せではなかつたのに。

家庭を顧みることなく、仕事と出世しか考えなかつた父。自身を着飾り綺麗に見せることのみ腐心し、社交界で人々の注目と関心を集めることしか感心のなかつた母。

家に帰ることもなく、裏組織の首領きぢりのことをしては、警察に連行さればかりいた兄。

いつも寂しかつたのを覚えている。そしてみんな死んで、本当に孤独になつた。

いや、そんなことはない。マースムカは自らの考えを否定した。セネロに出会えた。言葉を使わなくとも理解し合える、種を超えた友達。

ジフに育てられた。無愛想だけど、厳しくも大切に育ててくれた養父。

ああ、そういえば。マースムカは思い出す。

王都でも良いことが一つあつた。一人の少女と出会えたことだ。

自分と同じように孤独で、だからなのか、すぐに友達になれた。色々なことがあって会えなくなってしまったが。今は元気でいるのだろうか。友達をたくさん作れただろうか。今はどんな女の子になつたのだろうか。

「そうだ」パブロが不意に「拳銃、見せてくれないか」

「はい」なんだろうかと思いつつ、拳銃を渡す。

パブロは少し拳銃を検分しているようだつたが、拳銃に塗つてある油を指で確かめると「この油だと駄目だ。旧式拳銃だと爆発するかもしだれないな」

「え、そなんですか？」

銃の知識と整備は一通り習得しているが、油の種類までは気が回らなかつた。駆動式短弓と同じ物ではだめなのか。

それにしても、この人は少し油を触つて見ただけで判別が付いたのか。銃の使いに相当熟練している。

そのパブロは「手入れし直さないと。俺のを使え」

荷物の中から銃工具一式を取り出す。そして、自分の銃器類を出すと、パブロも手入れを始めた。

ラッガートが剣の手入れをしていると、ルマジャーンが焚火の反対側にいる、パブロとマースムカを見ながら、彼らに聞こえないよう囁いた。

「なにを話しているんでしょうか？ あの二人」

「さあな。わからんが、別にたいしたことではないだろう」

答えるラッガートは、もうパブロを怪しむのは止めていた。あの男の行動を見る限り、なにかを企んでいることはないと断定して差し支えないと、結論を出していた。なにかを隠しているのは確かだが、王女に直接かかわることではなく、もっと別のことだ。裏稼業に携わる人間ならば、誰もが持つ秘密の類。

ダラスも声を潜めて「でも、マースムカと一緒にいるのはまずいですよ。あいつきっと興味本位でついて来ているから、色々聞き出そうとしているに違いありません。そういう奴なんですよ。リグヴェーダ王女のこと知つたらなにをしでかすか」

「気にするな。今更なにを知つうが、どうこうなるものではない」顔に火傷の跡がある少年の話に乗つてこなかつたことに不満を感じたようだが、ダラスは話を変える。

「ところで、あの男は何者なんですか?」パブロを指して「騎士じゃないんですよね? セリナ様のように魔術師でもないですし」そのセリナは短剣を並べて手入れしている。争い事とは無関係のような温和な美女が、無言で刃物を手入れしている様は、なぜか得体の知れない恐怖を喚起させる。眼鏡が焚火の明かりに照らされて、その瞳が見えないのも要因の一つだろう。口元に薄ら笑みを浮かべているのは気のせいだろうか。

ダラスは話を続けて「案内人つて言つてましたけど、いつたいどういう?」

「王都で雇つた情報屋だ。王女の居場所を知つてると、我々に売り込みに来た。それだけだ」

「え? そりややばいですよ」ダラスは大げさに驚いて見せて「そんな怪しい奴、信じて良いんですか?」

「仕方がない。手掛かりがないのだ。なにかの罠であつても、王女に辿り着くには、奴についていくしかない」

もつとも、パブロがなにかを企んでいることはないだろうが。

「でも、神殿にいるのは判つたんでしょう。なら、もう必要ないんじゃないですか。神殿なら俺が案内しますから、ここで追い返したほうが良いですよ」

「神殿に王女がいなかつた場合、あの男が必要になる」

「でも、敵かもしれないんですよ」

「その時は、その時だ。まあ、それはないと思つがな」

「はあ」

なんとも言えない表情のダラス。ビリやラバブロとマースム力をなんらかの形で排除したいようだ。

自分を売り込んで、騎士に取り立ててもらおうと考えているのかかもしれない。そうだとすると、いたさか安易で無知だ。騎士になるには、推薦だけではなく、各種の試験に合格しなければならない。何百年も前のように、英雄行為だけで騎士の位を獲得することは、現代はほとんど例がない。

王女救出において重要な働きをしたとしても、表彰と報償が与えられるだけだろう。望めば騎士養成学校へ入学する推薦書ももらえるだろうが、それだけだ。後は自身の力で騎士になるしかない。

「ところで、王女さまはどんな人ですか？」

間が持たなくなつたのか、話題を変えてきた。

「人徳、人柄素晴らしい方だ。そして美しい」

それは王家に対するありふれた賛辞だつたが、それは嘘ではなかつた。鬪姫と称賛されるリグヴェーダ王女は、その容姿も称賛されている。

ダラスの顔に、不気味な笑みが浮かんだ。救出された美しい王女が強く逞しい勇者である自分に恋する光景を思い描いたらしい。

そラツガートは少し呆れて、誰も気付かない小さな嘆息する。この少年はあまりにも俗物的な考え方で動いている。後々厄介なことにならなければ良いのだが。

ラツガートとダラスの話を聞いていたルマジヤーンは、王女の話に及んで過去を想起し、自分の剣を見つめた。騎士叙勲において国王から賜つた剣。そして王女と初めて出会つた時のこと。

リグヴェーダ王女と初めて直接対面したのは、騎士選抜試験の最終日のことだつた。

最終試験を受ける直前、緊張していたルマジヤーンは試験会場の

闘技場から少し離れた通路で、心を落ち着けようと努力していた。

騎士はあらゆる能力に秀でた者のみが叙勲され、それを見極める無数の試験があり、その全てに認められて騎士に選抜される者は、当然少ない。

現在の騎士は、民衆が思い描く過去の栄光ある騎士とは随分違うが、それでも優秀で勇気ある者だけしか騎士を名乗ることが許されないのは、今も変わりない。

ルマジャーンはその数々の試験に合格し、最終試験を残すのみとなつたが、そこまできて緊張感が頂点に達した。

試験内容は単純で、現在の騎士の一人と剣を持って試合をすること。勝つことが合格の基準ではないが、力量が基準に達しないと見なされれば、それだけで不合格とされる。

そしてその対戦相手は、最強の騎士と呼ばれる者の一人、ラッガート百騎長。武闘祭において、剣術部門優勝者。緊張するなというのが無理だ。

無様な戦いだけはしたくないと、自らの心を鼓舞して勇気と度胸を振り絞るが、緊張で手足が震えるのがどうしても止まらない。

「大丈夫か？」

不意に声をかけられたルマジャーンは、それが誰なのか一瞬わからなかつた。あるいは、こんなところにいるはずがないという先入観と思いこみがあつたためかもしれない。

慌てて敬礼をとるルマジャーンは、疑問を口にする。

「……王女殿下？ なぜここに？」

なぜ国王の第二王女という立場の人間が護衛もなく、一人でここにいるのか。

「騎士の剣術試合に興味があつて見に来た」

まだ少女にすぎないリグヴェーダ王女だが、武芸、特に剣術において才能を發揮していることは周知の事実だった。

しかし護衛がないことには答えていないが、その疑念に答えることなく、王女は続けて質問する。

「緊張しているのか？」

「はい、少々」

王女はルマジヤーンの肩を軽く叩く。

「もつと力を抜くがよい。相手はあのラッガートだ。勝ち負けなど気にせず思いつきり戦えば良いのだ。当たつて碎けろといつである。ほら、深呼吸をしろ」

ルマジヤーンは王女といふ身分の方に、氣さくに話しかけられている事実に戸惑いつつも、王女の言う通りに深呼吸する。

「な、落ち着いたであります」

自分より五歳年下の少女の微笑みに、ルマジヤーンの乱れる心は急速に落ち着いていく。深呼吸よりもはるかに効果的だった。そしてルマジヤーンの心は、試験を控えた緊張とは異なる感情で乱れ始めた。

「では、試験に挑むがよい。期待しているぞ」

リグヴェーダ王女は、彼の心に芽生えた彼女への特別な思いに気付くことなく、その場を立ち去った。

その後、ルマジヤーンはラッガートに勝てなかつたが、本人にその戦いを賞賛され、試験に合格した。

そして数日後、騎士叙勲式において騎士剣を賜つた。

叙勲式に王族の代表として剣を受けたのは、リグヴェーダ王女だった。

王女に騎士となつた自分の姿を見てもらつことは、ルマジヤーンにこの上ない喜びだった。

「どうかしたのか？」

シールダックは怪訝に質問すると、ルマジヤーンは過去に思いを馳せるのをやめる。

「いえ、なんでもありません」

ショルダックは、彼が王女のことについて思っていたのだと見当がついた。

王女に個人的な感情を抱いていることも、以前から薄々気付いていたが、身分の違いからその思いが叶うことはないだらうとも思つていた。

叶わぬ思いといつのは青春時代にはよくあることだ。そして、そうした苦い経験が若者を成長させ強くする。

まあ、暖かい日で見守つておこう。見守ることしかできないが、失恋した時に酒場へ付き合つことはできる。

ルマジヤーンが不意に立ち上がる。

「どうした？」

「俺、あの一人のところに行つてきます。なにを話しているのかわらなくて、どうも不安で」

「ああ、そうだな。そうしてくれ

「よう、ルマジヤーン。どうした？」

ルマジヤーンが、焚火を挟んで離れた位置にいる一人の隣に移動すると、パブロは疑惑の欠片もない歓迎の声をかける。

「いや、たいしたことじゃない」と隣に腰掛け「ちょっと話をしようと思つてな」

パブロは探りに来たのだとわかつて「俺のことまだ怪しんでいるのか。まあ、当たり前と言えば当たり前だけだな。ま、明日になればわかる。明日には神殿に着く。その時に全部決着が付くだろ」そしてマースムカに「ちょっと、それ取ってくれ

「はい」工具の一つを渡した。

マースムカとパブロは銃の手入れをしている。

パブロが持っていた銃は全部で三つ。リヴォルバー六連装拳銃ショットガン一丁と、散弾銃が一丁。自己紹介の時にも見たが、改めて見ると、やはり最新式の銃のようだ。

「随分凄い得物を持つていてるが、ちゃんと許可証あるんだろうな？」

「あるわけないだろ」パブロは簡単に答えた。

「ない？」ルマジヤーンは驚いて「お前無許可なのか！？」

「当たり前だろ。俺みたいな身元不明に誰が許可証を発行するんだよ？」

「それ以前に違法だろ。犯罪だ。大体、どこでそれ買つたんだ？」

マースムカが少しきょとんした表情で「銃を持つのに許可証が必要ですか？」

ルマジヤーンは勢いを削がれて、肩を落とした。

「要るんだよ。警察に購入届けを出して、許可証を発行してもらわなければ、購入も所持もできない。第一それを提示しないと、店は売らないんだ」

エンカータ王国は、銃器類の規制が厳しい傾向にある。逆に刀剣類や「矢は緩く許可が要らないため、一般の者が武器として所有する」のは、たいてい刀剣や「類だ。

「でも、村の人は獵銃を持っていますよ。僕は駆動式短弓を使っていますが」

「辺境の村の、手作りの粗末な銃まで制限したらきりがないよ。警察が取り締まっているのは、正規の銃工房で製造された精度の高い物だ。この所持に関しては厳しく当たる」そしてルマジャーンは改めて「それで、その最新式、どこで手に入れたんだ?」

「秘密」

「おまえなあ」拳を握り締める。

「蛇の道は蛇、つてな。俺が裏道まつしげらの情報屋だつてこと忘れてないか?」

「はあ」ルマジャーンは溜め息を吐き「もうここのよ。でも、なにに使うんだ?」

「これから戦いになるかもしれないだろうが。お……」王女様と言おうとして、マースムカに聞かれることに気付いたのか、口籠る。「おまえらの敵、と言つか、連中とだ。まさか、話し合いで解決なんて考えているわけじゃないだろ」

「それはそうだが、なんであんたまで戦う必要があるんだ?」

「ここまで関わって、後は知らん振りすると思つたのか。そこまで不義理じゃない。前金は貰つたんだからな、最後まで付き合つさ。意外だつたか?」

「正直「意外だつた」

「なんの話をしているんですか?」マースムカがそこで口を挟む。ルマジャーンはそこで、パブロが余計なことを言わないと見張りに来たことを思い出した。そして、なにより自分がぼろを出しているということにも気が付く。

「あ、いや、なんというか、その」

マースムカは微笑み「いいですよ、言いたくなれば。事情があ

るんでしょう」「う

「あ、ありがとうございます」「ルマジヤーンは話題を変えようと、マースムカの拳銃を指す。「ところで、それは君のかい？」

「ええ、そうです」

「ちょっと見せてくれるかい？」

「どうぞ」マースムカは渡す。

「随分凄い装飾が施されているんだね。特注品みたいだけど、どういった由来があるのかな？」

「さあ……良く知りません」なぜかマースムカは言い淀んだが、ルマジヤーンは拳銃のほうが気になつた。

「この握りの鷹を模つた紋章。貴族の家紋だね。どこの貴族なんだい？」

「いえ、良く知りませんから」マースムカは慌てたよう、「あの、返してもらえますか。まだ整備の途中なので」

「ああ、ごめん」

ルマジヤーンはすぐに返したので、紋章がどの貴族の物であるのか気付く時間はなかつた。見たとしても紋章学に通じているわけではない彼にはわからなかつたかもしれないし、紋章にそれほど興味があつたわけでもなかつたので、追求しようとはまったく思わなかつた。

皆が寝静まつた深夜、最初の見張りをしているのは、パブロヒルマジヤーン。一番目にセリナとシェルダック。最後にラッガートの順番だ。

案内人の一人には見張りはさせないことにした。労力を使う役割ということもあるが、二人は基本的に無関係だ。それに、眠つてくれていた方が余計な話は聞かれにくいと、ラッガートは考えたのだろう。

それは、パブロにも都合がよかつた。

パブロはルマジヤーン以外、全員眠るのを待つてから、焚火から離れようと立ち上がった。

「どこへ？」皆を起こさないように、ルマジヤーンは小声で訪ねる。「少し周囲を見てくる」パブロはやはり小声で答える。

ルマジヤーンは特に不審に思わなかつたのか、止めることはしなかつた。

パブロは首を起こさないよう静かに離れ、焚火の位置から十分離れたことを確認すると、誰もいない虚空に向かつて話しかけた。

「リイジス。そつちの様子はどうだ？」

虚空から少女の声が返ってきた。

パブロ。まだ王女さまは無事だよ。でも、こいつらの目的がわかつた。このままだと王女さま、殺されるよ

「ああ、やつぱり生贊にするつもりか」

状況から推測すれば、それしかないが、なるべくなら他の可能性であつて欲しかつた。

そうなの。でも、それだけじゃないの。こいつら、王女さまを使つてなにを呼び出すつもりだと思う？

「色々ありすぎてさつぱり見当がつかないな。なんだ？」

声は少し間を置いてから答えた。

名の無い魔獸

パブロはしばし絶句した。

「……冗談だろ」

本当だつて

風が荒び、砂が舞う、大峡谷の谷間の丘陵にある、灼熱の陽に曝され赤茶けた神殿を中心として配置された、石柱の連なる奇妙な景観。

それは巨大な魔法陣。  
ワフク

なんのために造られたのか、その目的を果たせたのか、今はもう知る人間はない。

だが、遙かなる時の流れの先端で、思惑は様々なれど、神殿を利

用しようとする者たちが集まっている。

その名を忘れられた古代の神殿にて、銀髪の初老の男はどこへともなく歩いていた。目的があるのかないのか、彷徨ついているようでもあり、放浪しているようでもあり、探索しているようでもあった。

「ゲシユタル」

銀髪の男に、不意に声をかけた者がいた。神経質そうに眉根を顰めた、初老ほどの小太りの男。ゲシユタルの、そして現在神殿にいる、三十名近くの人間たちの雇用人。

ザーラディース・ハーマン。エンカータ国王側近の一人であり王國軍三将軍の一人。

「ゲシユタル」不機嫌そうに繰り返して呼び「こんな所でなにをしている。儀式の準備はどうした?」

ゲシユタルは抑揚のない声で返す。

「パレスが指揮を執つていて。私は必要ない」

「それはわかつていて。だが、呼び出すものがものだけに、慎重に慎重を重ねばならないだろう」

「大丈夫だ。問題はない」感情が欠落した声は、返つて反論を許さぬ畏怖を与える。

ザーラディースは喉を一波轟かし「そ、そうか。それなら良い」ザーラディースの手法の一つとして、軍務から大きく外れた非合法活動を行うさいは、軍部の人間を直接使わず、外部から臨時で雇うという方法を取る。軍の人間を使わないと、動きが知られ難く、判明したとしても、私用という言い訳が立ち、隠蔽しやすい。そして、万が一の時は見捨てても問題なく、後に引くことがない。

今回のリグヴェーダ王女に關しても、この方法を用いた。

だが、ゲシユタルは他の者たちとは違い、臨時で雇われたのでは

なく、前々からザーラディースと付き合ひのある、魔導士だ。

魔導士。カーヒ禁断の呪法に手を出し、あるいは魔法によつて犯罪に手を染めたために、世界魔術師連盟から指名手配され、邪惡なる烙印を押された魔法使い。

ザーラディースはこの男が極めて有能であることを最初に雇つた時に理解し、それ以来龐彌としている。

だが、時折垣間見せる言ひようのない雰囲気が、威圧感とも恐怖とも取れぬ、不愉快な感覚を引き出す。

ゲシュタルは彼の心情を知つてか知らずか、変わらない声で「私としては寧ろ、お前が王都での工作が失敗してはいなか、ということのほうが気になる」

「それは大丈夫だ。万全を期している」

「ならば問題はない。名の無い魔獸の召喚は滞りなく行われるだろう。本当にミスがなければ話だが」

「ぐどいな、大丈夫だと言つただろ。この召喚儀式の成否には、エンカータ王国の存亡がかかっているのだと言つても過言ではないのだ」

エンカータ王国の存亡と言つより、自身の未来と権力と言つたほうが正しいが、ザーラディースは心情的に区別が付いていなかつた。「神話に語られる名の無い魔獸。その存在を、その力を手中に收めることができれば、アスベルト帝国の新兵器など恐るに足りん」

アスベルト帝国。現在エンカータ王国と緊張状態にある、事實上の敵対国。二つの国は政治、経済、技術、軍事など、あらゆる面で対抗し、拮抗していた。だが、最近その情勢は帝国へ傾きつつある。新たに開発され、実戦配備が決定された軍用兵器。

戦車の登場である。

この移動する砲台は、軍事戦略に置いて劇的な変化をもたらし、実験演習において圧倒的威力を發揮したと、情報部にて報告されている。

そして、エンカータ王国に、それに対抗する兵器はない。

これは技術面において帝国に大きく遅れを取つた証明もある。

「いいか。我らに戦車を、もしくはそれに対抗する兵器を開発する時間的余裕はない。まだ戦争状態になつてはいないものの、我ら王国と帝国はいつそつてもおかしくない緊張状態が続いているのだ。そして、現在戦えば、負けるのは王国だ。確実に」

王国軍の将軍を職務とする彼は、あらゆる状況を想定、予想、予測し、結果を計算したが、勝利する確立は極めて低かつた。

そこで、機械工学で対抗できないならば、全く別の方面から試みること思いついた。

魔法的面から。

滅びを司る神話の存在。名の無い魔獸アシ アディースムを召喚し、支配し、制御する。神さえも滅ぼすその力を意のままに操ることができんならば、帝国など物の数ではない。

だが、召喚するにはどうしても必要な材料があつた。すぐ目の前にいるのに、手にすることができない者。

古代神人の直系。王族だ。

国王に、この召喚儀式を伝えたとしても、当然許可など出るはずがない。自らの最も近い血縁者、実の娘の命を奪うことを許すはずがないだろう。

だから、ザーラディースは独断で、非合法に、決行した。

世界最大にして最悪の暗殺組織にして暗殺教団、ジャノナ樂園から、ボッズルを筆頭とした十三人の暗殺者を雇つた。全員が麻薬によつて身体能力を強制的に向上させた化け物だ。彼らの力でリグヴェーダ王女を宮殿から拉致するのに成功した。

また、以前から何度か雇つたことがある傭兵団から十人雇つた。リグヴェーダ王女の運搬と、魔法儀式を行うための雑用だ。

ゲシュタルの伝手では、パレスという女魔導士と、彼女が従えている二名の魔導士を招いた。魔法儀式の準備には、ゲシュタル以外にも専門的な知識を持つ者が数人必要だつたためだ。現在も彼女たちが傭兵たちを指揮して準備を進めている。

さらに、成功を確実とするために、王都であらゆる妨害工作を施しておいた。

王宮の名誉のためにと情報公開を控えさせ、犯人からの連絡を待つたほうが良いとして、捜査班をほぼ足止め状態にし、情報が漏れる危険性があるとして、人員を最低限にまで減らし、犯行はアスベルト帝国を始めとした、敵国や隣国、犯罪組織の存在を臭わせ、捜査の指向性を惑わした。

これらは完全ではないものの、確実に効果があり、自分自身には全く容疑がかかっていない。それどころか、逆にリグヴェーダ王女の安否を心から案じているとさえ思われている。

後少しだ。明日には儀式を始められる。このまま何事もなければ。いや、必ず成功させなければならない。これが失敗し、もし事件の首謀者が自分であると判明したら、王宮を追放されるだけではすまない。確実に死刑だ。

「国王が自らの立場というものを良く理解しておれば、こんな面倒なことなどせずに済むものを。国王、そして王族とは、国民に身を捧げ、心を犠牲にしなければならない者なのだ。リグヴェーダ王女は始めから国民への生贊なのだ」

忌々しげに不平不満を並べるザーラティースに、ゲシュタルは冷たい眼を向ける。

それは、おまえにも言えることだ。ゲシュタルは胸中思つ。

ザーラティースもまた、古代神人の末裔たる王族の末席に名を連ねている。もし真に国のために思うならば、自身を生贊に捧げるべきだろつ。

だが、この男は自らの権力や利益のみに邁進し、国民のことなど顧みることはない。口先だけは大層だが、中身は支配欲の塊だ。国王への忠義も、国民への献身もない。ただ、己の欲望を満たさんが

ためだけに動いている。

この一連の計画も、國のため云々と言つのは建前で、他の二人の將軍を抑え込むための布石に過ぎない。名の無い魔獸の軍事利用が成功すれば、確實に王國軍を完全に掌握することができる。もしかすると、王國軍を掌握した暁には、アスベルト帝国へ戦争を仕掛けるかもしれない。敵国の危険を排除する理由で。そして本心では侵略することに歡喜して。それに伴う夥しい数の死を考慮せず。

自分一人では何一つできない矮小な人間に過ぎないのに。名の無い魔獸の召喚を教えたのは、ゲシュタルトだ。戦車に対抗できる力であることも。神殿がかつて名の無い魔獸が出現し、そして消えた場所であり、その土地を守り封印するために建設されたものであることも、その他全て。

だがザーラディースは全て自分で考えたということにしてしまっている。本当にそう信じ込んでいるのかもしれない。

自意識過剰とはこのことか。だが、そのほうが都合が良い。利用しやすいからな。

つて感じなの

アジアディースム

「まいつたな。よりもよつて、名の無い魔獸かよ」パブロは頭を抱えて呻く。「世界が滅亡するだ」

どうする？

「どうするもこうするも……」困ったように頭を搔いて「とにかく、そのまま探つてくれ。明日の夕刻には俺たちも到着する」

でも、そんな人数で大丈夫なの？ こつちは三十人はいるんだよ。おまけに化け物揃い

傭兵団はまだしも、樂園の麻薬服用暗殺者に、魔導士。この二つはとてつもなく危険だ。

「しょうがないだろ。俺の正体を知られるわけにはいかないんだ。合法的な手段で王女の捜査班に接触できない以上、これが精一杯だ」

ううー。不安一杯

「連絡終わり。明日到着したら、また連絡を入れる。その時に行動開始だ」

了—解

「パブロは溜め息をつく。

「アジアディースムの無い魔獸か。洒落なんねえな」

「ええ、本当に」

唐突に声を掛けられた。いつの間にいたのか、眼鏡の似合う美女がすぐ背後に立っている。その手に持つナイフを首筋に当てる。身動きが取れない。迂闊に動けば切られる。

「……セリナ。いつの間に？」

「注意力散漫。内緒のお話をする時は、周囲の警戒を怠ってはいけないわ」

セリナはいつものように笑みを浮かべ、どこかおつとりした口調だが、氷の刃のような鋭さを含んでいた。

注意も警戒も怠つてなどいなかつた。それにもかかわらず、彼女の気配を全く感じず、接近を察知できなかつた。

パブロは額に汗が流れるのを感じた。初対面の時から油断のならない人間だと思っていたが、やはり温厚な外見と中身が一致しないようだ。ここから先、対応を間違えると始末されかねない。

「……ひょつとして、今のは、聞いてた？」

「ええ、あなたの声だけは聞こえていたわよ」セリナは当然のことのように肯定し「それで、念話でどこかの誰かと話をしているあなたは、いつたい何者なのかしら？」妖精族

パブロは少し呆けたように、だがやがて苦笑してゴーグルを外す。隠されていたその眼は人間の眼とは明らかに異なっていた。白目の部分が一切ない黒い眼球に、細かい網目状の模様が浮かぶ。昆虫の複眼だ。

妖精族。創成期において、火から創造された炎の民の別名。シンニー

肉体という物を元来持たず、煙の無い火と言い伝えられる、限りなく純粹な力だけで構築された存在と言われ、その姿はこの世において輝く光か、形の定まらぬ煙のように眼に映る。だが、それさえも副産物にすぎず、本来は見るということが基本的にできない存在だと伝えられている。

また、神から与えられた世界である火の国から、この人間の住まう世界へやつて来る者が時折いる。

この世界に来訪した妖精族は大別して二種類。肉体を持つ者と、肉体を持たない者。

肉体を持たない者は、前述のとおり、希薄で空虚な存在で、接触事体が不可能とされているが、肉体を持つ者はその限りではない。彼らは肉体を製造し、それに宿ることで人間やその他の生物と同じ状態に近付き、この世界で行動する。

ただし、その肉体はどこか歪な箇所があるという。パブロの眼球のよう。肉体の製造技術が正確性に欠けているためとも言われているが真偽は不明だ。意図的に行つているのだという説もある。

炎の民が火の国からこの世界へ来訪する目的は不明で、それを知つている人間は誰もいないといわれる。いたずら好きの妖精が人をからかうことはあっても、それが真の目的ではないのは確かだ。

「気付いていたのか、魔術師

「気付いていたわよ、妖精族」

「なら、なぜもつと早く言わなかつた?」

「確信がなかつたから」

「いつから疑つていた?」

「最初に会つた夜からよ。あなたは気付かなかつたかしら。あなたは誰かのことを話す時、あの人間はとか、例の人間はとかつて、種を表す言葉を使つていたの。人間、つて。普通は、あの男はとか、あいつは、彼女は、と言つふうに、種そのものを指す言葉は使わないもの」

「ハハハ、気づかなかつた。これからは気をつけるよ

「これからがあればね」

首筋に当てているナイフが青白い輝きを発し始める。セリナの意  
思一つで攻撃的な現象が発動する魔法が付加されている、見た目よ  
り遙に危険な武器。

「あなたはいつたい何者なの？ なぜ炎の民が人間のことに関わる  
のかしら？」

「たいした理由じゃない。王女さまとは前からの知り合いだつてい  
うだけの話だ」

「前から？ ランプから出して貰つたの？」

この国に古くから伝わる民話。ランプに封印された妖精の魔神を  
解放すると二つの願い事を叶えてくれるという。

「いや、俺はそういうわけじゃない。あんたたち人間や魔法使いが  
火の国に興味があるように、俺たちのほうでもこっちに興味がある。  
それで人間の世界を偵察するように命令を受けて来ただけだ。二十  
年前にな。細かい話は省略するが、色々あって情報収集に都合の  
いい仕事、裏社会の情報屋をするようになった。そして王女との関  
係だが、平たく言えば、個人的に雇われている諜報員だ。リグヴェ  
ーダ王女専属民間諜報員つてところか」

「諜報員？ 妖精族のあなたが？」

「別にそんなに驚くようなことでもないだろ。とにかく、そういう  
関係で王女に王宮内外の情報を伝えていた」

「リグヴェーダ王女は、それでなにをしていたの？」

王女という立場にいながら外部の諜報員を必要とする、特殊な責  
務を任せていたのか。

パブロは肩を竦めて見せて「なにもしてない」

「なにもしてない？」

「ああ、なにもしてない。ただ、王女というか、王族の立場つて言  
うのは奇妙なもので、自分の与り知らないところで、自分にとつて  
重要な事件が発生しても、それを肝心の自分が全く知らないという  
ことがよくある。どうも、それが気に入らなかつたらしい。それで

王女は俺を雇い、俺は王女関係でなにかあるたびに情報を売つていた

「リグヴェーダ王女がさらわれた時も、あなたは知つていたの？」

「いや、知らなかつた。知つていたら阻止していた。上客だしな。当然、あんたの妹も死なせたりはしなかつた」パブロは自虐的な笑みを微かに浮かべた。「時期が悪かつた。別件を調査している最中で、王都を少し離れていた時期だつた。帰つて来たら、ちょうど王女がさらわれた次の日だつた」

「別件つて、なにを調べていたの？」

「それは言えない。王女から直接聞いてくれ」情報屋は顧客以外の者にけして情報を漏らさないのが基本であり矜持だ。セリナは深く追求しても無駄だと判断したのか、すぐに話を切り替える。

「私たちと接触した経緯は？」

「前に話したのとほとんど同じだ。王女が行方不明になつてていることがわかつて、すぐに調査した。そして組織の情報網に王女がどこへ運ばれていつたのか引っかかつた。長い付き合いだし、助けようと思つたんだが、当然俺だけで助けだせるもんじやない。だが、捜査班に接触することは不可能だ。俺は身元不明の怪しい人物で、しかも人間ですらない。正体がばれたらなにをされるか。信用されずに無視されるほうはまだましで、異端審問にかけられて投獄されるか、最悪、生体実験に回される可能性もある」

人ならざる存在にして、人と同じく知性を持つ者。

そのためか、炎の民は偏見や誤解が多く、また不可解な行動もあつて、危険な存在と見なされていることも多い。エンカータ王国では、特別な処置が規定されているわけではないが、王族に接近している妖精となれば、疑惑の目で見られることは間違이なく、断固たる対処が行われるだろう。

「とにかく、合法的に捜査班に接触するのは不可能だつたんだが、困つてたところに、ラッガートのことがやつぱり情報網に引っかか

つた。それで、渡りに船と、あんたたちに接觸して、王女さまが運ばれたところへ案内することにした「

「リグヴェーダ王女はあなたが妖精族であることを知っていたの？」

「ああ」パブロは頷く。「知っていた」

そもそも、自分が雇われることになったのも、その辺りが関係している。

「そう」「セリナは短剣を懐に収めた。

「信じるか？」武器を引いたということは、そのようにして構わないだろうが。

「ええ、信じるわ。妖精族のあなたが人間のトラブルに自分から係るとは思えないし

「そうしてもらえたとありがたい」

「じゃあ、次の質問。名の無い魔獣の召喚って言つたわね。どういうことなのか、詳しく説明してくれる」

「その前に、俺のことは他の連中には言つなよ。知られると色々まずいんだからよ。魔術師のあんたは俺たち炎の民に偏見はないだろうが、あの騎士三人は「焚火の方向へ目を向けて、頭が固そุดからな。捕まつて異端審問に掛けられるのは御免だ」

セリナは艶然とした笑みを浮かべ「わかるてるわ。情報屋

パブロは笑い返した。それは、虎の笑みのようで、猛獣が美女に懐いたかのようでもあった。

「じゃあ、説明する。まずは、首謀者の名前からだ」

パブロは語り始めた。

セリナは少なからず驚愕した。

「ザーラディース将軍が、戦車に対抗するために名の無い魔獣を？」

「ああ」パブロは頷く。

「……でも、そんなの成功するのかしら。召喚するのは神話の存在

よ。実在するかどうかもわからないのに」

「いや、名の無い魔獸は実在する」

「どうして断言できるの?」

「俺は炎の民だ。炎の民の、そして火の国の支配者は誰だ」

「……」セリナは一瞬答えるのに躊躇つたが「炎の王」

名の無い魔獸と同じく、滅びを司る存在の一つ。炎の王が天界を封じた炎の剣から発せられる火は、万物を少しずつ、だが確實に焼いていく。すなわち、老い、腐し、朽ちさせる。なにかの比喩や暗喩のように取れるが、パブロはそれがそのままの意味だと言いたいのだろうか。

「そう、炎の王だ。そもそも俺がこの世界に来ることになったのも、炎の王に命令を受けたからだ。その時、直に対面している。正直、二度と会いたくないんだがな」

パブロは微かにだが、明らかに恐怖を感じていた。炎の王とはいつたいどんな存在なのか。

「それで、その時に名の無い魔獸のことも少し聞かされた」

「名の無い魔獸を呼び出すのは可能だと?」

「召喚するだけなら不可能じゃないだろうな。だが、支配して制御し、思い通りに操るとなると、怪しいな。あの強大な存在を人間の手でどうこうするなんて、不可能としか思えない」

「どうすればいいのかしら」

セリナは途方もない規模の話に、途方に暮れそうになつた。一国の王女がさらわれただけでも、大事件だといつのに、神話の存在まで介入してくるとは。

「ハハハ」パブロは軽く笑い「そんなの決まつているだろ」

「?」当然のことのように言う妖精に、セリナは怪訝な表情になる。

「王女さまを助け出せばいいんだよ。それで儀式ができなくなる。名の無い魔獸は現れない」

同時刻、古代神殿の地下で、リグヴェーダ王女は、髪に着けていたヘアピンで鍵穴を開けようと奮闘し続けていた。

だが、開錠の訓練など受けていないので、当然開かない。もつとも鍵には、魔法が掛けられており、特定の鍵以外では開かないようになつていてるので、開錠技術を持つている者でも開けることはできなかつただろうが。

やがて彼女は諦めて、苛立ち混じりにヘアピンを床に投げつける。やはり鍵がなければダメだ。昔読んだ冒険小説で、今の自分と似たような状況に主人公が陥つた場面が会つた。それによると、鍵は牢の比較的近くにあるという。遠くに保管しておくと緊急時にすぐに使えないという理由で。可能性を考えもしなかつたので探さなかつたが、案外手が届く範囲にあるかもしない。

ちなみに、その小説は妹に低俗な三文小説といわれた。そんな本を信じて良いのか逡巡したが、探しても損はないだろうという結論に達する。

牢の鉄格子の隙間から念入りに見渡す。果たして鍵は、なかつた。影の形もない。

当たり前だな。リグヴェーダは自嘲気味に胸中咳き、自らの正気を疑つた。目の届く範囲に鍵を置けば、牢屋に入れられた者は、それを手に入れようと必死で努力するに決まつてゐる。そんな所に鍵を置くはずがない。ましてや、手の届く範囲など論外だ。

疲れているのだ。ここに入れられてから一日。いや、もうすぐ三日になるのか。とにかくほとんど寝ていない。

王宮での出来事からずつと彼女は意識を失つていて。おそらくは魔法かなにかで強制的に睡眠状態にさせられていたのだろう。どれくらい時間が経つたのか、気がつけば大峡谷の一画にある神殿の前にいた。あとは地下に連行されて、今ここにいる牢屋に閉じ込められた。

現在、王宮では自分の捜索が行われているだろうが、ここを見つ

けてくれる可能性は極めて低い。

自力で脱出するしかない。そしてボッズルとゲシュタルを見つけて、殺す。脱出にはまだまだ時間がかかりそうだが、必ず脱出する。そしてサリナの敵を討つのだ、絶対に。

王女は拳を、自らの握力で碎くかのように、握り締める。

瞼の裏に焼き付いているあの光景。慕っていた侍女の首から噴出する深紅。それを思い出しだけで自らの胸が真紅の炎で焼け付くようだ。

サリナとは主従関係にあつたが、関係はよく、友人といつても差支えなかつた。その絆を言葉で確かめたことはないが、少なくとも自分は彼女を友と思つていた。そして復讐するにはそれだけで十分な理由だ。

それにしても……。リグヴェーダは思案する。いつたいどういう思惑があつて奴らは自分をさらつたりしたのだろうか？ 政治目的か、賞利誘拐か。

神殿に到着した時に少し周囲を目にしただけだが、ここが辺境にある大峡谷であることぐらいはわかつた。こんな地形は、大陸中を探しても一か所しかない。

こんな場所に連れて来ることに如何なる意味があるのか。確かに隠して閉じ込めておくには良いかもしれないが、そのことを考慮に入れても、こんな遠くまで連行する理由にはならない。

この場所に連行することにどんな意味があるのか。

カツン、カツン。

足音が聞こえてきた。反響で正確な音源が判別できないが、人が来たのなら、脱出の好機かもしれない。

リグヴェーダは息を静める。全身に緊張が漲る。神経を集中し感覚を鋭敏にし、暗い地下牢の状態を把握する。

やがて暗い影が通路の闇の中から姿を現し、牢屋の前に立つた。そいつは備えられていたローソクに指先を軽く触れる。すると、灯が点いた。

一本だけの小さな明かりだが、その男の姿を照らすには十分だつた。

黒衣の初老の男。銀髪が灯に反射して赤く彩られる。

「……ゲシュタル」リグヴェーダは呻くように呟いた。

「私の名を覚えていてくれたとは。光榮だ、リグヴェーダ王女」

言いつつ、鉄格子の前に一步、進み出た。

バン！

その瞬間、リグヴェーダは鉄格子に体当たりするかのように突進し、隙間から右手を伸ばし掴みかかるうとしていた。だが指先が触れるか否かのところで届かない。

「激情家なのだな。王宮の時も思つたが、一国の王女はもう少し淑やかにしたほうが良いと思うのだが」

ゲシュタルは表情を変えず、淡々としている。

「貴様、よくもサリナを」リグヴェーダは獰猛な猛獸の如き声。

「あれは、ボツズルがやつしたことなのだがな」

「黙れ！ 貴様ら全員殺してくれる。絶対に殺してやる。必ずだ！」

「……殺す、か」一呼吸の間を置いてから「無理だな

「なんだと？！」

「我々が営利目的の誘拐を行つたのだと思うのなら、それは間違いだ。念のために言つておくが政治目的でもない。私は魔導士だ。政治にも金銭的な利益にも興味はない」

「ならば、なぜ？」

「王家の血に連なる者なら、想像はつくのではないのかな？」

「どういう意味だ？」

ゲシュタルは踵を返し、元来た通路を戻り始めた。そして背中越しに告げる。

「『』自分で考えることだ」

ベドウイルム村を巡察団が出立してから次の日の朝、ジフは一通りの支度をして、ジャリスに跨り村を出立した。

村を出る彼を見送るものはなく、ジフは一人で大峡谷を流れる河の上流へ向かつた。

彼の行動を気にする者はいない。いたとしても、狩に出るくらいにしか思わなかつただろう。かつては大峡谷隨一の狩人と賞賛されたが、人間関係においては希薄だ。

一度は村を出て、十年後に戻つてきてからのジフは、可能な限り人付き合いを避けてきた、その結果だ。付き合いといえば仕事上程度で、彼自身親戚がいないこともあつて、自然と孤立する。おそらくは、彼自身そのような結果になるとわかつた上で、村人と接してきた。

なぜ、人を避けるのか。その理由は誰にもわからない。村を離れていた十年間の期間になにかがあり、それが、人を避ける原因かもしれないと推測することはできるが、結局のところなにもわからない。

だが彼自身、親身な付き合いをしたいと思う人間ではなかつた。大峡谷へ戻つてきたジフは、どこか接することを忌避したくなる雰囲気を持っていた。それは嫌悪ではなく、恐怖だと誰もが理解して。マースムカを養子にした理由も不明で、誰にも説明したことはない。マースムカもその話をしたことはなかつたが、村人は少年がなにも知らないからだと考えていた。

村人の何人かがジフを見ると、一応挨拶をする。ジフもそれに答えるが、双方、社交辞令でしかなかつた。

ジフが村を出立してから半日ほど川の上流、北へ向かつて進むと、

彼は河原から少し離れた岩にくくりつけてあつた筏を確認した。

緊急時に河を移動手段として使うための筏が、大峡谷に点在する。使つた者は少ないが、ベド・ウイルム村は勿論、点在する集落の者たちは、近くによると必ず点検を行うのが慣習となつてゐる。

この、十人乗り程の筏は、少々老朽化しているが、しつかりしている。これなら、問題なく使えるだろう。

「ジャリス」

ジャリスを呼んで、筏とロープをジャリスの鞍と繋げる。そして自分自身もロープを引っ張つた。

筏の下に丸太を敷いて、車の代わりにするため、人間一人とティダ一匹でもなんとか運べる。そして二人で力を合わせて、河の近くまで運んだ。

「これで良い。しばらく休んだら、また進むぞ」

ジャリスは無言。それはジフの言葉を待つてゐるかのようだ。

「思い過ごしならいいんだが、ゲシュタルが関わつてゐるかもしね。もしそうなら、彼らは無事では済まないだろ」少し考えてジフは言い直した。「……いや、生き残れないだろ、だな」

巡察の騎士たちの案内に付いていくマースム力を、ジフは止めなかつた。自らの技術を全て教えた息子は、今では立派な狩人だ。そして本人に自覚を持たせないようにしたが、もう一つの側面でも。村人は認めようとしないが、先日大人になつた若衆の中では随一だろう。

巡察団の役に立つはずだ。

そして同時に、マースム力に外の世界と接觸させる良い機会だと考えた。マースム力は大峡谷には馴染めなかつた。村人は不条理なほどマースム力を認めず、そして人間関係から外されているも同然のジフも、そのことに関しては力になれない。このまま大峡谷にいても、少年自身のためにはならないだろ。

これを機会に自らの力量に気付き、外の世界に興味を持ち、そして大峡谷から旅立つてくれることをジフは期待した。

大峡谷はマースム力のいるべき場所ではない。

そう考えてマースム力を彼らと共に行かせたが、しかし一晩経過して、不意にゲシュタルのことを思い出した。関連性を考えもしなかつたが、あの男と騎士が同じ時期に大峡谷に現われたのは偶然だらうか。

こんな簡単なことに思い当らないとは、やはり引退してからの長い時間が、自身を衰えさせたのだろうか。

あるいはあの男の存在を考えまいとしていたのか。

いずれにせよ、以前の自分からは考えられないことだ。

それがジフの不安をさらに増加させた。

大峡谷を河上へ向かって進んだ騎士の一行は、夕刻になつてようやく神殿を目にした。

大峡谷の一つの大きな丘の頂に立つ、その存在の意味を忘れられた、マアハドウ古代の神殿。

石材で建築されている巨大な神殿の外観は、エンカータ王国に見られる建築様式とは異なり、巨大な箱のような印象を受けるそれは、寧ろアスベルト帝国の建築様式に近い。石材の色は灰褐色のようだが、今は落日が禍々しい朱に染めている。

いつたい誰が、いつ、何の為に建築したのか、謎に包まれている。これだけの遺跡が今迄調査もされずにいたことも含めて。大峡谷が一種の閉鎖的な土地であることに起因しているのかもしれないが。神殿が見えてきた所で、少し離れた位置に馬を止めると、パブロとセリナが徒步で偵察する。敵に発見されないよう、神殿から一定の距離を保ち、岩陰に身を隠めながら窺う。

ここからは神殿に見張りの姿は見えない。だが、敵も同じように姿を隠して警戒しているのかもしれない。少なくとも自分たちが発見される確率を高めることは避けるべきだ。

「パブロ、気がついてる？」セリナが神殿の周囲を見渡しながら訪ねた。

「ああ」パブロは頷き「これだけハツキリしていればな」

魔術師であるセリナと、妖精族であるパブロには、入り組んだ大

峡谷の地形と河に合わせて流れる、靈的な力が見えていた。

靈脈ハヤーサカラと称される大地を流れる世界の生命力。川の上流から四つが神殿の位置で重なり、そして下流に向かって四方向へ別れて流れていぐ。交差点ならぬ複合交差点。

全世界でも希少な、靈穴ハラム。

「神殿が建てられるのも頷けるわね。神を奉るには最高の場所」

「なにかを召喚するにも最高の場所だ。名の無い魔獣も呼べるだろうな」

「ところで、リイジスだったかしら、あなたの妹」セリナは話題を変える。「その子の連絡はどうだった？ リグヴェーダ王女はまだ無事なの？」

つい先程、リイジスから連絡を受けたばかりだった。魔術師ならば、これだけ近くで意識したなら、念話を感知すると思っていたが、どうやらリイジスの声は聞こえなかつたらしい。得手不得手の問題なのかな、それとも人間の使う魔法は、妖精の超能力とは異なるためか。

逆の意味で意外だつたのは、セリナは自身を隠蔽する技術に長けていたことだつた。場違いに濃い青紫色のドレスのようなローブを着ていてことから、こういったことは不慣れだと思っていたのだが、考えてみれば、セリナは一応王国軍に所属している。王国軍特殊部隊、魔術師団。魔法以外の訓練も一通り受けたはずだ。

そして、セリナのドレスは着用者の命令一つで、色を変える魔法的な機能が附加されてた。今は、薄い赤褐色の色になつており、黄昏時の大峡谷に迷彩して、すぐ傍にいるパブロにも見分けが付き難い。他にも防御力向上の魔法が附加されており、軽度な鎧程度と同等の防御力を持っているそうだ。他には動きやすい形状に変形する

機能など付いているらしい。

闘いと関係した印象のないメガネの美女は、戦闘に関する準備を入念に用意していた。昨夜気配を感じさせずに背後を取つたことと、いい、セリナの得意分野は戦闘なのか。

パブロはそんなことを考えながら、セリナの質問に答える。

「今のところ無事だ。儀式は明後日行われる予定だそうだ。助け出す時間は十分ある。というか、今夜には助け出せるな」

「無事助け出せるかどうかは、わからないけどね」

返り討ちにあう可能性を、少し皮肉を込めて揶揄する。

「悲観的だな。もつと楽観的に考えないと人生辛いぞ」

「あなたが楽観的すぎるのよ」

セリナは笑い、話は終りと手ぶりで撤退の意を示す。

パブロは了承して、二人はラッガートたちが待つ場所へ戻り始めた。

シェルダックとルマジヤーンは、少し離れた場所でラッガートとダラスが話をしているのを眺めていた。

ラッガートは村から連れてきた若者一人に、引き返すようにと指示を出したのだが、ダラスは不服らしく反論してきた。

王女の救出にも参加したいと言い出したのだ。

「ま、こうなる気はしてたんだがな」シェルダックは武器、装備の点検をしながら呟く。

旅の間は荷物の中に隠しておいたが、これから先は戦闘になる可能性が高い。万全の備えをしておく必要がある。

彼らが今回の任務において用意したのは、隠密性の高い防護服だった。布と柔らかい皮を合成させた生地を主として、そして一部の急所や手足といった箇所に、必要最小限に金属を使用した防具。軍では隠密行動を任務とする部隊が採用している防護服だ。防御力に

おいては金属製の鎧にはるかに劣るが、軽量で動きを損なわず、それほど体力を必要とせず、ほかにも音が鳴らないなどといった利点がある。

もつとも、銃器類が発達し採用され始めている今では、全身金属の塊のような鎧は使われなくなりつつある。動きにくく、体力の消耗が激しく、そして銃弾の的になりやすい。銃器類といった武器が主流になった今では、こういった特殊な防護服が主流になるかもしない。

マースムカやダラスの着ている服も似たようなものだ。急所を守る箇所に金属ではなく、硬質の革を使用しているが、全体として似ているのは、設計の basic 理念が同じだからだろう。狩人の行動と、軍の隠密行動は、酷似している。

騎士の三人は全員同じ防具だ。武器はそれぞれに合ったものを用意しているが。

シェルダックは背中に槍、腰に剣と拳銃。そして獵銃。  
ルマジヤーンは剣と拳銃。騎士に与えられる基本武器だけ。

ラッガートは授与された剣ではなく、刃渡り一メートルを超える特注の巨大な剣を持っている。そして同じく特注の盾。拳銃は持つてきていない。なぜなら我らが隊長は、拳銃が致命的に下手なのだ。練習において、的に命中したことが一度としてなく、教官からは「君は絶対に銃を使うな。味方が後ろにいても、同士討ちする可能性がある」と言われたほどだった。もし他の能力が秀でていなければ、隊長に抜擢されることは永久になかつただろうと思われる。そして子供の扱い方もあり巧いほうではないらしい。

「わかつていたなら、なんとかしてください。隊長、困りますよ」  
シェルダックの隣で同じように装備を点検しているルマジヤーンが要求する。

だが、それは難しいだろう。村からここまで一緒にいて理解したが、ダラスという少年は、視野が極めて狭く、独善的だ。自分の考えだけが正しく、ほかの意見は間違いだと思い込んでいる。

「俺に言わねえでくれよ。あの年頃の子供は難しいんだ。筋の通つた説得をしたつて聞き入れやしねえ」

子供と聞けば、ダラスは憤慨したかもしない。

幸い聞かれず、ダラスはラッガートに懇願していた。

「どうしてですか!? 僕も手伝いますよ!」

「駄目だ。おまえたちは帰るんだ。ここからは……」ラッガートはこれ以上の説明は、マースムカに知られたくないことを聞かせてしまうのに気がついたのか、咳払いをしてごまかす。「とにかく、我々には色々事情がある。言うとおりに引き返してくれ

「そんなことわかつています。でも、村の代表として引き返すわけには行きません。騎士さま

頑として言うことを聞かないダラスに、ラッガートは明らかに苛立つていたが、ダラスは気がついていないのか、参加することを主張し続ける。

マースムカのほうは、先程から騎士の様子に気付いており、これ以上は本格的に怒りを誘発させるかもしれないと危惧しているようだ。

「ダラス。言うとおりにしようよ。騎士様には事情があるんだ」

控え目に忠告するマースムカに、ダラスは憚々しげに言い返す。

「ならおまえ一人で帰ればいいだろうが。なにも知らないくせに口を挟んでくるんじゃねえよ。ちょっと話を知つたら興味本位で付いてきやがって。おまえのほうこそ迷惑なんだよ。さつと帰りやがれ

「あ、な……」

自分のことを棚上げした一方的なダラスの非難に、言葉に詰まるマースムカ。

ダラスはマースムカに蔑んだ一瞥を向けた。内心マースムカを、少し脅せばすぐになにも言えなくなる腰ぬけと嘲っていることが、容易にその表情から読み取れた。同じ村の仲間だといつのこと、ここまで軽蔑し嘲笑するとは。

ショルダックはダラスの存在を本格的に危惧し始めた。この少年はここで追い帰さなければ問題を起こす。過小評価しかしない英雄気取りは、必ず他者の足を引っ張る。

「そいつの言う通りだ。もう戻りな。案内してくれて助かったが、

ここからは、俺たちの仕事だ。おまえさんの出番は終わりだ」

ショルダックは少し厳しい言葉でダラスを諫めたが、ダラスはしつこく食い下がる。

「そんなことありません！」そしてなにを根拠に否定しているのか、ダラスは再びラッガートに「お願いします、騎士さま。俺にもリグヴェーダ王女を助けさせてください」

「ダラス！」ラッガートが警告を叫んだ。だが、遅い。

「あ！」不注意にも重大なことを口走つてしまつたことに、ダラスは気付いた。だが、やはり遅い。さつそく問題を起こした。

ショルダックは額を抑えた。内心「あっちゃん」と呟いて。

「……リグヴェーダって」マースムカはその名前を思い出したのか「第一王女のこと？」

「チッ」ダラスは忌々しげに舌打ちして「つるせえな！ おまえは帰るんだから関係ないだろうが！ 脳病者はひとつと消えろ！」

「なに大声出してるんだよ」いつの間にかパブロが戻っていた。「静かにしろよ。神殿にいる連中に気付かれるだろ」

「パブロ、セリナ」ラッガートはその姿を確認する。

二人は先に神殿の様子を見に行くと、偵察に行っていたのだが、パブロにとつてそれが、密告屋に誰にも合わせないようにする便であることはすぐにわかった。だからセリナが同行した。そして、確率は低いが、万が一この男が敵の手の者だった場合にも備えてい る意味もあった。

パブロはセリナが同行することに反論することなく承諾し、二人は偵察に向かい、そして戻ってきたが、密告屋の姿はない。

「密告屋は？」

ラッガートはパブロに目を向けて尋ねた。返答は予想できたが。「神殿に戻ったよ」予想通りだった。

結局密告屋とは何者なのか不明のままだ。セリナに説明を求めて目を向けるが、彼女は肩を竦めて見せただけで、なにも言わなかつた。それにどういう意味があるのかは理解できなかつたが。

そしてパブロは続けて「神殿の中ではなにかの儀式の準備が進められている」その断言を不自然に思うと、パブロはごまかすように付け加えて「……みたいだな。まだ王女は無事だ。生贊にはされてい

ない」

「ああ……」ラッガートは呻いて額を押えた。

この男も簡単に王女のことを口にしてしまつていて。

「なにを悩んでいるんだよ。もうマースムカにもばれたんだろ。こ つちにまで聞こえてたぞ」

「それはそうだが、ごまかそうとは考えないのか？」

「今更なにを」まかすつて？ ここまで来たならもう関係ない。王女さまを助け出して帰れば一件落着だ」

「やっぱり、リグヴェーダ王女が誘拐されたんですね」マースムカは確かめるように口にして、しばらく考えてから「僕も手伝います。リグヴェーダ王女を助けるのを手伝わせてください」

搖るぎない意志を感じる言葉だった。それは、ダラスのように名誉や栄誉、報酬を期待するというものではなく、本当にただ助けたい一心からだとわかる。

「なんで？ おまえさん関係ないだろ。危険なことに係わらなくなつていだらうに」

シエルダックが純粋に疑問を口にする。ラッガートも同じ疑念を感じていた。

マースムカという若者は、村人が思つてはいるような愚鈍ではない。今迄の行動や、ルマジャーンやシエルダックたちとの会話を聞けば、寧ろ賢いことが良くわかる。王女が誘拐されたということを知った時点では、これから先どれほどの危険が待ち受けているか、理解できるはずだ。

だがマースムカは、それを理解した上で、参加したいと言つているのだ。

「どうかしたのかい？」ルマジャーンも疑問に思い聞いた。  
マースムカが答えるより早く、ダラスが口を出す。

「いや、なんでもないんですよ。すぐにこいつは帰らせますから」マースムカの襟首を掴むと無理やりセネロのところへ引きずる。そして耳元で忌々しげに「臆病者がでしゃばるんじゃねえよ。とつとと帰りな」と突き倒した。

「あつ」マースムカは体勢を崩して転んだ。

さらにダラスは地面を蹴つて、マースムカに砂を浴びせかける。  
「ブモオウ！」セネロが闘牛のような雄叫びを上げて、ダラスを威嚇した。

「な、なんだテメエ」ダラスは後退つた。

ティダを相手に生身の人間では敵わないというのは、マースムカの説明だった。その草食動物的な外見からは想像し難いが、ティダは熊より強いそうだ。

そしてダラスは、勇者にあるまじきことに、助けを求めてラッガートたちのほうへと目を向ける。

だが、彼らはダラスの行動を非難する、咎めるような視線を向けるだけ。

ルマジャーンがダラスに目を向けずにその横を通り過ぎて、マースムカを助け起こす。

「大丈夫かい」

「……はい。ありがとうございます」

その様子を見たダラスは困惑している。

「な、なんで？」なぜマースムカを助けるのか理解できないようだ。ダラスは根本的に誤解し勘違いしている。ベドウイルム村で、マースムカが蔑ろにされ、不当に扱われてきたのは、顔の火傷の痕のこと以上に、他所者であるということに起因しており、マースムカ自身の人格はあまり関係がない。

そして王都からやつて来た、外部の人間であるルマジャーンたちは、そういうた感情や先入観はない。

だがダラスは、マースムカがどんな人間にも嫌われているのだと思い込んでいる。醜い右顔は誰もが嫌悪するものだのだと。

しかし普通に見る者なら、その右目と火傷の跡は、おぞましさよりも、その時の苦痛を思つて憐憫の念を抱く。少なくとも、面向かつてあざ笑うことなどしない。

そんなことも彼は理解できていないのか。

「あ、あの、俺はただこいつを村に帰そうと思つて……」

ダラスは言い訳のようなことを口にし始めるが、ラッガートは取り合わずに言い捨てる。

「俺はおまえも帰れと言つているんだ。危険なんだ！」

所詮は少しの道案内にすぎず、そして偶然王女のことを探されて

しまったので情報流出を防ぐために連れてきたにすぎない。これ以上のこととは期待していないし、王女救出作戦を目前とした今では、寧ろ邪魔でしかない。

「いや、でも」

場の空気は感じ取つていて、ダラスはまだ引こうとしない。今迄自分の思い通りにならないことなどなかつたことが、彼に引き際というものを理解させないでいる。

「帰るんだ。わかつたな」ラッガートはこれ以上の論議を許さない。だが、マースムカが彼の前に立つ。

「お願いします。僕にも手伝わせてください」

その醜い右目に、真摯な瞳に、ラッガートは強く拒絶することができなかつた。ダラスのよつに自己顯示欲の塊であれば気にせず捨てるこどもできるが、純真な思いを持つた者に彼は甘い傾向にある。

「人の命がかかっているのに見過ごすわけにはいきません。リグヴェーダ王女がなにかの儀式で生贊にされようとしているんでしょう。目の前で人が殺されそうになつて、なにもせずに引き返すなんて、そんなことはできません。お願いです、僕に微力を貰くさせてください」

ラッガートは返答に困る。単純に考えれば人数が多いほうが望ましい。だが、この一人は本来無関係だ。国と民を守る騎士として承諾するわけにはいかない。

「連れて行きましょう。一人とも」セリナが口を挟んだ。

ラッガートは驚いて「セリナ、なにを言つているんだ？」この二

人は無関係なんだぞ。危険に晒すわけにはいかない」

「置いて行つても、自分たちだけで勝手に神殿に侵入するでしょう、この調子だと。それなら、私たちが付いていたほうがまだましだわ

ダラスが追随して「そうですよ。俺は絶対に役に立ちますから」

セリナが役に立つとか、そういうことは一言も言つておらず、意味としては寧ろ逆なのだが、ダラスは自分が魔術師に認められてい

るのだと思った。

ルマジヤーンがラッガートに決断を求める。

「どうしますか？ ラッガート隊長。俺は一人が付いて来るのに反対はしません。リグヴェーダ様の救出が最優先事項です。人員は多ければ、それに越したことはありません」

言外に、彼らが犠牲になるのを厭わないことを含めていた。時として、普段の穏やかさからは想像も付かないほど冷酷になれる、この精神力が彼の強さの一つで、ラッガートはそのことを知っている。だから、驚かずには彼の意見を聞いていた。

シェルダックは反論する。

「俺は反対です。この二人は、戦いの訓練なんか受けちゃいません。言つてみりや素人だ。一緒にいたら、足手纏いにしかならない。その辺に縛り付けてでも、置いて行くべきです」

そう考えるのが当然だ。もっとも村人の話を聞く限り、それが話半分としても、足手纏いになることはないと思われるが。

問題は、無関係の者を危険に巻き込むかどうか。

パブロは両手を掲げて広げて見せた。意見は特にないという意思表示か、あるいはどうでも良いという意味か。

ラッガートに視線が集まる。皆がその決断を待つている。

「……そうだな。大事なのは唯一つ。それを行うのみ」マースムカとダラスに向かつて「わかつた。二人に協力を頼もう」

「やつた！」ダラスは思わずガツッポーズをとつた。

「ありがとうございます」マースムカが礼を言つ。

シェルダックが髪を搔きながら呟く。

「マジかよ。参ったな。大丈夫なのか？」

ただでさえ不安が山積みなのに、さらに不安要素が増えてしまつたことを懸念しているのだろう。

「話は決まつたか」パブロが皆の不安を払拭するかのようじ、どこか陽気な声で「じゃあ詳しい説明をするぞ」

パブロが神殿の図を簡潔に地面に書き始めた。

大峡谷に多く見られる傾斜の激しい丘の頂に神殿は建てられている。頂まで三百メートルほどの中腹の丘は、元々は中州なのだろうが、河は長い年月の末に移動しており、周囲に水は流れてない。北側の傾斜は比較的緩やかで、神殿の正面まで、ほぼ一直線の長い階段が続いている。

南側は半分ほどから下は崖になつており、稲妻状の階段があるが、神殿がある頂上まで続いていない。ただ、崖の中腹に小さな出入口があり、神殿の地下に当たる場所に通じているようだ。

「まず、王女の居場所は、神殿の地下牢だ。丘の内部が元々空洞で、そこを利用する形で地下牢やその他の部屋や通路なども建築されたらしいな。その地下牢のどこかにいる。地下牢に辿り着きさえすれば、王女もすぐに見つかるだろ。問題は神殿の内部だ。北側から入ると、大聖堂というか、礼拝堂のような広間があつて、神殿の各所に通じている扉が四つある。そのうち奥の右側の扉に入つて、通路を真つ直ぐ進めば、地下牢に通じている階段と一応繋がつている。ただし、見張りがいるから注意しろ」

パブロは、正面から地下牢までの通路に線を引いた。

「それで、南からなんだが、中腹にある扉から入ると、通路になつていて、その下が地下牢に繋がつている」

迷路状態の通路を描く。

「この通路というか、迷路を抜けると、筒状の広い空間とその壁に設置された階段、巨大な螺旋階段だと思えばいいんだが、そこに繋がつていて、その下が地下牢に繋がつている」

そしてその迷路にも地下牢への線を引いた。正直わかつていても迷いそうだ。

「これが、地下牢までの経路。ただ、神殿内部は不明な箇所が多い。地上部分は一階だけで構造も単純なんだが、地下は五階まである上

に、複雑だ。密告屋は一応、正面から地下牢に続く通路だけは調べたが、他の部分はわからん。迷つたら、自力でなんとかするしかないな」「

北側は簡単だが、見つかりやすい。

南側は見つかり難しそうだが、通路は複雑。

しかも、判明している通路にしても、見張りがいることは確実だ。「神殿内部に詳しい奴がいれば助かるんだがな」シェルダックが期待せずに、望みを口にした。「そうすれば、もう少し安全に行けるかもしれないんだが」「

「ないものを言つても仕方あるまい」ラッガートが高望みを捨てるよう忠告する。

「……あの」マースムカが控えめに手を上げた。「僕が少し知っています」

全員が同時にマースムカに目を向けた。

「知つてるって、なんで?」ルマジヤーンが尋ねた。「神殿には誰も近付かないんじやなかつたのかい?」

「……その」少し言い難そうだったが「一人で来たことが何度あります。中にも入りました。だから中腹からの扉からなら、地下牢までの道がわかります」

パブロはマースムカに親近感を持つた。危険と思われる場所にあって入りたがるのは男のさが。まじめで危険には近付かないような人間に見えたが、規律を意味もなく破るところはやはり男だ。

「おまえ! 長老の言いつけを守らなかつたのか! この神殿には近付くなつて言われただろうが」

ダラスが非難するのは、規律や戒律を守らなかつたからではなく、マースムカが活躍するのが許せないためのようだ。

「まあまあ」パブロは宥める。「いいじやねえか。おかげで少しは楽になりそうなんだよ」

それでダラスは騎士の手前もあつて引くことにしたようだ。先程マースムカを苛めたために顰蹙を買ひ、これ以上覚えが悪くなるこ

とを危惧したのかもしれない。そして内心、名誉挽回を考えているだろう。

ダラスが沈黙した隙に、パブロは説明を再開する。

「敵の数は約三十人。傭兵が十人ほど。魔導士が、たぶん四人」

「魔導士」セリナが繰り返した。

魔法を犯罪に使用したため、世界魔術師連盟から、危険人物に指定された魔法使い。

パブロは「だが、もつと厄介なのは、ハシーシャン麻薬服用暗殺者がいる」

「樂園の手の者か」ラッガートが微かに懼く。

世界最大の暗殺組織で育成された狂信者。その精神は信奉する神に捧げられ、その肉体は麻薬で侵し、常人離れした身体能力を手に入れた者たち。

「そうだ」パブロはラッガートに首肯すると、次にマースム力に目を向ける。「魔導士と麻薬服用暗殺者ることは知っているか？」

マースム力は少し怯えた表情でうなずく。

「知っています」

「そうか」

辺境の村の少年がどういった経緯で知ったのかはわからないが、裏稼業関係では有名な連中だ。一般人でも、知つてもそれほどおかしなことではない。

「とにかくどういう経路でそんな連中を雇つたのかわからないが、とにかく真っ向からやり合つたら、まず俺たちに勝ち目はないな。人数はこちらが少ないうえ、向こうは化け物揃いだ」

「救出作戦は隠密行動で行わなければならない」とラッガートは慎重論。

「なに言つてるんですか！ 神殿にいる連中なんか全員殺せばいいんですよ！ 化け物なんか俺が倒して見せます！」

ダラスが意気込んで反論すると、全員蠶蹙の眼を向けた。それでダラスはバツの悪そうに沈黙する。

こいつは学習能力がないのか。パブロは内心呆れる。さつきセリ

ナが一人とも連れて行けばいいと言つたが。緊急時のための、使い捨ての駒として連れて行くつもりなんじゃないのかと、勘織りたくなってきた。かといってここに置いていても、セリナの言う通り、おそらく勝手に行動し、たぶん事態を悪化させる気がする。

「基本作戦はこうだ。敵に知られずに、王女を救出し、撤退する」ラッガートは念を押すように皆に説明した。おそらく、ダラスに念を押したのだろう。

「だな」パブロはラッガートに同意して、「俺の説明はこんなとこだ。他になにか聞きたいことはあるか？」

全員を見渡すが発言する者はいなかつた。

「では、一手に分かれよう」ラッガートが指示を出す。「半分が北側から。残りが南側から侵入。神殿に入る時間は合わせよう」

「南側に到着するのは三十分ほど遅れる」パブロは補足する。

「正面はそれぐらいの時間を見て行動開始だ。さて、メンバーは……」

「俺は騎士さまと一緒にきます」

ダラスが真っ先に口を開いた。勿論騎士に活躍を見てもらうためだろう。

ラッガートが溜息をつく。

「俺とダラス、それからシェルダックとセリナが正面からだ。ルマジヤーン、パブロ、それとマースムカ。裏から回ってくれ。マースムカ、二人を地下牢へ案内してくれるか」

「はい」

「王女を見つけたら、すぐに脱出しそう。状況次第では、俺たちを見捨てても構わん」

ダラスはぎょっとしたが、他の者は気にしなかつた。

「良いんだな」パブロは確認する。

「構わん。王女の安否が第一優先だ。皆もわかつたな」ダラスを除いた全員が首肯する。

「では、夜になるのを待つてから行動開始だ。闇に紛れて侵入する

そして、彼らは神殿への侵入を開始した。

そんな彼らを崖の上の影から、銀髪の男、ゲシュタルが眺めていた。

神殿の奥に位置する祭壇の間で、儀式の準備が進められている。十人の傭兵が、怪しげな装飾品を規則正しく並べ、床に複雑な模様を描いている。本来の仕事とは程遠いが、こういった魔法関係の仕事の経験が全くないわけでもないので、彼らは黙々と作業をこなしていた。

指示を出しているのは、きらびやかなドレスで着飾った小柄な女性だつた。顔に化粧を厚く塗つており、そのため年齢が判別しにくい。二十をすぎたばかりのようでもあるし、老婆のようにも思える。声も甲高くて判断材料にならない。

その脇に一人の人物が控えている。道化師のような真っ白な仮面をつけており、ローブの色は、右は赤、左は青の、性別不明の人物。背丈が異様に高く、大男がそろつている傭兵たちの誰よりも高い。指示を出している女の部下らしいが、詳しい関係は誰も知らない。

その女がヒステリックな声を上げた。

「ボッズル！ それは壊れやすいんだ！ もつと大切に扱つておくれ！」

緑と褐色の斑模様の鉄帽と、同じ模様の上着を着た包帯男、ボッズルは大きな瓶を地面に置くと、おどけるように踊つて見せる。

「ンなこと言つたつてよお、俺は元々警備とか、誘拐とか、敵を殺すとか、不審者を殺すとか、侵入者を殺すとか、殺したほうがいい奴を殺すとか、殺せそうな奴を殺すとか、殺したい奴を殺すとか、そういうために雇われたんだぜえ。こんな雑用なんかやつてられつかつてんだよお。パレス、なんとかなんねえのかよお」

「そんなことは私じゃなくて、ザーラティースに言つておくれ」

「あーあ。人手が足りなくてこんなことする羽目になるなんて、ザ

「ラティースの旦那もケチだよなあ。金に物言わせて現地住民でも雇えばいいんだよ。こんな傭兵連中じゃなくてさあ」

その傭兵連中は無言で作業を続いている。彼ら十人の傭兵は、歴戦の兵士というわけではなく、ほとんど儀式の準備をさせる作業員として、ザーラティースに雇われたようなものだ。

それは彼ら自身自覚しており、なにより魔導士や楽園の暗殺者と係わることを忌避して、黙々と作業に集中する。時折、怯えたようにお互いの視線を交わして、安全を確認するだけ。もし、金額が低ければ、絶対に引き受けなかつただろう。楽園の暗殺者は、傭兵といつた稼業の者たちには恐怖の対象だ。たとえ雇用人を同じくして味方の関係になつてているとしても。

「愚痴ばかり言つてないで早くしておくれ。人手が足りなくてただでさえ遅れているんだから」

パレスが甲高い声で楽園の暗殺者に文句をつける。

「だつたら、その」と仮面の二人を指し「愛想の悪い奴らも動かせよ」

「こいつらは肉体労働には向いてないんだよ」

「俺だつて体弱いんだぜ。ちょっと無理をすると、ウツ、ゲホッゴホッ」咳き込むまねをして「うつ、持病の腰ヘルニシン痙攣症の发作が」

傭兵団はお互いに視線を合わせて、なぜ腰ヘルニシン痙攣症で咳が？ と少し疑問に思つた。そもそも腰ヘルニシン痙攣症つてなんだ？

「あなたの持病は頭の中身だろ。咳なんか出るもんかい。この麻薬中毒者が！」

「お、なんか差別発言」「きいいいい！」

ふざけた会話ばかり続けるボッズルに、パレスは癪癩を起こしたのか、頭を搔き鳩巣耳障りな奇声を上げた。

「もう良い！ わかった！ あなたは王女様の見張りに行つておく

れ！ 後はこいつらだけでやる

「ラツキー。じゃ、俺は行くぜ」スキップしながら祭壇の間から姿を消す。

「王女様に手を出すんじゃないよ！ 生贊に使うんだからね！」パレスはボツズルが消えた先に叫んでから「ああああー！」大声を上げて作業をしている一人に向かつて走る。そしてスパンと頭を引つぱたくと「あんた！ ここ間違ってるよ！」

そして戸惑う傭兵をそのままに、自分で間違えている部分を、猛烈な勢いで修正し始める。

「パレース！」

そこへ、唐突な呼び声に驚いたのか、筆を誤り大きくずれてしまい、歪な文字が出来上がった。

「キイイイイイイ！ 間違えちゃったじゃないのさ！」そして呼んだ本人、ついさっきリグヴェーダ王女のところへ向かつたはずのボツズルに「なんだい！？ あんた王女様の所へ行つたんじゃないのかい！？」

「そんなことよりゲシュタルの旦那から連絡だ！ 侵入者が神殿に入つたつてよ！」

ザーラディースはゲシュタルの報告を受けて動搖していた。

「どういうことだ？ 事前工作が失敗したということなのか？」言つてから自らの失敗の言い訳をしようとしていた。「いや、完璧だつたはずだ。少なくとも私は目をつけられていなかつたはず。それに、もし私を疑つていたとしても、こんなに早くここに辿り着けるはずがない。そうだろう？」

ゲシュタルは首肯する。

「そうだ。おまえが失敗したわけではない。それに、あの者たちのような存在が現れることは、ある程度予想していたことだ」

「なに？」

「独断で行動を起こしているのだ。リグヴェーダ王女近衛隊長ラッガートはな

「なんだと！？」

「人員も正規の者ではないようだ。魔術師団の一員がいる」

「魔術師団？！ なぜ軍の人間がいるのだ？！ 騎士団とは組織系統が違うだろ！」

「魔術師の名はセリナ。ボッズルが殺した侍女を覚えているか？」

「ああ、たしか」記憶の片隅に聞いた覚えのある名前を掘り出す。酷似した名前を。「サリナかソリナだつたな。そうか、姉妹かなにかなのか？」

「そのようだ。そして、王家警護隊リグヴェーダ近衛隊のルマジョンとシェルダック。あと三人はわからんが、臨時で雇つた者だろ。おそらく、そいつらから情報を買い取つたのだ」

二人知つている若者がいたが、それは説明するのは止めた。どうでも良いことだ。

「裏組織の人間か。確かに、非合法で動く奴らの情報網ならば、大峡谷にリグヴェーダを連れて行つたということくらいは知られたかもしれない。だが、それを知つている者に、ラッガートがこんなにも早く接触するなどということがありえるのか？」

裏組織、犯罪組織と呼ばれる、非合法で動く彼らは、同時に利益だけで動く。たとえ王国の存亡がかかっていたとしても、王女が誘拐されたとしても、自分たちに益がないのならば動くことはない。王女の拉致は、彼らに無関係だからこそ、動かないと判断した。そして騎士団や警察には、彼らと接触している者は少なく、情報流出を抑えるために捜査に制限を加えているとなると、彼らから情報を得ることはまずありえないのだ。それがなぜ？

「それだけ、騎士団が優秀だということだ。ラッガートがと言つべきか」

「くそつ。おのれラッガートめ。命令通りおとなしくしていれば良

いものを」

「そういうきりたつな。おまえはここで見物していればいい」「どうするのだ？」

「始末する。そのために楽園の者を雇つたのだらう」

マースムカたちは入り組んだ筋膜を登つていた。丘の南側は斜面というより崖と言つたほうが良く、階段も風化してほとんど崩れており役に立たない。足場の悪い斜面を、両手足を使って登る。馬やティダでは上れないでの、作戦を練つていた場所に留めて置いてきた。それに神殿内部では邪魔になる。

中腹のところで石造りの扉を見つける。長い年月が経過しているにも関わらず、ここはほとんど劣化していない。つい昨日作られたばかりのようだ。中に入つてみても通路は劣化しておらず、色が褪せていることも損傷もない。

マースムカは一人を案内して、迷路のように複雑な通路を進み、やがて空間が上から下へ続いている、大きな筒のような形の場所に出た。壁に沿つて階段が続いている。半径十メートルほどの巨大な螺旋階段は、柵がないため縁に近付くと転落する危険がある。一三十メートル上の天井からシャンデリアのようなものが吊るされて明かりを灯している。最下層でもなにか明かりがあり、目視で下まで五十メートルほど。

ここもやはり真新しく、ルマジヤーンが怪訝に壁を改める。

「これはどういうことなんだ？　壁も床も新品同様だ。今神殿にいる連中が修繕もしたのか？」

「いいえ」マースムカは否定する。「前に来た時もこうでした。ここだけじゃないんです。誰もなにもしていなはずなのに、神殿その物が昨日建てられたような状態に近いんです。埃とかは積もつても、風化したり損傷した形跡は一切ありません。僕も不思議に

思っているんですが

「耐久強化の魔法でも掛けられているのか？」

「そうだ」パブロが肯定した。「だが、強度を高めた魔法じゃない。時間を止めているんだ」

「時間を止める？」マースム力は意味がわからず首を傾げる。

「ああ、時間が止められているから、原因と過程と結果が繋がらない」紫煙をゆっくり吐き「意味がわかるか？」

「全然」ルマジヤーンが首を振る。

「つまり、こういうことですか。例えばこの壁に傷をつけようと、こう」

マースム力は拳で壁を叩くふりをしてみせる。

「こんなふうに衝撃を引えてみる。これが原因。だけど、壁その物に時間が存在しないから、叩いたから衝撃が入るという過程と、衝撃が加えられたから損傷を受けるという結果が、現れない」マースム力は考えながら「叩くという行為、損傷を受ける原因は時間の進んでいる場所では存在するけど、それから先、連鎖して続くはずの現象は、時間が止まっているこの建物では発生しない。原因だけで止まってしまうんですね。時間が止められているから、原因だけで終結する」自分で説明しながらマースム力は納得して「ああ、そうか。そうですね。だから原因から、過程、結果が繋がらないんだ」パブロは煙草を手にしたまま口に付けず、マースム力を呆けた表情で見つめていた。ルマジヤーンも同じ顔をしている。

マースム力はなにか気に障ることでも言つたのかと不安になる。

「あの、僕、変なこと言いましたか？」  
「いや」パブロは首を振り「良くすぐにわかつたな、ちょっとしか説明してないのに」

「頭良いんだね。俺なんか本当に全然わからなかつたのに」ルマジヤーンも褒めるが、呆然とした表情なので褒めているように見えない。呆れているようにも思える。

一人はそれだけ、この少年の理解力と、頭脳の優秀さに驚いてい

るのだが、マースムカにわかつたのは、一応二人が褒めているということだけだった。

「はあ、ありがとうございます」マースムカは生返事をしてから、そしてパブロに「煙草の火が根元まで来ていますよ」

「あ？」パブロは煙草を見ると「アチイ！」

慌てて煙草を捨てて火の粉と灰を振り払う。

そして落ち着くと「なあ、この件が終わつたら、本当に俺と一緒に大峡谷を出ないか。街には学校がある。そこで正式に勉強するといい。おまえなら、たぶん優秀な成績を収められるはずだ」

「そうだ」ルマジヤーンが口を挟む。「騎士育成学校はどうだ。騎士学校への入学を僕が推薦する。いや、隊長に頼めば、すぐに入学できるはずだ」

「いや、えつと」一人の急な申し出にマースムカは戸惑う。「でも、僕は大峡谷の外に出たことがないですし」

少し嘘だつた。意識したことではなかつたが。

「それは、だから、これから出るんだよ」とルマジヤーン。

「そうそう、外にはすぐに慣れるつて。あ、金の心配か？ それも大丈夫だ。仕事の紹介するつて。苦学生に理解のある経営者とか知つてるんだ」

「あんたの紹介なんか怪しいことこの上ないだろ。犯罪すれすれの情報屋のくせして。俺が面倒見るよ。騎士団は国王認定のエリートだぞ」

「えつと……」マースムカは少し思案して、無難な答えを捻り出した。「考えておきます」

「おう、ちゃんと考えて置けよ」パブロが念を押した。

「絶対だよ」ルマジヤーンがさらに念を押した。

二人の勢いに少し引きつつ「は、はい」

辺境の村で輝く才能を、金の卵を産む鳥を見つけたのだと一人は確信していたが、マースムカは一人が自分になにを期待しているのかわからなかつた。だが、村を出るという考えが再び、そして現実

的に湧き上がり始めていた。

そして、物質の時間を止める魔法を知っているパブロに関する疑惑などは、今後の自分の身の振り方に考えが及んで、思いつきもしなかった。

「良し、話が纏まつたところで、行くぞ」パブロが話を切り上げた。「えーと、下でいいんだよね?」ルマジヤーンがマースムカに尋ねる。

「あ、はい」マースムカは一瞬地下牢への道のことを聞かれたのだと理解できなかつたが、すぐに「下です。前に来た時、牢屋のような場所があるのを見つけました。いえ、ようなではなく、牢屋だと断定してもいいと思いますが」

「よし、行くぞ」

「よし行こう、じゃないよ。この三馬鹿トリオ」

不意に、酷く耳に障る甲高い声が響いた。パブロは即座に懐の拳銃を取り出す。

「誰だ!?

ルマジヤーンが誰何の声を上げて剣の柄を握り、マースムカは周囲を見渡している。

だが、パブロは上を見上げていた。マースムカとルマジヤーンはそれに気が付くと、目線を巡る。そこには、三人の人間が空中に浮いていた。

年齢が判別不明になるほど厚く化粧を塗ったドレス姿の女と、その両脇に道化師のような白い仮面を装着した、赤と青のローブの人間物。

三人は音もなく下降し、同じ田線の位置に浮かぶ。

「あんたたち、あんな大声で喋り腐つといて気付かれないと思ってるのかい。脳みそに蛆でも湧いてんじゃないの? イイーヒッヒ

ツヒツ

真ん中にいる女が、耳障りな甲高い笑い声を、広い螺旋階段に響かせる。

「おまえら何者だ！？」その正体は明確だが、ルマジヤーンはあって誰何した。「おまえらが、王女をさらつた一味だな」「だつたらなんだつていうんだい？ 捕まるのかい？ 殺すのかい？」

マースムカは殺すという言葉に、明らかに動搖した。考えていなかつたのか。リグヴェーダをさらつた者たちと戦うことになることは予想していても、命を奪うことまでは。

だが、パブロはすでに覚悟を決めていた。ルマジヤーンもだ。二人にとつては当然のことで、考えるよつなことですらなかつた。

「おまえらの出方次第ではだ！」ルマジヤーンはマースムカの心境を知らず言い切る。

「三対三。数合わせは丁度だな」言いつつパブロは、一丁の六連装拳銃を両手に構える。

発見されたからには、彼女たちを迅速に処理する必要がある。援軍が来る前に。可能ならば自分たちの存在が伝達される前に。

「いいや」女が否定する。「六対三だね」

螺旋階段の上から、三人の影が降りてきた。それは通常の重力の法則に従い落下し、壁を跳躍して、パブロたちを挟む位置に着地する。緑黄色の斑模様の上着を着た男が、前と後ろに一人ずつ。螺旋階段の中心を挟んだ反対側の位置に、もう一人。三人とも、暗殺者が好んで使用する武器、カタールを両手に装備している。

「ほらね」女は自慢げに腕を広げる。「あんたたちを始末して、お、し、ま、い」

まずいな。パブロは胸中呟く。どうやら、偶然発見されたのではなく、神殿に入る前から見つかっていたらしい。でなければこのようないい対応はできない。ショルダックのほうも、敵に遭遇しているだろう。

もつとも、対処法は変わらないが。

「お、し、ま、い、じゃねえよ」口調を真似してパブロは「くたばる」

るのはテメエのほうだ、この、ババア」

「ば、ババアですって！」

女は一瞬で癪癩を起こした。

「キイイイイ！ やつてお終い！」

ラッガートたちは、夜の闇に紛れて正面から侵入する。

松明の灯火が要所に設置されているため、明かりに困ることはないが、反面敵に見つかる可能性が高い。光に入らないように点在する柱の影への移動を繰り返し、やがて神殿内部へ入った。

いかなる技術で建築したのか、一つ数トンはある石材で構築された神殿は異様に広く、支柱をほとんど使っていない。両脇の壁に連なっているが、飾りとして作られたものらしく、本来の機能を果たしているとは思えない。常識的に考えれば、この神殿は足踏み一つで崩壊してしまう。だが、幾百年の時を重ねても、崩れた場所は勿論、ほとんど劣化は見られない。現在の技術では建築不可能の、そして古代の技術でもありえない、存在するはずのない建造物。

現在、周囲に人の姿はなく、不気味なほど静まり返っている。神殿にいるはずの、リグヴェーダ王女を拉致した連中の姿もない。

正面からすぐに礼拝堂、もしくは聖堂のような広間になつてあり、如何なる神が奉られていたのかわからぬが、向かって正面、聖堂の奥、神が奉られる位置に、信仰の偶像なのか、三つの石像が設置されており、さらにその奥に壁画が描かれている。教会などにある精密な物ではなく、寧ろ抽象画のような感じだ。

壁画も石造も同じ姿をしている。

奇妙な形状の剣を掲げた鎧姿の男。

大きな鎌を手にした黒いローブの人物。

そして大きな一対の白い翼を背から広げる女性。

どういった意味があるのかわからないが、神殿が建築された目的には、この三人がなにか重要な役割を持っているのだろう。祈りの対象か、慈悲を司る救世主か。

「なんか、静かですね」ダラスが駆動式短弓を構えながら呟く。「誰もいないんじゃないんですか」

「いえ、パブロの情報は確かよ。どこかにいるはずよ」

ラツガートは怪訝に「信用しているな。おまえは奴のことを一番疑つてゐると思っていたのだが」

「ちょっと色々あつてね」セリナは曖昧な返答。

ラツガートは訝しく思つたが、深くは聞かないことにした。今考えなければならないのはリグヴェーダ王女の居場所、地下牢への道を進むことのほうが先決だ。

足を進めようとすると、不意に後方から重厚な音が響いた。

「なんだ？！」

振り向くと、入口の巨大な両扉が閉じようとしている。

ラツガートはすぐに走つて閉まるのを止めようとしたが、到達する寸前、大きな音を立てて閉じてしまつ。そして閉じた門は巨漢の筋力でも全く動かない。

退路を断たれた。この意味することは一つ。敵に侵入を気付かれた。ならば次に来るのは。

シェルダックが警告の声を上げた。

「上だ！」

二つの人影が柱の天井近く出張り付いていた。

「な、なんだ？！」ダラスが思わず声を上げる。

二つの人影は発見されると、手を離して落下してきた。そしてラツガートたちの前に着地する。十メートル近く落下したはずだが、その衝撃を意にすることなく難なく着地したことから、なんらかの手段で身体強化を行つてゐる。

魔法か薬物。魔導士か麻薬服用暗殺者か。

両手に暗殺者が多く用いる特殊な形状の短剣、カタールを手にしていることから、この二人は楽園の麻薬服用暗殺者だろう。身体能力が大幅に強化されている、恐るべき相手。

「出やがつたな」ダラスは歓喜を含んで叫んだ「どうしますか、騎

士さま。こんなのが出てきたってことは、俺たちが入ったことは完全にばれてますよ」

敵に侵入を知られることだが、状況としては危険だということを理解しているとは思えない声に、ラッガートは苛立ちを感じつつ、背中の大剣を抜き、盾を構える。

「戦うしかないな」

王女が捕えられている牢につながる扉へ行くには、まず敵を倒さなければならぬ。だが、敵が自分たちの侵入をすでに知っているのなら、それに対処した行動をしているはずだ。自分たちが王女まで辿り着くのは不可能だろう。ならば、ルマジヤーンたちが救出するのを期待し、そして可能な限り彼らに有利な状況にしなければならない。

すなわち、敵を引きつける。

「了解」シエルダックが獵銃を構えた。

「それしかないわね」穏やかに言いながら、セリナは両手に短剣を構え、それは青白い輝きを放ち始める。

「ダラス、おまえは後ろに下がつていろ

ラッガートの指示に、ダラスは不服をあらわに駆動式短弓を構えた。

「俺も戦います」

ダラスは駆動式短弓を敵に向けて、引き金を一度引いた。発射された矢は狙いを違わず敵へ直進したが、奇怪な姿の敵は、体一つ分移動しただけで避けた。

そして、それがきつかけとなつたのか、それまで踊るように併んでいた敵は、奇妙な形状の短剣、カタールをかざして、四人へ疾走してきた。

「わ！ わわ！」ダラスは攻撃を簡単に回避されたことで、完全に腰が引けた。

「うおおおおおお！」逆にラッガートはその敵へ向かつて突進する。「ぬううん！」

右手の盾で、敵の体当たりのような一撃受け止め、同時に大剣を左片手で振り下ろす。

薬物の作用によつて強制向上された筋力による一撃を止めることも、一メートルを超える剣を片手で振ることも、並みの筋力では不可能だが、いかなる過酷な修練を積み重ねた結果か、ラッガートはそれを意図も容易く扱う。

だが大剣の強力な一撃は、驚異的な反射神経と瞬発力によつて、後方へ跳躍して回避され、入れ替わりに一人の敵が迫り、カタールを突く体勢で構える。

「行け！」

セリナの一声と共に投げられた一本の短剣が、青白い輝きを放ち、ラッガートの頭蓋骨が刃で貫かれるより速く、高速度で敵に向かった。

セリナの短剣は、ラッガートを突き刺そうとした敵の短剣に命中し、一本を粉碎、そして衝撃によつて敵は大きく吹き飛ばされる。

「やつた！」ダラスは快哉を上げる。

しかし敵は空中で体勢を立て直し、着地すると間髪入れずに跳躍し、ラッガートの腹部に飛び蹴りを食らわせた。

「ぐつ！」

弾き飛ばされた勢いで、壁に叩きつけられたラッガートは、衝撃で一瞬呼吸が止まり苦悶の声を出す。だが、鍛えた腹筋は蹴りの威力に耐え、たいした怪我はないようだ。すぐに起き上がり剣と楯を構え直す。

そしてラッガートを助けた短剣は、青白い残光を残しつつ、ブーメランのようないわを描いて、セリナの手元に戻った。

これがセリナの魔法か。ラッガートは初めて目にする彼女の魔法に感心する。短剣の攻撃力を増幅し、自由自在に操る。飛び道具としての特性を持ち、しかし投擲後に軌道を修正し変化させるため、予測防御は難しく、そしてその場から動かすとも回収可能のため、何度も攻撃できる。個人としては恐るべき攻撃法。

その短剣を受け止めたセリナは「ダメね。衝撃力を高めてあるから普通なら氣絶してもおかしくなかつたのに。痛みをほとんど感じてないみたい。直撃で即死させないと倒せそうにないわね」「じゃ、今のを連續でやればいいじゃないですか。すぐに命中しますよ」

ダラスの案もセリナは却下する。

「それもダメ。見てみなさい」

楽園の暗殺者の動きは、先程よりもさらに俊敏になり、セリナの短剣を警戒してか、的にならないよう動きまわる。

「今のは様子見だつたのよ。命中させること自体、ちょっと難しいわね。それに体力も薬物で、肉体の限界まで大丈夫でしきうし」「冗談だろ！ あんなやつどうやって倒せばいいんだ！？」ダラスが悲鳴のような声を上げる。

矢を回避する身体能力を持つている相手をどうやって倒すか。攻撃は命中しなければ効果がない。

ラッガートが指示を出す。まず厄介な動きを封じなければ。

「シェルダック、左側へ回り奴らの動きをかく乱しろ。無理に攻撃する必要はない。少しでも引き付ければそれでいい。俺は右へ回り一人の動きをなんとしてでも止める。動きを止めたら、セリナ、おまえの魔法で攻撃してくれ」

「了解」シェルダックが答える。

「わかつた」セリナが首肯する。

「よし」ラッガートは一呼吸置くと「行くぞ！」

シェルダックが合図と同時に左側へ走つた。同時に獵銃を発砲するが、弾丸を回避された。どうやら銃口の向きと引き金を引く動作を視認して回避しているようだ。先にダラスの矢を回避したのも同じ理由だろう。

しかしシェルダックは構わずに連續発砲する。動搖して発砲をやめれば、逆に相手に付け入る隙を与えてしまつ。シェルダックは冷静に相手の動きを予測しつつ、発砲している。この経験の豊富さに

裏付けされた行動の的確さが、彼の優秀さを示している。問題は本人に自覚がないことだが。

ともかく、麻薬服用暗殺者の一人はシェルダックが引きつける。その時間が勝負だ。

ラッガートは左側へ走り、大剣をもう一人の暗殺者に向けて大きく振り下ろす。意図的に動作を大きくし、防がれるようにした。

狙い通り敵はカタールを交差して防御した。続けて腹部へ蹴り込んできたが、ラッガートは腹筋に力を込めて耐える。

そこで突然、ラッガートは大剣を捨て、暗殺者が短剣を持つ腕にその手を回し、さらに首をはがいじめにした。

「ぬううん！」

唸り声を上げて、腕の筋肉を最大限に発揮し、力任せに暗殺者の動きを止めた。

ラッガートの意図を察したのか、もう一人の暗殺者が攻撃を仕掛けようとした。

シェルダックが弾切れになつた獵銃を捨てると、槍に持ち替えて攻撃し、妨害する。

「させるか！」

「やれ！」

ラッガートが叫ぶと同時に、セリナは短剣を暗殺者の頭部へ目掛け放つた。

「バカンツ！」頭蓋骨が粉碎する音。魔法の力が込められた短剣は、暗殺者の頭部を吹き飛ばしていた。

「やつた！」シェルダックが快哉の声を上げる。

だが、その喜びが些細な隙となつたのか、引きつけていたもう一人の暗殺者に槍を掴まれ、驚異的な膂力で振り回され投げられた。

「うわああ！」

地面に叩きつけられたシェルダックは、しかし大したダメージはなかつたのか、すぐに立ち上がり、獵銃を構える。

そして暗殺者は一人では不利と見たのか大きく間合いを取り、シ

エルダックから奪つた槍をへし折つた。仲間を殺されたことに怒りを感じているのだろうか。

だが、攻撃するでなく、動きを止めたままだ。

セリナは手に戻つた短剣を、再び投擲する体勢に構える。残り一人。どうやら麻薬服用暗殺者は身体能力こそ高いが、しかし技術的には一般的の兵士と大差ないようだ。身体能力に頼つていて、技術を疎かにしている。油断せず冷静に対処すれば、問題のない相手だ。

ラッガートは改めて敵を見据えた。

しばしの静寂。

「ほう、たいした者だ。楽園の麻薬服用暗殺者を倒すとは」

唐突に、抑揚を欠いた感情をまるで感じない声が聖堂に響く。

「ゲシユタルの旦那あ。感心してる場合じやねえつて。一人やられちまつたんだぜ。ゲッゲッゲッ」

続いて不快な笑い声が響く。

「やはり、薬で身体能力を向上させているだけでは、熟達の戦士には敵わぬか」

ラッガートと他の三人は、声のする石像の方向へ目を向ける。壁画の前にある三つの石像の下に、いつの間にいたのか二人の人物が立つていた。

「貴様ら何者だ？」

正体に見当は付いていたが、ラッガートはあえて誰何する。

「ゲッゲッゲッ」麻薬服用暗殺者と同じ緑黄色の斑模様の上着に、鉄帽をかぶり、全身に包帯を巻いた男が、奇怪な笑い声を上げた。

「なんか、王宮で同じこと王女さまに訊かれたつけなあ」

今の言葉、リグヴェーダ王女を拉致した実行犯であることを示している。

「おつやー？ なーんか王宮で殺した女と同じ顔の奴がいるぞお。ひよつとしてえ、生き返っちゃつたとか？」ボッズルは一拍置いてから「ンなわけないつかー。ゲーゲッゲッゲッゲッゲッ」

「おまえが……」セリナは激情を押えるよつて歯を食こしばり、「おまえがあの子を殺したのね」

「さあねえ」ボツズルは軽く踊るよつてその場でターンしてみせる  
と「ボクちゃん殺したサリナお姉ちゃんのお名前知りましねーん」

サリナはその瞬間、全身に布を巻いた男へ向けて短剣を投擲した。  
軌道に青白い残光を描き、一直線にボツズルへ。

だが、命中する直前、バチンッといつ破裂音と共に、ナイフが弾  
かれる。

「な!?」

ラツガートは驚愕する。魔法による防壁。セリナと同じ魔法使い  
なのか。

「ボツズル、ふざけるな」黒衣の銀髪の男が、叱責するよつには  
あまりにも感情を欠いた声で奢める。「次は守らないぞ」

いや、魔法使いなのは、正確には魔導士なのは、この銀髪の男だ。  
いやー、感謝感激雨あられ。ゲシュタルの曰那は、私を守ってくれる素敵なお、ひ、と

「ふざけるなといった」やはり抑揚のない声。

「ふざけているのは貴様のほうだ!」ラツガートは男に向かつて吼  
えた。「王女をさらつたのはおまえたちだな!」

「だとしたらどうする?」

「王女を返してもらう」

「そ、そうだ!」ダラスが「おまえらおとなしく捕まるんだ」  
包帯のような布を巻いた男、ボツズルは肩を竦めて銀髪の男に目  
を向ける。

銀髪の男、ゲシュタルはやはり感情のこもらない声でラツガート  
に答えた。

「やつてみるがいい。できるのならば」

そしてボツズルが周囲に向かつて叫ぶ。

「あいよー。みんなー、出てきてちょーだーい」

どこか陽気なボツズルの声と同時に、上から七つの人影が飛び降

りた。ボッズルと同じ緑黄色の斑模様の上着姿の男たち。ただ、包帯は巻いておらず、鉄帽もつけていない。

「俺の部下七人でーす。えーと、俺と、旦那と、最初にいたやつを入れてえ」ボッズルは指折り数えて「うわ！十対四！俺たちって無茶苦茶卑怯者かな？ ゲーゲッゲッゲッゲッ」

そしてボッズルはカタールを両手に構える。殺人という愉悦に、お菓子を目の前に差し出された子供のように舌なめずりしながら。「冗談だろ」ダラスは性質の悪い冗談でも聞いたかのような表情で「二人だけでもあんなに苦労したのに……」

それは他の三人の心境を代弁していた。

愉悦の笑みでカタールを広げるよう構えた。

「んじやま、遠慮なく楽しむとしようか、ナー！」

「ハッ！」

リグヴェーダは鉄格子を、全身の力を込めて蹴り込む。綺麗な体勢の蹴りは申し分ない威力があり、力も体重も分散せず打撃点に集中している。武術指南は喜びで手を叩いて褒めるだろう。

だが、当のリグヴェーダは足が痛いだけで、鉄格子はびくともしなかった。

「なんなのだこれは！？」

王女は忌々しげに叫ぶ。鉄格子は見た目の細さとは違い、異常なまでに頑丈で、何度も蹴り込んで、鍵が外れるどころか、変形することさえない。奴らが駆けつけてくるのを覚悟で、強攻策に出たというのに、結果はこの通りだ。

牢の材質が、パブロの言う時間の停止した、理論上破壊不可能の物質で製造されていることを彼女は当然知らない。

「おのれ、この『王女らしからぬ罵倒を数言吐いてから「落ち着け」と自分に言い聞かせる。

どうする？ どうすればいい？

思いついた脱出方法は全て試した。最後には力任せの手段まで行つた。だが、全て徒労に終わる。見張りがいないことを訝しげに思つていたが、なるほど、これなら見張りなど必要ない。この牢に絶対の自信があつたからだ。

つまり、手詰まり。そして新しい考えは思いつかない。

「ああ、冗談ではないぞ。若い身空で命を散らすというのか」

命を取られると確認したわけではないのだが、リグヴェーダはほぼ確信していた。他に拉致された理由が思いつかないのだ。

王族が古代神人の末裔であるのは、王国の人間なら誰でも知つて

いる。

そして魔法使いなら、その血の単純で凡庸な利用方法も。魔法儀式における生贊にして、最初の犠牲者。

「う……うああああ……」

雄叫びを上げてリグヴェーダは椅子を持ち上げると、何度も鉄格子に叩きつける。武術武芸、技の修練云々など微塵もない、ただ力任せに叩きつけるだけ。

椅子が砕けるまで続けたが、当然牢を破壊することはできなかつた。

王女はしばらく荒い息をし、やがて呼吸が落ち着くと椅子の足を捨て、諦めたように力なくうなだれ、床に腰を付ける。ここ数日の疲労が一気に押し寄せてきた。

今迄の十六年間の人生で出会つた数々の人々が思い浮かぶ。

その強さに鬪姫と称されたリグヴェーダだが、このように成す術もなく死に迫られたことは今迄になく、それでも修練で鍛えた強靭な精神力で脱出しようと試み続けたが、疲労はついに精神にまで及んだ。

すまない、サリナ、そなたの仇は討てそうもない。すまない、父上、親より先に旅立つなど親不孝の極みだ。すまない、母上、しょせん義母、血など繋がつておらぬなどと心を傷つけることを言つてしまつた。すまない、姉上、あなたの話をもつと聞いておくべきだつた。すまない、兄上、そなたのことを嫌つていたわけではなかつたのだ。すまない、シャリン、妹のおまえをもつと可愛がつてやれば良かつた。

すまぬ、皆。

最後に、最初の友人のことが思い浮かぶ。

生涯の伴侶になる者として出会い、だが婚礼も行われることなく、短い時間しか共有できなかつた少年。

もうすぐそなたのいる場所へ行くことになりそうだ。向こうで再会したら、私はそなたの名を呼ぼう。夢の中ではいつもそなたに名

を呼ぶことができなかつたから。私が名を呼んだのなら、そなたも私の名を呼んでくれるか？ そなたのいる場所では、お互の名を呼び合えるか？

彼女の目から一筋の涙が流れた。

「……嫌だ」リグヴェーダは呟いた。「嫌だ、死にたくない。私はまだ死にたくない」

私がそなたの場所へ行くにはまだ早すぎる。そうである。私はまだ死にたくない。私はまだ生きていきたい。助けてくれ。頼む、助けてくれ。

「王女さま、泣いているの？」

不意に状況にそぐわない、明るく楽しげな声がした。一瞬それが、亡くなつた友の声に聞こえた。

「泣いてると、けつこう可愛いんだね。いつもは、こゝ、尻を上げててさ、ちょっと怖い感じなのに」

「……リイジス？」

リグヴェーダは顔を上げて、すぐ目の前にいるものを信じられないような表情で見つめた。

「そうだよ」

金色の髪をバンダナでまとめ、同じ色をした瞳は面白いものを見たように楽しげだ。少女とも少年とも取れる可愛らしい顔立ちは、元気が満ち溢れる子供特有のもの。身長もリグヴェーダより頭二分低い。

しかしその背に蜻蛉のような羽がある。そして、それは飾りでも服装の意匠でもなく、少女の背から直接生えている本物の羽だ。

彼女を知らない者なら、自分の見たものが信じられず精神状態を疑うかもしれないが、リグヴェーダは、それが疲労から来る幻覚ではないとわかつていた。

リグヴェーダが私的に雇つてゐる諜報員であり、火の国から人間の世界に來訪した妖精。すなわち、炎の民。

「どうしたの？ 王女さま「おどき話に出てくるような妖精の少女は、楽しいいたずらが成功した時のような、どこか意地の悪い笑みを浮かべて尋ねる。

「リイジス……そなた、どうしてここに？」

「王女さまが悪い奴に捕まつたつて聞いたから助けに来たんじゃない。それ以外になにがあるつて言つのよ？」

手に持つている地下牢の鍵を、手で回して見せる。この絶望の色を表すような薄暗い地下牢から脱出する、まさに希望の鍵。「そ、そ、うか」リグヴェーダは涙を袖で拭うと「それならそれで、もつと早く来るがよい。いらぬ労力を使つてしまつたではないか」「うわ、さつきまでメソメソ泣いてたのに急に強気」「うるさい！ それよりも早くここから出してくれ」

「はいはい」言いつつ鍵を開ける。

軽い金属音が鳴ると、今迄の苦労が嘘のように、鉄格子の扉は開いた。

「よし」リグヴェーダは低い扉をくぐると「リイジス、そなたに感謝を」

「いいつていいつて」リイジスは屈託なく笑うと、手をパタパタと振り「王女さまはお得意さまだからね」

リグヴェーダは笑い「出口はどこだ？」

「こつちだよ。付いて来て。皆も来てるから」

マースムカが駆動式短弓を赤いロープの人物に狙いを定めたが、引き金を引かない。狙いを定めたまま動きは止まり、その手は震えている。

「マースムカ！ 早く撃て！」

パブロは叫んで促すが、マースムカは答えずに、震えているだけ。明らかに人を殺すということを一度として経験したことのない人

間の反応。おそらく殺人を考えたこともないだろ？。そんな人間にとって、殺人を犯すことは恐怖以外何物でもない。

戦いが始まってからまだ一分程度。

ルマジヤーンは緑黄色の斑模様の上着の男と斬り合っている。拳銃には自信がなかつたのか、混戦で味方に命中することを恐れたのか、剣を選んでいる。

だが、カタールを武器とする敵の身体能力は、人間には本来有り得ない力を発揮している。おそらくは薬物の効果。

「こいつらが麻薬服用暗殺者か」パブロは忌々しげに呟く。

ルマジヤーンは剣を選んだことを後悔しているかもしれない。だが、拳銃を使つたとしても、やはり後悔しただろ？。

パブロは他の者たちを牽制するように、拳銃を両手に持ち、連續発砲するが、命中しない。薬で強制的に向上させた反射神経で、指の動きを見た瞬間には、弾道からその身を外しているのだ。

「退け！」

ならばと、パブロはマースムカを押しやり、赤いロープの人物に狙いを付けると、引き金を一度引く。

弾丸は狙いを違わず赤いロープの魔導士に命中する。だが、赤の魔導士は命中しても平然として、悠然と空中に浮いたままだつた。ロープの命中した箇所を軽く手で払うと、弾丸が一発落ちる。少し間があつてから、階段の遙か下から軽い金属音が聞こえた。

魔法による防御効果をロープに附加させている。

「クソッ！ 魔導士が」

「キヤハハハハハ」ドレスの女は耳障りな笑い声を上げる。「あんたの豆鉄砲じや効きやあしないんだよ。わかつたかい、このトウヘンボク」

「つるせえババア！ その口塞いでトイレの穴に突っ込んでやるから覚悟しとけよ！」

啖呵を切つて見せたが、確かに攻撃が効かないのでは勝負にならない。麻薬服用暗殺者には弾丸が命中しない。銃口を魔導士に向

たままパブロは歯を食いしばる。

「やらないのかい？ なら、こっちからいくよー。」

ドレスの女の声と共に、控えていた赤と青の魔導士が、懐からなにかを取り出す。刃渡り一メートルほどの大鋏。

そして女魔導士は両手に三十センチほどの鋏を持つ。毎日研いであるのか、刃は鋭利な輝きをし、刃先は針のように鋭い。

「殺人鬼か、おまえらは」

どこか呆れた口調のパブロは左手で六連装拳銃を構えたまま、右手でもう一丁の拳銃薬莢を捨てて、器用に片手で弾を込め始める。女魔導士が弾丸の再装填を止めようとしているのは、ロープで防御できると確信しているからだらう。

女魔導士は急いで弾込めしているパブロを愉悦の笑みで眺めながら、その言葉をあつさりと肯定する。

「そうだよ」うつとりと夢見る口調で「この鋏で何十人切り刻んだかしら。旧王都じゃ、切り裂き魔、なんて呼ばれたこともあつたわねえ。そうそう、前に切り刻んだ子は好かつたわあ。まだ十歳くらいの男の子だつたよ。こう、ね」鋏で切る動作をして「少しづつ手の指を切つてあげたの。そうしたら、その子、ちょっと切るたびに悲鳴を上げてね。あの声、あの顔。ああん、思い出しだけでもゾクゾクするわあ」

「こいつ、狂つてる」マースムカが戦慄して後退る。

パブロも似たような感想だつた。

「テメエ、頭イカれてるんじゃないのか」パブロは吐き捨てる。「王女もそうやって殺すつもりだったのか？ そうやって魔獣召喚の生贊にするつもりだったのか？」

「なに！？」召喚のことだけならまだしも、魔獣のことまで知つていることに、驚愕した。「どうしてそのことを知つている？！」

「知りたいなら力ずくで来な！」パブロは弾込めを終えた二丁の拳銃を構える。

「キイイイイイイ！ なんて生意気な小僧なんだい！ いいとも力

「…くで闇を出しても…じつへり拷問にかけてやるから楽しみにしな！」

女魔導士は叫びながら、両手を広げるよつとして一つの鋏を構えると、滑るように迫ってきた。

不意にパブロは不適に笑みを浮かべた。

「こいつならどうだ

言つが否や、二丁の拳銃を收め、代わりにジャケットの懷にしまつていた散弾銃を構えた。その間、わずか半秒。

「イイ！」ドレスの魔導士は意表を付かれたのか、驚いたような悲鳴を上げる。

同時にパブロは引き金を引いた。近距離で発射された散弾は、的を完全に捕らえた。

「ギアッ！」

短い悲鳴を上げ、十数発の小さな鉛球が全て命中した女魔導士は、魔法で重力を消してあつたのが災いして、錐揉み状態で反対の壁にまで飛ばされ激突する。

「よし！ こいつなら効く

重力中和と魔法防御を同時に行つているのなら、魔法防御は案外強固ではないかもしないと考へ、手持ちの武器の中ではもつとも威力のある散弾銃を使つた。そして考へは正しかつた。魔法防御で威力が半減され、致命傷に至らなかつたものの、散弾の衝撃と壁に激突したことによって、ドレスの女は気絶した。

彼女を庇う位置に移動した赤と青の魔導士に、パブロは続けて狙いを定める。

「さあ、来やがれ」

一方ルマジヤーンのほうでは、かなり苦戦を強いられていた。リグヴェーダやラッガートのような武術の達人ならばともかく、剣術

に関しては凡才の彼には、薬物を使用した暗殺者相手に渡り合ひの  
は無理だった。

乱戦では銃は味方に当たる確立が高いと思い、とっさに剣を選んだのだが、やはりまだ比較的腕の良い拳銃を使うべきだったかもしれない。しかも他の二人の暗殺者は逃げ道を塞ぐことに専念しているのか、まだ動いていないのだ。あの二人が加われば、確実に終わる。

「マースムカ！ 援護してくれ！」

ルマジャーンは助けを求める。

「で、でも……」

マースムカは未だに躊躇つていた。殺人に恐怖しているのだ。理屈では自分たちが正義と呼んでも差支えなく、そして彼らはリグヴェーダ王女を殺そうとしている、まさに邪悪な人間だ。だが理解はしていても、感情は自身の通りにはならない。

人の命を奪うということは、とてつもなく精神力を必要とする。特に最初は。たとえそれが自分を、そして誰かを平然と酷薄に殺すことができる者であつても。

そしてマースムカは、今迄に殺し合いを考えたことがないのは、その様子を見れば明らかだ。

「マースムカ！ 賴む！ 援護をしてくれ！」

ルマジャーンは叫びながら、マースムカをここに連れてきたことを後悔した。シェルダックの言い分が正しかった。素人である彼らは足手まといにしかならない。そして、このままでは全員が殺される。

「ダメだ！ やっぱりできない。人を殺すなんてできないよ！」

マースムカが拒否すると同時に、ルマジャーンの肩を暗殺者の刃が切り裂く。

「グッ！」

だが浅く、たいした傷ではない。剣を振るのに問題はないだろう。しかし、迷い続けた拳銃に戦いを拒絶したマースムカが、ようや

く駆動式短弓の引き金を引いた。狙つたのは太股の部分だ。足を止めれば、殺さずに無力化できるかも知れないと思つたのかも知れない。

一本の矢が、風を切り、暗殺者の足に迫る。

眼の端にマースムカの動きを捉えたルマジャーンは、切られた腕で剣を横に薙いだ。狙つたのは首。暗殺者の動きを一瞬でも止めば、矢が命中する。そうなれば状況が逆転するかも知れない。

暗殺者は、まさか切られたほうの腕で攻撃するとは思つていなかつたのか、今迄とは違ひ大きな動きで、体を屈めて避けた。

そして、ルマジャーンはそこまで意図したわけではなかつたが、その眉間の位置は、マースムカが狙つた太股の位置だつた。

鈍い音がした。

「あ！」マースムカが思わず声を上げる。

暗殺者の眉間に矢に取り付けられた羽が、まるで装飾品のように突き立つていた。後頭部からは鉄の鎌が覗いており、まるで仮装舞踏会の扮装ように、頭に矢が突き刺さつていた。だが、これは道具の小道具を使つたからではない。本物の殺傷力のある弓矢だ。眉間から後頭部にかけて矢が突き刺さつた暗殺者は、まるでそれを確かめるように手を眉間に伸ばす。そして、バランスを崩して、あるいは平衡感覚自体失つていたのかもしれないが、螺旋階段の淵から足を踏み外し、縦に回転しながら落下した。

「よし！」ルマジャーンが快哉の声を上げる。「よくやつた！ マースムカ！」

だがマースムカは、まったく喜んでいなかつた。

ルマジャーンの賞賛も耳に届いておらず、もはや震えは手だけではなく、全身に広がつて満ちている。

「あ……違う、足を狙つて。僕は……」んな、殺すつもりじゃ……」

意味を成さない単語の羅列。

殺した。

人を殺したくない。人殺しなんてなりたくない。

だが、もう人を殺した。人を殺してしまった。足を狙つたなどとただの言い訳でしかない。自分の撃つた矢が人を殺したのだ。

僕は人殺しになつた。

人を殺すということはこんなに簡単なことなのか。  
あまりにも簡単で、簡単すぎて、マースムカは全身に恐怖が満ちて動けなくなつた。

「マースムカ！」パブロは叫ぶ「気を抜くな！ 敵はまだ四人残つている！」

その言葉どおり、残り一人の暗殺者は、仲間が殺されたことをきっかけとしたのか、一本のカタールを構えつつ、間合いを狭め始めた。そして主を倒された赤と青のロープの魔導士も、大鍔を鳴らし、散弾銃の弾を定めないよう空中を旋回しつつ、攻撃する隙を狙つてている。

パブロは続けて「腹を決めろ！ 僕たちは殺し合いをしているんだ！ 殺らなければ殺れるんだ！」

「でも、でも……」

「危ない！」

ルマジヤーンがマースムカの体を押しやり、次の瞬間鋭い金属音が鳴り響く。暗殺者の一人がマースムカを攻撃し、ルマジヤーンが防いだのだ。ルマジヤーンの剣と、暗殺者のカタールが鎧競り合う。

「この、野郎！」

力任せにルマジヤーンは暗殺者を押しやつた。ラッガートの筋力があれば押し返すのは簡単だつたろうが、ルマジヤーンの力では一歩押しやるのが限度だつた。それに片腕に受けた傷から血が一滴一

滴流れ落ちている。かなりの痛みを感じているはずだ。

そこにもう一人の暗殺者が加勢する。ルマジヤーン曰掛けてカタールを突き出した。

マースム力が咄嗟に駆動式短弓で受け止めて防いだ。意識しての行動ではないだろう。その表情には恐怖が溢れ、体勢も力も安定したものではなく、マースム力は暗殺者にそのまま力任せに床へ押し倒された。

そして、暗殺者はもう一本のカタールで喉を突き刺そようと、刃を振り上げた。

「させるかよ」

パブロは拳銃を撃つ。距離三十センチの至近距離。暗殺者は、信じられないことにそれを避けた。蛙のように跳ねると、マースム力たちがやつて来た通路のほうへ下がる。

「クソッ！ なんでこの距離で当たらないんだよ、化け物が！」

マースム力がすぐに立ち上がり、駆動式短弓を暗殺者へ向けるが、その指は引き金にかかっておらず、全身が小刻みに震えている。それは殺されそうになつたからなのか、殺したという精神的な衝撃によるものなのか。

どうする？ パブロは胸中自問する。

ルマジヤーンは腕に負傷し、戦闘能力が低下。

マースム力は初めての戦闘経験のためか、殺し合つて立たない。怖気づいてしまつて役に立たない。

暗殺者一人とドレスの女は倒したが、それもほとんど偶然だ。

現在四対三。劣勢なのは変わらない。そして気絶したドレスの女はいつ意識を回復してもおかしくはない。

このままでは負ける。

どうする？ 考える。この状況を打破するにかを、打開策を考える。



ズダン！ 突然床が踏み鳴らされる音が響いた。

ルマジヤーンと鎧迫り合いをしていた暗殺者が、突然弾き飛ばされ壁に叩きつけられた。だが暗殺者は痛みを感じていないかのように、すぐに跳ね上がるよう立ち上がり構えるが、続けて刃のように鋭く早い回し蹴りが、その首筋を捕らえ、暗殺者は脳震盪によつて昏倒する。

その蹴りは、ルマジヤーンではなかつた。そしてパブロでも、勿論マースムカでもない。

ルマジヤーンは突如加勢した人物の名前を口にする。

「リグヴェーダ様！」

それは金色の髪が燦然と輝く王女。

「リグヴェーダ様！ ご無事でしたか！」 ルマジヤーンは状況を忘れて歓喜の声を上げた。

「うむ」 リグヴェーダは力強く肯く。「ルマジヤーン、そなたも無事か？」

「はい、なんとか」

「あたしもいるよ！」 頭上から場にそぐわない可愛らしい少女の声が響く。そして重力による落下速度以上の加速で、人影が落下してきた。それはルマジヤーンたちの高さの位置の空中で停止すると「えーい！」

突然、螺旋階段に光が満ちると、赤と青のロープの魔導士が、どういうわけか苦痛の咆哮を上げた。

「「グオオオオオオオオ！」」

「パブロー！」 声が続けて叫ぶ。

「おうー！」

答えつつ、パブロは散弾銃を構えると、引き金を何度も引いた。

散弾は赤と青の魔導士を捕らえ、パレスと同じく、壁まで吹き飛ばし気絶させる。

「ナイスタイミングだ！ リイジス！」

「へへ」蜻蛉のよくな羽を広げた、少女の姿をしたなにかが、笑つて鼻を擦る。

パブロは笑い返すと、通路に残つてゐる最後の一人に散弾銃を向けた。

「さて、どうする？ 麻薬服用暗殺者<sup>ハシーシャン</sup>」

最後に残つた暗殺者は、劣勢と見たのか、脈絡もなく背を向けると、全力で逃げ出した。

「あ！ 待ちやがれ！」

パブロが間髪入れずに散弾銃を撃つが、一発で弾切れを起こす。すぐに弾込めを行つが、その時にはすでに通路を曲がつて姿が見えなくなつた。

「クソッ」パブロは追い付くのは無理と判断したのか、追い駆けるのは止めた。そして改めてリグヴェーダへ向き直ると「よう、王女さま。助かつたぜ」

「礼を言う必要はない」リグヴェーダは首を振り「私のほうが礼を言わねばな。パブロ、リイジス、そなたたちに感謝を」

「気にするな。お得意さまだからな」パブロは軽く手を振つてみせる。

ルマジヤーンは話に付いていけず、怪訝に「あの、リグヴェーダ様。この男と知り合いなのですか？」

「ああ。私的に雇つてゐる諜報員だ」

簡単でたいしたことのないよくな説明に、一瞬意味がわからなかつたのか惚けた顔をして、それから驚愕の表情へと変わる。

「なんですつて？！」

「ククッ、驚くのも無理はないか」リグヴェーダはパブロを見て笑い「怪しこことこの上ないからな。この男の容貌は」

白

パブロは頭上を見上げて「うわ、助けに来てやつたのに、その科

「たまにはゴーグルを外せ。私はおまえがゴーグルを外したところを見たことがないぞ」

「これは俺のポリシーだ。絶対に外さん」 どういうポリシーなのか。「ちょっと待てよ」 ルマジヤーンがパブロに「あんたなんで最初からそれを言わないんだ? 王女の諜報員だつて教えれば、もつと人貞だつて増やしたし、他にも色々できただろう」

「最初に説明したとして、それを信じたのか? 素性もわからない男の言うことをだ」

「それは……」 その通りだ。全てを明かせば逆にまったく信じなかつただろう。だが「いや、まだあるぞ。その少女はなんだ? 羽が生えているぞ」

「ああ、リイジスか」 パブロはなにかを考えてから「こいつが密告屋だ」

「は?」 ルマジヤーンはぽかんと口を開く。

「だから、この妖精が、例の密告屋なんだよ」

「よろしくうつ」 リイジスが空中に浮遊したまま、明るい笑顔で敬礼のポーズをとる。

パブロは方をすくめて見せて「わかつただろ。姿を出さなかつた理由が。妖精をおまえらが信用するとはとても思えないからな」

「あ、ああ、そうかもな」 ルマジヤーンはまだ釈然としないものを感じたが、とりあえず後回しにすることにした。今はリグヴェーダ王女の安否が先だ。

リグヴェーダは「とにかく。ルマジヤーン、そなたにも命をかけて救出に来てくれたことに礼を言わねばな」 リグヴェーダは彼の手を取り「そなたこそ忠義の騎士だ。感謝を」

ルマジヤーンは赤面して「いえ、そんな。俺だけじゃなく、隊長とシェルダックさんも」

「来ているのか?」

「はい、分かれて侵入したんです」説明してから彼は思い出し「ああ！ 隊長たちと早く合流しないと。リグヴェーダ様を助け出したんだから、もうこんなところに用はない！」

「だな」パブロは首肯して「早いとこ脱出するとしようが」

「うむ」リグヴェーダも肯いて「ところで、その者は？」

マースムカを見て尋ねた。そこで初めて、明確にマースムカの顔を目にし、不意に表情をなくした。それは自分自身がなにを感じているのかまるでわからないかのようだ。

「ああ、紹介を忘れていました」その様子に気付かずにルマジヤーンはマースムカを紹介する。「この少年は、近辺の村の者で、リグヴェーダ様の救出に志願したものです。名前はマースムカ。彼にも労いをかけてやってください」

マースムカは困惑しているような、それでいて懐かしむような、そんなんとも言えない奇妙な顔をしていた。だが、一国の王女に直に対面したことによる、敬愛や恐怖ではないようだ。妖精に気を取られているわけでもない。

ルマジヤーンは怪訝に「マースムカ、どうしたんだい？」  
リグヴェーダはそのマースムカの顔を、信じられない者を見たかのようだ、強張った表情で凝視していた。

「どうされました？」ルマジヤーンは改めて王女に目を向けてその様子に気付き「あの、この者の右目は恐ろしいかもしませんが、心はとても優しい少年ですので、ご安心を」

一緒にいて気にならなくなつてあり、いつしか忘却していたが、少年の顔右半分は火傷の痕があり、特に右目は瞼が異様に捲れ上がって、眼球が半ば飛び出しているように錯覚する。

初対面のリグヴェーダは嫌悪や恐怖感を抱くかもしぬない。最初の自分と同じように。

だが、リグヴェーダは不快とは感じていないのか、逆に少年に足を進めてその顔を良く見ようと、自ら顔を近付けた。

「あ、あの？」

戸惑いの声と共に後退るマースムカは、その顔を王女から背けようとするが、リグヴェーダはまるで逃がすまいと両手の平で添えるように掴んで、丹念に観察するように見つめた。

「リグヴェーダ様？」

そんなに興味を引くのだろうかとルマ・ジャーンは怪訝に思う。だが、ことによれば、かなり失礼な行為をリグヴェーダがするとは思えず、少年のなにが王女の興味を引いたのか、疑問に思うだけ。

「？」

パブロとリイジスも、王女の行動の意味がわからないのだろう、その表情には疑問が浮かんでいる。

リグヴェーダは咳く。

「まさか、そんな……」

目の前にいる少年は、年齢を重ねていても、けして忘れることのなかつた、忘れようとして忘れることのできなかつた顔だった。その右側が火傷を負い、成長して変化していくも、見誤ることも見間違えることもない。

だが、ありえない。ここにいるはずがない。存在するはずがない。なぜなら、死んだはずだから。

「おまえは……」

リグヴェーダは少年の名を呼んだ。

マースムカは胸の鼓動が一つ大きく鳴つた。

気が付けば、飛び退るようにリグヴェーダの両手を振り解いた。

「……どうしてわかったの？」

それはリグヴェーダに聞いたのではなく、自分自身の問いかける

ような言葉だった。

ガタンッ！ 突然大きな音が鳴り、マースム力たちが通つた通路が、天井から下ろされた鉄格子によつて塞がれた。

「なんだ！？」パブロは驚愕で叫ぶ

そして螺旋階段の反対側から甲高い声。

「なにを和んでんだい。この、大馬鹿集団！」

気絶していたパレスが、いつの間にか目を覚ましていた。そして壁に隠されていた起動レバーの一つを引き、神殿に仕掛けられた罠の一つを作動させたのだ。

「あんたたち、よくもやつてくれたね。この綺麗な柔肌に痣ができるちまうじやないのさ！」

「もう目を覚ましたのか」ルマジャーンが言つ。

そしてパブロは「つていうか、どこが綺麗な柔肌なんだ？ 厚化粧満載のくせして」

「キイイイイイイ！ なんて失礼な奴らなんだい。こうなつたら」  
パレスは他の一人の魔導士に「アハマル<sup>赤</sup>、アズラク<sup>青</sup>、さつさと目を覚ますんだよ」

その声に、倒れている赤と青のロープの魔導士は、何事のなかつたのかのように起き上がり、再び空中を浮遊し始めた。

「よーし、じやあ、いくよ」

パレスは悪意に満ちた笑みを浮かべると、もう一本のレバーを引いた。

「いくよつて、なにがだ！」パブロが叫ぶ。

パレスは説明せずに浮遊する。

「せいぜい楽しませておくれよ」

全員が嫌な予感がした。そして嫌な予感に限つて的中する。

螺旋階段の最下層から、断続的な機械音が響き始め、それは徐々

に近づいて、早くなつていく。

「なんだ!?」ルマジヤーンは誰にと問わず聞いた。

だが、それに答える必要はなかつた。

階段が最下層から上へ向けて順番に、壁の中に吸い込まれるよつに収納されていく。このままでは足場を失い、遙か下へと落下することになる。

「やばい！ 逃げる！」パブロが叫ぶと、全員が階段を駆け上がり始めた。「なんでこんな仕掛けがあるんだ！」

「キヤハハハハハ！」パレスが耳障りな嘲笑をあげる。「ほらほら、もつと速く走らないと落っこちちまうよ。」

「うるせえ！ このババア！」パブロは言ひざま拳銃を連射する。だが、当然効いていない。

「キヤハハハ！ どうしたどうした？ ゼンゼン効かないじゃないか。散弾銃を使ってみるかい？ でも、近くで撃たないと効かないねえ」

魔法防御ごと銃女たちに衝撃を与えるには、近距離でなければ効果がない。遠距離だと弾が散つてしまい、威力が半減してしまう。気絶している間に仕留めておくべきだつた。

戦っている時は余裕がなかつたが、暗殺者が逃げた後なら問題なくどじめを刺せたはずだつた。しかしリグヴェーダのほうに気を取られて、彼女の存在を全員忘れてしまつていた。

マースムカが後ろを振り向き、階段がどのくらい消えているのか確認した。

「パブロさん！ あの人人が！」

そして、忘れていたことを叫ぶ。リグヴェーダが気絶させた暗殺者。パブロが振り向いて見た時には、暗殺者のいる場所の階段は壁の中へ收まり、足場のなくなつた暗殺者は落下する。あの高さからでは助からぬだろう。

「なんてことを」マースムカは呻いたよつに呟く。

「おいおい、仲間を殺しているぞ」パブロは呆れたよつに言った。

「ハンツ！ なにが仲間なもんかい。あの麻薬中毒者どもとは別組織なんだよ。一緒にしないでおくれ」

「似たようなもんだろ！」パブロは言い返してから、リイジスに「リイジス、先に外へ行け」

「ええ？ なんで？」一人空中を飛んで安全なリイジスは、意味がわからず戸惑う。

「ここに連中の足があるだろ。それを頼む」リイジスはパブロの意図を理解したのか「わかつた」

一気に上へ飛翔した。

ドレスを着た魔導士は、先に上に逃げた妖精と、パブロたちを交互に見ていたが、妖精は放置しても問題ないと判断したのか、すぐに視線をパブロたちに向けて固定した。

「今はバカにしてくれた連中の、滑稽で面白い姿の見物が優先、と」「少しばかはリイジスも気にしろよ」パブロは呻く。

一人くらいはリイジスを追いかけてくれれば、戦力が分散されたのだが。

後ろを見ると、思つたより階段が消えるのが早く、すぐ背後まで差し掛かっていた。

「リグ！ みんな！ もつと速く走つて！」

マースムカが叫んだ。

なぜかリグヴェーダの愛称も。

同時刻、セネロは神殿の方向へ目を向けると、動物にしては表情豊かな顔を厳しくした。

そしてなにを思ったのか、ラッガートたちが使つてゐる馬の傍に行くと、繫いである綱を首から器用に解いた。それを口に咥え、さらに前足でしつかり握ると、先導して神殿の方向へ向かう。

そこに、ダラスのティダが一声嘶く。なにをする気なんだ？ と

聞いているようだった。

セネロは田を向けると、やはり一声嘶ぐ。それは説明しているようだ。

しばらぐ一匹のテイダは声を交し合つた。そして一段落ついたのか、再びセネロは馬を神殿へと向かわせる。

ダラスのティダはしばらくその場で、どうするべきか悩んでいたようだったが、セネロが付いて来たくないのなら来なくていい、と

いつ風に一警すると、結局一緒に付いて行くことにした。

「ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ ハイイイイイ！」

ボッズルはカタールによる速く鋭い連続攻撃を、舞踊のように滑らかに絶え間なく繰り出してくる。

ラッガートはその連續攻撃を盾で防御し、剣で捌ききつた。そして一瞬攻撃が途絶えた瞬間、反撃に大剣を横薙ぎに振るう。通常の状態でも麻薬服用暗殺者以上の筋力と、大剣の重量による攻撃は、生半可な防御を粉碎する。

だがボッズルは攻撃を予想していたかのように、防御せずに跳躍して回避。ラッガートの頭上、真上にまで移動し、そして落下が始まると同時に体を捻じつて反動をつけると、コマのように回転し、一本のカタールをラッガートの脳天に目がけて突き出した。

「シャアツ！」

「ぬん！」

ラッガートは盾を頭上に構えて防御。二つのカタールと激突し、耳障りな金属音が鳴り、接触点で火花が散る。

「イイーやツ！」

ボッズルは剣先で盾の上に逆立ちしたまま、体勢を崩さず、そのままの状態で腕立てのように腕を曲げると、盾を足場として腕だけで再び跳躍した。そして縦回転しながらセリナへ刃を向ける。

体全体が回転する刃の武器のように迫るボッズルに、セリナは臆することもなく迎撃態勢をとる。

彼女が着用していた、動き難い濃い青色のドレスは、いつの間にラッガートたちのような防護服に変形していた。動きやすく、おそらく防御力は騎士たちの防具より強度だろう。

セリナは周囲に円形に展開していた短剣をボッズルへ放つた。魔

力を帶びた短剣は正確にボッズル目がけて一直線に走るが、ボッズルに命中したかのように見えた短剣は、回転に合わせたカタールの刃によつて弾かれた。

セリナは続けて短剣を放つ。一本、一本、三本……。すべて弾かれる短剣。

「うお！」

しかし、さすがに七本目の短剣で、ボッズルの回転が止まり、体勢が崩れ、空中で一瞬無防備状態に。

ラッガートはすかさず走り、大剣を再び横薙ぎ。ボッズルは着地と同時にカタールを交差して防御態勢。回避する余裕がないのだろうが、ラッガートの臂力と大剣の攻撃力ならば、防御ごと叩き斬ることができる。

取つた。確信したラッガートは、しかしボッズルの動きに驚愕する。

ボッズルは大剣の攻撃方向に合わせて跳躍した。命中はしたが威力は半減しており、浮遊する羽毛を攻撃したかのように手応えがなく、ボッズルは跳躍力と攻撃力が合わさつて十数メートル飛んだが、空中で体勢を整えて難なく着地した。

「おつとつと」

着地に軽くよろめいたが、それは本当に体勢を崩したというより、意図的に見せたように思えた。

だがラッガートとセリナは、構わずに追撃をかけようとした。

「隊長！ そつちへ行きました！」

シェルダックが叫んだ。命中させることはできないものの、獵銃の牽制で他の敵の接近を防いでいたが、弾切れになり、その隙に四人の暗殺者がセリナとラッガートに迫る。

ラッガートは大剣を連続で突いて一人を寄せ付けず、もう一人の攻撃を盾で防ぎ、体当たりで転倒させる。二人の暗殺者は床を転がつて間合いを取る。

もう一人の暗殺者は、魔術師が周囲に高速度で短剣を竜巻のよう

に回転させ接近を防ぐ。

そして麻薬服用暗殺者の攻撃が一旦止まつた。向こうも簡単に倒すことができないと考えたのか、騎士たちの周囲に展開して牽制している。

「三人とも無事か？」

確認を取るラッガートは、肩で息をし、体の数ヶ所にカタールで切られた傷ができている。だが、戦士としての技量か、深い傷はない。

「ええ、まだなんとか」セリナもまた息を切らしつつ答えた。

魔力を仕込んだ短剣を七本同時に使用し、見えざる糸で操るよう常識では不可能な動きで飛ばし、敵を攻撃する。七本の短剣を操るというより、全部で一つの武器であるかのような、総合性の取れた、流れるように、そして的確な攻撃。これほどの魔法を長時間使えるとは、魔術師の称号を与えられたことはある。彼女がいなければ、どうにやられていただろう。

だが、暗殺者はその攻撃さえ、ほとんど反射神経だけで回避している。それに、同時に操れる最大数は七本まで。しかも体力の消耗が激しく、しばらくすれば限界に来るだろう。

「こつちも無事です」シェルダックが猟銃に弾を込めながら返事をする。

「おおら！ 来やがれ！ ぶつ殺してやるぞー」ダラスは返事をせず、敵に威嚇していた。

闘争心が高ぶっているというより、恐怖していると言つべで、その顔はひきつっている。彼の放つ矢は、俊敏で意表を突く動きの暗殺者には一本も命中しておらず、ダラスの狙いはどんどん難になつていく。

シェルダックの忠告を採用するべきだつたか。ラッガートはダラスを連れてきたことを後悔していた。

ダラスという少年は確かに村の中では強いのかもしない。だが、あくまで辺境の村という、限定的な基準での話だ。

広い世界を体験したことのない少年は、自分より強い相手と戦つたことがないために、強敵と対峙する時の精神力が養われなかつた。そして今、始めて自分以上の強敵と遭遇し、勇気よりも恐怖が勝つている。精神の強靭さは、自分より強大な存在と戦つて初めて培わるものだが、彼にはそれがない。

今までの常識や、戦いの技も力もまるで通用しないことに、ダラスは恐怖を覚え、それをごまかすために大声で威嚇しても、虚勢でしかないのは敵にも明らか。このままではダラスは混乱を起こし、状況をさらに悪化させるかもしれない。

そうなる前に状況を変化させなければならない。だが、どうやつて？

三人とも、今のところ致命傷になる怪我はないが、いつまで持つか。暗殺者の数人にかすり傷を追わせただけで、一人も仕留めていない。こちらは体力が確実に減っているが、やつらは息切れ一つしていない。勿論それは、薬物によつて強制的に向上させた身体能力の結果だ。

そして精神は恐怖を麻痺させている、その顔にある薄ら笑いは、戦いと虐殺と彼らが信奉する神への献身による、喜び。

麻薬服用暗殺者が一人だけの時でも手こずつた。今は魔導士を入れて十人。逃げようにも門は閉ざされてしまい、他の入口にも最低一人が陣取つている。もし全員で一斉に襲撃されたら、とうに終わつていた。それをしなかつたのは、様子見か、逃げられないようにと考えたのか、あるいは暗殺者の筆頭らしき人物、ボッズルが自身の嗜虐を満足させたいためか。

「隊長、どうしますか？ このままだと俺たちは……」 シエルダックは獵銃を構えながら、指示を求める。最後まで言わなかつたのは、絶望を口にしたくなかったからか。

「諦めるな！ 諦めずに好機を待て！ 必ず好機はあるはずだ」「ゲッゲッゲッゲッゲッ」 ボッズルが不快な笑い声を上げる。「あらわけねえだろ、そんなもの。おまえらは、みいーんな、ここで、

死ぬんだ、ヨー！ ゲーゲッゲッゲッ

勝利を確信したボッズルの嘲笑は、不意に止まった。

「ん？」

パブロが説明していた地下牢へ繋がる通路から、数人の走る足音が聞こえ、ボッズルが怪訝に足音の正体を確かめようと目を向けた。その瞬間「どけ！」

ボッズルは何者かの飛び蹴りを顔面に受けて転倒し、両手に持つカタールを落とした。

「くお」不意打ちをまともに受けた鼻を押えながら「な、なんだあ？」

現れたのは、囚われているはずのリグヴェーダ王女だった。

螺旋階段の罠をなんとか落不せずに、地上部分へ出たリグヴェーダたちは、マースムカの指示で通路と部屋の組み合わせを走り抜けた。

そして眼前に広い場所が見える。礼拝堂か、祭壇の間なのか。

「どけ！」

リグヴェーダは先へ走り、通路を妨害している、麻薬服用暗殺者を不意打ちで蹴り倒し、その間に全員がそこへ入った。

周囲を見渡すと、四人の味方を確認した。

「パブロさん、皆がいました」マースムカが歓喜の声を上げる。

パブロは険しい表情のまま「喜ぶのはまだ早い。なんか、敵が増えてやがる」

言いつつ拳銃を連射して、敵を攻撃する。命中しないものの、接近を防いでいる。

パブロの言つたとおり周囲に敵がいる。螺旋階段で遭遇した暗殺者と同じ格好をした者が九人。

その内の一人、鉄帽をかぶっている者をリグヴェーダが蹴り倒し

た。気絶させることはできなかつたのか、すぐに起き上<sup>ア</sup>がると、銀髪の初老の男の傍へ。

その一人を見て、リグヴェーダは頭に血が昇る感覺に襲われる。サリナを殺した二人。

「王女！」

後方から呼ぶ声がした。

目を向けたリグヴェーダはラッガートたちの姿を確認した。王宮で近辺警護に当たる近衛騎士の三人。この身の危機に馳せ参じてくれたのか。

「ラッガート！」

「王女。ご無事でしたか」

「うむ。そなたたちも無事か？」

言いつつ、リグヴェーダはボッズルが落としたカタールを一本拾い、装備し構える。

そしてラッガートたちの後方に、閉ざされた門を確認する。

巨大な両扉が閉まつていた。このためにラッガートたちは退避することもできずに、ここで鬪つていたのか。

「近付くんじやねえ！ おらおら！」

パブロが何度も発砲して敵を牽制し、その間に全員が同じ場所に合流し、敵の攻撃に備えた円を描く陣形を取つた。

そこでリグヴェーダは不意に瞳に映つた人物に驚愕する。自分が見た者を一瞬理解できず、しかしそれが間違いではなく、確かに存在することに愕然とした。

「サリナ！？」

サリナは殺されたはずだ。

だが、目の前で殺されたはずの侍女が、今日の前にいる。

死んだと思っていた人物に再開するのは、短い時間のうちに一度目。この神殿は死者が現れる場所なのか。

だがサリナと同じ顔をした女性は否定する。

「いいえ、王女。私はセリナ。サリナの双子の姉妹です」

その言葉でリグヴェーダは、サリナが以前話してくれたことを思い出す。同じ日に生まれた姉妹のことを。

そして、その姉妹がここにいる理由は一つしかない。

「そうか。セリナ、なぜそなたがここにいるのかは説明せずともわかる。サリナを殺めたのは、あの包帯のような布を体中に巻いた麻薬服用暗殺者。それと、その隣にいる銀髪の魔導士だ」

「はい。存じております」

「仇を討つぞ」

「はい」

初対面の二人は、同じ目的を確認し合い、短い時間で強い心の絆が成立した。

それに水を差したのは、以前から個人的に雇っていた情報屋。

「そんな余裕ねえだろ。周りを見てみろ」

リグヴェーダたちを追跡してきた三人の魔導士が、通路から現れた。

「キィイイイイイ！」

赤と青の魔導士は、広間にすると頭上で旋回を始め、ドレスの女は、銀髪の男の傍に着地する。

「なんて逃げ足が速いんだい！ 落つこむると思ったのに！」

「パレス。なぜリグヴェーダ王女がここにいる？」ゲシュタルはリグヴェーダが現れることに動いた様子を見せず「牢からどうやって出た？」

「そんなこと知るもんかい。あたしらがその」とパブロたちを指差し「三馬鹿トリオの相手をしてたら、いきなり出てきたんだよ。まったく、どうなつてんのさ？ あの牢からは出られないはずじゃなかつたのかい？」

「ふむ」ゲシュタルは思案していたが、やがて「まあ、いい。もう一度捕まえれば済むことだ」

そしてゲシュタルは魔力を構築し始めた。セリナとパブロには知覚できた、魔力の微弱な共振信号。なんらかの魔法を使う呼び動作。

ボッズルは暗殺者たちにまだ控えるように、彼らだけの手信号で命令する。だが、いつでも強襲攻撃に移れる状態だ。

そして頭上には赤と青の魔導士。刃渡り一メートルの大鎌を開きつつ、二人は円を描いて旋回している。パレスの指示でいつでも上から攻撃を仕掛けてくるだろう。

門は閉じられており逃げ道はない。

リグヴェーダたちの現状は圧倒的に不利。

戦力からすれば全滅させられてしまうだろう。

「おい、ラッガート」パブロが拳銃に弾を込めつつ「突破する方法は？」

「俺はおまえにこそ聞きたかったがな」

「方法はあります」ルマジヤーンが一呼吸置いて「何人かがここで奴らを食い止めれば、リグヴェーダ様と、後一人くらいなら逃げられます」

「バカな！」リグヴェーダは拒否する。「そなたたちを犠牲にして助かれというのか？！」

忠義の臣下を見捨てるくらいならば、共に戦い、共に散つたほうがましだ。

「他に方法はありません」ラッガートが「ダラス、マースムカ。リグヴェーダ王女をつれて逃げろ。なんとしても突破口を開く」「そんな！」マースムカが叫んだ。「そんなことできません。皆さんを見捨てて逃げるなんて」

「他に方法はないんだよ」パブロは拳銃の弾込めを終えた。

「それしかないわね」続けてセリナが七本の短剣を自身の周囲に浮遊させて展開させた。仇だけは必ず討取るつもりだろう。

「ここが、俺の死に場所かな」どこか諦めたように、そして待ち望んでいたように呴いて、シェルダックが獵銃を構える。

そしてラッガートは二人に告げた。

「二人とも、リグヴェーダ様を頼む」

リグヴェーダはとても承服できなかつた。危険を顧みずに救出に

来た忠義の騎士たちを捨て駒にするなど、王家の誇りと、人間の尊厳にかけて、絶対にできない。

だが、この者は？

リグヴェーダは迷いの中、友である少年を見る。

マースムカも困窮していた。

どうすればいい？ 確かにこのままでは全員殺されてしまう。でも、パブロさんたちを見捨てるなんてできない。なにか、なにか方法を考えないと。

だが、ダラスだけが違う考えだった。

やつたぜ、これで助かる。ついでにマースムカもここに置き去りにしよう。そうすれば、手柄は全部俺のものだ。村に帰つたら皆は勇者として尊敬するぞ。しかも王女しばらく一人きりだ。俺に惚れるに違いない。そうだ、これが終わつたらラーナをつれて王都へ行こう。国王からきっと表彰が渡される。こんな辺境の勇者じゃない、この国の勇者だ。

やがてリグヴェーダを救つた英雄として、王都で祭り上げられる自分の姿を思い浮かべ始めた。

もしかするとダラスは戦闘の昂揚と恐怖で少し頭がおかしくなつていたのかもしれない。

だが、すぐ我に返る。その前にここを確実に逃げ出さなくては。

「わかりました。リグヴェーダ王女を連れて脱出します」

ダラスは了承すると、ラッガートは「頼む。任せたぞ」

「はい」

ダラスは嬉しそうに答えた。



「なに言つてるんだよ、ダラス。皆を見捨てるの！？」

マースムカは非難する。ダラスは仕方なく皆を犠牲にするのではなく、明らかに喜んでいた。手柄を立てること、そして自分がそれを一人占めにできることを。以前から自分のことしか考えないような人間だったが、このような状況下でさえ、自尊心を満足させることしか考えないとは。

「うるせえ！ 役立たずは黙つてろ！」 いつものように思い通りにならないとなると、大声で怒鳴る。

だが、リグヴェーダがマースムカに同意した。

「私も同意見だ。そなたたちをここには置いて行けない。私も戦う」「いけません、リグヴェーダ様」 シエルダックが獵銃を敵に向かたまま「俺たちは、あなたを助けるためにここに来たんです。俺たちの任務はあなたを救出することです。あなたを死なせるためじゃありません」

ルマジヤーンが続けて「あなたの救出が俺たちの任務です」

それが国王からの正式な命令でなくとも、自分自身に課した使命として。

三人の騎士は攻撃態勢に入った。一拍遅れて、魔術師と、情報屋も。

敵も体勢を察し、牽制状態から、攻撃態勢に移行する。

マースムカは必死に脳裏で考えを廻らす。なんとかしなければ、なにか方法を考えなければ。状況を脱する方法。なにか、全員で逃げることのできる策があるはずだ。

正面の門へ目を向けた。ラッガートたちが入った正面の門は閉ざされており逃げ道を塞いでいる。確かにこの神殿から出るには、地

下まで戻る必要がある。それには誰かが敵をここに引き付ける必要があり、ルマジャーンの言うとおり、誰かが犠牲になるしかないだろ。」

逆に考えれば、閉ざされた門をなんとかすれば、全員が脱出できる可能性がある。

だが、一見して頑丈な大扉をどうすればいいのか。ラッガートたちがここで闘つていたことを考えれば、固く閉ざされて容易に開けることができないと断じて良いだろ。破壊するのも、その大きさから考えて難しい。

だが、なにか方法があるはずだ。開けるにはどうすればいい。開けることができないなら、破壊することは。

ふと、懷の単発式拳銃のことを思い出す。弾丸と薬莢、雷管を別々に装填する、旧式の拳銃。火薬は懷に入ったままだ。そして火薬は雷管の火花によつて簡単に爆発するため取扱に注意が必要な代物。「そうだ、これを使えば……」

纏めて火薬を発火させれば、かなりの爆発力を發揮するだろ。うまくやれば、扉に穴を開けるくらいなら。

「皆さん、少し時間を稼いでください。あの門をなんとかします」

マースムカに視線が、あるいは注意が向けられる。

「なんとかって、どうやって？」

パブロが方法を聞くが、マースムカが答える前に、ダラスが抗議する。

「おい、変な」とするんじゃねえよ。おとなしく騎士たちの言つことを聞いて……」

「なんとかできるのだな？」リグヴェーダが、ダラスの言葉を遮つた。

「うん」マースムカは肯く。

「わかつた」そして全員に「皆の者、聞いたな。しばらくの時間、この者を守れ。そして皆で生き延びるのだ」

リグヴェーダの声で、騎士たちはマースムカを囲む陣形をとる。

マースムカは大急ぎで懐の薬莢を入れた袋の一つを矢にくくりつけた。

鎌を外し、代わりに雷管と薬莢を装着する。油を注いで火薬を塗り、導火線の代わりにする。上手く行けば誘爆する。

一発ではおそらく破壊できない。最低でも一本は必要だ。迅速に作らなければ。

「早く始末した方がいいぞ」

ゲシュタルはマースムカがなにかを企んでいることにすぐに気付き、隣のボッズルへ命令を促す。

「あいよ。よーし、おまえらあ！ 始末しろ！」

ボッズルのぞんざいな口調の命令で、暗殺者が一斉に攻撃を開始した。

「させるかよ！」

夜にも関わらず遮光ゴーグルを着けたままの男、パブロが二丁拳銃で手当たりしだい撃つ。左右前後に高速度で動き回る麻薬服用暗殺者に命中しないが、接近させることだけは防いでいる。

「行け」

ドレスが変形した特殊防護服を着用した魔術師、セリナの言葉で周囲に浮遊していた七本の短剣が一斉に放たれた。標的は二人同時。一つは暗殺者。一つは青の魔導士。最後にボッズル。

だが暗殺者は避け、青の魔導士は結界ではじき、そしてボッズルはやはり避けた。

「旦那あ、守つてくれよお」ボッズルが懇願する。

「次は守らないと言つた」ゲシュタルは冷淡に返す。

飛翔する青の魔導士が、若い騎士ルマジヤーンの拳銃を受ける。

セリナの短剣の一撃を防いだ直後で、その攻撃のために魔法防御が緩んだ瞬間だつたためか、拳銃から発射された鉛球は効果が現れ、

青の魔導士は肩が弾かれる。

若い騎士は効果を確認したか、連續して発砲。青の魔導士は一撃を受けるごとに、衝撃で仰け反り、翻る。

そこへパブロが散弾銃を撃つた。強力な散弾を受けた青の魔導士は、ついに大きく弾き飛ばされ、床へ落下して動かなくなる。だが、出血が見られないことから、昏倒しただけか。

「ああ！？ アズラク！ なにをしているんだい！ しつかりおし！」

パレスが叱咤するが、氣絶しているので聞こえていないようだ。

「むううん！」

巨漢の騎士、ラッガートが雄叫びを上げ、同時攻撃を仕掛けた暗殺者の短剣を防御した。一人は大剣で、もう一人は盾で。そして間髪入れずに体を回転させ、その勢いで一人の暗殺者は弾き飛ばされる。大きく振り回された大剣は一人に命中したようだが、カタールで防御したようだ。しかし、その威力を緩和することができなかつたらしく、床に着地できずに転がる。

やはり他の者はボッズルほど戦闘技術に優れているわけではないらしい。それでも痛みをほとんど感じていないため、すぐに起き上がるが。

リグヴェーダがボッズルから奪つたカタールで戦つている。あの類の武器を使ったことはないだろうが、剣術と格闘術を応用して使っこなしているようだ。闘姫と呼ばれるだけのことはある。

そしてこちら側としては、無傷で捉える必要があるため、手加減せざるを得ず、結果三人を引き付けていた。

しかし王女の表情からして、真剣に命のやり取りをした経験はないのは明らかだ。剣術の才があり、修練していたとしても、王女という保護された立場の人間であることには変わりはない。殺人に対する忌避感もあつて精神の消耗が激しいだろう。

「くう……落ち着け。基本はいつもと変わらない。練習や試合と変わらないのだ」

眩いでいるのは、自分自身に叱咤して勇気を鼓舞しなければ、足が震えだしてしまつからだつ。それでも最初の戦闘における恐慌状態に陥らなかつたのは、賞賛するべきことか。

「危ない！」

老練の騎士、ショルダックが王女の背後を取り囲とした暗殺者の一人に向けて発砲。

暗殺者は反射的に回避したが、左肘に命中した。痛覚が半ばマヒしているため、苦悶の表情はないが、リグヴェーダがすかさず振り向きざまに攻撃し、それも大きく間合いを取つて回避。戦闘は続行可能だらうが、左腕はもう使い物にならないだらう。

ショルダックはリグヴェーダの背後を守る位置に立つて、獵銃を構える。

大峡谷の村の若者、ダラスは混乱氣味に、駆動式短弓を構えては矢を放つていたが、狙いは散漫で命中しない。正確に狙つたとしても、回避されるだらうが。

構え直そうと一旦駆動式短弓を少し下ろした瞬間、なにかの拍子に引き金を引いてしまつたのか、ダラスの視線の方向と、駆動式探求の方向が全く違う時、唐突に矢が放たれた。

矢は真っ直ぐ飛び、暗殺者の一人の胸を貫いた。暗殺者は心臓を貫かれ、即死する。

「え？ あ！？ やつた！ やつたぞ！」

ダラスは一瞬なにが起きたのかわからなかつたようだが、すぐに快哉の声を上げる。王都の騎士や、魔術師でもできなかつたことを、最初にやつたことで無邪気に喜んでいる。

実のところ、その暗殺者はちょうどビルマジャーを攻撃しようと、意識がルマジャーに集中し、周囲の気を配るのが途絶えた瞬間だつた。ダラスのことも一応確認していただらうが、矢が放たれたのが事故に近い形だつたために、反応できなかつたようだ。

ようするに、ただの偶然だ。もう一度、意図して行おうとしても、あの少年の技量では不可能だらう。

「やつぱり俺は強い。間違いなく強い。今まで上手く倒せなかつたのは、運が悪かつただけだ。そうとも、俺は大峡谷最強の狩人だ」しかし、ダラスはそんなことに気付くはずがなく、自信を取り戻した。もしくは、過信を。ラッガートはなにを考えてあのような少年を連れてきたのか。

「しかし、まずいな」

ゲシュタルは咳く。騎士たちは予想以上に手強い。こうなれば、暗殺者を巻き添えにするのを覚悟で、対処するべきか。

「キィイヤアアア！」

パブロはマースムカに向かつて飛翔するパレスに、散弾銃を発砲。やはり魔法防護によつて致命傷を与えられないが、それでも攻撃を防ぐことはできた。

そして、マースムカはそこで声を上げた。

「できた！」

一本目の火薬矢が完成したのだ。マースムカは急いで駆動式短弓に装着し、正面入り口の塞いでいる門に狙いをつけると、火薬矢を発射する。

効いてくれよ。パブロは胸中祈つた。なにに祈りを捧げたのか、自分でもわからなかつたが。

矢は正確に門の真ん中へ命中。先端に付けられた雷管が発した火花は、矢に塗られた油と火薬に引火し、瞬間的に反応を起こし、括り付けられた火薬に火が到達し、爆発した。

轟音と衝撃。

門の片方が粉々に吹き飛ぶ。

少し遅れて、もう片方が緩慢に開いた。

「凄い！」マースムカの思わず口にする言葉。

即席の爆弾でこんなに威力があるとは思つていなかつたのだろう。

予想以上の破壊力は一発で門を破壊した。

だが、パブロは誰にも聞こえない声で呟いた。

「……無理だろ」

不可能だ。あの程度の火薬の量で、あの破壊力はどう考へても不自然だ。ましてや、マースムカの使つたのは本来銃に使われる火薬だ。工事や軍などで使用される破壊目的に調合されたものではない。それに、迂闊にも失念していたことを思い出す。それ以前に、門を破壊すること事体不可能のはずだ。それとも門だけが例外だったのか。

だが、そんなことなど氣付くよしもないマースムカは、図面を叫ぶ。

「今だ！ みんな走つて！」

考へるのは後だ。パブロは全員が走り出したのを確認すると、自分も続けて走る。敵のことは無視だ。破壊された門を通過し、長い階段を駆け下り始める。

いつの間に点灯されていたのか、階段に並列している篝火に照らされて、階段の一一番下に、離れた場所に置いてきたはずの馬が待つているのが見える。

「セネロ！」マースムカがその姿に名前を呼んだ。

神殿の異常を感じて、セネロがここまで馬を連れてきてくれたのか。

「頭のいいやつだ」

だが、勿論敵も見逃しはしない。

「逃がすんじやねえ！」

門のところにボッズルが叫び、その声を聞いたセリナが立ち止まる。

「なにをしてる！」パブロが腕を掴んで「早く逃げろ！」

「あの男を、妹を殺したあの男を殺してからよ」

「アホ！ んなこと言つてる場合か！」と腕を引いた瞬間「グッ！」

暗殺者の一人がいつのまに傍に来ていたのか、パブロの脇腹に凶

刃を突き刺していた。

セリナの表情が強張る。

「パブロ！」

パブロは口元から血を吐き、だが苦悶の表情ではなく、口元に笑みを浮かべる。

「捕まえたぜ」その手は暗殺者のカタールを持つ手を握んでいる。「これなら避けられないだろ」

五発の銃声。一発体に鉛球が貫通すると、大きく痙攣するよう仰け反るが、手を掴まれているので、後ろへ引くこともできず、暗殺者はその場で鮮血を撒き散らし、最後に頭部から赤く濡れた白い肉塊を弾き出して、絶命した。

「逃げるぞ！ セリナ！」

セリナは一瞬躊躇したが、パブロが脇腹から血を流しているのを見ると、身を挺して諭したのだと理解し、肯いて了承の意を示す。そして肩を貸して再び駆け下り始めた。

ほとんどの者はすでに下まで降りていたが、二人は怪我をしているせいもあって遅い。

そして、後方に敵が迫っていた。

「パブロさん！」マースムカが警告を発する。

赤の魔導士が大鉄を広げてパブロとセリナに迫る。このままでは二人は追いつかれ大鉄の餌食になる。

マースムカはもう一つの火薬仕込みの矢を装着し、駆動式短弓を向けた。門の大扉一撃で破壊した威力だ。魔法防御など打ち破れる。だが、引き金をすぐには引けなかつた。今度は偶然で殺すのではない。自分の意志で殺すのだ。

自分の殺意が、人の命を奪う。

「うう……」マースムカは呻き、そして叫ぶ。「うあああああああー！」

放たれた矢が一閃となつて飛ぶ。

赤の魔導士は、ただの矢に過ぎないと思ったのか、結界で簡単に防げると思ったのか、それとも気付かなかつたのか、それを避けなかつた。

命中。爆発。

それは人として、生物としての原型を留めず、肉片となつて四散し、周囲を赤く染める。

さらに爆風が、近くにいた暗殺者を一人吹き飛ばした。

「うお！」「わあ！」

爆音でパブロとセリナが身を屈めたが、すぐに走り出し、マースム力の傍に。

「マースム力、助かつたぜ！」

だが、マースム力は駆動式短弓を降ろして、呆然としていた。殺した。人を殺した。偶然ではない。自分の意思で、人を殺した。マースム力の歯が噛み合わず、ガチガチと鳴り始め、全身から力が抜けていくのを感じた。

「マースム力！」パブロが叱咤する。「おい、なにしてる！ 早く走れ！」

「は、はい」パブロの声でからつじて正気を取り戻したマースム力は、再び走り始めた。

敵が追いかけてくるが、パブロが背中越しに銃を撃ち、前方でもシェルダックとルマジヤーンが援護してくれている。そしてセネロのところへ辿り着くと、その背に跨る。

「リグヴェーダ王女、こちらへ」

ダラスがリグヴェーダの手を引いて、自分のティダへ乗せる。ラッガートたちは、そしてリグヴェーダもそのことで意義を唱えなかつた。彼らの馬は基本的に一人乗りだ。一人乗りなら、ティダのほうがまだ向いている。

全員が馬とティダに跨ると、彼らは全力で走らせ始めた。敵から逃げるために。

その中でマースムカは二つの出来事が頭から離れなかつた。

螺旋階段で頭を貫いた暗殺者。今、爆殺した赤の魔導士。二人を殺したのは自分なのだ。

לְרַבְּנָן וְלְרַבְּנָן

僕は人を殺した。人を殺した。人殺しだ。僕は人殺しだ。リグヴェーダが、そんなマースム力を見ていた。

銀髪の男ゲシユタルは、マースム力たちが消えた大峡谷の向こうを見つめ続けた。その顔に感情はまったく表れず、なにを思つているのか、推し量れない。取り逃がしたことも、なにもかも、あらゆることを面に出さない。

ただ、なぜ、と少し疑問に思う。

なセジフの息子がここへしてきたのだろうか？ 無関係であるはずなのに、己の命を危険に晒すことができるような少年には見えなかつたのに、なぜあの少年は危険を顧みず、リグヴェーダ王女を助けに来たのだろうか？ そして、ジフはこのことにはどれだけ関わっているのだろうか？

だが、ゲシユタルは考えるのをすぐに止めた。敵ならば排除する。それだけだ。かつての仲間の息子であつても。そして、かつての仲間自身であつてもだ。

隣でボツズルが指示を出している。

「早く馬を持って来いって。なにをもたもたしてんだよ」部下はなにかを一一細かく詰めると「はあ? そつやどうこいつた?」

「どうした？」ゲシュタルは尋ねる。

「逃げた？」

ゲシユタルたちが気付くよしもなかつたが、神殿の上空ではリイジスが意地の悪い笑みを浮かべ、彼らを眺めていた。

パブロが指示したとおりに、彼らの馬を柵から放し、ついでに少し吃驚させた。恐慌状態に陥つた馬は、現在ボツズルの部下から全速力で逃げ回つてゐる。捉えるのには時間がかかることだろ？

「まあ、いい」ゲシュタルは端的に返すと、神殿へ足を戻す。「ここで少し待つていろ」

階段を上がる途中で、パレスがしゃがみこんでいた。

その場に、赤の魔導士が四散している。

「ヒヒ、イヒヒヒヒ、ヒイ、ヒヒヒ」

パレスは泣いていのうに笑いながら、赤の魔導士の肉片を搔き集めていた。

「どうしちゃつたんだよお、アハマル。そんなにバラバラになつちや動けないだろお。早く元に戻らなきやあね。ほらあ、こんなに体を散らかしちゃつて、まったく仕方のない子だねえ。早く元の姿に戻つて、動けるようにならないと」

搔き集めた肉片を粘土のように捏ねるが、それで人の形になるわけでもなく、つけようとした端から崩れしていく。

「ウヒツ、ヒヒヒ、ヒハ。ほら、しつかりおし。ちゃんと自分で立てるようにならなきや」

「それは死んでいる」ゲシュタルは同情も憐れみもない、冷淡な声で告げる。「今はただの肉片だ」

「うう、うううううう」

パレスはそれでなにを感じたのか、なにを思ったのか、涙をぼろぼろと流し始め、肉片を口へ運ぶと、租借し始めた。

「ちくしょお。殺してやる。あのクソガキ。殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる……」

呪詛のように、いや、まさに呪いとして、自らの愛する者を奪つた少年へ、憎悪の言葉を吐き続ける。死肉を食みながら。

ゲシュタルは興味を失つたのか、それとも始めから興味などなかつたのか、それ以上なにも言わず、再び神殿へ足を進めた。

そして神殿の門の所で、破壊された門を確認する。普通の石材だ。

神殿の建築材に使用されている時間を止めた物質ではない。

「だから破壊できたのか」

神殿の特性については調査していたが、全部を調べたわけではなかった。神殿が破壊不可能の物質で建築されていることから、扉も同じだと思っていたが、どうやら違うらしい。再調査すれば、他の不備も判明するかもしれない。もっとも、再調査するとしても、それは全てが終わつてからだが。

「ゲシユタル！ どこだゲシユタル！」

色々考えていると、今度はザーラディースが現れた。安全のため、傭兵がいる儀式の間に避難させておいたのだが、一応一段落付いたことを知つたのか、大声で呼ぶ。

「ゲシユタル！」 小走りで駆け寄つてくると「ゲシユタル、どういうことだ！？」 リグヴェーダ王女が逃げたと聞いたぞ

「そうだ」 ゲシユタルは簡単に肯定する。まるで、それがどうしたのだ、というふうに。

ザーラディースは気色張り「なにを悠長に構えている！ リグヴェーダ王女が逃げてしまつては儀式ができないではないか…」

「落ち着け。また取り戻せば良いだけの話だ」

「どうやって！？ 馬が逃げてしまつたのだろう。これでは追いつけないぞ！ まさか、もう一度王宮から拉致するといつのではないだろうな？ そんなことは不可能だ！」

一度拉致が成功したからには、王宮ではこれを教訓として警備を厳重にするだろう。二度目の成功はない。

「いいや、そんなことをするつもりはない。緊急用に用意して置いた馬の代わりがある。それを使えばすぐに追いつくだろう」「代わり？」

ザーラディースの疑問には答えず、ゲシユタルは神殿へ足を進めた。急ぐわけでもなく、緩慢でもなく、自分に適した足取りで。

そして十数分後、上空で偵察していたリイジスは、神殿から出てきたものを見て、驚愕する。

「なによ、あれ？」

神殿を脱出してから数刻。王女を含めた騎士たち八人は、大峡谷を南へ、ベドウイルム村へ向けて馬を走らせ続けていた。左側は崖で、その下の河は激流だ。転落すれば命はないだろう。足場の悪い峡谷を、夜の闇の中で走らせることほど危険なことはないが、追跡のことを考えれば致し方ない。追いつかれるこのほうが、よほど危険だ。

ダラスはティダを操りながら、妙な妄想を始めていた。

リグヴェーダはこれで俺に惚れるぞ、どうだこの手綱捌き、マースムカ"ときや、他の連中とは一味違うぜ、そうとも、王女と一緒に乗るのは俺に決まっている、大峡谷隨一の狩人である俺が相応しいんだ、命を助けてやつたし、俺にメレメロだぜ、おお、胸を押しつけてやがる、誘つてるんじゃないのか、いや、絶対にそうだ、まいつたぜ、そうだ田舎臭いラーナより、リグヴェーダをものにしよう、それがいい、リグヴェーダを俺のものにすれば、この国の王だ、そうとも、おれはただの勇者じやない、王になる男なんだ、少しばかりマースムカが手柄を立てたが、それも自分のものにしてしまえ、手柄は国王になる俺だけのものだ。

リグヴェーダは、ダラスが果てしない妄想を続けていることなど知る由もなく、ただマースムカに目を向けていた。マースムカと名乗る少年に。

「パブロさん、大丈夫ですか？」

すぐ隣を走るパブロに、マースムカは心配で尋ねる。パブロは脇

腹の傷口を手の平で押えているが、指の隙間から血が流れ出ている。

「だ、大丈夫だ。ちょっと痛いけど」答える声は明らかに強がりだ。

「隊長、ルマジャーン。傷の具合は?」シェルダックも他の気になつたのか、二人に聞く。

見るとラッガートも全身から血を流している。パブロほど深くはないが、数が多い。

ルマジャーンも暗殺者の一刀を受けた右肩から血が流れている。

「心配するな、この程度の怪我などたいしたことはない。それより、今は少しでも早く、奴らから遠く離れなければ」

「停める」リグヴェーダが唐突に「全員馬を停める」

「な、なにを言つてるんです?」ダラスが戸惑つて聞き返した。

「怪我のことより、今はとにかくできる限りに逃げないと」

この者の言つとおり今はできる限り遠く離れなければならぬだろう。神殿のやつらがこのまま見逃すはずがなく、そして今の自分たちでは勝ち目は薄い。もしかすると勝てないこともないのかもしれないが、何人かは確実に命を落すことになるだろう。

だが、皆の怪我を手当てしなければ、逃げ続ける事態が危うい。

迅速に手当てをし、逃走するのが最善策と考えるべきだ。

それに、騎士たちが苦痛に耐え続ける姿は見るに忍びない。

「とにかく停めるが良い。その者たちの手当てをする」リグヴェーダは再度命ずる。

「しかし……」ダラスは自分の命をこれ以上危険に晒したくないようだった。

その自分だけのことしか考えない思考は、リグヴェーダにもわから、怒りを顕わにして一喝する。

「早く停める!」

「はいっ」ダラスが思わず返事をして、ティダを停めた。

ダラスに続いて他の者も馬を停めと、マースムカはすぐにセネロから降り、パブロの馬へ駆け寄つて下馬するのを手伝つ。

「パブロさん、しっかりしてください」

「……しつかりしてゐつもりなんだがな」

言いながらもそれは力なく、半ば滑り落ちるかのようだつた。脇腹かの出血が酷く、衣服は足まで紅く染まつてゐる。死なずにするだけのは奇跡に近く、乗馬し続けていられたのはまさに奇跡としか思えない。

リグヴェーダも駆け寄つて手伝い、降ろしたパブロの背を、近くにあつた岩に預けさせる。

そしてマースムカに「なにか手当てをするものを」

「うん」マースムカはセネロのところへ戻り、急いで荷物から治療具一式が入つた袋を取り出した。

「よこせ」だが、そこにダラスが傍にやつて来て奪うようにして取る。そして「おまえが傷のこと言い出したから、リグヴェーダ王女が気にしたんじゃねえか。連中が追いかけて来てるつて時に、止まつて悠長に手当てなんかしてゐる余裕なんざあると思つてんのか、あ？ 少しはもの考えて喋れ、この足手纏いが」

「あ……」言葉に詰まるマースムカ。

仲間のことをまるで気にかけないダラスの言い方に唖然としたのが半分。実際に手当てをしている場合ではないのだといふことを指摘され納得してしまつたのが半分。

ダラスはさげすんだ一瞥を向けると、治療道具一式を持つてリグヴェーダのところへ。

リグヴェーダはそれまでパブロの傷を見ていたので、マースムカたちの一連のことは見ていなかつた。治療道具一式を持ってきたのが、マースムカではなくダラスだつたことに怪訝な表情をしたが、手当てが先と追及はしなかつた。

「うー」手当てを始めると、パブロは呻いた。

思った以上に刃傷は深い。 シエルダックもラッガートに手当てを始めた。こちらは傷が多いが、浅く、パブロほど酷くはない。

ルマジヤーンはセリナが。こちらは傷も浅く肩の一箇所だけなのすぐに終わる。

マースムカは手当てされている様子をセネロの傍で見ていた。ダラスが手伝っているので、自分は必要ないと。だが、心配はある。パブロは本来なら致命傷になつていてもおかしくなかつた。これでよく死なないと驚くほど。運よく急所を外れ内臓に損傷を受けなかつたからなのか、それともパブロがそうしたのか。だが不死身というわけではなく、重傷であることは変わらない。

そしてマースムカは再び思い出す。自分が殺した一人のことを。思い出すだけで体の底から恐怖が突き抜けてきた。それに伴う脱力感。

僕は、人殺しだ。リグを助けるためとはいゝ、人を殺したことには変わりはない。そしてそのことに対する罪の意識は消えない。いくら理由を付けても、言い訳をしても。

七年前に、僕を殺そうとした人間と同じことをした。そして神殿にいる者たちとも同類になつた。

もし、敵に追いつかれたら。もし、もう一度戦うことになつたら。その時、自分は戦うことができるだらうか。

手当をするリグヴェーダは、パブロに尋ねる。

「リイジスはどの程度時間を稼ぐ」

「はい？」ダラスが自分に訪ねられたのだと一瞬勘違いしたようだ。リグヴェーダは訂正することなく、パブロも気にせずに答えた。「一時間ぐらいは連中と差ができるだろ」パブロは付け加えて「だが、やつらに探知系統の魔法で捕捉されれば、一時間程度だ」

リグヴェーダの位置を捕捉する魔法を使用される可能性は高い。

探知するには、対象物になんらかの処置が必要だ。神殿にいた間、リグヴェーダは魔導士たちになにかをされた覚えはないが、自分が知らないだけということもある。寧ろ、意識を失っている間に魔法的な刻印処置を施された考へるべきだろう。

自分自身か、あるいは衣服か。この場で着替えて衣服は捨てたほうがいいだろう。発見される可能性は少しでも軽減するべきだ。

「そうか」リグヴェーダはそれ以後、治療に専念した。

十数分後、一通りの手当てが済み、ラッガートが具合を確かめる。応急処置だが、年季の入ったショルダックの手当ては見事なもので、包帯を巻かれながらも体の自由を損ねることはない。これならば馬の手綱も問題なく操れるだろう。

ルマジャーンも包帯を巻かれているが、右肩だけのこともあって、動きを損なつてはいよいよだ。

反面、パブロは酷く動き難しそうだが、リグヴェーダの腕が悪いからではなく、傷が深いためだ。マースムカが肩を貸して、セネロへ跨るのを手伝う。この状態では、これ以上馬を操るのは無理だと判断し、マースムカが変わりに手綱を取ることにした。

パブロをセネロの背に乗せると、リグヴェーダは少年の名前を呼ばうと思つた。今着ている服を脱ぎ棄てるために、新しい服を貰わなければ。

だが、なぜか友の名前を呼ぶことを躊躇う。

「あんな、その……」なにを言えば良いのかわからず言い淀み「聞きたいことが色々あるのだ。それに話したいことも、たくさん」

かつて婚約者だった少年は首を振る。

「後にしよう、リグ。今はまだ危険だよ」

「そうだな」リグヴェーダはすぐに納得し「そのとおりだ。後で、必ず」

「うん」少年は微笑む。

リグヴェーダは急に懐かしい思いに囚われ、少年を抱きしめたくなつた。

ああ、変わつていない。七年の年月は、少年を大きく変えたが、しかし大切なことはなにも変わつていない。

弟のように大切な、私の友。

パブロは一人の話を聞いて、怪訝に思つ。どうも一人は知り合いらしいのだが、どういう関係なのか見当もつかない。もつとも自分と王女の関係も、他から見れば見当も付かないのだろうが。空が朧に明るくなり始めていた。

もうすぐ夜が明ける。明るくなれば崖に転落する危険は少なくなつだろう。マースムカの案内で連中にはわかりにくい経路を走れば、見つかる可能性も少なくなる。

十分に逃げ切れる。

だが不意に、声ではない声が届いた。

パブロ！ ヤバイよ！

ラッガートは三人が妙に親しげな雰囲気なのが気になつたが、今はそんなことを考えている場合ではないので、追求はしなかつた。不意に、カラーン、カンカラーン、と石が一つ崖下に落下する音が響いた。峡谷は一種の音響管と同じ現象を起こし、遠くからでも音が届くことがあるが、今の音は比較的近くであることは、大峡谷の自然現象に慣れていない者でも判別が付いた。

ラッガートは音の方向に鋭い目を向けた。遅れて他の七人も、そしてそれぞれ武器を手にする。

村の方角からティダがやつて来る。その背に乗るのは知つている人物。

「父さん？」マースムカが疑惑の声を上げた。

どうして彼がこんなところにいるのか、息子でも疑問に思つている。

ジフはマースムカたちの姿を確認すると、ティダを早足で歩かせ、すぐに彼らの場所へ。

「どうしました？」騎士殿「ジフは丁寧な口調で聞いた。

「ぶつきらぼうなのは相変わらずだが、尋ねるというより、なにかを確認しているようだ。

「そこにおりるのは、もしやリグヴェーダ王女ではありませんか？」

ラッガートはどう説明するべきのか少し考えてから「いや、説明は後にしてもらいたい。今は一刻でも早く村に戻らなければ危険なのです」

「危険？」ジフの眉が微かに動く。

「とにかく、戻つてから話します」

早くここから移動しなければ。ラッガートは、他の者に馬に乗るよう指示を出した。

「ちょっと待て！」

だが、パブロが唐突に制止し、左耳に左手を当てた。その行動の意味を他の者にはわからなかつたが、セリナだけがその唐突な行動を理解したように聞く。

「どうしたの？」

「絨毯？！」

聞き方によつては、セリナの質問に答えたように思えるが、問答にしても噛み合つていない、首を傾げたくなる様子だつた。

パブロは続けて「時間は？　どれぐらいで追いつかれる？」

ラッガートは正直戸惑い「パブロ、なにを言つている？」

パブロは答えずに「五百メートル先に来てる！？　そんなの逃げ切れるか！　隠れろ！？　んな場所どこにもねえよ！」

神殿の方角から奇妙な音が聞こえ始めた。巨大な鐘楼が鳴つてゐるような、狭い空間で重低音の楽器を鳴らしているかのような、形容しがたい奇妙な音。

それは確実に、急速に接近していた。

「なんだあれは！？」ラッガートは驚愕で叫ぶ。

そして音を発しているなにかが、上空に届く朝焼けに照らされて

姿を現した。

ラツガートは自分の目にしている物が、非現実的で我が目を疑つた。

絨毯が上空を浮遊していた。

裏側に取り付けられた八つの水晶球が龍に輝いている。そこから奇妙な音と共に、風が発生し、濛々と砂煙を巻き上げ、ラツガートたちは手をかざして顔をかばう。

「魔法の空飛ぶ絨毯。なんつー古典的な」パブロが感心したような、呆れたような声。

セリナは信じられないものを見たかのように「どうして？ 現存している空飛ぶ絨毯は厳重に保管されているはずなのに」

魔法の空飛ぶ絨毯はその製造法が失われ、現存しているのは五つしかないと聞く。そして五つとも博物館や魔術師協会などが保管しているはず。それがなぜここにあるのか。

「まさか、あの魔導士たちが作ったの？」

セリナが可能性を提示すると、パブロが肯定した。

「みたいだな。現存している五つとは形式が異なる」

絨毯は地上に降り、そこに乗っていたのは、十一人。

緑黄色の斑模様の暗殺者が八人。一人だけ鉄帽をかぶっているのはボッズル。

そしてドレス姿の厚化粧の女と、青いローブを羽織った白仮面。

彼らの先頭にいるのは、銀髪の男、ゲシュタル。

朝日に照らされて現れた夜明けの使者は、騎士たちを夜明けの死者にする。

「ゲシュタル」ジフが忌々しげに名前を口にする。それは銀髪の男に向けてなのか、それとも他の誰かに男の名を伝えるためなのか、それとも自分自身に聞かせるためなのか。

「また会つたな、アザニスの悪魔」ゲシュタルが冷淡に答えた。

この二人は知り合いなのか。味方同士というわけではないようだが。

「アザニスの悪魔……」パブロが驚愕する。「まさか、あの伝説の傭兵、アザニスの悪魔なのか？」

「え？」マースムカはパブロに視線を向ける。「なんの話ですか？」  
ゲシュタルがマースムカに目をやり「息子になにも伝えていなかつたのか？」

「黙れ！」ジフが叫び「アザニスの悪魔などという過去は捨てた。

私はただの大峡谷の一介の狩人だ」

ボツズルがゲシュタルに聞く。

「なんだよ、アザニスの悪魔つて？」

「伝説的な傭兵だ。いや、暗殺者といったほうがいいのか。数々の不可能作戦を成功させ、ありとあらゆる破壊工作、暗殺を達成した、稀代の天才的特殊工作員」

「黙れと言つた！」ジフが叫んでそれ以上の説明を止める。

だが、ゲシュタルは無視して「依頼があれば老若男女問わず殺し、幾百人の人間を闇の中に葬り去つた殺し屋。ボツズル、おまえの先輩だな」最後は皮肉を込めていたのかもしれない。

「えー、俺の先輩い」ボツズルは驚いたような仕草をして「いやー、感激だなあ。そんな凄い人に会えるなんてえ」ズボンで手の平を拭くと、浮遊する絨毯の上からだが、それを差し出す。「握手してくれる？」

返答は、駆動式短弓の矢。

ボツズルは大げさに矢を避けて「おお、さーすが。問答無用とは、基本だね、基本。でも、そんな遅い矢なんざ当たりやしねーよ」

ジフは避けられたことを意にかけなかつたのか、ボツズルを無視して「ゲシュタル、いつみたいなにを企んでいる？ リグヴェーダ王女をさらい、いつみたいなにをしようというのだ？」  
「関係ないのではなかつたのか？ おまえとはもはや仲間ではないのだろう。リグヴェーダ王女の身柄を渡せ。さもなくば死ぬことになるぞ」

ジフは改めて駆動式短弓を構えて答えた。

「なにを企んでいるのかは知らんが、リグヴェーダ王女を渡すわけにはいかん。貴様の考え方など、人の命を顧みぬ、人道に外れたことに決まっている。貴様は、魔導士なのだからな！」

魔導士。魔法を犯罪に使用した魔法使いの総称。その使用法はほとんどの場合、命に関わる人体実験だという。魔法に関する好奇心を抑えられずに、禁断の領域に踏み出した者たち。

「貴様も私と同類だろう！ アザースの悪魔！」 ゲシュタルが叫ぶ。それは、この男には極めて珍しいことに、指摘されたことに苛立ちを感じていたのかもしれない。「貴様とて人間の命を商品として扱ってきたではないか。そのおまえに非難されるいわれはない！」

マースムカは頭が混乱する。突然与えられた情報を受け付けられないように。

父さんが傭兵？ 殺し屋？ 暗殺者？

嘘だ。そんなの嘘だ。父さんが殺し屋だなんて。だって、僕を助けてくれたじゃないか。育ててくれたじゃないか。あの時、僕が殺されそうになつた時、自分の身も省みずに助けてくれた。父さんが暗殺者だなんて、そんなことあるはずがない。

だが、同時に思い出す。七年前、襲撃を受けて殺されそうになつた時、助けるために襲撃者を躊躇わずに殺したことを。それが神業のように思えるほどの腕だったことも。

なぜこんなことを思い出したのかわからない。だが、想起された途端、ゲシュタルの言葉を受け入れそうになつてしまつた。納得してしまつた。

だが、必死に否定する。あれは仕方のなかつたことなのだ。自分を助けるために仕方なくやつたのだと。

「父さん」マースムカは力なく尋ねる。「嘘だよね？ あの人と言つてのこと、全部嘘だよね？」

ジフは答えなかつた。どいか苦渋の表情を浮かべて。

「なにをベチャクチャ喋つてんだい！」パレスが顔を憤怒で醜悪に歪めて叫ぶ。「とつとと皆殺しにして、王女を奪い取ればいいんだよ！」

「パレス、落ち着け」

ゲシュタルは制したが、怒りで我を忘れているパレスは聞き入れなかつた。

「殺つちまいな！」

叫ぶと同時にパレスは飛び出し、大鍔を持つ両手を広げて構える。四つの牙を持つ怪物の顎が開かれたように。

青の魔導士も、刃渡り一メートルの大鍔を広げ、パレスに続く。こうなつては躊躇う暇はない。危険を覚悟で王女を奪還するしかないだろう。

ゲシュタルは冷淡に「ボッズル」

「リヨウカーヴ

ボッズルは楽しげに返答すると、暗殺者たちが一斉に周囲に展開した。

戦いが始まつた。

「おおお！」

ラッガートが気合の声と同時に、接近する暗殺者の一人に剣を振り下ろす。暗殺者は真横に回避すると、カタールを一本同時に突いたが、ラッガートはそれを盾で横に払つた。

その力任せの防御に、暗殺者は弾き飛ばされて岩壁に激突する。だが、麻薬で痛覚を鈍くしてあるため、苦悶の声も出さずに起き上がる。再びラッガートに刃を向ける。今度は一人が連携をとる。

「行け！」

ゲシュタルは動きを観察していると、ラッガートとは離れた位置にいたセリナが呪文を唱え、魔法の短剣が一閃となつて迫る。

魔法の絨毯を操っているのがゲシュタルだと判断して、先に排除しようと考へたのか。だが、短剣はゲシュタルの眼前で火花を散らし、絨毯の上に落下した。魔法の結界による不可視の防壁。ゲシュタルは身をかがめて、セリナが使う魔法の媒体であり武器となる短剣を拾つた。これで武器が一つなくなつたわけだが、彼女にはまだ十本以上残つている。

「さて、どうしたものかな。あの魔術師は、もしかすると騎士隊長以上に厄介かもしけんぞ」

魔術師がいなければ、神殿で騎士たちは逃がすことなく、殲滅できただろう。

「俺に任せてくれよ、旦那」

ボッズルは絨毯から跳躍して降りると、セリナにナイフを構える。「ゲッゲッゲッ。お姉ちゃんのお相手をして、あ、げ、る」

「サリナの仇！」セリナは激昂して叫ぶ。

魔術師とボッズルから少し離れた場所では、ルマジャーンが右手で拳銃を撃ちながら、左手の剣を振るつ。

「この野郎！」

拳銃も剣も命中せずに全て避けられる。暗殺者を一人引きつけてはいたが、どうやら若い騎士は特別に戦闘能力が秀でているわけではないらしい。

背後でシェルダックが援護していなければ、最初にやられていただろう。

「この！ この！」

シェルダックが獵銃を発砲する。命中こそはしないが、暗殺者が三人接近できないでいる。滅茶苦茶に発砲しているのではなく、あの状況下にあつて狙いは正確だ。そのため暗殺者は回避に専念するしかないようだ。迂闊に間合いを狭めようとすれば、弾丸が命中するだろう。

シェルダックとルマジャーンの近くで、リグヴェーダはシェルダックの剣を借りて暗殺者一人と対峙していた。

お互いに隙がなく、動けない。暗殺者はリグヴェーダを殺すわけにはいかず、リグヴェーダも一人同時に相手にするのは無理があるようだ。常人ならともかく、相手は麻薬服用暗殺者だ。いかに鬪姫と称賛される剣術の持ち主でも、あくまで試合での話。実戦はこれが初めてだろう。そして、おそらくは殺人にに対する抵抗感があり、動きが試合の時より鈍くなっているはずだ。王宮の時も、ボッズルを一太刀で仕留めることができたはずだが、できなかつた。それでも、最初の実戦においてここまで動けるのは、剣を学ぶ者としてこのような時のために覚悟をしていたからだろう。それは賞賛するべきことだ。

そして、ベドウィルム村の狩人の一人、ダラスは駆動式短弓を適当に狙い発射するという行動を、延々と繰り返しているが、やはり命中せずそろそろ矢が尽きかけてきている。

「畜生、なんで当たらねえんだよ」舌打ちして、ラッガートが相手をしている暗殺者に狙いをつける。ちょうど鍔迫り合いをしている。「当たれ！」

命中した。ラッガートの相手をするので手が一杯だつた暗殺者は、避けるだけの余裕がなく、その胸を貫かれ動きが一瞬止まる。そしてラッガートがその隙を逃さず、剣を横に薙ぎ、首を跳ね飛ばした。

「いいぞ、ダラス」

「任せてください！」一人倒しただけで有頂天になっている。

そしてパブロでは、先程から動かないマースムカの付近で、散弾銃を連続して発砲。

「ぼさつとしてんな！」

脇腹から出血していることから、激痛を感じているはずだが、精神力で無理矢理こらえているようだ。

銃口から火が吹き、マースムカに接近していたパレスを弾き飛ばす。

「ギア！」だが距離が遠く、威力はドレスに付加されている魔法防御で緩和され、数メートル後退しただけで、何事もなかつたように空中を飛び続ける。

「このお、やつてくれるねえ」

憤怒と憎悪に顔を歪めて、パレスは大鎌を改めて構える。

パレスとパブロが相対し続ける。

そこから少し離れた場所にいるジフは、沈黙したまま駆動式短弓から矢を放つた。暗殺者の一人は矢を難なく避けた。だが、その矢は背後の岩に命中し、それは上へ大きく跳ね上がり、暗殺者の頭上を越えて落下し、その足に突き刺さった。暗殺者は足の力が抜け、膝を屈しかける。

地面に縫い止められた暗殺者は矢を引き抜く前に、二本目の矢が額を貫く。さらに一本の矢が、眉間と心臓を正確に貫いた。

ジフのその目は酷く冷酷だった。七年前と変わらず。

さすがだ。ゲシュタルは胸中呟く。大峡谷に訪れた時、再び仲間に引き入れようと考えていたが、やはりなんとかして引き入れるべきだった。今となつては遅く、そして失敗だった。

こちらの戦力は残り九人。

騎士たちはまだ一人も減っていない。

だが、一人まるで戦力になつていない者がいる。

マースムカだ。

マースムカは戦いの中、奇妙に虚ろな目でそれを眺めていた。

僕は今殺し合いをしている。そして、父さんはあの人たちと同じなんだ。そして、父さんに育てられた自分も、今は人殺しだ。

今まで気が付かなかつたことだが、そして考えたこともなかつたが、もしかすると考えるのを避けていたのかもしれないが、少年は人の死に對して、人が殺されることに、人を殺すことに、根本的な拒絕感を持っていた。

それは生来によるものなのか、もしくは幼い頃、圧倒的で容赦のない暴力と殺意によつて、両親を目の前で殺されたことに起因するものなのか、それはわからない。

ただ、そういうことに気が付かないまま、自分がその忌み嫌う、殺人者になつた。

酷く恐ろしかつた。自分も、そして自分を育ててくれたジフも。ジフが自分を育てたのは、狩の技術を教えたのは、自分の後継者として、人殺しの技を教えていたのではないだろうか。

だから、僕は人を殺した。

筋の通らない説明だが、マースムカにはそれが真実のように思えてならなかつた。そしてもつと大勢の人間の命を奪つてしまつような気がして、自分自身が恐ろしかつた。

マースムカはただ恐怖で震えていた。

パブロは右手で拳銃を撃ちながら、左手だけで散弾銃に弾込めをする。

「マースムカ！ しつかりしろ！」

戦いを経験したことのない少年は、ついに精神力の限界に達し、恐怖にとらわれ、完全に動かなくなつた。

どうする。敵の数は残り九人。だが、こちらは少しずつ劣勢に追い込まれている。

「どけ！」

突然ゲシュタルトが叫ぶと敵は全員その場から離れた。

同時に魔法の絨毯が大きく変形する。四方の端の部分が紙縫りのように巻き、触手のように伸びた。そして四つの槍のように地面に突き刺さると、土砂を掻き揚げてパブロたちを攻撃した。

王女と騎士、狩人たちは悲鳴と苦悶の声を上げる。目暗ましのつもりなのかもしれないが、大量の土砂と石礫はそれだけでも攻撃力

がある。

ゲシュタルは続けて触手を鞭のように振り、あるいは串刺ししようと連続して突いてくる。

パブロはすぐに立ち上がると、地面すれすれに撓る触手が眼前まで迫り、咄嗟にその場で跳躍して避けた。

ラッガートたちもそれ回避したようだ。

魔法の絨毯が変形した攻撃方法は、速度は暗殺者に比べれば明らかに遅く、動作も大振り。よけるのはそれほど難しくない。

あの魔法の絨毯は、おそらく大峡谷の地形を迅速に移動するために製造されたもので、本来戦闘用ではないのだろう。今の攻撃もあくまで応用によるものにすぎない。

だが、その破壊力は強力だ。地面に深く突き立てた攻撃力なら、人間の体を容易く貫き、土砂をまき散らした力ならば、人間の体を一撃で破壊する。

「クソ！ どうすればいいんだよこんな物！？」 ショルダックが叫ぶ。

魔法の絨毯から伸びる四本の触手に、暗殺者たちと魔導士が加われば、脅威は増大する。

だが、制御に難があるのか、攻撃は大雑把で、連携をとることは難しく、無理に戦闘に加われば、同士討ちを起こすようだ。

「銀髪の男だ！」 パブロが叫ぶ。 「ゲシュタルをやれ！ 操る奴がいなくなれば、絨毯は動きを止める」

ゲシュタルは絨毯の上から動いていない。魔法使いがその上で直接命令を出していなければならぬようだ。

そして動かなければ、やつらの移動手段は失われ、逃げることが可能かもしれない。

パブロは叫びつつゲシュタルへ向けて散弾銃を撃つた。だが、結界で塞がれ、十数発の小さな弾丸は、ゲシュタルの眼前で跳ね返された。

銃器類による遠距離攻撃は、魔法防壁によつて防御される。効果

があるとすれば、直接攻撃だが、浮遊する魔法の絨毯は、その位置のために攻撃し難い。

「行け！」

セリナが魔法を使い、セリナの周囲に展開していた浮遊する短剣が、全てゲシュタルへ向かった。槍のように一列になり、一直線に走るそれは、連續して攻撃を一点に集中し、生半可な結界を貫通するはずだ。そして銀髪の男は暗殺者のように避けられるほどの身体能力はない。

体力の限界に近いはずだが、この攻撃にかけるつもりか。貫いてくれ。

だが、ゲシュタルはセリナが短剣を放つた瞬間、触手を集中し螺旋状に回転させ、短剣を全て弾き飛ばした。魔法による防御ではなく、物理的な防御。

「……そんな」セリナは力を使い果たし、膝を地面に落とす。

それは致命的な隙。

「隙だらけ！ 好き好き好き好きだらけえーー！」

ボッズルがカタールを両手に構えて迫る。

セリナは体力を使い果たした状態で、しかし反射的な行動なのか、体を反らした。

ボッズルがカタールを振り下ろす。

左腕の肘から先が宙を舞う。

「おつと」切断したセリナの左腕を、ボッズルは飛び上がつて右手で受け止める。

「くうああ……」

左腕肘先から夥しい出血が始まり、右手の平で押えても簡単には止まらない。

ボッズルは切断したセリナの左腕の指先まで舐めあげると「ちょっと失敗。さあ、今度こそ僕ちゃんの愛を受け止めてええええ！」

左腕の切断部を右手で押えるセリナは、その攻撃を回避しようとしたが、しかし体力の限界に達し、さらに左腕を切断されたために

肉体的にショックをうけたのか、足が動かない。

「アブねえ！」パブロはセリナを体当たりで押し退けた。「ガ！」

そして横腹と背に凶刃が深々と突き刺さった。「あ、ああ？」

「パブロ！」セリナが悲痛な声を上げる。

「ありやりやー？ おいおい、人の愛の告白タイムを邪魔すんなよ。昔からいうだろ。人の恋路を邪魔するやつは、ハツ裂きにして殺してやるつて、なー！」

「うがあああああ！」パブロは力を振り絞り、至近距離で拳銃を撃とうと、腕を上げた。

だがボッズルは拳銃を容易く払い飛ばした。散弾銃と拳銃が異なる方向へ転がる。

「うるせー」そしてボッズルは後ろ回し蹴りでパブロを蹴り飛ばした。

数メートル宙に浮き、そして弧を描いて落ちるそこには地面がなく、パブロは峡谷の遙か下、激流へと落下していく。

だが、その日はゴーグル越しにボッズルを見据え、最後に残った六連装拳銃を向けると、落下しつつ発砲する。

ボッズルはその弾を踊るようにして避ける。

一発、二発、三発、死発。

力キン。激鉄が空撃ちの音を立てた。弾切れだ。

最後の攻撃は全て避けられた。

「クソつたれ」

かすかに呟いたパブロの声は誰にも届かず、そして水面に体が叩きつけられ、水飛沫の音も、激流の轟音にかき消された。

「パブロ！」

ルマジヤーンは悲痛に叫ぶ。

あの情報屋はどんなことがあっても死はないような、たとえ全滅

するような事態になつても、あいつ一人だけ助かるような印象を持つていた。

だが現実には、簡単に殺された。

ボッズルがパブロに別れを告げるよう手を振つた。

「いやー、なんか俺たち手間取つてるねえー。やーっと一人目かよ。ゲーッゲッゲッゲッ」

「貴様あ！」リグヴェーダが憤怒に剣を横に拵つた。

ボッズルはそれをカタールで受け止める。

「王女！」ラツガートが叫ぶ。

「皆の者！ 絨毯の上の男を倒せ！ パブロの最後の言葉だ！」

「「はい！」

ルマジヤーンとラツガートは了解すると、同時にゲシュタルへ走りだした。

だが、魔法の絨毯から伸びる触手の攻撃、連続して突いてくる巨大な槍のような攻撃で、接近を防がれる。

だが、ルマジヤーンはそれを避けきつた。ゲシュタルがラツガートを危険と判断し、そちらに攻撃を集中させたため、ルマジヤーンの技量でも避ける余裕があつたのだ。

しかし浮遊する魔法の絨毯は、攻撃の届かない位置にある。拳銃も効果がなかつた。攻撃を命中させるには、直接届く位置、魔法結界の中へ飛び込まなければ。

ラツガートが両手を組んでしゃがんだ。

「ルマジヤーン！」

ルマジヤーンは即座にその両手へ足を乗せた。タイミングを合わせてラツガートは上へ投げ、ルマジヤーンは跳躍する。

ラツガートの腕力と、ルマジヤーンの跳躍力が合わさり、空中に浮遊する魔法の絨毯へ届く。

ルマジヤーンは拳銃を撃ちつつ、一気にゲシュタルへ、そして斬撃の範囲に到達し、確信の声を上げた。

「取つた！」

この男を倒せば魔法の絨毯を操る者はいなくなる。敵が移動手段をなくせば、逃げる余裕がでるだろ。敵を殲滅することも可能かもしれない。これがおそらく最後のチャンス。

そしてパブロの仇を討つのも。ほんの数日だったが、あの男とは確かに仲間だつた。

「うおおおおおおー！」

ルマジヤーンは吼え、剣を振り上げた。

「ガツ！」そして苦痛の声。

ルマジヤーンの剣は振り上げた状態のまま止まつていた。

苦痛の声はルマジヤーンのもの。魔法の絨毯から伸びる触手が一本増えていた。不測の事態に備えて、もう一本存在するを隠していたのか。それはルマジヤーンの背から腹部にかけて貫いていた。

「お、ゴホ、ゴブブブ」そして大量の血を吐き出す。

「ルマジヤーン！」シェルダックがその名を叫んだ。

若き騎士は返事をすることができず、それでもなお、その剣で銀髪の男を切り倒そうとして振り下ろしたが、届くはずもなく、酷く滑稽に空振りする。

「あ、隊……シェル……」ラッガート隊長、シェルダックさん。必ずリグヴェーダ様を助けてください。

「セリ……」セリナさん。サリナさんの敵討ちを果たすことを祈ります。

「マ……スム……カ……」マースムカ、ダラス。こんな危険なことに巻き込んでしまなかつた。

パブロ。おまえのあとを追うことになつてしまつたようだ。

リグヴェーダさま。申し訳ありません。あなたをお守りすることが俺の仕事だったのに、俺の使命だったのに、全うすることができませんでした。

「リグ……ヴェ……ダ……」

リグヴェーダ様、結局告げることはできませんでしたが、俺はあなたのことが好きでした。せめてこの思いだけでもお伝えしたかった

た。

リグヴェーダ様。お別れです。必ず生き延びてください。

そして、彼は力を急速に失い、その手から騎士叙勲式の時にリグヴェーダから授かつた剣を落とした。

大地に剣が突き立つ。それは彼の最後の意思を象徴したのか、ただの偶然か。

少なくともルマジヤーンの瞳に、その剣が映ることはなかつた。永遠に。

「ルマジャーン！」

ラッガートは目の前で起きたことが信じられずに、若い騎士の名を叫ぶ。だが、触手に貫かれているルマジャーンは完全に脱力した状態でぶら下がっているだけで、返事をしなかつた。

ラッガートは憤怒の形相でゲシュタルトを睨むと疾走する。

「貴様あ！」

大剣を握り締め、迫り来る触手の攻撃を避け、岩肌を駆け上がり、反動をつけて跳躍した。避けられればそのまま河へ転落しかねない方法だが、触手を出してから魔法の絨毯はほとんど動いていない。おそらく、攻撃と移動は両立できないのだ。

それを確信したラッガートは、雄叫びをあげて剣を振り上げた。

「ウオオオオオオ！」

だがゲシュタルトは触手に突き刺したルマジャーンを、ラッガートめがけて投げ飛ばした。

「なに！？」

意外な攻撃方法だつたからなのか、それともルマジャーンを武器して使われたからなのか、動搖したラッガートは、空中に飛んだため避けることができず正面に受けてしまった。

「グッ」

衝撃で地面に落ち、倒れたラッガートはすぐに起き上がつたが、そこへ横払いに触手が攻める。

咄嗟に剣を構えて防ぐが、人間の力で受け止められるはずもなく、弾かれて岩壁に激突した。

剣で受け止めたので致命傷は免れたが、岩壁に激突した衝撃で、肋骨が数本折れ、脳震盪を起こした。

「……お、おお……お」

意識を失うまいと氣力を振り絞るが、虚しくも視界は闇に包まれ、地面に崩れ落ちた。

動かないラッガートに止めを刺そようと、暗殺者が三人迫る。

「隊長！」

シェルダックが叫んで猟銃を発砲した。暗殺者はそれを避けるために、ラッガートから離れた。

「なんでだ！ なんでだよ！ チクショウ！」

シェルダックは叫びながら撃ち続けた。

なぜルマジヤーンが死ななければならぬ。まだ二十歳だつたんだ。あいつはまだ若かつたんだ。それなのに、あいつの人生はこれからなのに、どうしてこんなところで死ななければならぬんだ。

「うあああああ！」

猟銃が弾切れを起こした。シェルダックは急いで再装填しようとしながらも、援護する者もいないその隙を、暗殺者が逃すはずがなく、その背に刃を突き立てた。

「ぐあ！」

苦悶の声を上げながらも、シェルダックはその暗殺者に目がけて、猟銃を振り回した。もう弾を込めることは考えていなかつた。ただ、棒を振り回すかのように猟銃を振り回す。

「ぎー！」その脇腹にさらに刃が刺さる。

さらに胸に。足に。脇腹に。肩に。

次々とカタールが突き立てられ、シェルダックはそれでも立ち続けようとしたが、もはや体の筋肉はまともに繋がつておらず、どんなに氣力を振り絞つても、意思を反映することはなく、シェルダックは倒れた。

「隊……長……」

だが、まだ意識は絶えておらず、暗殺者がラッガートへ向かつていくのが視界に入る。そして田の前に、パブロが落とした散弾銃があつた。

シェルダックは力が入らない震える手を、意思を振り絞つて伸ばし、散弾銃の持ち手を掴んだ。そして地面に伏したまま、背後を見せている暗殺者へ発砲。

暗殺者はもう死んだと思っていたのか、背後だから気付かなかつたのか、散弾を受けて頭部を四散させた。

シェルダックは満足そうに咳く。

「ざまあみやがれ」

ボッズルが、まだ生きているシェルダックの、その頭部にカタールを突き刺した。

頭蓋骨を突き破つたその衝撃は、脳にどのような影響を及ぼしたのか、シェルダックの目玉が限界まで裏返り、その意識は強制的に消滅した。

「パチパチパチパチ」ボッズルが拍手をして「はい、三人目ー。そしてえ」セリナとラッガートに向き「もうすぐ四人目えー。五人目、六人目ー。そしてみーんないなくなっちゃった。ゲーゲッゲッゲッ」

パブロの六連装拳銃がマースムカのところに転がってきた。指先に当たつたそれを虚ろな目で見ていたが、やがて急速に現実感を取り戻す。

「……パブロさん?」峡谷の遙か下、川の流れの中にはパブロの姿は見えない。

「ルマジヤーンさん?」岩に引っかかるようにして、逆様の状態でぶら下がっている彼は、血を滴らせながら動かない。

「シェルダックさん?」地面に伏して動かない彼の体には、何本も

のカタールが突き刺さつたままだ。

三人が死んだ。そのことによつやく気がついたように名前を呼んだが、当然返事は返つてこない。

「ああ……あああ……」

急速に現実感を取り戻したマースム力は、悔恨の念で呻く。僕はなにをしていたんだ。呆然としている場合じゃないのに。戦わなければならぬ時なのに、リグを守らなければならないのに、父さんの過去や、自分のことなんて後で良い。今はリグを守らなければ。

「リグ」マースム力は立ち上がり名を呼んだ。

ボッズルと相対しているリグヴェーダへ駆ける。

そこにパレスが上空からマースム力目がけて一気に下降した。「死ねえええ！」

マースム力はそれに気付いたが、避けるには間に合わない。

だが、鍔がマースム力を挟み切る寸前「グエ！」蛙が潰れたような声で、パレスは蹴り飛ばされた。

窮地を救つたのは「セネロ！」

「この獣があ！」パレスは血走つた目で睨む。「あたしの邪魔をする気かい！？」

「ブモウ！」セネロは闘牛の威嚇のごとき嘶きで答えた。

ヒュン！ 空を切る音と共に、一本の矢がパレスに当たつた。

「ちい！」パレスは舌打ちして、ドレスに刺さつている矢を払い落とす。魔法防御の効果で体には到達していない。

「父さん！」

ジフは駆動式短弓をパレスに構えたまま、マースム力に指示を出す。

「マースム力、リグヴェーダ王女を連れて逃げろ！」

「え？」

「早く逃げる。河に筏がある。それを使え」

大峡谷の住人たちが用意している、緊急用の移動手段。大峡谷に

点在するように、常に準備されている。

「う、うん」

マースムカはリグヴェーダの元へと走った。  
僕はなにを考えていたんだ。自責の念が込み上げる。父さんを、  
こいつらと同じだと思うなんて。

父さんは、確かに人の命を奪った。  
けれど、それは僕の命を守るためにだった。誰かを守るために、こ  
いつらのような人間から守るために戦っているんじゃない。  
父さんはこいつらの仲間なんかじゃない。

「リグ！」

ダラスは周囲を見渡すと、全員見捨てて逃げる決心をした。

勝ち目がない、完全に。

だが、全員を見捨てて捨て駒として置いて行けば、彼らが足止め  
して逃げるだけの時間が稼げる。

だが、リグヴェーダ王女だけはなんとかして連れて行こうとは考  
えた。王女を連れ帰れば、手柄は全て自分のものだ。

ティダに向けて口笛を吹いて合図をする。

暗殺者の何人かがそれに気付いて、攻撃しようとするが、駆動式  
短弓を向けて牽制する。だが、長くは持たないだろう。

早く來い。ダラスは胸中叫ぶ。だが、ティダは来なかつた。後方  
で岩陰に隠れてこちらを伺つてゐるだけだ。

ダラスは苛付いて「なにしてんだ！ 早く來い！」

叫ばれてもティダは動かない。それが、彼のティダの扱いを如実  
に表していた。

「リグ！」

リグヴェーダはマースムカの声に一瞬顔を向ける。セリナとラッガートに敵を庇う位置に立っていた王女のその一瞬の行動を逃さず、暗殺者の一人が襲いかかってくる。

「しまった！」リグヴェーダは反応するが、遅かった。

リグヴェーダの持つ剣が弾かれ、それは地面を滑つて離れていく。マースムカが咄嗟に駆動式短弓を、その暗殺者へ狙い定めた。

「伏せて！」

リグヴェーダは屈むと同時に、マースムカは躊躇いなく引き金を引いた。

空を切る鋭い音がリグの耳に届いた瞬間、暗殺者の肩に矢が突き刺さっていた。怯んだ暗殺者の顎に、リグヴェーダの右肘が捕らえた。屈んだ状態から、起き上がる時のバネを利用した、渾身の肘上げ。暗殺者は顎を碎かれ、昏倒する。

マースムカが敵を弓矢で攻撃しつつ牽制し、攻撃を避け、一呼吸の間にリグヴェーダの傍にやって来た。

「リグ、大丈夫？」

「なんとかな。だが、武運は途絶えてしまつたようだぞ」

暗殺者たちは周囲を取り囲み、逃げ道を失つた。突破するのは不可能に近い。こちらの戦力はたつたの四人。ラッガートは気を失つており、セリナも体力を使い果たし魔法はもう使えないうえ、左腕を切り落とされている。

だが、敵はまだ七人と一体がいる。特に、魔法の絨毯を破壊する方法がなく、操縦している魔導士を倒すことも現状では不可能に近い。

「マースムカ、てめえのせいだぞ」ダラスが忌々しげに「おまえが止まつて傷の手当てをしようなんて言わなきゃ追いつかれずにはんだんだ」

その言葉に、リグヴェーダは自責の念に眉根を顰めた。手当てのことを言い出したのはリグヴェーダであつて、マースムカではない。

ダラスには自覚がなかつたが、今の言葉はマースムカへの非難のようで、リグヴェーダに向けられたに等しい。

そして、事実、その発言のために、三人の忠義の家臣を死なせてしまつた。リイジスが時間を稼ぐと判断した、その考えの甘さのために。

もつとも、立ち止まらなくとも、あの魔法の空飛ぶ絨毯の移動力を考えれば、追い付かれるのは時間の問題だつただろつ。寧ろ、手当てをしたことで、長く戦うことができたのだが。

ダラスはティダに向かつて「なにしてやがんだ！ 早く来い！ また飯抜きにされたいのか！」

相変わらずダラスのティダは離れた場所から動かなかつた。逃げよつかと考えてさえいるようだつた。

マースムカが叫ぶ。

「セネロ！」

セネロは声を聞くと同時に、全速力でマースムカの元へ走つた。パレスの追撃は、ジフによつて防がれ、暗殺者の垣根を跳躍して、その頭上を飛び越え、一呼吸にしてマースムカの元へ。

「リグ、乗つて！」マースムカは指示を出す。リグだけでも逃がさなければ。

「しかし」セリナとラッガートに目を向けて、躊躇するリグヴェーダ。

「早く！」マースムカは急かした。「君が助からないと、僕たちが来た意味がないんだ」

リグヴェーダはどうするべきなのか迷つた。三人の死を無駄にしないことは、おそらく自分が逃げて助かることなのだつ。しかし、さらに死を増やすことにもなる。

なにより、この少年を置いていくことなどできない。

今度は、一度と会えない。

今度こそ、今生の別れとなる。

「おい！ 勝手なことするんじやねえよ！」

ダラスがリグヴェーダの腕を取つた。

マースムカがリグヴェーダを連れて逃げようとしているのだと、自分の手柄を横取りしようとしているのだと、自分勝手で言いがかり同然の思い込みから来た、突発的な行動。

その行動にリグヴェーダは、不快感を通り越して、怒りさえ感じた。

だが、それはリグヴェーダの命を救つた。  
そしてセネロの命を奪つた。

「殺つやちまいな！」

パレスの声に青の魔導士は、一瞬の間もなく手にする刃渡り一メートルの大鋏で、セネロの首を切断した。

セネロの人間的な表情を出す顔が、その首が、転がり落ち、胴体の切断面から、血が吹き出た。

「セネロ！」

マースムカの悲痛な声。

「パレス！」

ゲシュタルは制止の声を上げる。今のは、もしダラスがリグヴェーダの腕を取らなければ、確実に彼女の命を奪つていた。

「パレス！ なにをする！？ 王女は生け捕りにするんだ！」

「お黙り！」 パレスは一蹴し「そんなことあたしの知つたことかい！ こうなつたら皆殺しだよ！」

パレスは正気を失つている。このままでは本当にリグヴェーダ王女を殺してしまいかもしれない。ゲシュタルは手にする一本の短剣、セリナが攻撃し、魔法の結界で弾き、そして拾つた魔法の短剣に魔力を込めた。

そしてリグヴェーダに向けて投擲する。それは彼女のすぐ足下に突き刺さり、次の瞬間、眩い閃光と共に破裂音にも似た音を発した。

「ツガ！」

雷撃をまともに受けたリグヴェーダは、地面へ崩れ落ちる。王宮で氣絶させた魔法と同じ。あの時のことを思い出したかもしれないが、やはりあの時と同じようにすぐに意識が消失したようだ。

「ぬお！」

ダラスはその余波を受ける。距離が離れていたため電撃は微弱で意識を失うことはなかつたが、体の感覚がなくなつてゐるはずだ。

「あ、あが、う、体が、動かねえ」

このままでは躊躇殺しなると、地面を這いずり逃げようとしているが、しごれてほとんど動かないようだ。

「ああ？！」

マースムカはなにが起きたのかわからず、動搖しているが、雷撃の影響は受けていない。ダラスと立ち位置が変わつたため、ちょうど、リグとダラスが壁になつて届かなかつたのだ。

成功だ。ゲシユタルは胸中安堵した。今の魔法は不慣れな補助具を用い、もしかすると雷撃は意図したものより強力になつてしまつかもしかなかつた。だからこの方法は使いたくなかったのだが、とにかく成功だ。リグヴェーダを氣絶させただけで済んだ。

「ボッズル」

ゲシユタルは呼ぶと、ボッズルはその意図を汲み取り、氣を失つたりグヴェーダの体を走りざま脇に抱えた。マースムカが気付いた瞬間には、その場を離脱してゐた。

「リグ！」マースムカが叫んで追いかけようとした。だが、そこにパレスが迫る。

「死ねえええええ！」

王女に意識が向いていたマースムカは、その攻撃を避ける動作が遅れた。

「マースムカ！」

だが、ジフが走りざま、暗殺者の一人の喉をナイフで切り、屠ると、パレスの絶叫と同時にマースムカを底つた。

「ウグツ！」

その胸に、刃渡り三十センチの鋏が突き刺さる。そしてジヨキリと肉が挟み切られる音。

血が吹き出る。ジフは構わずに、マースムカの持つ単発式拳銃を奪うように取ると、パレスの顔面へ向けて、ほぼ零に等しい至近距離で発砲した。

「ギア！」

大口径の弾丸は、パレスを弾き飛ばし、仰け反つて回転させ、岩に激突させ、パレスは気絶する。

ジフはそれを見届けると、力尽きたのか、前のめりに倒れた。

「父さん！」マースムカがその体を支える。

ジフは明らかに深手を負つたが、まだ息がある。すぐに手当をすれば助かるかもしない。

「ゲッゲッゲッ、これで勝ち目は完全になくなつたな」

だが、鉄帽をかぶつた暗殺者の頭、ボッズルはリグヴェーダを部下に渡すと、カタールをジャッグルしながらマースムカへ間合いを少しづつ詰める。

この男の言ひとおりだつた。マースムカは我々と戦い勝つことも、逃げることも、全ての不可能に等しい。なにより、リグヴェーダを助けることも。

だが、ゲシュタルトは「ボッズル、退くぞ」

「あん？」ボッズルは首を傾げ「なんだつて？ 退く？ これからが本番だぜ。楽しい楽しい弱い者虐めの時間だ」

「リグヴェーダ王女は取り返した。もう用はない。それに体勢も立て直さなければ。何人死んだと思ってる」

「でもよお」ボッズルは不満一杯。

「ボッズル」ゲシュタルトは名を繰り返して呼び、その目が剣呑に細められる。

「わーかつたよ。わかりました。退くよ、それで良いんだろ」

ボッズルが部下に指示を出すと、パレスと、顎を碎かれた部下を

魔法の絨毯の上に運び、そしてボッズルもその上へ。他の者もそれに続いた。

魔法の絨毯を動かす前に、ゲシュタルトはマースムカとジフに目を向けた。その胸中に渡来したものはなんだつたのか、その動かぬ顔からは窺いることはできない。

ゲシュタルトたちが去つた後、その場に残されたのは、樂園の暗殺者の死体と、ルマジャーンとシェルダック、そしてセネロの遺体。気を失つたラッガート。左腕の出血を止めようとしているセリナは、体力を使い果たし歩くことすらできない。体が痺れて立ち上がることのできないダラス。

そして、ジフを抱え、震え続けるマースムカ。

「マースムカ」ジフは息も絶え絶えに「マースムカ。皆を一旦村へ連れて帰るんだ」

「父さん」マースムカは我に返り「待つて、すぐに手当てをするから」

ジフをその場に寝かせその辺に転がつていた治療道具一式を拾つと、急いで手当てを始めた。

大峡谷では珍しい雨が降り始めた。

稀有な天からの恵みの雨は、やがて戦いの後に残つた血を、大地から洗い流し始めた。

少年は父と母の二人目の息子として誕生した。

少年にとつてその両親の元に生誕したことが幸福だつたのか、それとも不幸だつたのかと問われれば、少なくとも幸せを感じたことはなかつたと答える。

資産家で地位のある父の息子という立場は、なぜか友ができるない環境にあつた。異なる立場が隔たりとなつて、友と呼び合うほど親しく関わることができなかつた。

傳く使用人は少年に仕事以外のことで関わろうとはせず、孤独に憐れみを向けることもなかつた。

家族とはどうだつたのか。

兄がいたが、仲は良くなかった。話をした記憶も少年にはない。父親に極度に反発していた兄は、家に帰ることも少なかつた。少年の記憶の中の兄は、常に憎悪と憤怒に満ちた顔をしていた。

母は自分の子供に興味がなかつた。興味があるのは、社交界で注目を集めること。抱きしめられたことも、頭を撫でてくれた記憶もない。

父もまた、息子に興味がなかつた。父の興味は金と権力にだけだつた。

後で知つたことだが、母との結婚も、一代で巨額の資産を築き上げた父は、侯爵という肩書を手に入れるため、母方の親族へ多額の融資することと引き換えに、結婚を要求したらしい。

もし一人が誠実で人間の心に満ちていたなら、そんな始まりでも愛情が育つたかもしれない。

だが、両親の間に愛情が生まれることはなく、生まれた二人の息子にも、愛情を与えることはなかつた。

少年は広い館で七年間、ほとんどの時間を一人で過ごした。そして父は、二人目の息子を政治に利用することにした。

権力の確立を狙つて、第一王女の婚約者にした。正式に婚姻すれば、その権力と地位は不動のものとなる。

だが、父の画策は結局失敗する。

十数名の正体不明の襲撃者に、強襲を受けたことによつて。

当時七歳だった少年には、なにが起きたのか理解する間もなく、ただ怯えて洋服棚の中で隠れていた。

父は胸にナイフを何本も突き刺された絶命した。

母はその顔に銃撃を受け、その誇った美貌を無残に破壊された。

兄は弟である少年を見捨てて、一人で逃げようとしたが、崩落した天井に巻き込まれた。

執事も侍女も、屋敷にいる人間全てが殺されていき、屋敷のあらゆる場所で悲鳴が上がつていた。

どこかで火の手が上がり、煙が漂つていた。

襲撃を受けてからしばらくして、動く者は襲撃者たちだけになつた。

「どこだ!?」

「まだ見つかりません」

「早く見つける。あの子供が標的だ」

「向こうは探したか?」

「そっちへ行け」

「俺はあっちを探す」

「早くしろ! すでに付近に気付かれたぞ」

洋服棚で隠れていた少年は恐怖で震え、次は自分の番なのだと怯え、洋服棚の中で息を潜め、耳を塞ぎ、襲撃者の声も、悲鳴も、全て遮断しようとしたが、それでも殺意は届いていた。

襲撃者たちは少年を探していたが、広い屋敷で一人の子供を探し出すのは困難だった。しかしそれも時間の問題にすぎず、いつか見つかる。

あるいはその前に、屋敷に放たれた炎に焼かれるか。充満する煙は洋服棚の中にまで侵入し、禍々しい紅い炎は部屋を焦がし始めた。

誰か助けて。誰か助けて。誰か助けて。

少年はただ、声にならない悲鳴を上げていた。誰にも届くはずがないのに。

やがて洋服棚の部屋に誰かが入ってきた。部屋の中を捜索している音が聞こえ、気配が動く。

見つけないで。ここを開けないで。

少年は声を出さずに懇願したが、虚しくも洋服棚の戸は開けられた。

少年と、開けた者との目が合つ。

男は手に血で塗れたナイフを持つていた。そして父が持っていた拳銃も。

「うわああ！」

少年は悲鳴を上げて洋服棚から飛び出した。

戸を開けた襲撃者は、その行動を予想していなかつたのか、子供に突き飛ばされただけで体勢を崩して転倒する。

その脇を少年はすり抜けて走った。

どこへ逃げればいいのかわからない。考えることもできない。無我夢中で走り続ける。

他の襲撃者がその姿を見つけて追いかけた。

逃げないと、逃げないと、殺される。みんな殺された。次は僕の番だ。僕で最後だ。

死の恐怖だけが、全身を動かした。

突然、通路の床が抜け、炎に満ちている階下へ、少年は落下した。

「うわあああ！」

床に落ちた少年の全身に激痛が走り、さらに体を炎の熱が炙る。

その暑さが少年の意識を明瞭にし、意識を失わずにすんだが。

「ううえ……ごほごほ……」

煙が充満し、呼吸がほとんどできない状態で、必死に逃げ場を探す。

だが、どこにも逃げ場がないことにすぐ気付く。扉は塞がれてしまい、窓は炎が遮っている。

不意に柱の一つが崩れた。そして連鎖的に少年の頭上の天井も崩落する。

「わあ！」

咄嗟に飛び退いたが、炎を纏った木材が少年の顔に命中した。

「あああ！」

顔の右側に走る灼熱の痛みで悲鳴を上げる。

同時に扉が破られた。凶熱が少年を支配する中、かろうじて残つていた意識が、破壊された扉へ逃げようと床を這う。

だが、そこから三人の襲撃者が姿を現した。彼らはすぐに少年の姿を見つけ、手にするナイフを翳して、炎をものともせずに近付いて来る。

「ひい、ひい！」

恐怖で後退るが、二階からの落下と、燃える木材の打撃の痛みによつて、体が言うことを利かない。

三人の襲撃者が、少年に迫つていた。

次の瞬間、一陣の黒い風が舞つた。

三人の襲撃者が突然動きを止め、そしていつせいに倒れた。なにが起きたのか理解できなかつた少年は、ただの風と思つたものが、人が動いたものなのだと気付いた。

少年の前に、洋服棚を開けた先程の男が立つてゐる。黒装束の男は顔を隠していたが、同一人物だとなぜかわかつた。

「静かに」それはささやきだつたが、有無も言わせぬ口調でもあつた。

男は少年を抱えると、少年の様態を確認した。顔の右側に酷い火

傷を負つてゐる。右目は失明してしまつたのかどうかわからないが、早く手当てをする必要があつた。

同時に、部屋に襲撃者の一人が入つてきた。ドアの周囲は炎に遮られていたため、部屋に入るのに覚悟がいるのか、その場で誰何してきた。

「おい、なにをしている？！」

答えは一本のナイフ。少年を抱える男はナイフを投擲し、襲撃者の喉に瞬きの間に突き立つ。

「グツ！」

襲撃者は苦悶の声を上げて、口をパクパクと魚のように何度も開閉したが、それ以上声は出さずに、炎の中に倒れた。

なにが起きたのか理解できない少年に、男は告げる。

「静かに。助けに来た」

「あなたは？」少年は尋ねる。

「アフアマツドの友人だ」男は少年を肩に担いだ。「絶対に声を出さない。目を閉じて、息を止めろ」

返事を待たずに男は、炎が遮る窓ガラスへ向かって走つた。

少年はわけがわからなかつたが、炎への恐怖で目を閉ざして息を止めた。

そしてガラスが碎ける音がした。そして肩の上で揺れながらも目を瞑り続け、やがて周囲から凶熱が消え去り、夜の冷気が肌を冷やし始める。

「もういいぞ」

目を開けると、屋敷の外の舗装路だった。すでに街中に入り、屋敷から離れている。

自分を担いだまま、燃える屋敷から脱出したのだということだけは、少年にも理解できた。

町の住人が屋敷の火事に気付いて騒いでいるが、それを避けるよう裏路地を男は走り続け、少し離れた教会まで少年を運ぶと、そこで少年を降ろした。

「いいが、おまえはこのままこの教会に入つて、保護してもらつんだ。すぐに火傷の手当をしてもらえ。急がないと失明するかもしれない。だが、自分の素性をけして明かすな。自分の名前も、家族のことも、今日のことも、全て、誰にも言つんじゃないぞ。わかつたな？」

男の静かだが言葉に込められた迫力に、少年は無言で肯くと、男は踵を返し、屋敷へ戻ろうとした。他の生存者を探そうといふのか。「あ、待つて」少年はそれを引き止めた。「名前は？　あなたの名前はなんていふんですか？」

男は一瞬躊躇つたが、名乗つた。

「ジフだ」

彼が去つた後、少年は教会に保護してもらつた。尼僧には言われたとおり、なにも説明をしなかつた。

ただ名前だけは答えなければなかつた。

「あなたの名前は？」

本名を言つてはいけないと思つた少年は、尼僧の質問で、ふと思いついた言葉を告げた。

現在では使われなくなつた古代の言葉で、尼僧の質問を繰り返しただけ。

マースムカ  
汝の名はなにか？

教会の人間は、その素性に察しが付いたようだが、しかし子供が誰なのか声高に知らせることは、幼い少年の命を危険に晒すことになると考へ、追求することも、少年の保護者となるべき人物を探すこともしなかつた。

治療を受けたマースムカは大きな怪我はほとんどなかつたため一週間で回復した。

だが顔右側には火傷の跡が残つた。

半年後、再びジフが現れ、教会から少年を取り取り、自分の故郷だという大峡谷へ連れて行つた。

大峡谷で暮らすことになつた少年は、見慣れない景色に子供心に感動していた。

だが、どんなに素晴らしい景色でも、その中にいる人間の心が素晴らしくなるとは限らなかつた。

一緒に暮らすことになる村人たちの反応は冷ややかなものだつた。かつて故郷を捨てた男に対する冷淡さと、他所者の少年に対する排除感。

それらは村の子供たちにもあつた。

一人になつた少年に、ダラスをはじめとする数人が囲んだ。最初は当たり障りのない話をするだけだつたが、その内に嘲笑を含んだ攻撃性を感じていた。だが、この時の少年は対処法などわからず、困惑するだけだつた。

そして子供達は、程なく少年を小突き始め、本格的な暴力に発展し、遠くで村の大人がそれを見ていたが、彼らは止める様子もなく、その場を立ち去つた。

偶然発見したジフが止めるまで、幼い子供ゆえの際限のない暴力にさらされ続けた。

それ以来、少年はジフからなるべく離れないようにし、ジフもそのようにした。

だが、ダラスは執拗とも呼べるほど、少年に暴力を加えることに執着し、ささいな隙を見つけては暴力を振るつた。

それが終わつたのは、大峡谷に来てから三ヶ月後。セネロと出会つてから。

丁度八歳になつたばかりの子供が、野生のティダを飼い馴らしたことに、大峡谷の住人は驚きを隠せず、だが少年を受け入れることはなかつたが、少なくとも追い出そうとする者はいなくなつた。それを始まりとして、少年は狩人の技術をジフから急速に習得し、十歳になる頃には、大人たちにも引けを取らないほどだつた。

しかし村人は少年の存在を認めようとしなかった。外の人間が、自分たちより優れていることを頑なに認めようとはしなかった。だが、少年はそれでもよかつた。

自分を守り、育ててくれるジフ。

自分といつも一緒に居てくれるセネロ。

二人がいればそれで満足だった。

そして、いつか村人も自分を受け入れてくれるかもしれない。狩人として優れた技能を修得すれば、村のみんなに貢献し続ければ、いつかみんなも受け入れてくれるかもしだい。

そう思っていた。

根拠もなく呑気にそう思い込んでいた。  
誤りだと思い知るまで。

大峡谷の神殿から王女を救出することは失敗した。その戦いの場所から離れた河岸で、緊急用の筏をマースムカは見つけた。ジフが事前に用意しておいたもので、すぐにでも使える状態だった。

マースムカたちは、それを使って村へ向かった。

村は川の流れの方角、それも大峡谷の複雑に入り組んだ地形を考慮せず、最短距離で移動できるため、馬で移動するより早い。

セリナは左腕の出血をなんとか止め、自力で動けるぐらいに体力が回復した。

ダラスもしばらくして体の感覚が戻り、動き回れるようになる。一連の失敗はマースムカの責任だと責めるぐらいに。

ラッガートは村に到着してから目を覚ました。肋骨を折っているようだが、元々体力に優れているため、命に別状はない。ただ呼吸をするたびに鈍痛に悩まされる。手当はしたが、治るまで動きや力は鈍ることになる。

ジフは傷が深く、危険な状態だった。応急処置だけではどうにもならず、大至急、医者に見てもらう必要があった。

急いで河を下り、村に到着した時は、夜が訪れた頃だった。マースムカたちは、村人を呼んでジフを医師の家に運ばせた。

医師はあらゆる手を施したが、今夜が峠だと告げた。

ルマジヤーンとシェルダックの遺体をしばらく安置することになつた小屋に、セリナは入つた。

白い布でその姿を隠されたルマジャーンとシェルダックを前に、ラッガートが膝を付いている。

なにも言わず、なにも語らず、沈黙のまま、そこで両膝を床に付いている。

憔悴しているのかもしね。ラッガートは信頼する部下であり、仲間でもある一人を同時に失つたのだ。

セリナも憔悴している。体力の限界まで魔法を使した結果か、左腕を失つたためか、それとも戦いの結果のためか。その全てが原因か。

左腕の切断部からの出血は完全に止まっている。体力がある程度回復してから、魔法で治癒したのだ。左腕を完全に再生させることは不可能だが、傷口をふさぐ程度ならばなんとかなる。

セリナはしばらくラッガートの後ろでどう話しかけるべきか、躊躇つた。しかし説明しなければならないことがある。一呼吸落ち着けてから、名前を呼んだ。

「ラッガート」

「……セリナか」ラッガートは顔を向けずに答えた。入ってきたことには、すでに気付いていたのだろう。

「ラッガート、話があるわ」

セリナは返事を待たずに説明を始めた。

今回の事件の黒幕。その目的、手段。リグヴェーダをさらつた理由。

それはパブロの説明と同じだったが、彼が炎の民であることだけは隠しておいた。そういう約束だ。もう約束を守る意味はないのかかもしれないが、だからこそ黙っていた。それは死者へのささやかな礼節だったのかもしれない。

そのパブロの遺体は発見できなかつた。河に流されて、今はどこにいるのかわからぬ。

説明を黙つて聞いていたラッガートは、終わつてもしばらく返事をしなかつた。

しばらくしてから「そうか。パブロは王女の……」部下だったのか、と言おうとしたのかどうか、その先は口に出さなかつた。沈黙が流れれる。

それは短い時間だつたが、なぜか長く感じた。

沈黙を破つたのはセリナからだつた。

「あなたは、これからどうするの？」

「……わからん。おまえはどうする？」

「わかつていてるでしよう。もう一度神殿へ行くわ。サリナの仇を討

ちに。そして、リグヴェーダ様を助けるために」

「勝ち目はないぞ」

一度侵入を受け、そして何人か生かしたままにしておいた奴らは、警備を厳重にしているはずだ。

それに対しても、こちらは人数が少なくなり、残つてている者も怪我をしている。総合的に戦力は大幅に低い。

「わかつていてる」

「ザーラディースの目的は？　名の無い魔獣が召喚してどうするつもりだ？」

「ザーラディースは実質的に、王国軍を掌握するつもりだと思う。名の無い魔獣の軍事利用の成功は、政敵である他の二人の将軍を退けることができるでしょ。そして次は帝国に戦争を仕掛け。名の無い魔獣の強大な力を手に入れれば、帝国に勝つのは確実と判断して。彼は強硬派だというのは王国軍内部じゃ誰もが知つてているわ」エンカータ王国とアスベルト帝国。

世界的な二つの大国は、その強大さゆえに、戦争が始まれば夥しい数の人間が死ぬことになる。そのため、王国と帝国は、対立しつつも、戦争状態には突入しなかつた。互いに思慮分別があるのが、かろうじて平和を保つていてる。

だがザーラディースは、帝国に対して積極的に武力を誇示するべきだという持論を掲げていて。実質的な行動は起こしていないが、好機さえあれば戦争へ突入することを躊躇わぬだろ。

名の無い魔獸の軍事利用の成功は、まさにその好機だ。  
しかし、一つ問題がある。

しかし、一、問題がある

云説より毛古い物語である神話は、どうまで眞実を伝えているの

アジアディースム

名の無い魔獸は存在するのか？

魔術師のおまえなんかかんなば、  
ハーフナガシハ魔術の本書き著い。

# 神話における三つの滅び。ハラカ

神は四つの世界を御創りになられた。  
（イニシアチフ）

四一の世界 それそれに  
四一の名を御用になされた  
フィルダウス

マーザンダラーン

セ  
レ  
ク  
ト  
。

# 火の国。<sup>カノフ</sup>

それぞ

光から天使を創り、天界に置いた。

闇から魔族を創り、魔界に置いた。

ナレ  
士から人間を創り、  
ゾン  
地界に置いた。

火から炎の民を創り、火の国に置いた

の民の在り方を教える。

四つの民は、母にして父である神に従い、教えを忠実に守護し続けた。

しかし千年田にして綻びが生ずる。

神の玉座に最も近い位置に在る七人の天使長が、突如として神に反旗を翻し、魔界を統べる魔族を従え、神に戦いを挑んだ。

この時から、七人の天使長はその地位を剥奪され、魔王と呼ばれるようになった。

これに対し神は、天使を率いて、魔王の軍勢を迎撃った。

神と魔王。

天使と魔族。

二つの勢力軍による戦争が始まった。

神は人間に命じた。天使と共に、魔族と戦い、魔王を撃ち倒せ。魔王は人間を誘った。魔族と共に、天使と戦い、神を打ち倒せ。だが、四つの世界を震撼させた戦に、人間は参加しなかった。臆病な人間は、神の勅命も、魔王の誘惑も、どちらも選ぶことができなかつた。

そのため戦いは拮抗し、永遠に続くかと思われた。

しかし、存在するはずのない存在が現出し、単純にして純粋な結末を迎える。

滅び<sup>ハラカ</sup>

深淵の虚無から死が訪れた。死は魔王と魔族を、地獄の奈落へと引きずり落とした。この時より四つの世界には死が訪れるようになつた。

火の国から炎の王<sup>マーリード</sup>が立ち上がつた。炎の王は炎の剣<sup>ラハット・ハベレヴ・ハミトウハベベット</sup>で天使を焼き尽くし、天の扉を閉じ、炎の剣を据え置き、天界と神の玉座を封じ込めた。この時より万物は古い、腐<sup>シャイフー・ファサダ</sup>し、朽ちる<sup>タクスィル</sup>ようになった。

空虚なる混沌から名の無い魔獸<sup>アジ・アディースム</sup>が現れた。名の無い魔獸が全ての名を剥奪し、滅びは完成される。

完成された滅びは、全てを真なる永劫の内に終焉<sup>イフタタマ</sup>させる。しかし神は奇跡<sup>ムウジザ</sup>を起こした。

名の無い魔獸に名が与えられ、名の無い魔獸は、名の無い魔獸ではなくなつた。

そして世界は存続を許された。だが魔王も秘跡<sup>スイッリー</sup>を起こした。

名を与えたことによつて、名の無い魔獸ではなくなつたはず

のものから、名を奪い、再び名の無い魔獸へと戻した。

そして名の無い魔獸は空虚なる混沌へ帰つて行つた。

再来<sup>ラジヤア</sup>することを告げて。

神は人間に説く。

汝らは、我にも彼の者たちにも従わなかつた。それ故に汝らは善<sup>ハイル</sup>でも悪<sup>シヤッル</sup>でもあり、そのどちらでもない存在となつた。次に名の無い魔獸が現れるまでに、我の言葉を聞き入れなければ、我は救いを与えず、名の無い魔獸は全てを終わらせるだろう。

魔王は人間に囁く。

汝らは我らにも神にも耳を貸さなかつた。それ故に汝らは悪でも善でもなく、そのどちらもある存在となつた。次に名の無い魔獸が現れるまでに、我らの言葉を聞かぬならば、我らは褒美を与えず、名の無い魔獸は全てを終わらせるだろう。

セリナはしばらく沈黙する。

「私が魔法使いになるきっかけは、奇妙な事件に巻き込まれたことだつた」

セリナは唐突に過去を語り出した。

「詳しく述べは説明できないけれど、饒舌に頃くしがたいあの事件で、あの存在に遭遇した。私は、死を見たの」

ラッガートは怪訝に繰り返した。

「死を見た?」 どういう意味だ。

「そう、死よ。神話に現れる、死。私には、いえ、人間の言葉では説明ができないけれど、あれは間違いなく、根源に存在する滅びの一つである、死だつた」

ラッガートはその言葉の意味することを考える。

セリナは続けて「パブロは、炎の王マーリードと会つたことがあると言つていたわ」

「パブロが、炎の王と……」

「嘘は吐いていないと思う。勿論見間違いや、勘違いと言つ可能性も否定できなければ、多分それはない。本当に遭遇したことがあるんだと思う。だからこそ、ただの情報屋にすぎない彼が、王女を救出しようとした。少なくとも理由の一つではある」

忠義心があるでなく、金で雇われているにすぎない情報屋が、危険を冒しても救出しなければならないと判断した理由。

「炎の王マーリード。死マウトウ。神話の存在のうち一つが存在するのなら、名の無い魔獸が存在しないと言う保証はない。寧ろ、その逆。おどぎ話や絵空事、空想の産物ではなく、現実に存在する証拠と言えるでしょう」「ザーラディースが名の無い魔獸の制御支配に失敗したのなら……」

「世界は滅ぶ」

「成功する確率は?」

「無いわ」

セリナは断言する。

「永遠に死なないことなどできないように、老い腐し朽ちることを止められないように、名の無い魔獸の力は、絶対的ななにか。人間の力で操ることなどできない。魔法使いであっても、崩壊と死の二つだけは、根源にある滅びだけは、避けることはできない。ましてや人間がまだ遭遇していない、未知の滅びならば尚更。万が一制御支配に成功したとしても、王女は死ぬ。そして戦争が始まる」

「どちらにせよ、大惨事が始まることは確実。  
「……ルマジヤーンならばどうするだろうな? ショルダックならどうするかな?」

ラッガートは独り言のように呟く。

ルマジヤーンの剣を握り締めた。騎士を叙勲する時、付け慣れていない彼は、それでも誇らしげにしていた。

傍らにシェルダックの猟銃が置いてある。騎士になる前から愛用していたという獵銃は、自信を持てなかつた彼が唯一、自信を持つことができるものだと、常に携行していた。

若き騎士と、老いたる騎士。一人の部下はその職務を最後まで果たそうとした、確かに騎士の名に恥じない勇敢な男たちだった。

ラッガートの質問にセリナは答えなかつた。

だが、答えはわかつていた。

セリナがその左腕をなぞる。彼女が失つた左腕が一瞬そこにあるような気がした。だが、失つたものは戻らない。

問題なのはこれからどうするべきなのか、その選択。

「あなたの正しいと思つた判断を。あなたは、隊長なのだから」ラッガートは立ち上がり、セリナに顔を向けた。隊を率いる者に必要な冷静さと、その内に闘志を燃やす騎士の瞳で。

「村人に全てを伝え、勇志を集めよう

世界の危機を止めるために。

一時間後、集会場に村人が集められた。

ラッガートはセリナから聞いた説明を彼らに語り始めた。

人の集まりから少し離れたところで、岩に腰掛けているマースムカは一袋の包みを抱いていた。

セネロの首だつた。胴体部は重量がありすぎて、持ち帰ることができなかつた。

「……セネロ」

喉の奥底から搾り出すように名を呼んだ。

セネロはマースムカが名を呼ぶとすぐに傍へやつて來た。顔を嬉しそうに摺り寄せてきた。その背に乗つて大峡谷を一緒に走つた。一緒に狩をして、その肉と一緒に食べ、草木の実を探り、一緒に食べた。

七年前のあの日から、ずっと傍にいてくれた、たつた一人の友達。

涙は出なかつた。ただ、胸に空洞が開いたような、空虚な感覚だけ。あまりにも多くの出来事が起きて、正常に感情が働かなくなつてしまつたかのように。

自分の手で人を殺したこと。リグヴェーダとの再会。新しい友達になれたかもしけなかつた、パブロの死。ルマジャーンとシェルダツクの死。ずっと一緒にいたセネロの死。

怯えて何一つできなかつた自分。

そして、ジフの死。育ってくれた父の、最後の言葉

死の床で、ジフはマースムカを呼び寄せた。

医師は今夜が峠になるだらうと言つていたが、それすらも気休めの言葉でしかないことはマースムカにもわかつた。今生きているのが不思議なくらいなのだ。

だが、マースムカはそれを極力顔に出ないよう、最大限の努力を払つて、ジフに話しかける。

「父さん、なんだい？」

ジフが微かに笑う。

「まだ、父と呼んでくれるのだな」

「当たり前だよ。あんな奴の言つこと気にしてゐるの？ 昔のことなんて関係ないよ。父さんは、僕の父さんだ」

ジフは首を振る。

「私はおまえの父ではない」

マースムカはその言葉に少なからず動搖したが、平静を装つてその場を取り繕うようにシーツをかけ直す。

「なにを言つてゐるんだよ？ もう喋らないで。傷に触るよ」

だが、その手をジフが握つて止める。

「私は、おまえに父と呼ばれる資格などないのだ」

ジフがマースムカに向ける目は、なぜか怯えていた。

「……おまえの本当の父親を殺したのは、私だ」

「……え？」

マースムカは今度こそ、その言葉の意味を理解できなかつた。

「私は以前、あの男、ゲシュタルと共に非合法の仕事をしていた。そう、あの男の言ったことは全て本当だ。私は、傭兵であり、暗殺者だつた」

いつの頃からだろうか、大峡谷から離れたジフは、どんな仕事に就いても上手く行かず、やがて食い扶持を稼ぐために、犯罪に手を染めた。

そして、いつしか殺人を仕事とするようになり、依頼があれば誰であろうと殺した。

ゲシュタルと出会つたのはその頃だつた。ある仕事を一緒にしたことをきっかけに、二人はパートナーとなつた。

二人が組んでからは、一度として仕事に失敗したことがなく、数々の仕事をこなし、多くの人間の命を奪い、気が付けばその業界で、異常なまでの成功率の高さから、アザニスの悪魔と呼ばれるようになつていた。

そして七年前、二人は一人の男から仕事を請けた。

当時、將軍職に就任したばかりの男、ザーラディース・ハーマン。依頼内容は、政敵アファマツド・クラノフ侯爵の暗殺。

政府の人間の仕事は危険が多い。暗殺対象よりも、依頼主自身に口封じとして殺される危険が多いため、ジフはこの仕事に気乗りではなかつたが、ゲシュタルが依頼を受けることを強く主張したため、結局仕事を引き受けた。そして二人はその場限りの仲間を数人集め、襲撃を決行した。

この時の指揮官はゲシュタルだつた。この男には珍しいことに襲撃という強攻策だつたが、事は潤滑に進み、アファマツドを含めた

屋敷の人間全てを殺害することになんなく成功した。

ただ一人を除いて。クラノフ第一子。その少年だけがなかなか見つけることができなかつた。アファマツドは仕留めたのだから、依頼達成基準を満たしているとして、撤退することを提案したが、ゲシュタルは禍根を残す可能性を指摘して、少年も必ず始末するよう命令した。

そしてジフは見つけた。洋服棚に隠れていた少年を。

「私は、あの時、おまえを殺すつもりだつたのだ。洋服棚に隠れていたおまえを見つけた時、これで屋敷の人間を全て消し終える。仕事が終わると、それだけしか考えなかつた」

そして刃を振り上げた。

「だが、殺せなかつた。おまえの目に、限りなく澄んだおまえの蒼い瞳に見つめられた時、なぜだらうな、私はとうになくしたはずの罪の意識が蘇つた。良心の呵責を感じたんだ。それを理解した時は、私はもうおまえを殺せなくなつてしまつた」

そして少年は逃げられた。

だが、それが他の者に姿を見られることになり、少年の顔に深い火傷を負う原因となつた。

「あとのことはおまえも憶えているだらう。その場で見つかつた仲間を殺し、おまえを教会の孤児院へ預け、私は再び屋敷へ戻つた」  
襲撃と火の手が上がつた屋敷の混乱に紛れ、少年を殺したと偽り、その場をやり過ごした。

それからゲシュタルと手を切り、ほとぼりが冷める半年間潜伏して身を隠し、孤児院からマースム力を引き取り、故郷であるこの村に戻つた。

「そして、全てを隠したまま、七年間を過ごしてきた。そうして全てを偽つたまま、七年間生きてきた。おまえに優しくしたのは、同情でも哀れみでもない。おまえを育てたのは、瘦せこけた良心の呵責を紛らわすため。ほんの微かな罪悪感から目を逸らすため。全ては自分の過去を「こまかすためだつた」

マースムカは沈黙していた。

なにを言えば良いのか、なにを感じれば良いのか、なにを考えれば良いのか、なにもわからなかつた。

「マースムカ……許しを請うつもりはない、どれほど私を憎んでく  
れても構わない。今のおまえの境遇は、全て私のせいなのだから。  
だが……」

ジフはマースムカの手を強く握る。

「だが、これだけは信じて欲しい。おまえを、愛している」  
そうして、アザニスの悪魔と呼ばれた一人の男は、この世を去つ  
た。

皆が集まる広場で、ラーナは騎士の話を聞いていた。彼らの語る内容は、とても信じられるものではなかつたが、体に残る痛々しい怪我が、全くの嘘ではないと示していた。

騎士の話は終わり、村人は沈黙している。

皆とは少し離れた場所で、マースムカが岩に座つていた。騎士と一緒に戦つた彼は、憔悴しているのか、空虚な眼をしている。

村人は誰もマースムカのことを気に止めない。父親がなくなつたというのに、それを慰めるものは誰もいない。

ラーナは彼の傍に行きたかつた。彼を慰めてやりたかつた。だけど、なにを言うべきなのか、まるで思いつかない。

説明を終えたラッガートに長老が最初に質問する。

「お話はわかりました。しかし、それで我々にどうしろと言つのですかな？」

「勇志を集めたいのです。神殿へ向かい、王女を救い出し、奴らと戦う戦士を」

村人はそれぞれに囁き合つ。だが、それは贅同の言葉ではなかつた。

「つてもなあ。ジフでさえ敵わなかつたんだろ」

「俺たちが集まつたつてどうなるんだよなあ」

「大体、俺たちは関係ないだろ」

「王都の妙な陰謀を大峡谷に持ち込んで欲しくないぜ」

「そうだ。要するに死に行くようなもんだろ」

「冗談じやない」

「名の無い魔獸だとよ」

「そんなものいるわけないだろ。子供に聞かせるおどき話だぜ」

いつしか騎士たちへの非難へと変わる。

「騎士だからって勘違いしてるんじゃないか」

「王家の人間なんか知ったことか」

「なんで俺たちが戦わなければならぬんだ」

「おまえらだけで行けよ」

「俺たちを巻き込むんじゃねえ」

「とつとと出て行け」

最初の日の時の歓迎は一体なんだつたのか。そこにあるのは、余所者に対する不信感、排除感、拒絶感だけだった。

「おう！」突然威勢のいい声を上げて、ダラスが立ち上がった。「おまえらそれでいいのか！ テイダ乗りの、狩人の誇りはないのかよ！ 俺たちの大峡谷で邪悪な儀式が行われているんだぞ！ それを放つて置いて良いのか！ 怖気付きやがって。俺は行くぞ！ 邪悪な敵を倒し王女を救うんだ！」

村人はダラスの勢いに当てられ、沈黙してしまった。それは己の臆病さや卑小さを恥じたからなのか、ただ大声に驚いただけなのか。だが、その中から二人が立ち上がった。

「俺も行くぞ」と、リーバ。

「俺もだ」とジェドム。

ダラスといつも一緒にいる、先日ラーナたちと同じように成人した二人だ。実質的にダラスの舍弟のようなものだから、兄貴分の声に賛同したのか。

「リーバ、ジェドム」ダラスは嬉しそうに「よし！ それでこそ大峡谷の男だ！」そして改めて村人を見渡し「他にいないのか！ 誇りある狩人は他にいないのかよ！ ええ！」

村人は再び囁き始めた。騎士への非難は混じっていないが、勇志となる者は現れない。

ふと、マースムカはふらりと立ち上がる。そして村人の集まりに向かつた。

「マースムカ？」

それに気付いたラーナが声をかけるが、しかしながら思わず道を明けた。

他の者も、マースムカに気付いて怪訝な目を向けるが、彼が前に来ると、自然と道を明けた。それは、醜悪な右目のために、言いようのない異様な威圧感ため。マースムカから発せられるそれに、道を遮つてはいけないような気がしてならなかつた。

マースムカはそうしてラッガートの前まで来ると、静かに告げる。「神殿への近道があります。少し危険がありますが、明朝から出發しても、十分間に合います」

「待ちなさい、マースムカ」長老が制する。「これは大峡谷の一大事じや。皆で話し合つて決めねばならん。ダラス、おまえもじや。おまえたちが独断で神殿へ行くのを許すわけにはいかん。血氣盛んなおまえたちの気持ちはわかるが、ここは抑えて冷静になるのじや。良いな」

ラーナは不意に理解した。

長老の判断基準は、事の正誤にあるのではなく、問題が一番起きないという選択をしているのだ。眞実はどうであろうとも関係ない。ただ村に、そして大峡谷に問題が起きなければ良いのだ。だから、成人式の競馬の時も、マースムカの言葉が正しいのかどうか、確かめさえしなかつた。

マースムカはなにを感じただろうか、沈黙するその後ろ姿にラーナは不安感が込み上げてきた。

今、とてもない失敗をしたような。

「そんな悠長なこと言つてる場合かよ！」ダラスは長老の言葉を一蹴し、そしてマースムカに「マースムカ！ テメエも余計な口出しうるんじやねえ！ 脣病者は引つ込んでろ！」

マースムカは一人とも無視した。返事もせずに踵を返すと、人の

集まりから離れるように足を進める。

「おい」ジェドムが前に立ちはだかった。マースムカよりも大きな体で遮り、嘲る笑みを浮かべて「マースムカ、ダラスの話を聞いていけよ。だいたいな、おまえみたいな役立たずが、王女を助けに行くなんて言うこと事態おこがましいんだよ。おまえは村に残つてろ。いいか、リグヴェーダ王女は俺たちが助け出す。わかつたな」マースムカは返事をしなかつた。

「おい、なんとか言えよ」

マースムカはやはり返事をしなかつた。

ダラスは怯えているのだと思い、小気味よくその様子を見ていた。マースムカは少し脅せばなにもできなくなる腰抜けの臆病者なのだ。きっと騎士の前で醜態を晒すに違いない。残酷な期待を込めて、ことの推移を待つた。

だが、不意にジェドムはなにかに気付いたかのように顔を強張らせると、やがて顔を青くして、一步後ろへ下がつた。

ダラスやラーナ、ラッガートとセリナ、その他の村人も、なにが起きているのか怪訝に思つた。

だがマースムカは彼らに背を向けていて、その表情を知ることはできない。

マースムカは力なく一步進むと、ジェドムが一步後退し、さらに一步進むと、一步後退し、三歩目にはジェドムは横へ逸れて道を譲つた。

ジェドムの背に他の村人が当たり、そこで動きを止めるが、その表情からはもつと後ろへ下がりたがつてているのは明らかだった  
「おい？」ジェドムの背中を支える形となつた村人が、怪訝な表情で尋ねるが、ジェドムは答えない。その体が震えている。

マースムカは開いた道を緩慢に進んで行き、夜の闇へ姿を消した。ジェドムはただ見つめられただけだ。何一つ表情はなく、睨まれたわけでも、怒氣を向けられたわけでもない。そして別に武器を持っていたわけでもなく、ましてやそれを向けられたわけでもない。

そもそもジョンドムはその程度で怯むような若者ではなく、ましてやマースムカが粹がつても誰が怯むといふのか。

「うう……う、うう……」

だが、ジョンドムは明らかにマースムカに怯えていた。

「み、皆、いいのか。あいつでさえリグヴォーダ王女を助けに行くと言つたんだぞ。それなのに皆は黙つているのか」

ダラスが再び演説じみたことを始めるが、それは勢いを失つていった。

結局、リーバとジョンドム以外、誰も立ち上がる者はいなかつた。

マースムカは納屋で包みを藁の上に置く。セネロが好きだつた木の実とミルクを沿えて。

「クウー」

ジャリスが一声嘶ぐ。彼女は知つていた。その包みにセネロが包まれているのだと。運んだのは彼女なのだから。そして長い年月をセネロと同じ小屋で過ごしたジャリスは、今なにを感じているのか。「セネロ、ごめんね。少しの間ここで我慢してくれるかい。すぐに戻つてくるから」

そしてマースムカはジャリスに向かうと、その手を額に添えた。

「ジャリス。父さんが死んだよ」

その意味を理解したのだろう、瞳を閉じて、頭を垂れる。

「ジャリス、お願ひだ。僕に力を貸してくれ。僕はもう一度あいつらと戦う。でも、神殿へ行くには君の力が必要なんだ。ジャリス」ジャリスは頭を上げると遠吠えを上げた。

その意思を示す、力強く、限りなく澄んだ声で。

「ありがとう、ジャリス」

不意に、戸口が開いた。

「誰?」

「マースムカ、私」

ラーナがそこに佇んでいた。

「ラーナ、どうしたんだい？」

「マースムカ」ラーナはマースムカの前に立つと「どうしてあなたが行く必要があるの？」

「え？」マースムカはすぐにその言葉の意味を理解することができなかつた。

「あなたがリグヴェーダ王女を助けに行く理由なんてどこにあるの？」それともジフさんの敵討ち？」

「違うよ。……いや」マースムカは首を振つて「それもあるけど、僕がリグヴェーダ王女を助けに行くのは……」

「名譽のため？」ラーナが科白を遮つた。「狩人の誇り？　勇者の称号？　ダラスみたいに」

マースムカは一日前と同じ誤解をした。ラーナは自分がダラスの名譽を横取りしようとしているのだと思い、それを責めに来たのだと。

「違う。僕はダラスの邪魔をするつもりはないよ。栄誉とか、名声とか、そういうのは全部ダラスに譲るよ」

「ダラスなんかどうだつていいわよ！」ラーナが突然怒鳴つた。

驚いて思わず身を竦めるマースムカ。

「ラーナ？」

「皆で私とダラスを恋人に仕立て上げようとして」ラーナの肩は震え、その目に涙が滲んでいる。「私はダラスなんて、ダラスが嫌いなのよ。なんでも自分の思い通りになると思って、自分の考えは全部正しいと思い込んで、人のことを考えないで好き勝手にして。中身は七歳の子供じやない。なんで私がそんな奴の恋人になつてるのよ。私が嫌がつていいつてわからないの。私はダラスの恋人なんて、結婚するなんて絶対に嫌よ！　私はダラスが大嫌いなのよ！　私は、私は……」

マースムカはどこか呆然としながら「ラーナ

ラーナは田尻からこぼれる涙を拭いながら「私はちゃんと好きな人がいるの。なのに、その人も私とダラスが恋人だって思つてる。私はその人のことが好きなのに」

その人が目の前にいる人なのだと、マースムカには伝わらわなかつた。

マースムカはしばらくの沈黙の後、呟くように「ごめん、ラーナ」自分の意思を無視され、その心さえ他人の都合の良いように捏造されることの辛さは、よく理解できた。

「ううん」ラーナは首を振り「あたしのほうこそごめんなさい。こんな時に変なことを言って」もう泣いてはいなかつた。そして改めて「マースムカ、どうしても神殿へ行くの？」

「うん」マースムカは肯く。

「どうして？ 王都の陰謀や政略なんて私たちには関係ない。あなたが行く必要なんてないわ。それとも、やつぱりジフさんの仇を取るつもりなの？」

マースムカは首を振る。

「なら、どうしてなの？」

マースムカは答えを探すかのように目を瞑り、静かに答えた。

神殿にて目を覚ましたパレスが、ゲシュタルに食つて掛かる。  
「なぜあいつらを生かしておいたんだ！ なぜ殺さなかつた！」「落ち着け」ゲシュタルは冷淡に制する。

「落ち着けえ！？ 落ち着けだつてえ！？ 落ち着いてなんかいられるもんかい！ キイイイイ！」パレスは頭を搔き龜ると「こうなつたらあのクソガキの村まで行つてやる。村の人間を全員あのクソガキの前で殺して最後にあのクソガキを嬲つてじわじわと痛めつけて苦しめてヒヒヒ、ヒヒヒヒヒ

最後には恍惚として狂喜の笑い声。

「待て、その必要はない」

ゲシュタルは後ろから止めるが、パレスは拒否した。

「あんたには必要なくても、あたしには必要あるんだよー。」

ゲシュタルは続けて「あの少年はここへやつて来る

「なんだつて！？」歓喜とも驚愕とも取れる声。

「リグヴェーダ王女を助けに、彼らはもう一度ここへやつて来るだろう。その時にあの少年を殺せばいい。勿論、やり方はおまえの自由だ」

パレスは狂喜に歪んだ満面の笑みを浮かべて確認する。

「本当かい？」

ゲシュタルは無言で首肯する。

「そうか。なら私から行く必要はないわけだね。そつか、あいつは私のところへ、ヒヒヒ。そつかそつか、ヒヒヒヒヒ

この女は正常な判断ができていない。今の話を半ば嘘だということさえ見抜けないでいる。だが構わなかつた。自分の目的を果たすために動いてさえいれば、駒がなにを考えていよつとも、どんな状態にならうとも、知つたことではない。

そしてゲシュタルはその場を後にした。少年はともかく、ラッガートたちは戻つてくるだろう。そのための備えをしておかなくてはならない。

名の無い魔獸は必ず召喚する。

それが、目的を果たす最後の手段であるがゆえに。

傭兵团は儀式の準備を終えた。

その光景を眺めながら、禁断の魔法を想像した。しかし、具体的に想像することは彼らにはできなかつた。

神殿の最奥に位置する儀式の間に作られた、巨大な魔方陣は、確かに知識のない者には、異様な光景に写るだろう。

しかし傭兵団の彼らにとって、それは特に気になることはなく、普通の魔法儀式のように思えた。彼らの中には魔法使いはないが、それでも係わったことはある。魔法儀式に関しても、初めてというわけではない。

名の無い魔獸と言つから、どれほどのものかと想像したが、指示通りに造つたのは、いく普通の魔方陣。

「隊長。名の無い魔獸なんて本当に出るんですかね？」

「知らねえよ、そんなこと。大体、俺たちに関係ないだろ」

「でも、魔獸が出たら、世界が滅ぶんじゃないですか？」

「バカ。世界が滅ぶわけないだろ」

根拠のない断言は、しかし誰もが納得した。世界が滅ぶはずがないという先入観は、誰もが持つ。奇妙なことに、いつか世界が滅びると言う考えも同時に存在する。

それは自らの死について考へることに似ているのかかもしれない。その日はいつか必ずやって来る。だが、どうしても現実に起こることとして感じることができない。

「とにかく、仕事はもうすぐ終わりだ。細かいことは気にするな」隊長の言葉に従つて彼らは深く考へるのを止めた。

金さえ貰えば、彼らはどのよつな雇い主にでも従つ。それが王女を生贊として使おうとしている者であつても、傭兵は気にしなかつた。

薄暗い地下牢で、鎖に繋がれたリグヴェーダの顔には、疲労が色濃く映し出されていた。

一度この牢から逃げ出したからには、警戒を厳重にせねばならないと、見張りを一人付け、さらに彼女自身の両手足を壁に綱がる鎖の枷で封じてある。

もう彼女自身で脱出することは完全に不可能だ。もつとも最初から結局脱獄することはできていなかつたのだが、敵はそのあたりのことは知らないし、彼女も説明する気はなかつた。

今も可能性があるとすれば、リイジスが助けに来てくれることだけだが、あの少女の姿をした妖精は戦う力がほとんどない。だから、パブロが来るまでなにもしなかつたのだ。

そのパブロは死んでしまつた。ボッズルに受けたあの傷は致命傷。さらに手当でもできないまま河に流された。

妖精族はこの世界で活動するためには、肉体を必要とする。肉体を得た妖精族は、この世界で自由に活動することができるが、同時に肉体という弱点も得てしまう。

肉体の損傷は、妖精族の本質にも直接影響を及ぼす。

肉体が死ねば、宿る炎の民も死ぬ。

パブロが妖精であつても、あれではもう助からない

ルマジヤーンとシェルダックも死んでしまつた。人間である二人は、パブロよりも容易く死んでしまう。

ルマジヤーンは触手に貫かれて。

シェルダックは暗殺者の凶刃に貫かれて。

若き騎士はその忠義を示し、老騎士は忠義を果たして。

王国のために献身を捧げ、王女である自分を助けるためにその身

を捧げた、誠の騎士。

すまぬ、私が至らぬばかりにそなたたちを死なせてしまった。リグヴェーダは心中謝罪する。三人は自分を救うために命を落とした。こうのに、自身の命の時間は残り少ない。

セリナとラッガートのことを思う。意識を失うまでは、まだ生きていた。幸運に恵まれて無事であることを祈った。

そして途中で出会った老狩人。リグヴェーダは初対面だったが、他の者には既知の人物であったようだ。話を聞く限り、少年の父らしい。少年が七年前からどのような人生を歩んできたのか、預かり知らぬことだつたが、少年の養父なのだろう。

少年の育てくれた老狩人は無事でいるだろうか。

そして少年自身は。

そなたは無事か？ 生きているだろうか？ また私を残して逝つてしまつたのではないだろうな？

私は死すまでそなたに会えぬと思っていたというのに、生きているうちに再会できた。そなたが生きていた。それはこの上なき喜びだが、私は俄かには信じられぬのだ。そなたに再び会えたのは、この薄暗い牢で見た夢現なのではないか？

リグヴェーダは少年の名を呴こうとした。夢ではけして口にすることができなかつた名。

その時、階段を誰かが下りてくる足音が響いてきた。リグヴェーダは身を硬くして身構えようとしたが、鎖で手足を束縛されており、鎖が音を鳴らすだけ。

蠟燭の明かりに照らされて、見知った顔が現れた。どこか卑屈な笑みを浮かべた初老の男。

「ご機嫌麗しゆうござります。リグヴェーダ様」

リグヴェーダはその声の主に、驚愕に目を見開いた。

「ザーラディース将軍」

「左様でござります」

「貴様が！」 鎖を引きちぎる勢いで前に出て叫ぶ。「貴様が首謀者

か！？

「『明察で』ござります。さすがはリグヴェーダ様」

ザーラディースは慇懃無礼に答える。それは普段上に立つ者より、優位に立っているという優越感からだつた。

「なにが目的だ！？ 貴様は一体なにを企んでいる！？」

「企みとは人聞きの悪い。私は王国のために働いているのです。そう、全ては王国のため」

「ふざけるな！ サリナを殺したこと！ 他の者たちを殺したこと！ 全て王国のためだというのか！」

ザーラディースは気まずそうな仕草をして見せたが、それが意図的であることは誰にでもわかるほどわざとらしいもので、極めて不快感を催す。

「あー。まあ、あれは不慮の事故というものでして」

「バン！」リグヴェーダは地を蹴り、ザーラディースへ手を伸ばす。だが伸ばした手は、束縛する鎖が一杯に張つたところで止まる。リグヴェーダはそれでもなお手を伸ばそうとする。目の前にいる不快な男を殺そうと。

ザーラディースは一瞬怯んだが、自分の身に危険が及ぶことはないとわかると、嘲る笑みを浮かべた。

「リグヴェーダ様。一国の王女ともあろう者がはしたないですぞ。もう少しあ淑やかになさつてはいかがですか」

その言葉は、以前ゲシュタルが言つたことと同じだつた。ザーラディースは知る由もなく、またゲシュタルは殺意の手に怯えたりはしなかつたが。

ザーラディースは続けて「よろしい、お教えいたしましょう。私がいかに王国のために身を尽くしているかということを。なにも知らずに死ぬのは、お辛いでしょ」から

帝国が開発した新兵器。名の無い魔獸の召喚。儀式の生贊。一通りの説明を聞き終えたりグヴェーダは、怒りより寧ろ睡然としてしまつた。

「おまえは、そんなばかばかしいことに、幾人もの命を奪ったのか」「ばかばかしい！？」ザーラディースは激昂する。「私が考えた帝国の対抗策がばかばかしいだと！」

「名の無い魔獸が存在するなどと本氣で信じているのか？　あれはただの神話、おどぎ話だ」

「黙れ！」

子供の戯言扱いされたことが怒りを誘発させたのか、ザーラディースは上辺の礼儀を捨てて怒鳴る。

「魔獸は召喚できるのだ。そのような虚言で助かるなどと思つた！おまえは魔獸の生贊になり死ぬのだ。次はあの村だ。この召喚を知つた者がいるに違いないベドウイルム村は、王国にとつて危険だからな。魔獸を召喚したさいは、最初にあの村を実験として滅ぼしてやろう。そう、王国のために！」

しばらく息継ぎをすると、再び慇懃な態度に戻る。

「いやいや、リグヴェーダ様、私が好きでこのようなことをしているのだと勘違いされでは困ります。私はあくまで王国のために、献身を尽くしているのですよ。あなたも王族の一人であるのなら、ご自分を王国に捧げることを光栄に思わなくては。フハハ、フハハハハハ」

リグヴェーダは返事をしなかつた。この男の言つ王国とは、己のことには他ならないと気付いたから。

王国と己が置き換わっていることに、この男は気付いていない。自他の区別が付いていないことは、その瞳に宿る卑屈な欲望が物語つていた。

力を得るために、全てを犠牲にし、その責任が自分にあると考えない。すべては責任を逃れるための言い訳だ。

献身を尽くしているなど、そのような世迷言は、命を捧げた忠義の騎士に比べれば、下劣な戯言以下。答える価値さえない。

「あ、そうそう」ザーラディースは思い出したように「もう一つあなたにお伝えしておかなくてはならないことがありました。もう、

お忘れになつてしまつたでしょ？が、クラノフ家の襲撃を命令したのは、実は私はです」

「……なに？」

「おや、覚えていらっしゃるのですな」ザーラティースは楽しそうに「いや、あなたの婚約者になるはずだった、あの少年には可哀想なことをしてしまいました。本当はアファマッド・クラノフだけを暗殺するように指示をしたのですが、どうも手違いがありました。襲撃という形で、あの屋敷の者の全員の命を奪ってしまいました」

「……あれも、おまえが……おまえがやつたのか？」リグヴェーダは呆然と問う。

「いやいや、あれは少々罪の意識を感じてしまいます。ですが、まあ仕方ないこと。のような成り上がりの分際で、貴族連盟の主席を狙うなどとおこがましいことを考えたクラノフを制裁しなければ、王国にとつて悪しき前例を作つてしまつといひましたからな」

明らかに皮肉としかいいようのないことだった。

古来より続く王族貴族の身分は、近年急速に廃れつつあり、百年前には考えられなかつたことが、当然のように受け入れ始めた。

アファマッド・クラノフ侯爵は、平民という立場から、商人として成功し、貴族の肩書を手に入れるために、絶えかけた侯爵家の最後の娘を妻として娶り、そうして絶大な権力を手に入れた。資産家とはいえ、平民が金で貴族になることなど、一昔前では考えられなかつたことだ。

だが、それは逆のことも言えた。

王族貴族という立場は奇妙なもので、重要で安樂な地位にいるようすで、実は他のことがほとんどできないといつ、拘束にもなつてゐる。王族を辞めることを希望しても、叶えられることはなく、自分の望んだ人生を歩む機会さえなかつた。

例えそれが誰も気にならないような末席に位置するものであつたとしても。

寧ろ、王族の中では、肩書にすらならないような末席のザーラティ

イースには、優遇を受けることなく、地位に縛られた人生を送ることになりかねなかつた。

だが、慣習が廃れ始めたことによつて、ザーラディースは軍部に入ることができ、将軍という地位に昇りつめた。

ザーラディースは逆の立場での成り上がりだ。

おそらくは、本人もそのことをわかつてゐる。

だからこれは、悪意に満ちた皮肉だ。

「そう、あれは必要なことだつたのです。あなたの婚約者も、必要なために仕方のない犠牲でした。しかし、あなたもまた私の手によつて尊い犠牲となるのですから、きっとあの世で再会できることでしょう」

リグヴェーダはなにも言わずに俯いて、泣いてゐるかのように肩を震わせていた。

「……フフフ」だが、不意に笑い声を上げ始めた。「フハハハ、クハハハハハ！」

「ハハハハハ！」そうか、ククク、だから、フハハハハハ！」  
いつたいなにがそれほど楽しいのか、享樂に満ちた笑い声を上げるリグヴェーダに、ザーラディースは戸惑つた。

「なにがおかしい！？」

リグヴェーダはザーラディースを見据えると、不適な笑みを浮かべる。

「私の婚約者は生きているだ

「なにをばかなことを？」  
ザーラディースはその言葉が理解できないのか、しばらく呆然としていた。

「おまえが殺した少年は生きている」リグヴェーダはザーラディースの否定を取り合わずに繰り返す。「あの者はここへやつて來た。私を助けるために。そして仇を討ちに、おまえを殺すためにだ」

「少年が、生きている？」

ザーラディースはあの中に少年がいたのだとよつやく理解したのか、しかし鼻で笑う。

「ふん、だが失敗した」

「あの者はもう一度ここへ来る。一度死んだ者が一度も死ぬものか。  
おまえを殺しに必ずやって来るぞ」

理屈になつていらない理由だったが、自信に満ち溢れた断言は、恐怖を喚起させるには十分だつた。ザーラティースの顔が見る見るうちに恐怖で青ざめる。

「あの者はここへ来る。もう一度やって来る。必ずやって来る。私を助けて、そして家族を殺したおまえを地獄に送るためにだ」何度も繰り返すリグヴェーダは、やがて彼女自身確信する。そうだろう。おまえはそのために蘇つたのだろう。

当面の物資を保管するための倉庫にしておいた部屋で、切り札を起動したゲシュタルに、ボツズルが聞いた。

「こんな物、本当にいるのかよ？　あいつら怪我人の集まりだぜ」「わからん。だが、必要ないとも言い切れまい。少なくとも、奴らがもう一度ここへ来るのは間違いない」

その中に、あの少年がいるとは限らないが。  
「だからあの時さつさと殺しちまえばよかつたんだ。簡単に終わつてたぜ」

「ジフの息子がいた」

「あ？　それがどうかしたのか？」ボツズルは意味がわからず、「まさか、昔の仲間の子供を殺すのは忍びないとか言つ気じやねえだろうな？　そんなこと言われたら、言つちや悪いけど、俺、笑つちまうぜ、ゲーゲッゲッゲッ」

もう笑つているボツズルに、ゲシュタルは気分を害するでなく、端的に一言。

「違う」

「じゃあ、なんだよ？」

「アザニスの悪魔仕込みの戦闘技術を習得しているかもしれん。もしそうならば、現役のアザニスの悪魔と同じ戦闘能力を持つていると推測される」

「でも、あいつビビッて震えてたぜ。ションベン漏らしてたんじゃねえか？ ゲッゲッゲッ」

「だが、最後には戦つた。迷いを振り切り、最初の戦闘における恐怖を克服したのだ。わずか半日足らずで」

ボッズルは笑みを止めた。未知の危険性を理解したのか。「ゲシユタル！」唐突に銀髪の男を呼ぶ声と同時に、ザーラディースが現れた。「ゲシユタル、準備はどうなっている？ ああ、いや、違う」質問を間違えたらしく頭を振つて「ラッガートらはどうした。何人始末した？ 誰と誰を消した？」

彼はゲシユタルが返事をするのを待たずに、矢継ぎ早に質問する。その様子はなぜか取り乱していた。なにかを恐れていた。

ゲシユタルは怪訝に眉を顰めたが、冷淡に返答する。

「騎士を一人、雇われた男を一人消した」ジフはまだ息が合つたようだが、あの傷では助からないと判断して、数に数えた。

「たつた四人か！？ 他はどうした？！」

「まだ生きている。だが、負傷している」

「手傷を負わせたのなら、なぜ止めを刺さなかつた？」

「こちらの被害が大きかつたため、一旦引いた」

「なぜそんな悠長なことを！？」

興奮するザーラディースに、ボッズルが宥める。

「落ち着けよ、旦那。どうしたってんだ？」

だがザーラディースは聞こえなかつたのか、もしくは無視したのか「対策は？ 奴らはまたここへ戻つてくるのだろう？ ちゃんと対策は考えてあるのだろうな？」

ゲシユタルは無言で背後の物を指差す。

そこにある物を見たザーラディースは、顔に安堵と喜びの色を見せた。

「おお、こいつを起動させたのか。そうか、なら問題はないな。うむ、大丈夫だ」

一人で納得しているザーラディースだったが、ゲシュタルは、そしてボッズルでさえも、この男が正気であるのかどうか、疑っていた。

ザーラディースは王家の遠縁だった。その家系図が正確に残っていたため、王族の一員として、末席に加えられているが、ただの名稱だけで、なんの権限も持たず、恩恵も受けられなかつた。

それなのに、自分の行動は制限される。

彼にとって、王家に列席していることは、自由を縛られ、不当な扱いを受けているとしか感じられなかつた。

それが、彼の劣等感を刺激し続けた。国王の近親者は豊かな生活を甘受しているのに、自分は平民と同列の扱い。

その待遇の差は、現在の王とその家族への嫌悪につながつた。なにも知らず、なにも理解せず、安寧な生活を保障され、傲慢に振舞つても許される、雲の上の、無能な存在。なにもできない無能どもが、胡坐を搔いて安寧に耽るだけの、唾棄すべき存在。王家の血に連なりながらも、末席であつたために、平民と同じ境遇にあつた彼からすれば、不快感でしかなかつた。

能力もなく上に立つものなど、畜生以下の存在でしかない。

畜生は田畠を耕し実りをもたらすが、彼らはただ浪費するだけ。そのために有能で優秀な自分は、王家の血が流れているにも関わらず、末席と言つことで蔑ろにされ、平民と同じ底辺から這い上がりなければならなかつた。

だが、それでも王家がこの国の万民のためにあると言つならば、その義務を果たしてもらわなければ。自分が果たしているように。

だが、邪魔者が現れた。

アファ マツド・クラノフ。平民から成り上がったとした、愚かな存在。

能力のある者が、しかるべき地位に付くのは当然のことだが、それは高貴な血が流れているという条件の元にだ。

王家を憎み、同時に羨望する。彼の奇妙で矛盾した精神は、単純な解決方法を選択した。

暗殺。

政敵だったクラノフが王家と手を結ぼうなどと考えなければ、殺す必要はなかつたかも知れなかつた。

ザーラディースが自分の地位を確固たるものにするには、アファ マツド・クラノフは将来的に邪魔になるのは目に見えていた。だからその前に消した。

王家の血筋に連なり、同時に能力を持った、相応しい者が権力を手にするために。

名の無い魔獣の召喚と制御の成功は、確実に権力を手にすることができる。

やがては、自分が王になることも可能だつ。

世界に滅びをもたらす存在が、自分の輝ける未来を拓く。

だが、下らぬ邪魔が入り、さらには死んだはずの少年が生きているかも知れないという。

たつたそれだけのことが、ザーラディースに恐怖を与えた。騎士以上に。

ザーラディースはなぜこれほどまでに、少年を恐れるのか。それは誰にも、自分自身でも理解できることだった。

つまりは罪の意識。己の犯した罪が、巡り巡つて自らに帰つてくる。

因果応報。

目に見えないにかが、誰もその存在を本当は信じていないにかが、その見える手によつて、自分を罰しに来る。

死んだはずの、死んだと思っていたはずの少年が生きていたといふことが、そんな迷信じみた妄想を加速させていった。

明朝、ラッガートは志願した四人の若者を連れてベドウイルム村を出発し、神殿を目指して進んだ。

マースムカが案内する近道は、迂回する必要がほとんどなく、前回と同じく夕刻に近付いた頃、神殿の近くまで到着した。なぜ以前にこの経路を使わなかつたのか疑問に思つたが、その答えは神殿に到着した時に理解した。

彼らの前にあつたのは、高さ数百メートルの鋭い傾斜。ほとんど崖と言つたほうがいい。

神殿へ入るには、ここを降りなければならぬ。もしそれ以外の経路を使えば、大きく迂回しなければ辿り着けない。確かに最初に使わなかつた理由がわかつた。

そして、マースムカのいう近道の意味も。

ここを直接降りれば迂回することもなく、一気に神殿へ辿り着ける。だが慎重を要するため人の足で降りれば丸一日かかるだろう。結局普通に神殿に行くのと変わりはない。そして、こんな崖を降りるための専用の装備品もなく、あつたとしても危険を伴う。

「こんな場所に来てどうするつてんだ！ おまえ、頭おかしいんじやねえのか！？ ああ！」

ダラスが早速非難の声を上げる。ここ数日の付き合いで理解したが、彼はマースムカを理不尽で不条理なほど軽蔑している。そのため能力も実力も正しく評価することなく、自分よりも先頭に立つことに我慢ならない。

ダラスを連れてきたのは、敵と戦わせるため。少しでも多く戦力を得るために。もし足手まといになることがあれば、今度は躊躇わずに見捨て、使い捨てにさえするつもりだった。

ラッガートは、自身に言い訳をしていくことに気付いた。ダラスの人格を理由に、死なせて構わないのだと言い訳している。

たとえ彼が正義感によつて志願したとしても、やはり連れてきたし、状況次第では見殺しにするだろう。

数日前とは状況が違う。すでに王女一人の命の問題ではない。犠牲を考慮しても、それだけのことをする理由があった。

名の無い魔獸。

ラッガートは彼らを連れてきた理由を改めて認識し、しかし後悔はしなかつた。

「非難を受けたマースムカは、ダラスに目を向けずに冷淡に答える。「ティダと馬で降りればすぐだ」

ダラスは続けて「ふざけたことをぬかしてんじゃねえ！ こんなもの降りられるわけがないだろうが！」

「待て」ラッガートが制する。「軍事戦略の講習で聴いたことがある。難攻不落の要塞を、その背後にある崖を騎馬軍団が駆け下りて、落城させたという」

ダラスは忌々しげではあつたが、それ以上は沈黙した。王都の騎士に自分を売り込みたいダラスは、騎士の意見に反論すれば、反抗と受け取られると危惧したのだろう。

ダラスの沈黙を確認して、ラッガートは続けて「だが、それは勿論犠牲を伴うものだつたと聞く。マースムカ、ここを降りることは本当に可能なのか？」

「前に、野生のティダがここを下りるのを見たことがあります」「それだけかよ。たつたそれだけでここへ連れて来たのか」ダラスは、なぜか嬉しそうに指摘した。マースムカをやり込める材料をつけたからか。

「来たくないのなら、来なくていい」

マースムカはやはり冷淡に答えると、手綱を軽く操つた。すると、ジャリスは一気に駆け下り始めた。一本脚で走る速度は土煙を巻き上げるほどで、しかし転落することなく傾斜を下つていく。初めて

ジヤリスに乗つたとは思えないほど。

「すげえ」リーバが思わず称賛の言葉を呴く。

ダラスが怒りの眼を向ける。自分の子分が自分以外の誰かを賞賛することなどあつてはならないことだと感じているのだろう。

リーバは身を竦ませ「あ、いや、俺は別に」

ダラスはリーバの言い訳など聞かず、自分も降りようと鞭をティダの尻に振るつた。だが動かない。

「あ？！ なにやつてんだ！？」言いつつ鞭を数回振るつ。だが、それでも動かない。「行けよ！ なにビビッてやがる！」

リーバとジェドムは、お互い困つたように顔を見合わせ、ダラスに目を向ける。相変わらずティダは動かない。

「動けつづつてんだろうが！ なにしてやがる！」

ティダは何度鞭を振るつても動こうとしなかつた。傾斜が恐ろしく、命を危険に晒すのは嫌であるらしい。

「テメエ、殺されてえのか」ダラスは感情が高ぶり、腰のナイフに手をかけた。

同時にティダはいきなり傾斜を駆け下り始めた。

「うお！」

唐突に走り出したため、ダラスは後方へ大きく仰け反り、落ちそうになるが、なんとか踏ん張り、崖を降りて行く。

セリナはその様子を見て嘆息し「私たちも行きましょう」

そしてラッガートも「ああ、気をつけろ」

二人は馬の手綱を鳴らすと、傾斜を降り始めた。

マースムカほど鮮やかには行かないが、それでも崖を転がり落ちることなく、なんとか下りて行つた。

神殿にて、ゲシュタルとザーラディースは、望遠鏡でマースムカたちの姿を確認した。

「ついに来たか」ザーラティースは恵々しげに、そして微かに怯えが混じつた声で呟いた。

ゲシュタルは「おまえは奥に避難している。対処が終わるまで我々が……」

「いや！」言いかけた科白を遮つて、ザーラティースは「私が指揮を執る」

「なに？」ゲシュタルは眉根を顰めた。

「おまえに任せられるか。おまえが奴らを殲滅しておけばこんなことにならなかつたのだ。ここは私が指揮を執る」

ゲシュタルは怪訝に思う。昨日からこの男は明らかに冷静さを欠いている。普段から自分を過信する傾向にあつたが、それでも正しい分析と判断をしていた。だが今日は明らかに様子がおかしい。

「なにかあつたのか？」

「……いや、なにもない。おまえは儀式の準備を進めておいてくれ。あとどれくらいで召喚儀式を始められる？」

なにかを黙つていてことに気付いたが、ゲシュタルは追求するのを止めた。ここまで来たのならば、取るに足らない些細なことだらう。

「基本的な準備は終わつた。半刻程度で開始できる」

「そうか。ではそこまで進めておいてくれ。ああ、魔獣召喚は私が来るまでするなよ。魔獣が出現するところは見ておきたいからな」

ザーラティースは少年が生きていることを説明しようとして、止めた。今更教えたとしても意味がない。

そしてこの男とは、これを最後に手を切ることにした。

最初の仕事、アファマッド・クラノフ暗殺依頼を完遂していないのならば、思つていたよりゲシュタルは有能ではなかつたのだ。そして今回の件も、詰めが甘い。

この男が多少の犠牲を厭わずに、奴らを全員始末していれば、憂いなく儀式に集中できたのだ。

ゲシュタルがいなければ、そもそも名の無い魔獣を召喚することができなかつたのだと、ザーラティースは考えなかつた。

崖を全員無事に降りたことを確認し、以前侵入した時と同じ場所で馬を止め、セリナは周囲を確認する。

魔法使い特有の広範囲に亘る知覚には、敵の存在は確認できない。とすれば神殿の中だろつ。

「死ぬかと思った」崖を一気に下降するといつ難行を、それこそ死ぬ思いで成し遂げたリーバが呟く。

「だらしねえこと言つてんじゃねえぞ。これからもつときつうことになるんだからよ」ダラスは言いつつ、ティダの足を蹴る。「てめえ、帰つたらどうなるかわかつてんだろつな」

ラッガートも馬を岩に留め、神殿に入る準備を整える。

「よし、では、行くぞ」

今度は、潜入して発見されずにリグヴェーダ王女を取り戻すという方法は不可能だろう。敵は戻つてくることを予想しているはず。ならば、真つ向から戦い敵を殲滅する。勝率は低いが、それしか方法はない。

マースム力が警戒する様子もなく、先頭に立ち早足に神殿へ進んで行く。

「おい、ちょっと待てよ」ダラスが「なに先に行つてやがんだ。おまえは後ろに引っ込んでろよ」

マースム力は無視した。聞こえていないのではないかと思つほど、まつたくの無反応。

「おい！」ダラスは瘤に障り怒鳴つたが、やはり反応なし。

「ダラス、ほつとけよ」とジェドム。「びびつてやがんだよ

「ああ、そうだな」

ダラスはその言葉を採用して、それ以上は止めた。聞こえがよしに舌打ちして。

だが、マースム力は不快感を示すわけでもなく、神殿を見つめているだけ。

セリナは唐突に、マースム力から得体の知れない不気味な、恐怖に近い感覚を抱いた。少年は一連の出来事から、大きく変化した。臆病さは消え失せ、物事に動じないというより、無関心なまでに冷淡。

殺し合いを経験し、父親を失ったことが、少年の心にいかなる変化をもたらしたのか。少なくとも、それは成長と呼べる代物ではないことは確かだが。

そのマースム力に続いて、セリナたちも神殿へ向かう。

「静かね」セリナはラッガートに呟いた。

神殿の正面の門へと続く階段を上がっていくが、敵の姿は現れない。自分たちが再び神殿に戻つてくることは予想しているはずなのだが。

「すぐに出でくると思ったのだが。まさか、引き落つたのか？」

「ありえないわ。名の無い魔獸を呼べる場所なんて、そうあるわけじゃない。召喚するならここだけよ」

「もう魔獸を呼び出してしまったということは」

「もし儀式を行つたのなら、私が感知している」

魔術師であるセリナは、常人より遙かに鋭敏で広域に渡る知覚を持つている。それは、その感覚を持つていらない者に説明しても理解できないものだが、それでも感知できるのは確かだ。パブロとリィジスの精神の会話を聞き取つたように。

長い階段を上ると、門を通過し、そこには前に来た時と同じ、礼拝堂のような広い祭壇の間だった。前と変わらず、三つの石像と三人の壁画が、彼らを見下ろす。

そしてその下に偶像の使徒の如く、ザーラティースがいた。

脇にボッズル。妹の仇。今ではパブロとシェルダックも含まれる。前方に五人の暗殺者。そのうち一人は顎に包帯を巻いている。リグヴェーダが碎いた顎。

その周囲を浮遊しているのはパレスと青い魔導士。

敵は待ち受けていた。

「へ、出やがったな」ダラスは不適な笑みを浮かべ「おい、リーバ、ジエドム。あれを出せ」

「ああ」

「わかつた」

二人は初めて相対する敵に多少腰が引けていたが、荷物から用意していた物を出すと、ダラスに渡す。そして自分たちも一つずつ装備しておく。

ダラスは受け取ると、それを駆動式短弓に装着した。

「ザーラディース」ラッガートは怒りを滲ませてその名を呼ぶ。

「おお、これはこれは、ラッガート近衛隊長」ザーラディースは意図的に余裕であることを見せるように「リグヴェーダ王女がさらわれたというのに、こんなところでなにをしている？ 近衛隊長ともあろう者が、こんなところで遊んでいて良いのか？ んん？」

「ザーラディース！」激昂したラッガートは叫ぶ。「貴様の企みは全て知られたぞ。観念して縛につけ」

「ふん、貴様らを始末してしまえば良いだけの話だ。私の邪魔はさせんぞ」

不意に地響きが一つ。重量のある石の塊が落ちた時のようだ。

「な、なんだ？！」ダラスは思わず声を上げる。

再び地響き。続けて鳴り続け、巨大なにかの足音だと気付いた時、後方から現れた。

身の丈二メートル以上の、四つの腕を持つ女神の石像だった。それぞれの手に剣と盾を持つ。女神像は生物のように滑らかな動きで四人に向かって足を進める。女神像の重量は見た目の通りらしく、一步進むごとに足音が響く。

続けて広間の両脇にある四つの扉のうち、奥にある一つ扉からも現われた。

動く三体の女神像。

神殿に侵入した不信心者に怒りの鉄槌を「えよ」とするかの如く武器を構える。

「怒りの女神?!」ラッガートが慄いて叫ぶ。

「いいえ!」セリナが否定する。「魔法で製造された戦闘用の石人形よ!」

ゴーレム。魔法によって仮初の知性と命を与えた自動人形。古代において戦争に使用されたと文献では記されており、その力は一体で百の兵士に匹敵するという。だが、その製造法は失われ、現存しているものは僅か四体。

「これも、あの魔導士が作ったの?」

製造法が失われた魔法の空飛ぶ絨毯と、石人形を作り運用するとは、あの銀髪の魔導士はいったい何者なのか。

女神像が少しづつ間合いを狭めていく。

前後挟み撃ち。ここまでなにもせずに入れたのは、これが狙いか。

「はっはっはっ、これで逃げ道はないな」

マースムカが不意にザーラディースへ向かって歩き始めた。

それはあまりにも自然で、誰もが、ザーラディースたちでさえも、魔法の石像の傍を通過するのを見過してしまつほど、何気ない歩みだつた。

セリナはマースムカの行動の危険に慄然とする。

「なにを考えてるの? あの子」このままでは殺される。

リーバがダラスに「お、おい、ダラス、どうするんだよ? あいつ一人で行つちまつたぜ

「ほつとけ! 勝手な真似しやがつて」ダラスは言いつつ駆動式短弓を魔法の女神像に構える。

マースムカを巻き込む可能性があるが、少年はもう魔法の女神像を通過しており、正面にはザーラディースと暗殺者。マースムカは

敵に囲まれ孤立している。今更呼び止めても意味がなかつた。

なのに、マースム力はまるで自分がどれほど危険な状況にいるのか認識していないかのように、平然としている。自信に満ちているわけでもなく、虚ろな感じでもなく、ただ自然にそこにいるのだ。

「うう……」

ザーラディースは、少年のあまりにも自然な態度に、なぜか威圧感を感じた。

待て。名前はなんだつた。ザーラディースはラッガートたちの会話から名前を思い出していく。

ラッガート。セリナ。ダラス。リーバ。ジェドム。そして目の前にいる若者は？

死んだはずの名前を思い出す。自らの野望のために、家族と一緒に殺すはずだつた少年。

それはただの偶然。ただ彼らの口からマースム力とこいつが出てこなかつただけ。それは、偶然にも正解に導いた。

「なにをしている！」ザーラディースはマースム力を指差し「早くそいつを殺せ！」

「キヒヒヒヒ。そいつを待つてたよ！」

パレスは嬉々として両手に鍔を構えた。どういたぶつてやろうか、こいつをどう虐めてやろうか。抑えきれない恍惚とした狂氣が滲み出る。

この時のために、今日は念入りに鍔を研いでおいたのだ。いつもより切れ味は良い。肉を切る感触もずっと良いはずだ。ましてやそれが、このクソガキなら。

パレスはマースム力へ向かって跳躍しようとした。魔法を使い、重力を中和して浮遊する。

だが、不意にマースム力は肩に担いでいた駆動式短弓を頭上に向けると、何気なく三本発射した。

見当違いの狙い、あまりにも大外れで、思わずパレスはその矢を目で追つて上を向いた。ザーラディースも、そしてボッズルも、他の暗殺者や、ラッガートたちまで。

パレスのすぐ隣で、鈍い音が聞こえた。

「……あ？」

パレスは聞こえた音に目を向けて、だがしばらくの間、なにが起きたのか理解できなかつた。

青の魔導士の喉元に矢が突き刺さつており、青の魔導士は喉を左手の平で押えようとしたが、突き刺さつた異物が邪魔をしてできなかつた。白い仮面の隙間から大量の血が溢れる。

「オ、ガボ、ゴボボ」

なにが起きたのか、パレスが理解したのはマースム力が駆動式短弓を向けていることに気付いてからだつた。

ほんの一瞬の隙、マースム力はなぜわかつたのだろうか、攻撃態勢に入り結界を張る一瞬前の無防備な時間。そこに、矢を上に向けて放つことで標的の意識を逸らし、その瞬間を狙つて矢を首へ向けて放つた。

敵の意識を意図的に異なることへ向けるといつ、極めて単純で基本的な、戦闘術の一つ。

「アあ？ アあ？！ あアアああああ！！」

パレスは悲鳴をあげて青の魔導士に手を伸ばそうとした。それは助けようとしてのことだったのか。

青の魔導士はマースム力に手を伸ばす。それは復讐をしてのことだつたのか。しかし、他の者には助けを求めていたように見えた。マースム力は無情に数本の矢を立て続けに放ち、それは全て青の魔導士の急所に命中する。

「ア！　ゴ！　ガ！」

一本突き刺さる」と奇妙な呻き声を上げ、合計七本の矢が突き刺さったところで、青の魔導士は仰向けに倒れた。

「アズラク！」

悲痛な叫び声をパレスが上げたと同時に、ボッズルの真横で「オグ！　オ、オゴ」奇怪な呻き声が上がった。

その声の主、暗殺者の一人には、頭の頂点に三本の矢が植木のように突き立っていた。マースムカが最初に上に向けて放った矢が、重力の法則に従い落下を始め、そして落下地点にいた暗殺者に命中した。

これも単純な方法。上に放った矢の落下地点を計算して、そして別のことに戦の意識を向けさせて、避けるということそのものを考えさせない。

暗殺者は足が覚束ない様子で立っていたが、マースムカがどざめに放った矢が額を貫き、絶命した。

「ひい！　ひいい！」

ザーラディースが無様な悲鳴を上げて尻餅をつき、一いつの死体から離れようを這うように手足を動かしていた。

「殺れ！」ボッズルが叫ぶ。「そいつを殺せ！」

瞬間にボッズルは判断した。この場でもつとも強い敵は、この年端も行かない少年だ。

ゲシュタルの考えは正しかった。人を殺すことを躊躇しないマースムカは、ジフが狩の技術と称して、そして護身術と称して教えた戦闘技術を完全に習得し、体得した、紛れもなく現役時代のアザニスの悪魔に匹敵する存在だ。



四人の暗殺者は四方向から同時に間合いを詰めた。マースム力は動じることなく駆動式短弓を向けた。だが、引き金をすぐに絞らなかつた。

向けられた暗殺者の一人は体を射線から移動したが、矢が飛んでこないので再びマースム力へと跳躍しようとして、できなかつた。他の暗殺者が移動方向にいたため、一旦動きを止めて、前にいる暗殺者は移動してから、改めてマースム力へ飛ぶ。

同時に、もしくはそれより一瞬前、乾いた破裂音が響き、頭部に衝撃を受け、後方へ弾かれた。

マースム力の手には発砲し終えたあの硝煙が立ち昇る、単発式拳銃が握られていた。

前にいた暗殺者の体で視界が遮られ、銃を撃つ瞬間が隠されてしまった。

頭蓋骨を碎かれ脳を後頭部から吹き飛ばされた暗殺者は、それに伴う身体機能が停止し、今のはマースム力が意図的にしたもののか、偶然だったのか考えようとしたが、脳の思考能力はほとんど機能しておらず、意識は急速に薄れ、考えるということもできず、三秒も経過しないうちに、完全に全機能が停止した。

障害物となつた暗殺者は、それを見て思い切りよく、向かつて右後方へ飛び、マースム力と間合いを取つた。それは暗殺者として育成されたものにはあるまじき感情、恐怖が体を走つたからだつた。しかし一瞬後にはすぐに機械的な精神状態に戻り、再びマースム力へと向かう。

撃たれた者の一の轍を踏まないよう、他の一人に今まで以上に気を配りつつ、間合いを一気に詰めた。しかし銃を向けられたため、

射線から外れるために、横へ飛ぶ。注意していたため、同じ失敗はしなかつたが、異なる失敗をしたことに気付く。

マースムカの持つ銃は旧式の単発式拳銃。弾込めをしていない今は、弾切れの状態だ。

だが、それに気付いた時は、他の一人がマースムカを攻撃範囲に捕らえた。

マースムカは一人の攻撃を駆動式短弓で受け止めた。だが麻薬で向上させた腕力に対抗しきれない。そしてもう一人の攻撃には、両手が塞がつて対応できない。

背後に回りこんだもう一人の暗殺者の凶刃が煌く。その切つ先は背中の急所へと。

マースムカは力比べをしていた腕の力を、唐突に抜いた。力で押えようとしていた暗殺者は反応しきれずに、マースムカのほうへ前のめりに倒れそうになる。

そしてマースムカは横へ体の軸を移動させ、暗殺者が倒れる方角へ後押しする。

背後から攻撃しようとしていた暗殺者と、転倒する暗殺者が、激突し、二人が一緒に床に転がることになった。そして攻撃しようとしていたナイフは、もう一人の暗殺者の胸に刺さる。

しくじつたと思った瞬間、ドキュ、という頭蓋骨が貫かれる音。絡まるように転倒した二人の、上にかぶさっている位置にいる暗殺者の口から、マースムカが後頭部へ至近距離で撃つた駆動式短弓の矢の鏃が、顔を覗かせていた。流れ出る血が下に位置する暗殺者の顔に降りかかり、視界を赤く遮る。

力任せにかぶさっている死体を押し投げると、足音が前方で鳴る。あと一步で接近攻撃の範囲に入る距離まで接近された。

暗殺者は間合いを取ろうとして後ろへ飛ぶ。目に血が入り見えなくなってしまったが、一時的なものだ。十秒もすればすぐに元に戻る。それまで時間を稼げばいい。そう判断して後ろへ跳躍した。そして永遠に見えなくなる。

背後にいた魔法の女神像の剣が、その暗殺者の背中から貫いた。跳んだ方向に待ち構えていたかのように、剣が突き出された状態で、魔法の女神像は待機していたのだ。跳躍の勢いと体重が剣先の一点に集中し、暗殺者の体を貫き、腹部から剣先が覗く。

なにが起きたのか理解できず、視界を閉ざされた暗殺者は、背後に敵、ラッガートが誰かが待ち構えていたのだと考えたが、振るうナイフは攻撃が届かず、数秒後には心臓が停止した。

四人の暗殺者が攻撃を開始してから十三秒。死体が三つ。マースム力は残りの敵、四人へ駆動指揮短弓を向けた。奇妙に感じるほど冷淡に。

そうだ。

始めからこうすればよかつた。

最初からこうしておけばよかつた。

躊躇う必要なんてなかつた。

躊躇う理由なんてどこにもなかつたんだから。

始めから迷わずに殺しておけばよかつたことだつたんだ。

ダラスはしばらく呆然としてしまった。戦いは始まつており、本來ならすぐにマースム力に続き戦闘体勢に入らなければならぬはずなのだが、そんなことも思い付かずに、呆然としてしまつた。  
「あ、あいつ、あんなに強かつたのか」リーバの恐怖の念が籠もつた咳き。

「なんだと！」ダラスが激昂する。

ふざけんじやねえ、あいつが強いだと、そんなわけねえだろ、あいつはなにもできない役立たずの臆病者のクズ野郎だ！ 今のは偶

然に決まっている、絶対にそうだ、あんなことを狙つてできるわけない、ありえないんだよ！」

言葉には出さなかつたが、ダラスは胸中否定する。マースムカの全てを否定し続ける。そうしなければ、今までの自分を、自分自身で否定してしまつことになつてしまつから。

「旦那！ なにやつてんだ！？ 早く人形を動かしてくれ！ ゲシユタルの旦那から動かし方は教えてもらつたんだろ！？」

ボッズルが叫ぶと、ザーラディースは我に返り、持つていた宝玉に念をこめる。魔法の才がない者でも、石人形を操れるようにと、ゲシユタルが事前に造つておいたもので、複雑な命令はできないが、簡単な指示なら問題ない。

「そいつらを殺せ！」

魔法の女神像は、ラッガートたちへ動き始めた。

ラッガートは間合いを詰める魔法の女神像に対して構えた。体中に残る怪我が痛むが、精神で抑制する。

セリナも魔法の短剣を展開し、濃い青のドレスは一瞬で戦闘形体の防護服へ変形する。

「セリナ、魔法の人形は倒せるのか？」

「倒せる。魔法の石人形は中核となる刻印がどこかに刻まれている。それを破壊すれば、魔法の効果がなくなつて停止するわ」

女神像には一見刻印らしきものは見えない。どこにあるのか。刻印を見つけられないなら、完全に破壊する方法もあるわ」ラッガートはその意味することを理解し、ダラスに命じる。

「ダラス！ 撃て！」

「はい！」

「ダラスは喜々として駆動式短弓の引き金を絞った。

火薬を仕込んだ矢は、風を切り女神像に向かう。今度の起爆方法は導火線。石人形に命中し、貫通力を高めた形状の鎌は表面に刺さり、導火線は火花と煙を発生させる。

女神像が自身の胸に突き刺さったものを見るかの様に顔を動かすと同時に、火薬に引火した。

耳を劈く爆発音。

マースムカの時より爆発は小さいが、それでも怒りの女神の右上半身が碎けた。

「どうだ！ 僕が考えたんだぞ！」

矢に火薬を仕込むというのはマースムカの考案なのだが、リーバとジェドムは知らなかつたし、セリナとラッガートは取るに足らないこととして指摘しなかつた。今はそういう状況でもない。

「まだ完全に破壊していいない！」

ラッガートが叫ぶ通り、女神像は崩れかけたまま接近し、攻撃を仕掛けようとしている。その一撃は必殺の剣撃。

「リーバ！ ジェドム！ 撃て！」

ダラスが指示を出すと、二人は同じ火薬仕込みの矢を放つ。爆発が二度。上半身が完全に碎かれ、続けて下半身部分も碎けた。

ダラスたちは、すぐに火薬仕込みの矢の再装填を行い始めた。

現在の敵数。樂園の暗殺者、一人。魔導士、一人。女神像二体。そしてザーラディース。

「ダラス、入口の方は任せたぞ」ラッガートは指示を出すと、前方に残っている女神像へ向かう。「セリナ、援護を頼む」

「了解」

セリナの周囲に、七つの短剣が浮遊し、展開された。

ザーラディースはうろたえる。

女神像がいきなり一体破壊されてしまった。火薬など考えもしなかつたのだ。ゲシユタルの報告は受けていたのに。

「チツ」ボッズルが舌打ちして「旦那、なにやつてんだよ。全部動かせつて」

「おお、そうだ」ザーラディースは言われてすぐに、宝玉に命じる。まずは火薬をなんとかしなければ。

そこにマースム力が矢を放つた。ザーラディースは反応することさえできなかつたが、ボッズルが一本の矢をカタールで弾き落とす。「おおつと、あぶねえあぶねえ」

マースム力は標的をボッズルに移して構える。

「おいおい」ボッズルはおどけて見せて「おまえの相手は、俺じゃあないぜえ」

空中を浮遊していたパレスが、不意にその姿が消え、次の瞬間マースム力の背後に出現し、大鍔で首を切断しようとした。

「死ねえええ！」

マースム力は鍔が閉じられる寸前、屈んでそれを回避したが、駆動式短弓が鍔に挟まれ破壊された。

魔法的に攻撃量を増加してあるのか、木製の駆動式短弓は神のようくに切断される。

マースム力は屈んだ状態のままから、地面を転がつて間合いを取る。

「よくも息子を一人とも殺してくれたね！」

厚化粧が涙と涎と汗で剥がれおち、まるでこの世ならざるもののが流れおちているかのようで、あるいはそれが彼女の狂気を表しているのかもしかれなかつた。

「おまえにも同じ目にあわせてやる。おまえの家族も、友人も、知

「！…」  
り合いも、顔見知りも、声を聞いただけのやつも、姿を見ただけで  
も、あんたにかかわった人間全員皆殺しにしてやるうううああああ

パレスは両手に大鍔を構えると、再びその姿が消えた。空間転位や瞬間移動ではない。姿を透明化する魔法。マースム力は狩猟用ナイフを構えると、目を閉じた。

ラツガートは魔法の女神像に攻撃を繰り返していた。だが材質が硬質の石材であるため、完全に破壊するのは難しい。それでも数回の攻撃で、女神像の左側の一本の腕は破壊した。

がその援護に短剣を放とうとしたその時、もう一体の女神像がラッ  
ガートに攻撃を仕掛けた。

「ぐう！」盾で防御したラッガートは、しかしその威力に呻き声をあげる。

女神像は連續して攻撃を繰り出し、ラツガートはそれを盾で防御し続けるが、衝撃に耐え切れずに、盾が砕かれた。

本居宣長著　新古今和歌集　大正元年　大正元年

折れている。

そして女神像は、火薬仕込みの矢を持つ、タラスたち三人へ疾走した。その重量からは想像もつかないほど俊敏な速度で。

え？」ショットが氣付いた瞬間——「ホ！」

ついた刃が突き抜けている。

「ジエジエジエジエジエ！」リーバが名前を呼ぼうとするが、驚愕で舌が回らない。

ジードムの駆動式短弓の矢に仕込んだ火薬の導火線が、残り一セントにまで達していた。

「逃げる」ダラスが叫ぶが否やその場を離れる。

一呼吸遅れてリーバも。

そして女神像も。

爆発。

ジードムの体が四散し、すぐ傍にあつた荷物も吹き飛んでいた。当然中にあつた火薬仕込みの矢も。誘爆は免れたようだが、火薬筒は破けて中身が拡散してしまい、もう使えない。

「火薬が！？ チクショウ！」と自分の矢を見ると、導火線が後もう少しで火薬に引火する状態だった。「うわあ！」

ダラスは狙いをつけることも忘れて、思わず発射し、火薬矢はマースムカの方向へ。

「いかん！」

ラツガートは思わず叫んだ。

自らの姿を透明化したパレスは、息を潜めてマースムカの背後に忍びよつた。空中に浮遊している状態では、足音を立てることもなく、察知されることはない。

そしてマースムカの型に鍔を突き立てようとした。まずは腕を使えなくなる。その後は足。動けない状態にして生きたまま捕え、拷問にかけてやる。どれぐらい長く生きていられるか、じっくり試してやる。

振り上げた鍔を突き立てようとした瞬間、マースムカは前方へ地面を転がって回避。すぐに振り向いてクロスボウを発射。

矢はパレスの胸に命中。だが魔法防護を附加されたドレスは、鎧を皮膚まで貫かせない。しかし攻撃が命中したため、透明化の魔法が解除されてしまった。

「キィイイヒヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

パレスはその場で連續して鍔を繰り出す。ナイフとは異なり挟むという動作を必要とするが、両側から挟み切断し肉を抉り取つたその傷は、直すことができずに出血が続くことになる。

マースム力は後方に下がりながら鍔を回避するが、いつまでも続くわけではない。

壁際まで追い込んだ。

「もう逃げられないねええ

愉悦の笑みでパレスは両手に持つ鍔を構え、突きだした。

マースム力は狩猟用ナイフを、挟みの根元へ叩きつけた。

「なに！？」

鍔の可動部分が変形して動かなくなり、パレスは一瞬戸惑う。そしてマースム力が至近距離で、パブロが残した六連装拳銃を発砲するのを見逃してしまつた。

魔法防護で防いだが、衝撃は重力中和をして浮遊しているパレスを後方へ弾き飛ばし、そしてダラスが放つた火薬付きの矢が、パレスの背中に刺さつた。

「あひ！ あひいい！」

悲鳴をあげて振り払おうとするが、取れない。結界によつて体には到達しなかつたが、矢の鏃は両側が鉤爪状になつてゐるためドレスから取れ難いのだ。

「ひいやあああああ！」

そして爆発。

残虐性と狂気に彩られた精神の持ち主である、ドレスで着飾つた魔導士は、その復讐を達成することなく、拍子抜けするほど簡単に、死んだ。

ザーラディースは念じる。あいつだ。右顔に火傷の跡のある少年

を殺せ。

この中でもっとも恐怖を『える存在である少年をなんとしてでも殺さなければならぬ。

すべての原因は少年にある。騎士が神殿へ来たことも、そして計画に狂いが生じたことも全て、少年が生きていたために起きたに違いないのだ。

ザーラディースは理屈にならない理論で、マースム力に標的を定める。あるいは、それは本能的な恐怖に起因し、説明など後付けにすぎなかつたのかもしれないが。

女神像の一体は攻撃対象を明確に指示され、他の者を無視して、マースム力へ向かつて跳躍する。

マースム力は横へ跳ぶ。その場所の床に女神像の剣が真上から叩きつけられた。地響きのするほどの衝撃。一撃でも命中すれば、ジエドムと同じ運命を辿ることになる。

「おお！ いいぞ！ 殺せ！ 殺つてしまえ！」

ザーラディースは、まるで新しい玩具を『えられた子供のようこ歓喜して、快哉を送る。

マースム力は一瞬ラッガートたちに目を向けると、突然踵を返して、全速力で扉の一つへ走った。女神像を一体を引き付けるためか。

「逃がすな！ 早く追え！」

ザーラディースの意思を受けて、女神像はマースム力を追跡した。

神殿の奥へ走り続けたマースムカは、一旦壁の影に身を潜めて隠れる。

走ってきた通路の方角から、女神像の影が見える。歩いているのか、壁に映る影の速度は遅い。だが、確実にこちらに近づいてきている。

どうする？

駆動式短弓は魔導士に破壊されてなくなつた。パブロの六連装拳銃の弾は、あと三発しか残つていない。単発式拳銃はまだ三十発ほど残つているが、一度発砲するたびに弾を再装填しなければならぬ。一撃で女神像を破壊するのは不可能だ。狩猟ナイフでは、強硬度の石像には貧弱だ。

あの憤怒の女神の姿をした、魔法の石人形は、一撃で仕留めなければ、次には自分が死ぬことになる。

だが、決定打となる攻撃方法がない。

セリナが言つていた刻印に命中させれば可能かもしぬないが、どこに刻まれているのかわからぬ。

女神像の姿を改めて確認しようとしたが、その姿が見えなかつた。え？

「！」

瞬間、背中に電撃が走つたかのような感覚に襲われ、思わずその場から飛び退いた。

同時にその壁から衝撃音。いつの間に移動したのか、すぐ傍で女神像が右拳を繰り出したのだ。直感的に避けたので助かつたが、次は避けられない。

マースムカは連装式拳銃を発砲し、間合いを取る。もつとも脆そ

うな首筋を狙つた。頭部を破壊すれば、動きを止めるかもしない。  
女神像は盾を構えてそれを防いだ。

三発の弾はすぐになくなつた。

そして女神像は一直線にマースムカへ突進し、間合いを一瞬で詰める。

マースムカは女神像へ向けて両手を伸ばす。格闘をまったく知らない子供が怯えのあまりにしてしまう、攻撃を防ごうとして両手を突き出す行動に似ていたが、体重の軸がまったく違う。そして手が女神像と接触した瞬間、マースムカは半身を右へ回転させ、体重軸を後方へ移動させた。

女神像はその突進力を利用され、投げ飛ばされた。

それはジフから教わつた、興奮したティダを取り押さえる時の技術。力に勝るティダを転倒させて捕らえる方法。

マースムカは知る由もなかつたが、それは東洋武術における合氣に似ていた。

女神像自身の速度に、マースムカの力が加わり、体は縦に回転して、女神像は頭から床に叩きつけられ、その頭部に亀裂が入る。

「うつ」

だがマースムカの右手首にも激痛が走つた。女神像の力と速度も対応しきれず、関節を痛めたようだ。骨が折れていることはなさそうだが、数日は使い物にならない。

床に叩きつけられた女神像は何事もなかつたように起き上がる。マースムカがそのことに気付いた時には最高速で迫ってきた。回避が間に合わない。マースムカは死を予感した。

だが、女神像はマースムカの真横を通過して、そのまま壁に激突した。酷く滑稽なほど。

「え？」

マースムカは疑惑の声を上げた時には、女神像は起き上がり再び疾走する。だが、見当違ひの方向へ向かい、唐突に転倒した。

「そうか……」

先程女神像は頭部を強打した時、人間でいう平衡感覚が狂ったのだ。それは微小なものが、おそらく最高速度で移動する時は、その僅かな差が大きく現れる。

頭部に入った亀裂が原因か。

マースム力は勝機を見出した。

同時に全速力でその場から離れ始めた。

「付いて来い！」

儀式の準備が終了したことを確認したゲシュタルトは約束の報酬を渡した。

傭兵団の頭は袋一杯に入っている金貨・宝石類を確認する。どこへ行つても換金可能なため、特定の国を持たない傭兵たちには、こういった報酬が喜ばれる。

ゲシュタルトは続けて「おまえたちはここから離れろ」「どこで待機していればいい？」

指示に具体性を求めた傭兵団の隊長に、ゲシュタルトは首を振る。「違う。この神殿から離れると言つた。仕事はもう終わりだ」

十人の傭兵は顔を、戸惑つたように見合わせる。仕事はこれで終わりだと言われても、納得するわけではない。敵が襲撃していると、いう連絡は受けた。先程は爆発音がここまで届いた。戦いは始まっている。それなのに戦わなくとも良いと言つのか。

「敵はどうするんだ？」

「ザーラディースは負ける」

断言するゲシュタルトに、傭兵団は怪訝に思つ。

「負けるのに、加勢しなくてもいいのか？」

「おまえたちが加戦しても結果は同じだ」

それは傭兵団の実力を侮つていいでも、過小評価しているでもない。正確に評価した上で、負けると分析している。

「戦力差を考えれば、ザーラディースのほうに分があるだろう。ラツガートがどのような対策を考えてきたのか、それは想像しかできないが、おそらく戦力差は埋められない。だが、それを考慮に入れても、ザーラディースは負ける」

ザーラディースは王国軍の将軍職に就いているが、戦闘訓練を受けたことなど一度としてない。事務員として上り詰めただけの男だ。実戦経験も、実戦における知識もない。そんな人間が指揮を取れば、如何に兵士が優秀であっても勝ち目などない。ボッズルが善戦すればあるいは勝てる可能性がでるかもしれないが、おそらく無理だろう。

傭兵团を投入しても、大して変わりはない。

「それに、おまえたちの仕事はこの儀式の準備をすることだけだ。ならば、命を無駄に捨てる事はないだろう。裏の出口はわかるな？ そこからなら安全に撤退することができるだろう」

説明を聞いた傭兵团は、自分の雇い主を、目的のために利用しても平然としているゲシュタルに慄然としたが、彼らを雇用しているのは、正確にはザーラディースではなく、ゲシュタルだ。彼の指示に従うのが筋だろう。

「あんたはどうするんだ？」

「私は、まだやることが残っている」

名の無い魔獸の召喚。

「それが、あんたの目的なのか？」

ゲシュタルは答えなかつた。

名の無い魔獸を召喚することだけが目的のはずがない。もしかすると、この男が狂気に犯され、世界を滅ぼそうとしているのかとも思つたが、それならば逃げるなどとは言わないだろう。命を無駄に落とすことはない、などとは言わないはずだ。

事実、ゲシュタルの眼は狂気には程遠い。どこか疲れたような眼だが、正気だ。

「まあ、いいさ。それじゃあ、俺たちは行くぜ。成功するといいな」

傭兵団は深く追及せずに、神殿から脱出することにした。

傭兵たちが神殿から撤退するのを確認した後、儀式の間に来たゲシュタルは、一通りの確認をする。

複雑な魔方陣。魔法の媒体。場に満ちる、靈脈から給汲される強大な靈力。

完全であり、完璧だ。

そして祭壇に横たわるリグヴェーダ王女。

彼女を殺せば、名の無い魔獸は出現する。その身に秘めた万物を支配する神の力によつて。

ゲシュタルは短剣を握り締め、彼女に声をかける。

「リグヴェーダ王女。なにか言い残すことはあるか

それは犠牲とする者へのささやかな慈悲だったのか。

祭壇に手足を鎖で束縛され、身動きの取れないリグヴェーダ王女は、逃げ出すことも、抵抗することもなにもできないにも関わらず、ゲシュタルに向けるその目は、不思議にも怯えがまったくなかつた。つい昨日までは、抑えても隠しきれない死の恐怖があつたのに、なぜ今はないのか。その理由はわからないが、騎士たちが助けに来たことが、彼女になにらかの精神的な成長と強さを与えたのかもしない。

そして彼女は淡々と告げる。

「ある」

続きを口にしない。こちらからの質問をあえて待つてているのだ。

「なんだ？」

「殺さないでくれ」

「……」ゲシュタルは沈黙。まったく予想のしていなかつた言葉だつたので、珍しいことにこの男は少し呆然としてしまつた。

「どうか、助けてくれ」リグヴェーダは重ねて「ついでに逃がし

てくれるありがたい。死ぬのは嫌だからな。特に生きる理由があるわけではないのだが……ああ、これはここ数日牢の中で考えて、自分には人生の目標がこれといってないことに気付いたと言うことなのだが、しかしそれを踏まえても、とにかく死ぬのは絶対に嫌だ、という結論に至った。そういうわけで、ここで逃してくれるなら、まあ、おまえを躍起になつて捕まえることはしないから、ここは取引ということで、殺すのはなしにしてくれないか？」

ゲシュタルは無言のまま、彼女の言葉を考えた。

もしかすると時間稼ぎのつもりなのかと思ったが、すぐに違うのだと理解する。彼女は、[冗談]を言つてゐるのだ。こんな状況で、自分を殺そうとしている相手に向かつて、つまらない[冗談]を言つているのだ。

「クツクツクツ」ゲシュタルはいつしか笑い始める。つまらない[冗談]だが、おかしかつた。「ハツハツハツハツハツ」

リグヴェーダは不敵な笑みを浮かべて、それを眺めていた。何一つ感情を見せなかつた男が、今彼女に始めて、その感情を隠すことなく見せてゐるのを、彼女自身面白い見世物のように、眺めていた。「ああ、いや、失礼」ゲシュタルは笑いの発作を抑えつつ。「悪いがそれはできない」

「で、あらうな」手足の自由がきけば、肩を竦めて見せただらう、そんな同意。

「そうだ。では、そろそろ覚悟を決めていただこう」

「ああ、待つてくれ」リグヴェーダは思い出したように「今度はこちらから質問をしたい」

ゲシュタルは怪訝に「なにか？」

「おまえの目的はなんだ？」

「ザーラディースが説明しなかつたか？」

「違う。おまえの目的だ。ザーラディースは、帝国の新兵器に対抗するためだと言つ口実で、王国軍掌握の手段として魔獣召喚を考えているようだが、おまえは違うのだろう。ザーラディースを利用し、

暗殺教団、楽園を使い、魔導士を招き、傭兵団を雇い、そうまでして達成しようとする、おまえの目的は、なんだ？」

ゲシュタルはリグヴェーダに敬意の目を向けた。少しの時間で、その人物の人となりを見抜き、目的の相違を見抜いた、その観察眼と洞察力。

もしかすると、将来とてつもない大人物になるかもしれない者を殺めようとしているのかもしれない。もつとも、それで名の無い魔獸を呼ぶことを止めるつもりはないが。

「……どう説明すればいいのかな」答えを思案して「簡単に言えば、私の目的は、神を殺すことだ」

「……なに？」リグヴェーダは戸惑つた。「なんだって？」

「私は神を殺す。……いや、違うな」言葉を捲すように視線を彷徨わせ「私は神を消滅させたいのだ。あの強大で偉大な存在を。過去、現在、未来、その全ての時空から、神の存在を消去する。それが私の生き延びる唯一の方法だからな。そして名の無い魔獸ならば、それが可能だ」

「どういう意味だ？」リグヴェーダは純粹に理解できずに問う。

「私は……」

ゲシュタルは背を向けて、頭上を仰いだ。リグヴェーダからはその顔が見えなくなる。

「……私はあの日、あの時、神が如何なる存在であるのかを知った。そうして私は、我らは、神の配役によって滅びの運命を背負わされた。おまえには理解できないだろうが、おまえたち人間には理解できないだろうが、我らは神を滅ぼさねば、我らの未来を手にすることはできないのだ。そして名の無い魔獸は、今や神を滅ぼす唯一の方法なのだ。死も、炎の王も役割を果たした今、残された名の無い魔獸だけが最後の手段」

ゲシュタルの肩が震える。それは笑っているのか、嘆いているのか。

「私にあの頃の力があれば、死が我らを地獄の底へ落とす前の力が

あれば、このような手間は要らなかつた。だが、皮肉にも、力を失つたことによつて、神の瞳から逃れることができたのだ。神は私を見逃してしまつた。まったく、皮肉なものだ

「おまえは一体何者なのだ？」

「私は……」

マースムカが女神像の一體を引き付けて、扉の向こう側へ走つてから五分ほど経過した。

「うおおお！」

ラッガートは雄叫びを上げて、女神像の盾を持つ右腕を粉碎した。同時にセリナが破壊の力を帯びた短剣を三本同時に投擲する。頭部、胸部、腹部を連續して粉碎する。

女神像は原型をどぎめず、動きを止め、下半身部分が倒れた。魔法の刻印を破壊されたのかはわからないが、少なくとも動く状態ではなくなつた。

「やつた！」リーバが駆動式短弓を構えたまま、快哉を擧げる。

「グウ」だがラッガートは膝を突いた。

元々強行軍で神殿に来たために体力は限界に達し、新たに受けた傷から血が流れ、先日受けた傷も開いてしまつた。

セリナも肩で息をしている状態で、体力がほとんど残つておらず、魔法はもう使えないだろう。左腕からも出血が再び始まつてゐる。治癒魔法である程度は塞いだが、激しい動きで開いてしまつたらし

い。

「こちらはすでに満身創痍。

だが、やつらの戦力はボッズルと、暗殺者が一人。そしてザーラディース。魔法の女神像を一體とも破壊した今なら、まだ勝算はある。

「フハハハハハ」

しかしザーラディースは勝利を確信した哄笑。そしてザーラディースが持つ宝玉を掲げると、扉の一つからさらに一体、魔法の女神像が現れた。

「チクショウ！ まだいたのか！」

ダラスが悲鳴を上げた。

「戦力を隠すのは基本だ、基本」

女神像は突進して剣を振り回す。

少年二人は走り回つて逃げる。

ラッガートは盾で防いで反撃に転じたが、振り降ろす剣の威力は弱く、魔法の女神像はその攻撃を腕で直接受け止めると、拳を腹部へ繰り出す。

「ぐぼ！」

まともに受けたラッガートは苦悶の声を上げて床を転がる。

「う、ゴボ」口から夥しい血を吐いた。内臓に損傷を受けている。

女神像は続けてセリナに剣を振り下ろす。セリナは横へ転がつて回避。その位置の床に、突き刺さる勢いで叩きつけられる。剣先から火花が飛ぶほどだが、床に損傷はない。時間が停止された物質であるため、どのような影響も伝わることがない。

魔法の女神像は床に伏せるセリナを蹴り飛ばす。

「あうっ！」

右腕で防御したが、蹴りの威力は彼女を数メートル浮かせ、そしてセリナは床へ叩きつけられた。そして蹴りを受けた右腕が不自然に曲がっている。骨が完全に折れた。

ラッガートとセリナは動ける状態ではなく、ダラスとリーバに至つては、火薬がなければ攻撃方法などない。

魔法の女神像を破壊するだけの戦力はない今、勝算は完全になくなつた。

これで終わりか。ラッガートの精神に諦念が芽生えた。

まだ。ラッガートは氣力を振り絞る。ここで諦めでは死んでしまつた者たちに申し訳が立たない。命が終えるその瞬間まで、戦う

ことを諦めるな。

だが、その闘志とは裏腹に、体は思うように動かず、立ち上がる  
ことさえできなかつた。

「ボッズル、やつてしまえ。そいつらはもう戦えん。残り一人も、  
雑魚だ」

「わかつてるつて」ボッズルは言いつつ、カタールをジャッグルし  
ながら四人へ足を進める。「さて、どう料理してやろうかね。刻  
んで焼いて茹でて炒めて蒸して煮て揚げて食わずに捨ててやろうか  
あ、なー！ ゲーゲッゲッゲッゲッゲッ」

ザーラディースは勝利を確信した笑い声を上げる。

「ハハハハハ！ わかつたか！？ 私に逆らうことがどういうこと  
か！？ 私に逆らうものはみな死ぬのだ！ 貴様らにはなにもでき  
ん！ 無力な貴様らができることは、ただの無駄死にだ！ 犬死が  
お似合いだ！ ハーハッハッハッハッハッ！」

全てが自らの思いのままになる充実感が、狂喜の嘲笑を搔き立て  
ていた。

「そいつはどうかな」

唐突に頭上から声が聞こえた瞬間、なにかが投擲され、丁度女神像の頭部に落下。次の瞬間、爆発が起きた。女神像の頭部の破片が周囲に飛び散り降り注ぐ。だが、致命打にはなっていないのか、視覚情報を捕らえる部位を失つても、動き続けている。

しかし、さらに爆発物が落とされた。筒状の紙製の入れ物に、火薬を封入した物。ダイナマイト火薬筒の導火線の火花が輝き、それは火薬に引火すると同時に、その威力を最大限に發揮する。

女神像の至る箇所で、爆発する。

そして爆発が收まり、煙が晴れた時、女神像の姿はなく、大小の石材の破片が散らばっているだけ。

爆発物を投げたのは、神殿の天窓の淵に救世主の如く堂々と姿を見せるのは、バンダナで髪を纏め、遮光グラスのゴーグルをつけた男。

「パブロ！」セリナはその名を呼んだ。

「遅くなつてすまねえ」

パブロが言いつつそこから続けて、導火線に火が付いた火薬筒をボッズルへ向けて投げた。

「うお！」

ボッズルはその場から飛び退く。爆風に煽られ体勢を崩すが、空中で整えて着地する。

だが、その横で「ぐえ」蛙の潰れたような声。

見るともう一人の麻薬服用暗殺者が、その腹と胸に一本ずつ、顔に一本、合計四本の矢が刺さっている。すべて急所に命中し、ほぼ即死だろつ。

爆風に煽られた隙を狙つて撃つたのは、駆動式短弓を構えているリーバ。自分のしたことが半ば信じられないかのよつた、しかしそれでも敵を仕留めたことで喜びが混じつた表情。

「や、やつた」

ダラスはそれを見て「てめえ！ 勝手なことするんじゃねえ」この期に及んでも、まだ手柄を立てるこことしか考えないダラスに、リーバは戸惑うだけ。

「ええ？！ 僕はただ敵を倒そうと……」

「うるせえ！ 黙つてろ！ 僕が英雄になるんだ」

ダラスはボッズルへ向けて駆動式短弓を撃つた。

「おわ！ つと、とと」ボッズルはそれを難なく躲す。そしてザーラディースに「旦那、もつだめだ。僕は逃げるぜ。旦那も逃げな」

「なにい！？」

あまりにも簡単に敗北宣言し逃亡しようとするボッズルに、ザーラディースは驚愕するが、ボッズルは構わず扉の一つへ走った。ザーラディースも遅れて反対の扉から逃げ出す。

「ま、待て！」セリナはボッズルを追跡しようとするが、体力の限界で、意思に反し、足は引きずるようにしか動いてくれない。

「逃がすかー！」

だがボッズルが逃げようとした扉から、場違いに可愛らしい少女の声がすると、ボッズルが開いている扉を通過する直前、見えない壁に激突したかのように弾き飛ばされた。

「おわ！ な、なんだあ！？」転倒したボッズルの両膝に弾丸が命中した。「あひ！ ひあ！」

奇怪な悲鳴を上げて足を押える。明らかに膝の骨が砕けている。これでは麻薬による強化した身体能力も意味を成さず、動くことができない。

硝煙が立ち昇る六連装拳銃を手にしたパブロが、セリナに叫ぶ。

「殺れ！ セリナ！」

今が好機。膝を砕かれたボッズルは、今までのよつたに避けること

ができない。そして守る魔導士も、部下も、魔法の石像もない。セリナは残つた体力を振り絞り、一本の短剣に魔力を込めた。

「行け！」

一筋の閃光が空気を焼き飛くすほど輝く。

「ウソオオオオオ！？」

樂園の暗殺者、最後の一人の、最後の叫び。

パブロは神殿の上から降りた。

「よお、久しぶり。元気か？」

様子を見れば、元気のはずがないのはわかつていたが。

「あたしもいるよ

隣にリイジスが来た。こんな状況だといふのに、子供みたいに元気いっぱいに笑う。

「なんだ、それは？ 背中から、蜻蛉の羽が生えているぞ」 ラッガートが尋ねる。

「あれ？」 パブロは首を傾げて「あ、そうか。おまえらは初めて会うんだつたな」

「ああ、そう言えば、そつだつたね」 リイジスも気が付く。

パブロはリイジスを示して「改めて紹介する。密告屋のリイジスだ」

「よろしくう」 軽く敬礼して、羽根を広げて見せる。

「妖精族。炎の民か」 ラッガートはその正体は理解したようだ。

「は、はじめまして」 セリナが息切れしつつ答えた。

限界まで魔法を行使したので、もう立つこともできないようだ。

言葉をつかうことが重労働だらう。切断された左腕からも出血している。

「パ、パブロ。でも、どうして？」

「ああ、無理に喋るな。辛いんだろ」 パブロは制する。

「だが、どうして助かつたんだ?」ラッガートが代わりに質問する。

「あの傷は致命傷だつたはずだ」

パブロの衣服はナイフが突き立てられた跡があるが、その下の皮膚は綺麗で、傷跡一つない。

「それはな……」リイジスに目を向けて「セリナを頼む

「あいよ、つと

リイジスはセリナの胸に手をかざすと、その手の平と、蜻蛉の羽が、ぼんやりと輝き始めた。

セリナの左手の出血が止まり、他にも敵に受けた傷も消え始め、不自然に曲がった右腕も元に戻る。

「あら?」

パブロは肩を竦めて見せた。

「こういうこと。とはいっても正直かなりやばかったんだがな。あと数分でもリイジスが河の中から俺を見つけ出しが遅れていいたら、まあ、助からなかつただろうな」

勿論、炎の民であるといつことも、助かつた要因の一つだらうが、そのことは黙つておく。

そして河の中から這い上がつたのだが、分岐している別の支流に流されたため、ベド・ウィルム村からは遠く離れた位置だつた。運よく砂漠を旅する旅隊カフィラ商に助けられ、馬と武器を調達し、急いでベド・ウィルム村に向かつた。今日の朝になつて到着したが、村人から事情を聞くと、すでに出発したあとだつた。そして急いで跡を追つてきた。

ラッガートは少女の姿をした妖精に目を向けた。

「妖精族が密告屋、か。おまえは一体何者なんだ?」

「秘密だ」言つてからパブロは、気取つて顎に手を当てる「ふつ

ふつふつ、俺は謎に包まれた男なのだよ、ラッガート君」

「王女の諜報員だというのは、セリナから聞いたのだがな」

「あら」パブロは肩を落とし「言つちやつたの、それ

「その部分だけはね」セリナは樂になつたのか、上体を起こし「で

も、他のことは言つてないわよ  
「他のこと？」とラッガート。

「ああ、秘密秘密。企業秘密だ」パブロは手をパタパタと振つてから「リイジス、ラッガートも頼む」

「はいはい。まったく人使いが荒いんだから」

言いつつラッガートの怪我も治し始めた。完全に治すには時間がかかるが、ある程度ならば急速に治癒できる。傷口を塞ぐだけなら問題ない。

「左腕はあるか？」

セリナは首を振つて、ボツズルを示す。

「やつが持つて行つたけど、今はどこにあるのか」

ボツズルがどこかへ捨てたとしたら、広大な大峡谷で発見するのは不可能に近い。運よく発見できたとしても、おそらく腐敗か乾燥が始まつてゐる。炎の民の力でも、そんな状態の腕を接合するのは不可能だ。

「そうか」パブロはジェドムの死体に目を向けた。「名前知らないけど、あいつはもう助からないぞ。死んだら、それまでだ」

「ああ、わかつてゐる」ラッガートは始めから納得していたかのよう答える。

「すまない。もう少し早く来ていたら」

「いや、おまえの責任ではない。全て私に責任がある。危険を承知で勇志を集つたのだからな」

「……あ、あの」それまで呆然としていたダラスが「俺たち、ザーラディースを追いかけます」

言つが否や、ザーラディースが消えた扉へ一人は走つた。

「あ、おい」パブロが止めようとした時は、扉の向こうへ。「元気だね、あいつらは」そして周囲を見渡し「他の連中は？」

「マースムカは魔法の石像の一体を引き付けて、あの扉へ入つた」ラッガートが扉を示す。「早く追いかけなければ、危険かもしれない」

「わかつた。ルマジヤーンとショルダックは？」

ラッガートとセリナは答えずに目を伏せた。それだけで、意味は伝わった。

「……そうか」パブロは六連装拳銃の弾を入れ替えると「リイジス、二人を頼む」

「どこへ行くの？」

「王女の所だ。マースムカも探さないと。ああ、寝とけつて」一緒に行こうとしてのことだろう。立ち上がりうつする一人を制して「あとのことは俺に任せな」

そしてパブロは扉の向こうへ消えた。

リーバはダラスに聞く。

「なんだよ、あれ？ 妖精族って本当にいたのか？」

迷信深い大峡谷の住人でさえ、炎の民も名の無い魔獸も、おどぎ話の存在にすぎなかつた。

「いたじやねえかよ。見ただろ」

「でもよお、騎士様、なんであんな平然としてるんだ？」

ラッガートが平然としていたのは、驚愕することが続いて起こつたため感覚が少し麻痺していただけなのだが、それは一人にはわからなかつたし、セリナが平然としていたのは、すでに知つていたからで、それも一人にはわからないことだつた。

「知るかよ、そんなこと。それより、今はあのザーラディースを倒すことが先だろ」

ダラスは自分の活躍する見せ場がまったくなく、このままではリグヴェーダを救つた英雄になれないのではないかと、焦燥していた。

リーバはそんなことを考えなかつたが、言つていることはもつともなので同意する。

「ああ、そうだな」

そして二人はザーラディースを探して神殿を走り回つた。

三分後、二人はどこにいるのかわからなくなってしまった。自分たちがどこにいるのかが。

怒りの女神のような姿の魔法の石像には眼がなく、眼に当たる部分は少し窪んでいるだけなのに、まるで誰かを探すように首を左右に動かしていた。もしかするとその部分は人間のような眼球はないが、視覚となる機能が付いているのかもしれない。

とにかく、視覚に頼つて周囲を認識しているのなら、好都合だ。通路の角の陰に隠れて様子を伺つていたマースムカは、突然女神像の前に出て姿を見せた。

距離二十メートル。十字路になつてゐる通路の陰から現れたマースムカを、女神像は確認すると同時に走り始めた。

その速度は若干遅いが、バランスを崩すことなく走つてゐる。どうやら平衡感覚の調子が狂つてゐるのだと、この命を持たぬ人型は理解して、速度を調節してゐるらしい。

マースムカは背を向けて全速力で走つた。女神像が追跡してくるが、女神像は最大速度で動くとバランスを崩して転倒すると確信していた。

一人と一体の競争は、すぐに終わる。

百メートルも走つたところで、マースムカは開けた場所に出た。直径十メートルほどの螺旋階段。以前、あのドレスを来た魔導士と戦つた場所。そして初めて人を殺した場所。

マースムカはそこへ出る直前、なにかを飛び越えるように軽く跳躍した。そして螺旋階段の手前で停止して、女神像を待ち構える。

「来い」

酷く冷淡に女神像を見据えて呴くマースムカに、女神像は反して急停止する。先程の突進を利用した投げを狙つてゐるのだと分析したのかもしれない。このまま走り続けると、螺旋階段の遥か下へ落

下することになる。

走る速度の勢いを殺すため、地面を数メートル擦る。

その足元で、爆発が起きた。それは小さいが、女神像は転倒して数メートル転がる。右足首と、左膝あたりまでが砕けた。

マースム力は簡単な罠を仕掛けておいた。旧式拳銃の火薬を、足元の床に撒いて、足を踏む、理想としては止まるために擦るのが良いのだが、とにかくそうして床の部分に撒かれた火薬が瞬間に発火し、その中心に設置した薬莢が連續して反応を起こす。

マースム力は女神像の状態を離れた位置から確認して、ふと些細な疑問が起きた。

予想より爆発が小さかった。膝の辺りまでしか砕けていない。ダラスが女神像を吹き飛ばしたが、あれは専門の火薬を使つたからなのか。だが、先日門に矢で使つた時は、予想以上に爆発力があり、破壊専門の火薬と同等だった。

だが少なくとも、足を破壊された女神像はもう動くことができない。そして近付かないほうがいいだろう。迂闊に接近して掴まれたら組合状態になる。その状態では力が圧倒的に上の女神像には対抗できない。

女神像を完全に破壊できる武器もない。薬莢は、もう五発分しか残っていない。

マースム力は這いざる女神像をそのままにして、軋むように痛む手首を押えつつ、螺旋階段を降り始めた。ここまで来たのなら、ラッガートたちのところへすぐ戻るより、一旦地下牢を確認したほうがいいだろう。今も地下牢にリグヴェーダが閉じ込められているかもしれない。

しばらくして、最下層に到着する。

広い空間。螺旋階段の下から一回り下辺りで、壁が一部屋分なくなり、それだけ広がっている。螺旋階段だけはそのままの広さなのだが。

マースム力は右側の扉へ向かう、その先は直線の階段があつて、

それを降りると地下牢だ。

この事件にかかる前に来た時は不気味で、恐ろしくて仕方がなく、逃げるようにして帰つたことを思い出した。成人式の一ヶ月ほど前のことだつた。あの時は、こんなことが起こるなどマースム力には思いもよらなかつた。

リグヴェーダと再会することも。

マースム力は扉に手をかけた。

なにかが叩きつけられたような大きな音が螺旋階段に響いた。まるで重量のある物体が落下したような音。

マースム力は即座に振り向いて拳銃と狩猟用ナイフを同時に構えるが、螺旋階段にはなにもない。

「？」マースム力は疑問符を浮かべた。

だが再び大きな音。上だ。螺旋階段の一階上ほどで音がした。目を向けると、女神像が逆立ちして降りきっている。先ほどは角度の問題で見えなかつたが、逆立ちしたことによってその姿が見えるようになつた。

その酷く滑稽なその姿は、見る者によつては唖然とするか、戦慄するのか。マースム力はどちらだつたのか。

女神像はバランスを取るためかゆっくりと降りてくるが、不意に転倒し重い音が響く。そして再び立ち上がるが、正確には逆立ちしようとしたが、今度は失敗して前転のように転がり、そして止まらずに螺旋階段を一週すると、マースム力のいる最下層まで転がり落ちた。

女神像は再び逆立ちすると、腕を曲げて反動をつけ、マースム力へ向かつて跳躍した。腕だけで飛んだとは思えないほどの速度。マースム力はその場から横へ飛んで回避。

女神像の体当たりによる、重量と速度が合わさつた攻撃力は、一

度でも受けると、内臓が破裂するか、骨を碎かれるか、それとも両方か。

マースム力は動きを確認できるように間合いを取る。

足が使い物にならなくなつた今の状態の女神像は、移動に腕を使つてゐるためか、予備動作が大きい。落ち着いて確認すれば回避は難しくない。それに女神像は武器を持っていない。移動に腕を必要とするため放棄したようだ。

だが、どうする？

武器は旧式の単発式拳銃のみ。そして弾は残り五発。女神像を破壊するのは、全弾使つたとしても不可能。

女神像は再び逆立ちして、マースム力へ跳躍した。意思も命も持たない魔法の女神像は、足を失つてもその命令を最後まで実行しようとしている。体当たりだけで殺そうというのか、それとも移動力が関係ない掴み合いに持つていいこうとしているのか。

「くそ！」

マースム力は横に転がつて回避。

女神像は攻撃対象に命中しなかつたため、勢いで床に激突し、數メートル滑る。

しかし、いつまでも繰り返してはいられない。こちらの体力が尽きるのが先か、それとも女神像がその愚考とも取れる攻撃を繰り返して、体が碎けるのが先か。だが、女神像は頑丈にできている。短時間で碎けることはないだろう。避けるだけで終わらせるなら、長期戦を覚悟しなければならない。

しかし、そんな時間があるのか。リグヴェーダはこうじてゐる間にも生贊にされて殺されるかもしないのに。

再び逆立ちをする女神像から、小さな破片が落ちたのをマースム力は見逃さなかつた。

あの女神像は体の数箇所に亀裂が入つてゐる。最初は頭部。次は足。そして階段から転がり落ち、己の体を省みない攻撃のため、亀裂が徐々に広がつてゐた。

決定的な衝撃を与えるべきは碎けるかもしない。上手く銃撃を亀裂に命中させることができれば。

だが、外せば体当たりを食らうことになる。命中したとしても、本当に碎けるのだろうか。

女神像は腕を曲げて反動をつける。

やるしかない。マースム力は旧式拳銃を向けた。

女神像がその体をマースム力に命中させようと、二度目の跳躍。同時にマースム力は発砲した。狙いは頭部。

砕ける。なにに祈ったのか、祈りは聞き届けられたのか、命中した瞬間、頭部が大金槌で力任せに叩いたかのように割れた。

「やつ」た。と快哉の声を上げようとして、できなかつた。まだ無事だつた胴体部分が迫つた。

咄嗟に横へ飛び、しかし完全には避けきれず、女神像の右腕が通過するさいに脇腹を殴打する。

「ウツ」マースム力は呻き声を上げて膝をつき、肋骨が折れたのを自覚した。

だが、生きている、内臓もやられていない。それに今度こそ女神像を破壊した。

残つた胴体部は壁に激突し、その亀裂がさらに広がつていった。

マースム力は立ち上がりうとしたが、唐突に右足になにかが接触して、再び膝を崩す。

「?!」

女神像が倒れたマースム力の右足首を掴んでいた。

しまつた！ まだ女神像は動く。

マースム力は必死にその手を振り解こうとするが、万力で締められたかのような激痛が骨にまで浸透する。

そして女神像はマースム力の足を掴んで離さず、力任せに引き寄せて、拳を振り上げた。

自分の頭を碎いたよつて、今度はマースム力の頭を碎こうとする。

「うあああ！」

雄叫びを上げてマースム力は単発式拳銃を女神像に向けた。その距離十センチの至近距離。

拳が振り下ろされるのが早いか、引き金を引くのが早いか。

マースム力は引き金にかけた指に力を込めた。

そして、砕けた。

弾丸が胴体部を貫き、壁に命中した。

「……助かった？」

マースム力は、胴体が砕けて動きを止めた女神像を押し退けた。右側肋骨が一本ほど折れているらしく、動くたびに痛みが走る。右手首の関節も痛めている。特に最後に銃を撃つたのは激痛としか言いようがないほどだった。

呼吸をするたびに鈍痛が起こるが、それを堪えて女神像から離れる。

立ち上ると右足首に激痛が走った。掴まれた時に骨が折れたのかもしれない。

だが女神像はもう完全に動かない。

今度こそ破壊した。

そしてマースム力は拳銃の弾を再装填する。痛みで手が震えて上手く動かないが、問題なく弾丸を込めた。

「……？」

弾を交換して、不意に気付いた。旧式の単発拳銃。女神像の頭部を撃つた後、弾を交換していない。胴体部を撃つことなどできなかつたはずだ。

「……どうして？」

疑問を呟いたその時、不意に壁が崩れた。ちょうど、胴体部の弾丸が貫通して命中した場所だ。女神像が瓦礫に埋まる。

老朽化して脆くなつていた箇所が、戦いの衝撃で耐え切れずに崩

壊したのだろう。女神像の体当たりを受け、続けて弾丸を受けた  
めか。

だが、弾丸はないはずなのに。

マースムカは疑問に思いながらも、その崩れた壁から向こう側を  
覗いた。

リグヴェーダはゲシュタルに問う。

「おまえはいつたい何者なのだ？」

その説明だけを聞いていると、突拍子もなく荒唐無稽で、滑稽でさえあるのに、なぜか信じてしまう、得体の知れないなにかが、この男から感じた。

神殺しはどういう意味なのか。なにかの例えなのかとも思ったが、しかしそうとも聞こえない。狂気に犯されているのかとも思ったが、この男は狂気に程遠い。

ゲシュタルが質問に答えようと口を開く。

「私は……」

「ゲシュタル！」

唐突に第三者の声が答えを遮った。

「ザーラディース？」ゲシュタルは唐突に戻ってきたザーラディースに、思わず疑念の声。

「ゲシュタル！ 傭兵は？！ 傭兵団はどこへ行つた！？」

ザーラディースはなにがあつたのか酷く慌てている。もつとも大体の予想は付くが。そして楽園の暗殺者や魔導士に比べて、戦力としては遙かに劣る傭兵团を使おうとしている。

「奴らはどうやら逃げたようだ」

ゲシュタルの説明は面倒なので適当な虚言でごまかしたものだとわかつたが、ザーラディースはまるで気付かなかつたようだ。

「逃げた！？ 逃げただと！？ なぜだ！？ なぜ逃げた！？」

混乱し、怒り狂っている。よほど追い詰められている。

「知らん。それより、他の者はどうした？」

「全滅だ。全員倒されてしまった」

予想通りだつた。

「ぬううう」ザーラディースは歯軋りし、ふと妙案が思いついたかのように「儀式は？ 儀式はどうなつてゐる？」

「すでに最終段階だ。あとは、贊を捧げるだけだ」

「ならば、すぐに魔獸を召喚するんだ。魔獸の力をもつてすれば、奴らなど恐れるに足りん」

「それが良さそうだ。これ以上の妨害を受けては困る」

迅速に儀式を終えるためにゲシュタルは持つていた短剣をかざす。「では、リグヴェーダ王女。これでお別れだ」

煌めく刃の輝きは死をもたらす。だがリグヴェーダはまるで恐れていなかつた。強い瞳をゲシュタルに向けたまま動じなかつた。まるで、自分が絶対に死ないと確信しているかのようだ。

その時、壁の一角に重厚な音を立ててひびが入つた。そしてすぐには崩れ、人が一人通れるほどの大きさの穴が開く。

「な、なんだ！？」ザーラディースの声は金きり寸前。

ゲシュタルは、この男には珍しいことに、驚愕で呟く。

「バカな。ありえない」

なにがあり得ないのか、リグヴェーダが疑惑を言葉にしようと思ひ立つ前に、崩れた壁から一人の少年が現れた。

少年の姿に、些細な疑惑など忘却した。

「やはり来てくれた」歓喜の声でリグヴェーダはその名を呼ぶ。

「やはり来てしまつた」恐怖の声でザーラディースはその名を叫ぶ。少年が崩れた壁を潜り抜けると、祭壇の間にいるリグヴェーダに叫んだ。

「リグ！」

「来てくれると信じていたぞ！」

リグヴェーダが答えると同時に、少年はゲシュタルに銃を向けて引き金を引いた。弾丸はゲシュタルの持つ短剣に命中し、その刃を折る。折れた刃が宙を舞い、甲高い音を立てて床に落下し、転がり滑る。

ゲシュタルはそれには目を向けず、それどころか短剣を撃たれ刃が折られたことさえ気付かなかつたかのように、その顔に驚愕を浮かべたまま呟いた。

「どういうことだ？」そしてザーラディースに尋ねる。「今のはどういう意味だ？あの少年がアファマッド侯爵の息子とは？」

ザーラディースが忌々しげに答える。

「貴様はあの時の仕事に失敗したんだ！アファマッドの息子を始末し損ねてしまつて。今、私を殺しに、おまえと私を殺しに、アファマッドらの仇を討ちに来たではないか！」

「バカな！あの少年は確かにジフが……」そこでなにかに気付いたのか「そうか、あいつはあの時……」

どのような経緯に気付いたのか、ゲシュタルは明らかに動搖していた。それでも混乱しなかつたのは、この男の冷徹な精神力によるものか。

「リグから離れる！」少年は弾を込めるごとに、再び銃口を向ける。

ゲシュタルは一步後退した。その瞳に微かにだが、明らかに恐怖の色を滲ませて。だが、この男が銃を恐れるだろうか。少年の、少女のように整つた左目と、異形の怪物のような右目に、搖ぎ無い意思を感じたとしても、怯えたりするだろうか。

「おまえこそ捨てる！」ザーラディースが懐から銃を取り出すと、リグヴェーダに向ける。「王女が、どうなつてもいいのか！？」

少年は拳銃を撃つのを躊躇つた。ナイフと違い、下手に衝撃を与えると引き金が引かれてしまうかもしれないと思ったのか。発砲された弾丸はリグヴェーダに命中するかもしれないと恐れたのか。

「私に構うな！撃て！」

リグヴェーダは撃つよう促したが、少年は苦渋の表情で拳銃を向けたまま行動起こさない。

ザーラディースは自分が優位に立つたことを確信した、不快な笑みを浮かべると、ゲシュタルに「おい、あの小僧を始末しろ。今度はしくじるなよ」

ゲシユタルは、動かなかつた。ただ、少年を奇妙な表情で見つめている。驚愕と恐怖の混在した表情。

「……おい、ゲシユタル。なにをしている？ 早く始末しろ」

だが、やはり動かない。やがてゲシユタルは苦渋の思いを搾り出すかのようにその名を呴く。

「おまえは……いや、違う。おまえは……」

違う？ リグヴェーダがその呴きに疑問を持った瞬間、乾いた音が儀式の間に響いた。

ザーラディースの拳銃が床を転がる。

その様子を拳銃が止まるまで見ていたザーラディースは、銃を持っていたはずの右手に目を移した。人差し指と中指が千切れている。「うあ、あ、うあああ！」そこで初めて悲鳴を上げた。

人間の感覚は時として奇妙な現象を起こす。怪我を負つても一時的に痛みを感じず、視覚で確認して初めて激痛が襲いかかる。

ザーラディースは一本の指を失つたことで錯乱し、実際の痛みよりも倍加していると錯覚し、混乱して恐怖している。

そしてザーラディースの指ごと拳銃を弾いた者は、先程ザーラディースが現れた扉の所で、硝煙の立ち上る六連装拳銃を手にしていた。

「ヨウ」場違いにひょうきんな挨拶の声。

「パブロさん！？」

「パブロ！？」

リグヴェーダと少年はその姿に、歓喜と驚愕。

「無事だつたみたいだな」パブロは軽く手を振つて答える。

「それはこちらのセリフだ！」リグヴェーダは言い返す。この神殿では本当に死んだと思っていた者たちと再会することが多い。

パブロは改めてゲシユタルとザーラディースに拳銃を向ける。「さて、残つたのはおまえら一人だけだ。王女さまを返してもらおうか」

ザーラディースは失つた指の傷口を押えつつ「ゲシユタル！ な

んとかしらお！」

「おつと」パブロはゲシュタルに拳銃を向けて「妙なまねはするなよ」

そして少年に、相変わらずゴーグルを外さない眼を向けた。なにかを指示しようとしたようだが、なぜかしばらく沈黙する。

「……マースムカ」

「はい」

「その壁、おまえが壊したのか？」

「？」こんな時になにを言うのだろうか。

リグヴェーダは疑念に思つた。

「ええ、一応そうですが」少年も同じらしげ、一応答えた。

パブロはその返答に、なにを言えばわからなくなつたような表情。ゲシュタルが、リグヴェーダだけにしか聞こえないほど小さな声で呟く。

「絶対に破壊することのできない、時間の止まつた物質で構築された壁を破壊した。やはり……」

そしてゲシュタルは懐に手を入れると、小石程度の大きさの玉を三つ取り出した。

「なにかするぞ！」

リグヴェーダは警告の声を上げる。

「だから妙なまねをするなつて！」

叫ぶパブロを無視して、ゲシュタルはその玉を投げて地面に叩きつけた。破裂し濛々と煙が立ち込める。

「あ！ くそ、煙幕か」パブロは思い切りその煙を吸い込んでしまい、咳き込む。「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ」

リグヴェーダは煙を吸い込みはしなかつたが、視界が遮られる。煙は数秒で晴れ始め、だがリグヴェーダの傍にいたはずのゲシュタルの姿はなく、ちょうど扉の一つを通つたところだった。

「あー！ 逃げやがつた！」

「なんだとお！」ザーラティースは完全に予想外の出来事に混乱を

起こす。「う、うう……」

後退りながら少年とパブロへ交互に視線を動かすと、別の扉へ全  
力で逃げ出した。

パブロは拳銃を撃つてザーラティースを止めようとしたが、煙の  
ために涙が出たせいか、狙いを外し、ザーラティースは姿を消す。  
「くそ！ マースムカ、俺はゲシユタルを追う。おまえは奴を」パ  
ブロは返事を待たずに、ゲシユタルが消えた扉をくぐつた。

リグヴェーダの傍へ少年は右足を引きずるように走ると、手枷を  
外そうとし始める。

「リグ、大丈夫かい？」

「早くザーラティースを追え！」

少年は追跡しようとはせずに重ねて尋ねた。

「怪我はない？」

「私のことより奴を追え！」

「あいつらになにかされなかつた？」

「おまえの両親を殺したのは奴らだ！」

「知つているよ。それで、君は大丈夫なの？」

「早くザーラティースを追わぬか！ 仇を討つんだ！」

「大丈夫みたいだね」

噛み合わない会話にリグヴェーダは気付いた。

「私の話を聞いているのか？ ザーラティースはおまえの父と母を

……

少年は首を振る。

「いいんだ。君が無事なら、それで」

そして少年はリグヴェーダの動きを封じる枷は鍵がないと外せないと判断したのか「少しここで待つていて。鍵を探してくる」

そして少年は、怪我をしているのか右足を庇う歩き方で、儀式の  
間を出た。

リグヴェーダはその後ろ姿に、不思議な感覚を覚えた。

脱力感に似た、うまく言葉が見つからない、説明のできない感覚。

「……仇を討ちに来たわけではなかつたのか」

ザーラディースは神殿内部を走り続けながら考えた。

なぜこんなことになつたのだ。全てはうまく行くはずだったのに、なぜ失敗した。

名の無い魔獣の召喚に成功すれば、戦車に対抗する新兵器として使役することができたはずだ。そして軍を掌握し、帝国との戦争を開始できた。その功績を利用して、王国を支配することも、国王になることも。最終的には世界を動かすことさえ可能だつた。

それなのに、なぜ失敗する。これで身の破滅だ。全てを公に知られ、極刑に処せられる。

逃げなければ。王国にはもういられない。国のために身を貢へしたこの私が、国を追われて逃げなければならない。

なんという屈辱。

なぜ、こんなことになるのだ。

そして一人の男を思い出す。

ゲシュタルだ。あいつが私を陥れたのだ。

それは被害妄想としか言えない思い込みだつたのだが、ザーラディースはそう思えてならなかつた。

あの男が私から全てを奪い去つたのだ。

私の野望を、私の成功を、私の輝かしい未来を。そうだ、そうに違ひない。あの男は私を裏切つて、名の無い魔獣を奪い取ろうとしたに違ひない。だからこんなことになつたのだ。奴が素直に私に従つていれば、こんな事態にはならなかつたのだ。いや、ゲシュタルは始めから私を裏切るつもりだつたのだ。でなければ説明がつかない。

どのような説明が付くというのか、ザーラディースはそれすらも考えることができない。冷静であれば、自分の考えが支離滅裂で、

何一つ説明になつていないことも気付いただらうが。

ただ、結論だけは、正解だつた。

そうだ、あの男は私を利用して、なにかを企んでいたのだ。

「おのれ、ゲシユタル」

忌々しげに呴ぐザーラディースは、角を曲がつたところで、誰かと衝突した。

「うお！」転倒したザーラディースは、なににぶつかつたのか理解できずに、上体を起こす。「な、なんだ？！」

「イツテエ」同じく転倒し、上体を起こした相手と目が合つ。礼拝堂で騎士と一緒にいた少年たち。ダラスだった。その後ろにはリーバ。

「あー！」ダラスは指差して叫ぶ。「見つけたぜ！」

その目を歡喜の殺氣で輝かせる。

「うあ、うわあああ！」

ザーラディースは悲鳴を上げて、ダラスから逃げようと、酷く無様に床を這う。

「逃がすかよ！」

背中にナイフが突き刺さり、灼熱の激痛が走つた。

「ギヤア！」短い絶叫を上げ、しかしそれでも逃げようとする。「アヒ、ヒアアア……」

殺される。逃げなければ。早く逃げなければ。

「この！ 待ちやがれ！」

だが背中に馬乗りにされて動きを封じられ、ナイフがさらに突き刺さる。

すぐに激痛を感じなくなり始め、意識が朦朧とし、それが死の訪れの予兆だと理解し、ザーラディースは恐怖で助けを求めようとしたが、声すら上げることができなかつた。

いやだ、嫌だ、イヤダ。

死にたくない死にたくない死にたくない……

かつて自分が死に追い込んだ者たちと同じ願いを、声にならない

声で叫んでも、救いは『えられなかつた。

ダラスは床を這うように逃げようとしたザーラディースの背中に馬乗りになると、立て続けにナイフを突き刺した。何度も、何度も、どこか恍惚とした表情を浮かべて。

「……お、おい？ ダラス？」リーバがその執拗さにおぞましさを感じて、なぜか疑念の声を上げる。

ダラスはそれに答えず、やがて完全に動かなくなつたザーラディースの首を、ナイフで切り落とそうとする。興奮しているのか、狩で行う獲物を処理する時とは違い、酷く雑で手際が悪かつたが、何度も切りつけ、刺し、抉り、そうしてなんとか首を切断した。

「へ、へへ」笑つてダラスはザーラディースの髪を掴み、勝利のトロフィーのように、首を高々と掲げた。「やつたぜ！ どうだ！ リーバ！ 親玉の首を取つたぜ！」

「あ？ ああ、そう。そうだな」首謀者を倒した喜びよりも、人間の生首が不気味で恐ろしく、生返事しか出てこない。

ダラスはそれに気付かないのか、返事を聞いていなかつたのか、一人喜ぶ。

「やつたぞ！ 俺が首謀者を倒したんだ！ 俺がやつたんだ！ 俺が邪悪な野望を打ち碎いたんだ！ 俺が名の無い魔獣の召喚を阻止したんだ！ 俺が世界を救つたんだ！ 俺が英雄だ！ 俺が勇者だ！ 俺が救世主なんだ！ リグヴェーダの心は俺のものだ！」

リーバはその様子に恐怖を感じて、一步下がつた。

なんだ？ なにを喜んでるんだよ？ ジェドムが死んだんだぞ。殺されたんだぞ。仇を討つためじやなかつたのかよ？ 名誉とか勇者とか、それだけなのか？ 他にはなにもないのか？ マースムカも無事かどうかわからないのに。邪魔な奴だけど、村の仲間だろ？ それなのに、なんなんだ、こいつ？

リーバは同じ村で生まれ育った者が、まるで得体の知れない怪物に思ってきた。

ダラスは一人で喜び続けていた。

ゲシュタルはその年齢からは想像できない俊足で、外へ通じる扉に辿り着き、門を外そうと手をかけたが、扉に弾丸が命中して金属音と共に火花が散り、その動きを止める。

パブロは十メートルほど離れた位置で六連装拳銃を右手で構えていた。

「逃がすかよ、ゲシュタル」二人は気付かなかつたが、パブロが銀髪の男の名を呼んだ始めての瞬間だつた。

「パブロ、だつたな」ゲシュタルもまた、その名を始めて呼んだ。「なぜ助かつた？あの傷は致命傷だつたはずだ」

「へつ」パブロは鼻で笑つて「なんでだらうな？自分で考えてみな」

ゲシュタルはパブロを見据えるかのように、目を細めた。

「なるほど、炎の民か」

パブロは笑みをその顔から消した。いくら魔法使いだからといって、正体を見破るのが早すぎる。魔術師団の一人であるセリナでさえ、正体を見極めるのに一週間も必要としたのだ。

「なんでわかつた？」

今度はパブロの質問にゲシュタルは「なぜだらうな？自分で考えてみることだ」

パブロは首を振つて「まあ、いいさ。あとでゆっくり考えよう。なんだつたら、おまえからじつくりと聞き出せばいいんだしな。捕まえたあとで」

「捕まえられると思つてゐるのか？」

魔法による防御の結界がある。散弾銃も防御した結界は、六連装拳銃の銃弾では通用しない。

「思つてゐた。俺がなんの策もなく戻つてきたと思ったのか」そして弾丸を一つ見せる。「対魔法用特殊弾丸。こいつは結界を貫通するぞ」

旅隊商の商品の中にあつた特注品。これを持つてもらひには少々、交渉の苦労と金が必要だつたが、その価値はあつた。

ゲシュタルは納得して頷いた。

「なるほど。助かつたにしては戻つてくるのが遅いのではないかと思つたが、それを手に入れるのに時間がかかつたのか。しかし、どこで手に入れた?」

「河から旅隊商に助けられてね。商品の中にあつたんだよ」

「ふん。運がいいというべきかな」

「さて、そろそろお縄についてもらおつか」

「それは断る。私はこんなことで止まるわけにはいかんのだ」

「?」その言葉の意味はわからなかつたが、パブロは「逃げ切れる」とでも思つてゐるのか? それとも戦うつもりか? 結界と魔法の石像がなけりや、おまえの戦闘能力は人並み程度しかないんだろ? 「

魔法を使用するより、拳銃を発砲する方が早い。常に展開してい るらしい魔法防御を無効化できるのならば、パブロのほうが圧倒的に有利だ。

「そのとおりだ。だが、他に方法がないのでな」それは逃げるという意味か、それとも戦うという意味なのか。

「名の無い魔獸を召喚しようとは考えなかつたのか? まあ、王女になにかしようとしたら、すぐ撃つつもりだつたけどよ」付け加えて「つつても、どつちみちおまえらが名の無い魔獸を制御できるとは思えないがな。あれは俺たちの想像を遥かに超える、なにかだ。炎の王や死と同じ滅びを司る、だがまったく異なる存在。呼び出せば、制御も支配もできず、すべての名は剥奪され、滅びは完成するまるで見てきたことがあるような言い方だな」

「あるわけねえだろ。だが、炎の王なら対面したことがあるぜ。一度と会いたくないけどな」言うパブロに微かに恐怖が現れた。

「なるほどな」ゲシユタルは納得したのか「しかし、勘違いするな。私が考案した魔獣召喚法と、制御支配の技は完璧だ。こちらから意図的に呼び出し、そして現出したその時であれば、確実に魔獣を支配し、意のままに操ることができる」

そこまで断言するゲシユタルに、パブロは疑問を感じた。同時に違和感も。

「じゃあ、なんで召喚しようとなかった？」

「こちらから呼び出した、その瞬間でなければ成功しないのだ。だがあの少年が生きていた」

パブロは思い出す。「ああ、そう言えばマースムカのことを別の名前で呼んでいたな。あれはどういう意味だ？」

「知らないのか？」

「知らないから聞いてんだろ」

「リグヴェーダ王女の婚約者だ」

「婚約者！？」パブロは純粋に驚いた。「え？ ジゃあ、あいつって、あの？ 七年前に一家全員殺されたクラノフ侯爵の」

「そうだ。少年が家族の仇を討ちにきたのかどうかは知らないが」「仇？」パブロはその言葉の意味を理解する。「アファマッド侯爵の襲撃はザーラディースがやったのか」

「正確には依頼しただけだ。あの人間は自分で実行するだけの力はない」

「実行したのは、おまえか」

そして、アザニスの悪魔。自分の過去を少年に知られることをあれほど恐れた理由は、彼の本当の両親を殺したからか。

「そうだ。少年の目的はなんであれ、とにかくリグヴェーダ王女を助けに来たというわけだ。政略上の婚約とはいえ、友人とは思つていたのかも知れんな」

パブロは大体の事情を察する。こいつはクラノフ侯爵襲撃事件にかかわっていたわけか。もつとも、リグヴェーダとザーラディースが名前を呼ぶまで気付かなかつたようだが。

あの少年も気付いていた様子はなかった。今回の件は、おそらく偶然。マースム力もこいつも、本人が気付かないところで、因縁が深かつたらしい。

「で、マースム力が死んだはずの人間だったからって、それが名の無い魔獸とどう関係して来るんだ？」

意外な関係はわかつたが、肝心な話につながらない。

もつとも、どんな話を聞かされたところで、驚くようなことがあるとは思えなかつた。

だが、驚くことなどないと確信している時に限つて、驚愕すべきことに直面する。

あるいは、驚愕を通り越して、理解が難解であるかもしれない。ゲシュタルの端的な言葉は、まさにそれだつた。

「あの少年が、<sup>アジアディースム</sup>名の無い魔獸だ」

「……は？」

端的な答えの意味を、パブロは理解できなかつた。

「私は十五年前に一度、<sup>アジアディースム</sup>名の無い魔獸を召喚したのだ。そして、失敗した。だが、幸い世界は滅びなかつた。名の無い魔獸は、その審判を保留としたのだ」

十五年前、魔獸召喚と制御支配の術を発案、考案したゲシュタルは、それを実行に移した。

だが、失敗に終わる。

古代神人の末裔たる生贊の選抜を誤つた。

生贊に選んだ人間は、王家の血に連なる家系に生まれた者だつたが、いかなる理由か王家の血を受け継いでいなかつた。つまり古代

神人の力をまつたく持つていない。古代神人の、その死の瞬間に放出される、特殊で強大な神力を利用することがどうしても必要であるにもかかわらず。

おそらく、その家系は過去において、なんらかの形で血脉が途絶えており、秘密に養子を迎えるなどして、家を継続させたのだろう。いつの時点なのはわからず、生贊に選んだ人間自身がそうなのかかもしれないが、とにかく、その時はそれに気付かずに、魔獣召喚を行い、支配に失敗し、名の無い魔獣は己の意思で行動する結果になってしまった。

「しかし、どのような理由があつたのか、その必要があつたのかはわからないが、魔獣は召喚者である私に語つた」

世界を滅ぼすか否か、その審判を下すには、世界のことをなにも知らない。知識が不足しているのは明らかだ。よつて現時点では保留とし、知識を得る手段として、人間になろう。

人間として世界に生まれ、人間として世界を見て、人間として世界を聞き、人間として世界を感じ、人間として世界を知ろう。

「そして世界は救われた。一旦はな」

名の無い魔獣が姿を消した後、ゲシュタルはその時の魔獣の痕跡を徹底的に調査し、突き止めようとした。魔獣はどこで、誰に生まれたのか。

「七年の歳月をかけて、私は見つけたよ。人間として生まれた名の無い魔獣を」

人間として、人間から誕生した、人の形をした、人ならざるもの。名の無い魔獣の化身。

「ふざけたことぬかすな」パブロはどこか心あらずといった感じで、しかしぬにははつきりと「ふざけたことぬかすな！ ンなわけねえだろうが！ あいつが名の無い魔獣だと。そんなことあるか！」

ゲシュタルはパブロの動搖に特に頓着せず続ける。

「私は名の無い魔獣の召喚をやり直すために、その子供を消すことになった」

人間となつた名の無い魔獸は、人間としての状態を徹底的に破壊されると、一旦元の状態に戻らざるをえなくなる。すなわち空虚なる混沌に帰る。

問題は、その子供に魔獸としての力と自覚があるかどうかだった。だが、名の無い魔獸は正確な情報を得るために、そして完全に人間になるためには、不必要で寧ろ阻害となる名の無い魔獸としての記憶を、一旦封じるだろうと推測した。

「そして正しかつたよ。子供はなにも憶えていなかつた。普通の人間の子供と変わらない状態だつた。あとは、実行するのみ」

そしてザーラディースの依頼がきた。

それは偶然だつたが、確実性と迅速性を考えて、その依頼を受け、家族ごと子供を抹殺することにした。

同時に、それは後々に再度魔獸を召喚するための援助者を確保する布石でもあつた。

そして自分の思惑を誰にも悟られずに、アファマッド侯爵一家を全員殺害した。

名の無い魔獸の生まれ変わりとも呼べる子供も。

「だが、生きていた。ジフが裏切つたのだ。なにを考えたのかは知らぬし、奴が死んだ今となつてはもうわからぬことだが、ジフは子供を殺さずに逃がしてしまつたのだ。そして子供を引き取り、大峡谷で自分の息子として育てた」

パブロの拳銃を持つその手が震えていた。それは怒りか驚愕か、それとも恐怖か。

「……本当なのか？ 本当にマースムカは名の無い魔獸なのか？」

「今のあの少年には自覚も記憶もないだろ。だが、間違いなくあの少年は、世界を滅ぼす存在、名の無い魔獸そのものなのだ。おまえは妖精族、炎の民なのだろ。傍にいてなにも感じなかつたのか

？ なにか気付くことはなかつたのか？」

拳銃用の火薬で、しかも量が少ないにも関わらず、とてつもない爆発力を起こし、神殿の門を吹き飛ばした。

儀式の間で、時間の存在しない、破壊不可能の物質で構築された壁を崩壊させた。

「あれが、名の無い魔獸の力の、片鱗か」

同時にパブロは疑問に思つ。目の前にいる男は何者だ？ 魔獸の召喚法を考案し、操ることを考えたこの男の目的はなんだ？

「おまえはなにが目的だ？」 ジンニー おまえは、なんだ？」

「気がつかないか、炎の民よ。私が誰であるのか？」 この世界に無理なく自然に存在するため、本来の力をほとんど失つてしまつたようだな。その点は私に似ている

「その眼球が不意に窪んだ。

「！」

眼球のないそこには、深淵の虚無が広がる。空虚にして虚空の、その魂を現すが如く。

「私は、この世界に辿り着くのに長い年月を要した。千年、一千年の長い時間を。そうして地獄の底から這い上がつた時には、私はかつての力をほとんど失つていた。あの頃の力があればこのような迂遠なこともする必要はなかつただろうが、失われた力を取り戻すこともできない。結局、私ができることと言えば、策を弄して名の無い魔獸を利用するだけだ。もっとも、かつての力があつたとしても、名の無い魔獸に頼るしかなかつただろうがな。私には、我らは神に対抗することさえできないのだから」

ゲシュタルは深く嘆息する。深い疲労と、深い絶望を、絞り出すように。

「私の望みは、目的はただ一つ。神を滅ぼすこと。それが我らの末來を掴み取る唯一の方法であるがゆえに」

「おまえは……」 パブロは悟つた。目の前にいる男が何者なのか。私が何者であるのか、それは本当に意味では私自身わからない。

だが、私はそれでも存在し続けよう。私の存在が消えるなど、私は許さぬ。そのような運命を背負わせた神も許さぬ。ゆえに、私は神に反旗を翻した。<sup>イイカ</sup>魔族たちを支配化に置き、神に忠実な下僕たる天使と戦い、そして神を討ち滅ぼそうとした。その時から私はこう呼ばれるようになつた……」

パブロと、その存在は、同時に言葉にした。

「「魔王」」<sup>シャイターン</sup>

突然神殿が震動し始めた。

連続して続くそれは、地震とは異なるようだが、足元を揺らし、立つことも困難になつていく。

「なんだ！？」

叫ぶパブロに、ゲシュタルが答えた。

「ザーラディースが殺されたな」

「なに！？」

「ザーラディースも王族の末席に名を連ねている。一応は古代神人の末裔だ。本家の王族に比べれば血脈は遠く薄く、本人の力も微弱だが、それでも魔獣召喚儀式の最終段階だ。その死はなんらかの影響を及ぼす」

「影響ってなんだ？！ なにが起こる！？」

「十五年前、世界に現出した時と酷似した状況なら、あるいは。名の無い魔獣がすぐ傍にいるなら、あるいは」

「あるいはつてなんだ！？ 早く言え！」

「名の無い魔獣は審判を下すかもしけん」<sup>アジアディースム</sup>

「そんなことだろうと思ったぜ！ クソッタレが！」

パブロはゲシュタルトに背を向けると、全力で儀式の間へ戻り始めた。

「鍵を見つけたよ。すぐ隣の部屋にあつた」  
戻ってきたマースムカは、リグヴェーダの両手足を封じる、鎖を外した。

ようやく自由となつたリグヴェーダは、なんとも形容しがたい奇妙な瞳でマースムカを見つめた。

「……私は、おまえに……」

リグヴェーダがなにかを告げようとしたその時、突然、魔方陣から膨大な光の量が放出された。

それは光の柱となつて神殿を貫き、遙か天空に達する。あまりの眩しさに、マースムカとリグヴェーダは目を暗まされる。

「なにが起きた！？」リグヴェーダが叫ぶ。

「僕から離れないで！」マースムカがリグヴェーダの手を握り締める。

神殿全体に振動が始まる。隣にいるリグヴェーダの声も聞き取りにくく、なにを言つているのかわからない。

「なに？ よく聞こえない」

マースムカは聞き返したが、リグヴェーダは意味がわからなかつた。

「なんだ？ 私はなにも言つてないぞ」

「え？」気のせいか。マースムカは思つたが、やはり聞こえた。

答えは？

「……答え？」

答えは如何に？

今度は明瞭に聞こえた。

「……誰？ なにを言つてるんだ？」

汝が答えは如何に

「なんだ？ なにを聞いてるんだ？」

リグヴェーダは一人叫ぶマースム力に怪訝に尋ねる。

「どうしたのだ？ 誰と話している？」

マースム力にしか聞こえない声は続けて答えを要求する。

問いに答えよ。汝が答えは如何に？

光の柱からの声に、マースム力は慄然とする。

「まさか……」

名の無い魔獸。

儀式が不完全ながらも遂行され、出現したのか。

問いに答えよ。人間として生まれ、人間の心を持ち、人間と関わり、人間として生きた、汝が答えは如何に？

そして、名の無い魔獸は、なぜか自分に答えを要求している。

「そんなことわかんないよ！」

答えは如何に？

声は厳しく問う。曖昧な返答など許さぬ、二者択一の答えを要求するのみ。

滅びか、存続か。

「……どうして僕に聞くんだ？」

なぜ他の人々に答えを聞くのか。なぜ、よりもよって自分なのか。

偶然、名の無い魔獸が現出した場所に居合わせたからなのか。それとも違う理由なのか。

どちらにせよ、困窮するしかない。

世界の運命を選択することなど自分にはできない。

答えは如何に？

「僕は……」

僕はどうして答えたくないのだろうか？

選択できないという問題ではない。選択肢が一つしかないのなら、答えは始めから決まっている。

滅びを選択すれば、おそらく本当に世界は滅ぶ。ならば、答えは明確だ。迷う必要さえない。

「僕は……」

それなのに、答えたくない。

「……僕は」

どうして答えたくないのか、その理由はわかつていた。

裕福な家庭に生まれても幸福ではなかつたから。

家族がいても、孤独だつたから。

その家族さえ、殺され、奪われ、いなくなつたから。

大峡谷に連れられて、そこでも余所者と嫌われ、醜い顔と蔑まれ、のけ者に扱われたから。

そして自らの欲望のためなら人の死を厭わない人間が現実にいると知つたから。

人を殺すことに狂喜する人間が実在すると知つたから。

人を殺すことを厭い、それでも望まざる殺人を犯さなければ生きていけないほど、世界は酷薄で残酷だと知つたから。

それでも父とセネロがいたのに、その二人が殺されたから。

そして、心から慕つていたジフが、本当の両親を殺したのだと知つたから。

「……僕は……」

大切な宝物を始めから持たず、ささやかな小さな宝物が手の平にあるとthoughtても、それはすぐに奪われ、踏み躡られ、塵のように消され、その拳句に偽物だと思い知らされる。

心の中で芽生えたその思いは、少しづつ、だが確實に、純粋な命を持つて生きる歡喜さえをも蝕んで、侵食して、腐敗させ、朽ちさせる。

清らかなる心の純粋なる善意が太陽の輝きならば、清らかなる心の純粋なる悪意は暗黒の輝き。

穢れの無い黒曜石の如く澄んだ憎惡の光は、真直ぐに進み、迷走することなく究極の答えに到達する。

問いかに答えよ。汝の名はなにか？  
マスムカ

「僕には……」

大切に思う者は誰もいない。

大切だと思える人は誰もいない。

大切だと思つてくれる者は誰もいない。

「僕には……」

名を呼んで欲しい人など誰もいない。

本当に孤独な少年が思うことはただ一つ。

こんな世界など消えて無くなつてしまえ。

「しつかりしろ！」

リグヴェーダは少年の肩を掴んだ。

「しつかりするんだ！ 私を見るんだ！」

少年の様子がおかしい。光の柱を凝視して動かず、なにかと話をしている。自分がすぐ傍にいることも忘れて、なにを言つても気付かない。

光の柱の正体はわからないが、少年が突然おかしくなった原因是、これ以外にない。

だが、実体のないこれに対処する方法がない。魔方陣を構成する媒体を破壊すればいいのかとも思つたが、それらはすでに神殿が揺れた時に、崩れてしまつてゐる。

とにかく注意をこちらに引かせようと叫ぶ。自分の声を届かせなければ。

「光に囚われるな！ 私の声を聞け！ ……あ？」

リグヴェーダは少年の名を呼んでいて、慄然とした。

「名前？」

少年の名は？ 何度も呼んでいたはずなのに、思い出すことができない。

「おまえの名はなんだ？」

何度も呼んでいたはずの少年の名が思い出せない。

あの悪夢のように。

名を呼ぶことができない。

「名の無い魔獸が……」

名の無い魔獸が、少年の名前を奪ったのか？

神話にあるように。

名を剥奪し、その全ての意味を消し去り、滅びは完成され、全ては真なる永劫の内に終焉する。

「うう……ええい！」

リグヴェーダは少年の体を抱き寄せると、引きずつてでもその場から運びました。とにかくここから離れなければ。

「あ！？」

だが、光の柱から、光の粒子で構成された無数の触手が、少年の体を束縛した。

「おのれ！」

触手を解こうとするが、光の触手は実体がないように、掴もうとした手が通過して、接触することができない。

それなのに少年の体だけは、束縛してその場に拘束している。

「私だ！ 私の声を聞いてくれ！ 光の声に耳を貸すな！ 返事をしてくれ！」

少年の、その精神は光に囚われ、名を奪われ、心を奪われようとしているのか。

「行くな！ 私と約束したではないか！」

光から庇うようにして、その体を抱きしめる。

このままではまた少年は遠くへ行ってしまう。

今度こそ、一度と帰つてこない場所へ。  
真なる永劫へ。

「私の傍にいると約束したではないか！」

名だ。

名を呼ばなければ。

名を呼ばない限り少年は答えてくれない。

それなのに、喉元でせき止められたかのよつて、名を呼ぶことが  
できない。

名を一言呼びたいのに。

「私の側にいてくれ！」

名がわからない。

「私から離れないでくれ！」

名を思い出せない。

「私と一緒にいてくれ！」

その名を、ただ一言呼びたいのに。

「私と約束したではないか！」

不意に、少年の瞳が、一瞬だけ抱きしめる少女に向いた。  
その温もりがとても暖かくて。

とても優しくて。

それはなによりも望んだ、たつた一つの願い。  
優しく名を呼んでくれる人。

彼女は少年の名を呼んだ。

少年が育つた村の、少年の住む家の納屋で、一人の少女はこう聞

いた。

「どうしてあなたが助けに行くの？」

少年は静かに少女に答えた。その顔は微笑を浮かべていたけれど、どこか悲しそうな瞳で。

「彼女はね、僕の友達なんだ」

「……え？」

少女は一瞬理解できなかつた。

少年は続けた。

「王都にいた頃、彼女と会つたのは数えるほどでしかないけれど、僕には大切な思い出で、忘れなかつた。でも、彼女は忘れてしまつていると思っていた。憶えてくれるほど大切にするとは思つてなかつた。でも、憶えていたんだ。七年も経つたのに。七年間で僕は成長して顔も変わつて、それに……」

顔右側にある火傷の痕をなぞる。焼け爛れた痕跡。瞼が異様に捲り上がり、眼球が飛び出しているように錯覚する、異形の右目。

「元々の顔もずいぶん変わつたのに、それなのに、僕だつてすぐに判つてくれた。だから、今でも彼女と僕は友達だ。今はたつた一人の友達なんだ。友達だから、友達が危険な目にあつてゐるのなら、助けないといけない。いや、助けたいんだ。たつた一人の、僕の最後の友達を、助けたいんだ」

彼は栄誉も名声も求めていない。

そんな少年を少女は引き止めることができなくなつた。

ただ、名前を呼んでくれる友達を助けたいだけなのだから。

名の無い魔獸は問い合わせに答えた。

アジアディースム

受理した



パブロは全力疾走して儀式の場所へ戻った。

同時に、六連装拳銃を構え、名の無い魔獣へ向けた。

少年は王女に抱きしめられていた。

優しい姉に抱かれる弟のように、安らぎに満ちた、そしてどこか寂しげな微笑で。

リグヴェーダは、抱きしめる少年に囁く。

「この大嘘吐き者が。私とずっと一緒にいると約束したではないか。私の傍にいると約束したではないか。私がどれほどおまえに会いたいと思ったか……」

「……ごめんね、リグ。」

それは、約束を破つたことに対する謝罪だったのか、それとも今から告げることに対する謝罪だったのか。

「僕はもう……」

なにを告げようとしたのか、その言葉は最後まで口にすることはなかつた。

「パブロさん？」

少年はパブロに気付いた。その瞳は以前となにも変わらない。少女のようになつた左顔。

異形の怪物のような右顔。

相反する美醜が同居する顔にある二つの瞳は、人間の瞳だ。善でもあり悪でもある。善でもなく悪でもない。

人間の性質を現すように。

パブロは安堵の息を吐いて、六連装拳銃を下ろす。

そしてリグヴェーダもパブロに気付くと、急に少年を離した。少

し赤面している。少年を抱きしめているのを見られたことが恥ずかしかつたらしい。変なことで照れる。

「……終わったのか？」

全速力で戻ってきたため息切れする呼吸を整えながら、パブロは周囲を見渡し、異常がないことを確認する。

「そのようだ」リグヴェーダが肯定した。

改めてパブロは周囲を見渡した。魔法陣はその原型をとじめているほど崩れている。だが、それだけだ。

世界は滅んでいない。

リグヴェーダも、少年も、自分も確かにここにいる。

「名の無い魔獣は、元の世界へ帰ったみたいです」

その言葉でパブロは、少年がなにも思い出していないのだと理解する。自分自身の正体も知らないままだ。

世界の命運は確立二分の一。そんな分の悪いくじ引きを実行されるわけには行かず、パブロはたとえ少年を殺してでも止めるつもりで戻った。

名の無い魔獣と戦つて勝てるのかどうか、それ以前に迷いなく少年を殺すことができるのか。

短い時間に覚悟を決めて、最後の審判に挑むためにパブロは儀式の間に戻った。

しかし、そこには、なにやら抱きしめ合っている少年と少女。感動的な場面なのだろうが、名の無い魔獣との戦い、そしてこの少年を殺すこと。全てを覚悟して走ってきた身としては、安堵通り越して、肩透かしを食らつた気分もある。

もつとも、二人にこのことを言うわけにはいかないが。とても、言えない。終わった今では、言つ必要もない。

そして名の無い魔獣が下した審判の結果は訊かなくてもわかつていた。

「……パブロさん。大丈夫ですか？」

少年はまだ力が入っていない声で聞く。

「大丈夫だ、一応。それより、おまえこそ大丈夫なのか？」

少年は微笑むが、やはりそれも力が入っていない。

「ちょっと、大丈夫じゃないかもせん」

見たところ、右手首と右足首を痛めている。右側肋骨も一本骨折。打撲もあるが、命に別状はない。リイジスに頼めばすぐに治るだろう。

「ま、世界が滅んでなくてなによりだ」

パブロは少年に手を差し伸べた。

少年はその手を握り、立ち上がった。

続いてリグヴェーダにも手を貸して立たせた。

リグヴェーダはパブロに「なにがあつたのか、知っているのか？」  
「状況から大体の予想はつく。だから決死の覚悟で全速力で戻つて  
きたんだが、もうやることないみたいだな」

「ははは」少年は軽く笑うと「戻りましょうか、パブロさん。リグ」

「ああ、そうだな」リグヴェーダが答える。「みんなのところへ戻ろ  
う」

少年がリグヴェーダに肩を貸してもらうと、神殿の通路を二人は  
歩き始め、ラッガートたちのいる礼拝堂へ向かう。

パブロは煙草に火をつける。本来ならば、雇い主である一国の王  
女に代わり、少年を支えるべきかもしれないが、異形の目を遮光ゴ  
ーグルで隠す妖精は、そうしなかつた。

馬に蹴られたくないので。変わりに間延びした声で聞いた。

「なんか痛そうだが、大丈夫か？」

「あまり大丈夫じゃありません。骨が折れてるみたいですから」

しかし少年はそれほど苦にしていないようだ。どこか冗談混じり  
で答えている。もう戦いが終わつたからだろう。

「そりや、そうだな。でも、まあ役得つてことで」

王女様とべたべたできるんだからな。

しかし少年は意味がわからず「なにが役得なんですか？」

「気にならない気にならない」

手をパタパタと振つて返事を「」まかす。

リグヴェーダはパブロに向ける表情から意味を理解したようだが、この奇妙な妖精がそういうからかうようなことを言つのはいつものことなので、相手にしないことにしたようだ。

気になるのは、他にあった。

リグヴェーダは少年に聞く。

「あの時、おまえになにが起きたのだ？　おまえは私の声が聞こえていなかつた。そして私は、おまえの名を少しの間ではあるが、どういうわけか思い出すことができなかつた。なにが起きていた？」

少年が説明したことは少なかつた。実質一つだけだ。

「光の柱から、名の無い魔獸が、僕に聞いたんだ。答えは如何に？　つて」

リグヴェーダはそれで納得したようだ。完全に全ての説明がつくわけではないが、しかし大体理解できれば十分らしい。もつとも根本的なことに間違いがあるが、パブロはそのことを説明するつもりは、やはりなかつた。

「なるほど。そして、名の無い魔獸は元の場所へ帰したか……いや、あれは本当に名の無い魔獸であつたのか？　光の柱の正体は、本当に、名の無い魔獸だつたのか？」

鋭いな。パブロはリグヴェーダの直感に感心しながら「さあな。わかんね」

そして胸中付け加える。嘘だけどな。

少年に答えを求めた存在は、名の無い魔獸ではない。

少年自身が名の無い魔獸だ。

当然、問い合わせたのは異なる存在。

それは、誰もが知る存在。

見ることも聞くこともできないが、常に感じる、あらゆる世界でもつとも強大にして偉大なる存在。

再び奇跡を起こしたのか、それとも見捨てたのか。その心を推し

量るのは、限られた存在である自分には不可能なのだろう。

パブロの馳せる思いを知るよしもない少年は、淡々と告げる。

「わかるのは、名の無い魔獣は本当に現出して、審判の答えを僕に、

人間に求めたんだ」

パブロは胸中付け加える。おまえが人間になることでな。  
そして言葉にして付け加えるのは「だが、人間が自殺をするよう  
なことをするわけがない。なのに、なんで人間に審判を求めるんだ  
か」

なんとなく、理解できるような気もするが。

人間は死に恐怖する。

人間は老い、腐し、朽ちることに嫌悪する。

人間は滅びを拒絶している。

滅びを求めるない人間が、滅びを願つた時。

その時、世界には存続する価値などない。

世界は在るに値せず、滅ぶに値する。

ただ、それだけの単純な理由。

だが、少なくともそれは今ではなかつた。

「まあ、良い。こうして助かつたのだからな」リグヴェーダは少年  
の体に回した腕の位置を少し直す。少しだけ、少年の温もりを多く  
感じるよう。『それに、そなたが生きていてくれたのが、私は嬉  
しい』

「リグ」少年も笑顔を見せた。

パブロはしばらく一人を眺めていたが、ふと氣になり、水を差す  
ようで氣が引けたが、尋ねた。

「それで、結局、どっちの名前で呼べばいいんだ？」おまえの名は  
なんだ？」

「知ってるんですか？」少年は少し驚いた。

「途中で気付いた。王女さまが何度も別の名前で呼んでいただろ」  
肝心な個所は話しておらず、説明も端折っているが、少年は取る  
に足らないことだと思ったのか、すぐに答える。

「マースムカと呼んでください。昔の名前は捨てました」

それは王都には戻らないという意思の現われ。貴族の身分も、それに伴う裕福な生活も。そして一国の王女を救つたのだという、名声も栄誉も、全て捨てるという意味。

すなわち、過去との決別。

「良いのだな、それで」リグヴェーダが確認する。

「うん」少年は力強く肯く。そして、ふと付け加えて「でもマースムカって言うのも、本当の名前じゃないけどね。ああ、なんだか名前がないみたいだな。そうか、だから魔獸は僕に聞いたのかな。名の無い者に、名の無い魔獸は」

それは奇妙な符号。

不思議な一致。

偶然の合致。

「そうかもしだれぬな」リグヴェーダは合点がいったように、そしてどこか感慨深く同意した。

パブロは考える。もしかすると、この少年は記憶の片隅のどこかで、自分が名の無い魔獸であることを覚えていたのかもしれない。だから、名前を持たないようにして、名を持つことを避けているのではないか。

誰も少年の名を知らない。

だから誰もが少年に尋ねる。

汝の名はなにか？

その問いに、名を持たない少年は、答えることはない。

ただ、異なる言葉で質問を繰り返すだけ。

マースムカ。

ゲシュタルは騒動に乘じて逃げただろう。捕まえて置く余裕などなかつた。二三発撃つておけばよかつたかもしぬないが、魔王であるあの男がその程度で死ぬとは思えない。

そして魔王の目的の遂行に、名の無い魔獸が不可欠ならば、いつか再びこの少年を狙うはずだ。

その時、少年は自分の正体を知ることになるかもしない。

自分が何者なのか気付くかもしない。  
自分が誰なのか理解するかもしない。

その時、この少年はいつたいどうするのだろうか？

名を問われた時、なんと答えるのだろうか？

この、名の無い魔獸は。

アジャディースム

三人はしばらくして礼拝堂に到着した。

リイジスによる治療を終えた、騎士と魔術師が、王女の姿に喜ぶ。  
「王女！」ラッガートが厳つい顔に安堵の笑顔を見せて「ご無事でしたか」

「うむ、大事ない」リグは自身の無事を伝える。だが、笑顔は返すことなく、「シェルダックヒルマジャーは残念であつた。私一人のために。真に無念だ」

「いいえ、王女」ラッガートは首を振り「二人の犠牲は、王女一人のためだけではありません。王国の未来。騎士の教義。二人は自らの意思と誇りのために戦つたのです」

リグヴェーダは感慨深く「そうだな。そのとおりだ」

「パブロ」セリナが「ありがとう。色々助けてくれて。妹の仇も討てたわ」

「たいしたことじゃないさ」パブロは笑つて答える。

リイジスがパブロの周囲を飛び回る。

「ところで、さつき揺れたよね。いつたいなんだつたの？ 地震とは違うみたいだし」

マースムカがなにか言おうとしたが、パブロは誰にも気付かれないように、マースムカだけに見える程度に首を振つて止めた。

名の無い魔獸の一件は伏せておくべきだ。このことが明るみに出たら、どのような事態が起こるかわからない。ザーラディースのような人間が他にもいないとは限らない。

マースムカはパブロの意を汲んだのか、なにも言わなかつた。

「よくはわからないが、どうも中途半端に召喚魔法が作動したらし  
い。だが、生贊がない今まで行われたから、魔獸は出なかつたみた  
いだな」

「……そう」セリナが微笑んでいたが、含みがあるような気がする  
のは、たぶん気のせいではない。

「気付かれたか。だがセリナは追及する気はない」

「騎士さま！」

唐突に元気な声。扉の一つから息を切らして、ダラスが駆け寄つて  
くる。その後ろからリーバが現れる。

「騎士さま！ やりました！ ザーラーティースの首を取りました！」  
その首を振り回すようにして見せる。昔の戦争で討ち取つた敵の  
首を持つてることが褒賞と引き換えとなつていて、それを真似  
ているのか、それとも現在でも同じだと思つてゐるのだろうか。し  
かし、それは英雄が敵将を討ち取つた時の栄光ある姿というよりは、  
子供が玩具で遊んでゐるようにしか見えなかつた。

「ああ、そうか」ラッガートは生首を不気味としか感じていないので  
は明白で、近付けられて引いている。「よ、良くやつた。ダラス」  
首謀者を仕留めたといつたのにラッガートには喜んでゐる様子はな  
く、賞賛の言葉もつわの空といった感じで、本当に褒めてゐるわけ  
ではないだろう。

「はいっ、ありがと『いわいます』だがダラスは全く気付かずに單  
純に喜んでいる。

「あ、そうだ。ところで、今の地震なんだつたんでしょうね？」

「さあな。わからん」ラッガートは肩を竦める。

だがダラスは可能性の一つを考えた。

「マースムカだな」ダラスはマースムカを睨みつける。「てめえ！  
なにかへまやらかしやがつたな！ なにしやがつた！」

一方的に決めつけてマースムカを糾弾するダラスに、皆が呆気に  
とられ、啞然とした。

そして不意にダラスまでも呆気にとられたような顔をした。自分の行いに気付いたからではなかつた。

「おまえ！ なにリグヴェーダに触つてやがる！ どけ！」

リグヴェーダがマースムカに肩を貸していることに気付いたダラスは、怒りにマースムカの胸倉を掴んで、リグヴェーダから力任せに引き剥がした。

「あう！」

マースムカは疲労と怪我で、足の踏ん張りが利かず、転倒する。「リグヴェーダ王女！ 見てください！ やりました！ 首謀者の首を取りましたよ！」ザーラディースの首を掲げて見せる。そしてリグヴェーダの体にいきなり密着した「さ、俺が肩を貸します」つまりダラスは、マースムカがリグヴェーダに肩を貸しているのだと勘違いした。そのことが、怒りさえ感じるほど不愉快だつたのだ。

それがこの横暴な行動の理由。

パブロはダラスに凶暴な感情が芽生えた。一緒に戦つた仲間だが、行動と共にしている間、一度としてこの人間に良い感情を持つたことはなかつた。時折見せる幼稚さは不快でさえあつた。そして今、かなり本気でぶん殴りたくなつた。

この人間は、ザーラディースやボッズル、パレスと同じ、悪意の人間だ。

「ダラス！」

マースムカがダラスのあまりの横暴さに頭に血が上つたのか、怪我の痛みも忘れて、殴ろうと拳を振り上げた。

「ブヘツ！」

そしてダラスの間の抜けた声。

「……あれ？」

マースムカの間の抜けた声。

ダラスは、リグヴェーダに殴り倒された。

「貴様、この者への暴挙は私への暴挙と思え」

リグヴェーダは眉目を危険な角度に上げて、反論も言い訳も許さない口調で断すると、殴られた鼻を押さえて呆然と床に尻をつけてしまっている無礼者には、それ以上目もくれなかつた。

そして表情を柔らかくして、拳を振り上げた状態で呆気に取られているマースムカに、心配そうに訊いた。

「大丈夫か？ 怪我が痛むか？」

「……う、うん。大丈夫」

強い意志が空回りして少し呆気にとられているマースムカを、リグヴェーダは改めて支える。

「治療道具は、外にあるのだな？ そこまでがんばれるか？」

「なんとか」

「では、行こう」

二人は体を寄り添わせて、神殿の外へ向かつた。

ダラスはわけがわからず、腰を地面についたまま動かない。そしてこの人間を助けようとすると者は誰もいなかつた。

「では、俺たちも行くか」

「そうね」

魔術師も騎士も、王女に続いて神殿を出る。

ダラスの仲間であるはずのリーバも、殺された仲間の遺体を担ぐと外へ出て行つた。

共に戦つた仲間であり、いくつかの功績を取つたはずだが、誰一人ダラスに見向きもしなかつた。

「あ、あの？ 俺は勇者に……」

ダラスは栄誉の証明であるザーラディースの首を掲げて見せるが、誰も見ようとしなかつた。

急速に暴力的な気分が消え、パブロはリイジスに一言。

「行くぞ」

「うん」

そして一人で神殿を出る。

神殿の門を通過し、階段を下り始めたパブロは、急に実感する。

今回の事件は、世界が滅亡する寸前だつた。

まさに滅亡寸前だつたのだと、パブロは明確に理解し、恐怖した。あの村で、マースムカはダラスのような人間と常に接触し続けていた。

そして今回の事件でマースムカが遭遇した、数々の悪意の人間に、マースムカはなにを思ったのか。

滅びを完成させる名の無い魔獸の周囲には、悪意に満ちた人間ばかりだつたのだ。

そんな悪意にさらされ続けた名の無い魔獸は、人間の存在をどのように定義したのか。

それは世界の存続にかかわることでありながら、世界全体からみれば小さなことなのかもしれない。

ほんの一部の、それこそ数えるほどでしかない人間によつて、人間全体の属性が決められるなど、かかわりのない者には不条理に思えるかもしれない。

だが、世界が存続したのも、やはり単純でささやかな理由だ。妖精は、少年の体を支える、一人の人間を見つめた。

階段を降りるマースムカを、リグヴェーダが大切に支える。弟を守る姉のように。

「ほら、もつとしつかり掴まれ」「うん。ありがとう」

ラッガートとセリナは、不思議そうな表情でお互いの顔を見合わせた。二人がなぜあれほど親しいのか、事情を知らない者には理解が及ばないことだ。

そして誤解することもある。

ラッガートは姉弟のような二人に聞こえないように、セリナとパブロに囁いた。

「国王にどう説明すればいい。王女が一目惚れされたなどと

それはパブロの笑いのツボを刺激した。

「ブハハハハ」

笑い続けるパブロを、不思議そうに見るリイジスが、やはり不思議そうに呟いた。

「一体なんなの？」

リイジスが怪我を治療できるが、パブロはもうじばりくの間、黙つておひいきと思った。

その後のことは簡潔に記そう。

十日後、リグヴェーダ王女は王都へ帰還した。

その事件の全容は、不明確な部分が多く、これから先、長い調査が必要だろう。

しかし、多くの犠牲を出したこの事件は、騎士たちの活躍により、さらなる多くの犠牲者が出ることは未然に阻止され、そして王女の帰還にて一応の決着を見せた。

王宮の人々はそのことを喜び、王女の無事を喜んだ。

リグヴェーダ王女は、家族と多くのことを語り、また語りきれないう多くのことを残し、帰還した最初の日を終えて、一夜の眠りに入つた。

それまでの疲れを癒すために。

ラッガートは緊急事態の時に休暇をとつたことや、一連のことでの実質独断行動をとつたことの責任は追及されることはなく、王女を救出したことで、逆に国王から賞賛と栄誉を与えられた。

また、遺体を王都へ運んだルマジヤーンとシェルダックにも同じ栄誉が与えられた。

若き騎士と、長年仕えてきた騎士。

二人が果たした忠義の誓いに。

諸々の事情によって公表はできないが、事情を知る騎士団内部でも、三人を英雄と称えた。

ラッガートはそれを誇りに思い、そして一人の騎士の死を悼んだ。

ルマジヤーンの剣。

シェルダックの銃。

その二つを形見として、彼はその騎士道を生涯において貫く決意を固めた。

二人の仲間のために。

セリナは王国軍へ戻った。休暇願に書いた理由、私用につきはもう終わった。

誰よりも愛する、双子の妹の仇は討つた。

国王からの栄誉は辞退した。独断行動をとったことは許されるかもしれないが、それを抜きにしても、栄誉を授かることが、まるでセリナの死と引き換えるような気がして、受け取る気にはなれなかつた。

王都へ戻つてから数日後、セリナの葬儀を行つた。両親に事件の全てを告げて。

両親は悲しみ、涙を流し続けたが、少なくともこれから先、娘に死を与えた者を憎み続けることだけはなくなつた。許すことはできなくとも、憎しみに満ちて生きていく必要はなくなつたのだ。

セリナ自身も。

ダラスは自分の武勇伝を誇張交じりに村人に話し、自慢話に花を咲かせ、村人から勇者と称えられた。

ちなみに彼のティダは、神殿から馬を停留している場所に戻ると、その姿がなかつた。普段の「行いの悪さ」がついに祟つて見限られたらしい。彼はラッガートに頼んで馬に乗せてもらうことになつてしまつた。

そして彼はラッガートたちに付いて王都へ向かい、騎士見習い学

校へ入った。行く行くは騎士団長にと考えているが、それを果たせるかどうかは誰にもわからない。

それから、ダラスはラーナも一緒に連れて行こうとしたが、彼女は頑として拒絕した。

ラーナがそれほど強い意志を見せたのは初めてで、ダラスを始めとした村人の誰もが驚いた。

ダラスは一人の女に同時に振られたような気分だった。

パブロとリイジスは、王女たちが大峡谷を出立する前に姿を消してしまった。自分たちのことを知られたくない二人は、王都へ一足先に戻ったのだろう。

もつとも、すぐに王女に姿を見せてくれるだろうが。

そしてマースムカは……

事件が終わってから一ヶ月後、村はずれの草原で、マースムカは二つの墓石の前で語る。

「父さん、セネロ。僕は行くよ。ここにいる理由はなくなつたからセネロに語る。

「セネロ、君と一緒に大峡谷を走つたこと、たくさん楽しかったこと、忘れないよ

ジフに語る。

「父さん。父さんは、僕が父さんと呼ぶ資格はないって言つていたけれど、僕は胸を張つて、誇りを持つて呼ぶよ。父さん、つて」

そして一人に告げる。

「さよなら」

村へ足を向けずに、そのまま村を離れていく。  
ジャリスが止まっており、そしてその傍らに、少女と呼ばれる時  
間がすぎたばかりの女性が佇んでいた。

「……ラーナ？」

ラーナはマースムカの傍に来ると尋ねる。

「村を出るのね？」

「うん」マースムカは首肯する。迷いなく、誇らしげに。

「そう……」

ラーナは俯き、少し迷った。止めるべきなのかどうか。一緒に村  
にいて欲しいと思う。けれど、それが彼にためにはならないことは  
わかつっていた。

なにより、彼の心はすでに大峡谷はない。最初からなかつた。  
そして今、彼はそれを確信して、旅立とうとしている。

無理に引き止めても、それに意味はない。

それに、彼はもう少年ではない。

独り立ちした大人だ。

自分もまた、少女ではなくなったようだ。

「この前、言つてたよね。リグヴェーダ王女はたつた一人の友達だ  
つて」

ラーナは顔を上げると、精一杯の笑顔を見せて、告げた。

「でも、大峡谷を出ても忘れないで。私も、あなたの友達だつてこ  
とを」

マースムカは、ラーナに笑顔を見せた。

それは彼女に見せる、初めての心からの微笑み。

夢を見た。

風がそよぎ、華が咲き乱れる、おとぎ話のような庭園で、少年は約束した。

「僕はずっと君の傍にいるよ」

少女は喜びに涙を輝かせ、しかし次には疑いの眼差しを少年に向ける。

「そなたの約束はあてにならぬ。」の前もそつにって、私の前から姿を消してしまったではないか」

「あ、いや、それはね、なんていうか」

慌てて言い訳する少年を遮って、少女は続けた。

「だから、私が約束しよう。たとえそなたがどこか遠くへ行つてしまつたとしても、私が必ずそなたを探す。たとえどこに消えてしまつたとしても、私は必ずそなたを見つけよう」

少年は少し驚いた顔で、しかしさにはとても嬉しそうな笑顔。

少女のようないい顔で、焼け爛れた醜い右目。

人に嫌悪感を催すそれは、しかし少女にはなんの不快感を与えないかった。

彼女の目に映るのは、輝くような、そして優しく温かい笑顔。

「わかった。僕が遠くへ行つてしまつことになつても、君は絶対に僕を見つけてくれるんだね」

「そうだ。そして絶対にそなたを離したりはせぬぞ」

そうして少女は、少女と約束を交わした。

「約束だね

「約束だ

そして、少女は少年の名を呼ぶ。

「すつと言いたかったその名を。

その名は……

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9982n/>

---

名の無い魔獣

2011年2月4日12時55分発行